熊本県文化財調査報告　第81集

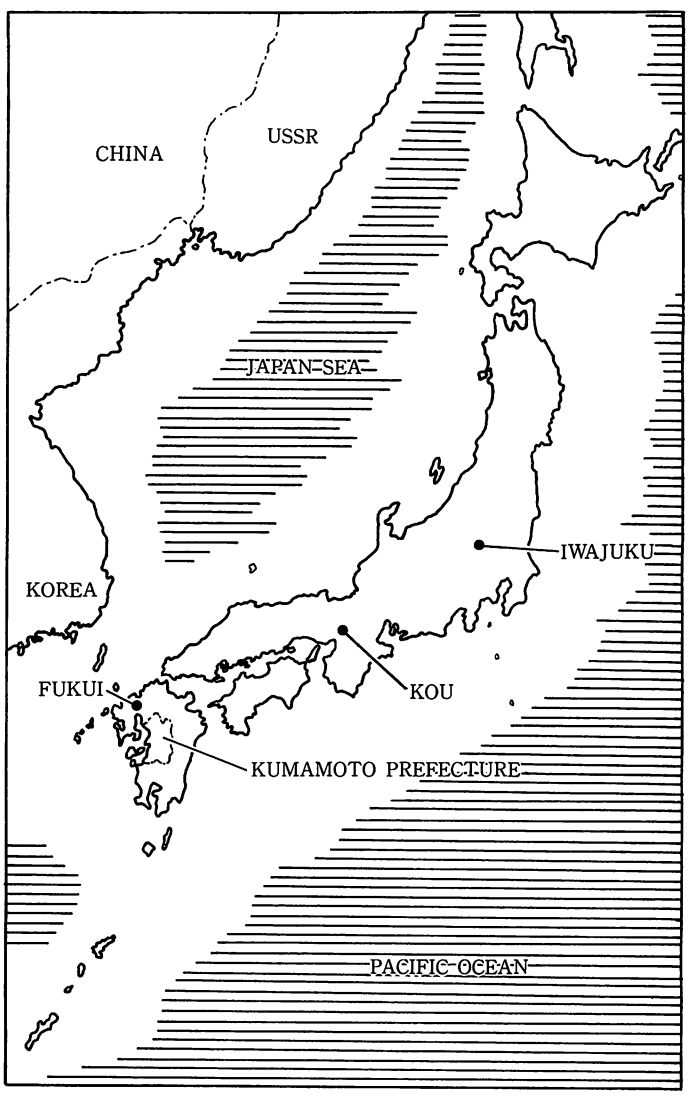
熊本県旧石器時代調査報告書

1986

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第81集

熊本県旧石器時代調査報告書



1986

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では，県内の貴重な文化財の保護と活用に努めているところでありますが，各種の基礎調査を行い，資料の整備をはかる事が最も重要で，かつ急がねばならないことであると考えております。

かかる観点のもと，過去において，条里制調査（昭和56～58年度），中世城調査（昭和50～52年度），菊池川流域文化調査（昭和50～52年度），生産遺跡調査（昭和53・54年度），鞠智城調査（昭和55～57年度），歴史の道調査（昭和53・54年度），装飾古墳総合調査（昭和48・49，56～58年度）を行い，各々，熊本県文化財調査報告書として刊行してきました。これらの実績は各時代，各方面に多くの成果をなしてきたと信じております。

今回は旧石器時代の調査を昭和59・60年度の二カ年に亘って実施しましたが，これは，熊本県地域における約一万年から二万数千年前という大変古い時代の人類の足跡を知るものであります。幸い，本県のシンボルとでもいえる阿蘇火山は厖大な火山灰を長い間に降らせ，厚く地表を覆うことにより，当時の足跡を極めて良好に遺存させていることがわかりました。この成果は全国的にも注目されているところでありますが，本書が多くの方々に活用され，文化財保護の基礎資料として，また，学究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが，文化財保護行政の趣旨を御理解のうえ調査を承諾いただきました土地所有者の方々に深く感謝申し上げます。また，文化庁をはじめ専門調査員，関係市町村教育委員会及び地元作業者の方々など，多大のご協力を受け，円滑な調査ができました。ここに厚くお礼を申し上げます。

昭和61年３月31日

熊本県教育長　伴　　正　善

例　　言

(1) 本書は熊本県教育委員会が国庫補助を受けて実施した熊本県下に分布する旧石器時代遺跡についての調査報告書である。

(2) 県内で採集されている資料や遺跡の確認作業を行い、阿蘇郡阿蘇町大観峯遺跡、同郡一の宮町象ヶ鼻遺跡、菊池市伊野遺跡、水俣市石飛東遺跡では一部発掘調査を行った。

(3) 調査には専門調査員の御指導があり、地質分析については広島大学理学部柴田喜太郎先生から玉稿を賜った。

(4) 第Ⅵ章　県内旧石器時代資料は、肥後考古学会編『肥後考古』第５号を転載し、一部新しい事実をつけ加えている。

(5) 本書の編集は熊本県教育庁文化課で行い、江本直が担当した。執筆・実測・製図・写真撮影は江本が行ったが、伊野遺跡の発掘調査には奈良大学文学部坂口圭太郎氏の実測参加があった。また、実測・製図には文化課・木崎康弘、中原由子、住田幸恵氏の助力があった。

本　文　目　次

第Ⅰ章　序　章

1．調査概要……1
2．調査の事務組織……2

第Ⅱ章　大観峯遺跡

1．調査概要……5
2．Ａ地点の調査……8
3．Ｂ・Ｃ地点の調査……13
4．まとめ……14

第Ⅲ章　象ヶ鼻遺跡

1．調査概要……16
2．Ａ地区の調査……16

第Ⅳ章　伊野遺跡

1．調査概要……21
2．層　位……23
3．出土状況……26
4．出土遺物……33
5．まとめ……53

第Ⅴ章　石飛東遺跡

1．調査概要……60
2．層　位……64
3．出土状況……67
4．出土遺物……81
5．まとめ……108

第Ⅵ章　県内旧石器時代資料

1．分布図……115
2．旧石器時代遺跡一覧表……116
3．旧石器時代関係文献目録……118

第Ⅶ章　総　　括……120

付　　章

熊本県遺跡の地質分析結果について……柴田喜太郎……128

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図　1.大観峯遺跡　2.象ヶ鼻遺跡…… 5
第２図　大観峯遺跡位置図…… 6
第３図　大観峯遺跡　トレンチ配置図…… 6
第４図　大観峯遺跡　地形図…… 7
第５図　大観峯遺跡　Ａ地区第４トレンチ南側層位図…… 8
第６図　大観峯遺跡　Ａ地区第４トレンチ西側層位図…… 9
第７図　大観峯遺跡　Ａ地区第３トレンチ南側層位図…… 10
第８図　大観峯遺跡　Ａ地区
第５トレンチ石器出土状況図…… 11
第９図　大観峯遺跡　Ａ地区出土石器(01～05)…… 12
第10図　大観峯遺跡　Ａ地区
第５トレンチ石器出土状況図…… 13
第11図　大観峯遺跡　Ａ地区出土石器(06)…… 13
第12図　大観峯遺跡　Ｂ地区第１トレンチ南側層位図…… 14
第13図　象ヶ鼻遺跡　位置図…… 16
第14図　象ヶ鼻遺跡　第１トレンチ北側層位図…… 17
第15図　象ヶ鼻遺跡　第２トレンチ北側層位図…… 18
第16図　象ヶ鼻遺跡　第３トレンチ東側層位図…… 19
第17図　象ヶ鼻遺跡　第２トレンチ遺物出土状況図…… 20
第18図　伊野遺跡位置図…… 21
第19図　伊野遺跡　全体図…… 22
第20図　伊野遺跡　第１トレンチ層位図…… 24
第21図　伊野遺跡　第３・第４トレンチ層位図…… 25
第22図　伊野遺跡　第１トレンチ遺物出土状況図(1)…… 27
第23図　伊野遺跡　第１トレンチ遺物出土状況図(2)…… 28
第24図　伊野遺跡　第３－Ａトレンチ
遺物出土状況実測図(1)…… 29
第25図　伊野遺跡　第３－Ａトレンチ
遺物出土状況実測図(2)…… 30
第26図　伊野遺跡　第３トレンチ遺物出土状況実測図(3)… 31
第27図　伊野遺跡　第３－Ｂトレンチ
遺物出土状況実測図(1)…… 32
第28図　伊野遺跡　第３－Ｂトレンチ
遺物出土状況実測図(2)…… 33
第29図　伊野遺跡　第４トレンチ遺物出土状況実測図…… 34
第30図　伊野遺跡　出土石器実測図(01～14)…… 36
第31図　伊野遺跡　出土石器実測図(15～20)…… 37
第32図　伊野遺跡　出土石器実測図(21～26)…… 38
第33図　伊野遺跡　出土石器実測図(27～31)…… 39
第34図　伊野遺跡　出土石器実測図(32～37)…… 40
第35図　伊野遺跡　出土石器実測図(38～43)…… 42
第36図　伊野遺跡　出土石器実測図(44～51)…… 43
第37図　伊野遺跡　出土石器実測図(52～58)…… 45
第38図　伊野遺跡　出土石器実測図(59～63)…… 46
第39図　伊野遺跡　出土石器実測図(64～73)…… 47
第40図　伊野遺跡　出土石器実測図(74～81)…… 49
第41図　伊野遺跡　出土石器実測図(82～87)…… 50
第42図　伊野遺跡　出土石器実測図(88～93)…… 51
第43図　伊野遺跡　出土石器実測図(94～98)…… 52
第44図　石飛東遺跡位置図…… 61
第45図　石飛東遺跡　平板測量図…… 62
第46図　石飛東遺跡　全体測量図…… 63
第47図　石飛東遺跡　層位図(1)…… 64
第48図　石飛東遺跡　層位図(2)…… 65
第49図　石飛東遺跡　平面分布図
(第１トレンチ第Ⅲ・Ⅳa層)…… 67
第50図　石飛東遺跡　平面分布図
(第１トレンチ第Ⅳa･b・Ⅴa層)…… 68
第51図　石飛東遺跡　平面分布図
(第１トレンチ第Ⅴb・Ⅴc層)…… 69
第52図　石飛東遺跡　平面分布図
(第１トレンチ第Ⅴd・Ⅴe層)…… 70
第53図　石飛東遺跡　平面分布図
(第１トレンチ第Ⅴf・Ⅴh層)…… 71
第54図　石飛東遺跡　平面分布図
(第２トレンチ第Ⅲ･Ⅳa･Ⅳa･b層)… 72
第55図　石飛東遺跡　平面分布図
(第２トレンチ第Ⅴa・Ⅴb層)…… 73
第56図　石飛東遺跡　平面分布図
(第２トレンチ第Ⅴc・Ⅴd層)…… 74
第57図　石飛東遺跡　平面分布図
(第２トレンチ第Ⅴe・Ⅴf層)…… 75
第58図　石飛東遺跡　平面分布図
(第２トレンチ第Ⅴg・Ⅴh層)…… 76
第59図　石飛東遺跡　平面分布図
(第３トレンチ第Ⅳ・Ⅴa層)…… 77
第60図　石飛東遺跡　平面分布図
(第３トレンチ第Ⅴb・Ⅴc層)…… 78
第61図　石飛東遺跡　平面分布図
(第３トレンチ第Ⅴd・Ⅴe層)…… 79
第62図　石飛東遺跡　平面分布図
(第３トレンチ第Ⅴf・Ⅴg層)…… 80
第63図　石飛東遺跡　出土石器実測図(01～07)…… 82
第64図　石飛東遺跡　出土石器実測図(08～15)…… 83
第65図　石飛東遺跡　出土石器実測図(16～22)…… 84
第66図　石飛東遺跡　出土石器実測図(23～26)…… 86
第67図　石飛東遺跡　出土石器実測図(27～33)…… 87
第68図　石飛東遺跡　出土石器実測図(34～39)…… 89
第69図　石飛東遺跡　出土石器実測図(40～46)…… 90
第70図　石飛東遺跡　出土石器実測図(47)…… 91

第71図　石飛東遺跡　出土石器実測図(48～53)…… 92
第72図　石飛東遺跡　出土石器実測図(54～59)…… 93
第73図　石飛東遺跡　出土石器実測図(60～68)…… 95
第74図　石飛東遺跡　出土石器実測図(69～73)…… 96
第75図　石飛東遺跡　出土石器実測図(74～80)…… 97
第76図　石飛東遺跡　出土石器実測図(81～88)…… 99
第77図　石飛東遺跡　出土石器実測図(89)……100
第78図　石飛東遺跡　出土石器実測図(90)……101
第79図　石飛東遺跡　出土石器実測図(91～95)……102
第80図　石飛東遺跡　出土石器実測図(96～103)……103
第81図　石飛東遺跡　出土石器実測図(104～112)……105
第82図　石飛東遺跡　出土石器実測図(113～120)……106
第83図　石飛東遺跡　出土石器実測図(121～128)……107
第84図　石飛東遺跡　出土石器実測図(129～132)……108

図　版　目　次

図版 1　伊野遺跡・石飛遺跡空中写真
図版 2　大観峯遺跡　調査状況図他
図版 3　大観峯遺跡　出土石器(01～07)
図版 4　伊野遺跡　伊野遺跡遠景他
図版 5　伊野遺跡　調査状況・遺物出土状態
図版 6　伊野遺跡　出土石器(01～22)
図版 7　伊野遺跡　出土石器(23～33)
図版 8　伊野遺跡　出土石器(34～48)
図版 9　伊野遺跡　出土石器(49～61)
図版10　伊野遺跡　出土石器(60～75)
図版11　伊野遺跡　出土石器(79～90)
図版12　伊野遺跡　出土石器(91～98)
図版13　石飛東遺跡　石飛遺跡遠景他
図版14　石飛東遺跡　層位・遺物出土状況
図版15　石飛東遺跡　出土状況
図版16　石飛東遺跡　出土石器(01～20)
図版17　石飛東遺跡　出土石器(21～46)
図版18　石飛東遺跡　出土石器(47～54)
図版19　石飛東遺跡　出土石器(55～80)
図版20　石飛東遺跡　出土石器(81～92)
図版21　石飛東遺跡　出土石器(96～124)
図版22　石飛東遺跡　出土石器(125～131)

Ⅰ．序　章

1．調査概要

今回の調査は熊本県内に存在する旧石器時代遺跡の状況を把握し、文化財保護行政の基礎資料を整備する事を目的として行ったものである。我国における旧石器時代研究が縄文時代、弥生時代、古墳時代等の研究に対して遅れをとったことは否めない事実であり、熊本県地域には阿蘇火山があり多量の火山灰を降下させ、厚く地表を覆っている。これらのことも原因して文化財保護行政を進めていく上での最も基礎的な旧石器時代遺跡の存在状況も充分把握できない状態が続き、ともすれば貴重な旧石器時代遺跡が急テンポで進む開発事業の犠牲を強いらされる危惧が強く懸念されたものである。

そこで、熊本県教育委員会は国庫補助を申請し、昭和59年度、昭和60年度の二カ年の調査を実施するに至ったものである。

初年度は前半期に県内の発掘調査された遺跡や石器が採集された資料をもとに遺跡のリストアップや内容把握作業を行った。後半期には、遺跡の分布状況や石器の出土層位の把握を目的に三遺跡の小規模の発掘調査を実施した。

昭和59年９月に阿蘇郡阿蘇町大観峯遺跡、同年10月～11月に同郡一の宮町象ケ鼻遺跡、同年12月～昭和60年２月にかけて菊池市伊野遺跡の発掘調査を終えた。

熊本県内の旧石器時代の調査研究活動を段階的に概略を述べれば第Ⅰ～第Ⅲ次の活動期に分けられよう。

第Ⅰ次活動期は昭和30年代後半から40年代前半期の調査が上げられる。それは上益城郡甲佐町大峯遺跡[註1]と水俣市石坂川、石飛分校遺跡[註2]の発掘調査がある。この調査により熊本県内に旧石器時代遺跡が確実に存在することを明らかにし、また、①ナイフ形石器盛行⟶②ナイフ形石器＋台形石器⟶③ナイフ形石器＋細石器⟶④細石器＋縄文土器という石器群の変遷が明示されている。

続く第Ⅱ次活動期は昭和50年代半ばの阿蘇郡小国町下城遺跡[註3]と下益城郡松橋町曲野遺跡[註4]の発掘調査が語られる。下城遺跡では２枚の文化層の確認があり、上位にナイフ形石器＋三稜尖頭器＋台形石器、下位にもナイフ形石器が存在するという石器文化が把握された。折りからの自然科学分野の研究は広域火山灰の存在を明らかにし、下城遺跡の第Ⅱ文化層（Ｂ・Ｂ：暗色帯）は「ＡＴ」（姶良―丹沢火山灰：21.000～22.000年前）の下位に相当するとの判断に至っている。すなわち、県下ではじめて「ＡＴ」下位に石器文化が存在することを明らかにした事になる。

曲野遺跡では「ＡＴ」下位の第Ⅵ層赤褐色粘質土にナイフ形石器＋台形石器＋局部磨製石斧の石器群が検出されている。

以上の様な調査成果をもとにして、第Ⅰ期～第Ⅳ期の石器群として捉える作業を進めることができ、第Ⅰ期は「ＡＴ」前として曲野第Ⅵ層石器群。第Ⅱ期は、下城第Ⅱ文化層石器群。第Ⅲ期は「ＡＴ」後として、下城第Ⅰ文化層石器群。⟶第Ⅳ期は細石器群へとつながる編年大系が形成された。

今回の調査をはじめとして昭和50年代後半から60年代前半期を第Ⅲ次活動期とする事ができよう。球磨・人吉地区では九州縦貫自動車道建設に伴う事前調査が実施され、球磨郡山江村大丸・藤ヶ迫遺跡[註5]、同村狸谷遺跡の発掘調査が行なわれている。前者では「ＡＴ」直上にナイフ形石器＋剝片尖頭器＋三稜尖頭器の石器群が検出されている。後者はシラス「ＡＴ」層をはさみ上下に二枚の文化層が良好に検出されている。

この様に、各期ごとの類例資料が増加することにより、細かな石器群の内容把握や編年作業が可能となろ

うし、今回の調査では、各期ごとの石器群様相を明確に知る資料の検出が期待された。

〈大観峯遺跡〉では従来、ナイフ形石器や剝片尖頭器が採集されている。標高約900mで阿蘇火山北外輪上に位置する遺跡であり、層位状態に恵まれており、石器群の出土層位を明確にする事や明確な石器組成の追求がもくろまれた。

〈象ヶ鼻遺跡〉でも石器群の出土層位を明確にすることと石器組成の追求を目的としている。

〈伊野遺跡〉阿蘇火山の火山灰がもたらす良好な層位状態を示し、従来、採集された石器群には、ナイフ形石器、台形石器、剝片尖頭器、細石器などがあり豊富な石器組成と、複合する文化層の探究が期待されたのである。すなわち、良好な地層に恵まれた三遺跡の調査によって、「ＡＴ」前の石器群の存在有無を問い、「ＡＴ」後の石器群を段階的に把握することが可能であるのか。そして、剝片剝離技術展開の追求や国府型ナイフ形石器や彫器などが、どの様な出土状態を示し、その石器組成が明らかにできるかなど多くの問題点へのチャレンジといえよう。

小規模の発掘調査であったが、結果的に大観峯遺跡では石器包含層の確認と剝片尖頭器、削器等を検出し、象ヶ鼻遺跡でも、阿蘇山北外輪での標式的な層序状態を明確にし、石器包含層を確実に推定しえる状態に至っている。伊野遺跡では造園造成のためにわずかに残された斜面で石器群の包含層を確認できている。石器群は数枚の文化層に分けることが可能で良好な結果となっている。

おって、昭和60年度は県南地域にあたる芦北・水俣市地区の踏査を行い、９月～11月に、水俣市〈石飛東遺跡〉の発掘調査を実施している。周知のように石飛分校遺跡は昭和40年代前半に、鹿児島県立出水高校の故池水寛治氏を中心に数度の発掘調査が実施され、日本の旧石器時代研究の先駆的実績となっている。今回の調査は石飛分校遺跡から東方向へ約150mの小丘陵上に位置し、石飛東遺跡と命名している。発掘調査によってナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器・細石器等多量の石器の出土があり、遺跡が周辺へ広く拡がる事実の確認ができている。また、土質分析が可能であり「ＡＴ」前後から細石器文化へ数枚の文化層を分離する事も可能であろう。

この間、第Ⅲ次活動期においては、在野の研究者による多数の遺物採集作業と遺跡の発見がその大いなる基礎活動として捉えられるし、肥後考古学会編による特集「熊本の旧石器文化」[註6]を大きな活動として捉えなければならない。

さて、今回の報告書は、昭和60年度後半の作業として、12月から熊本県文化財収蔵庫で、各遺跡の遺物、図面の整理作業から開始し、報告書の作成にとりかかった。

註１．国分直一・三島格「熊本県における考古学調査の概要」『九州考古学』25・26　1965
２．池水寛治　「熊本県水俣市石飛分校遺跡」『考古学ジャーナル』№21　1968
３．熊本県教育委員会　『下城Ⅰ』『下城Ⅱ』　1979・1980
４．熊本県教育委員会『曲野Ⅰ』『曲野Ⅱ』　1983・1984
５．熊本県教育委員会『大丸・藤ヶ迫遺跡』　1986
６．肥後考古学会　『肥後考古』第５号　1985

２．調査の事務組織

調査は下記の事務組織で行った。

調 査 主 体　　熊本県教育委員会

調査責任者　森　一則（文化課課長）

調査総括　隈　昭志（文化課主幹・文化財調査係長）

調査主査　江本　直（文化課主任学芸員）

専門調査員　橘　昌信（別府大学文学部教授）

柴田喜太郎（広島大学理学部地鉱教室）

調査指導及び協力者

三島　格（肥後考古学会会長）

河口貞徳（鹿児島考古学会会長）

鎌木義昌（岡山理科大学理学部教授）

小林博昭（岡山理科大学理学部助教授）

甲元真之（熊本大学文学部助教授）

安蒜政雄（明治大学文学部助教授）

松藤和人（同志社大学文学部講師）

白石浩之（神奈川県教育庁文化課）

鈴木次郎（神奈川県立埋蔵文化財センター）

新東晃一（鹿児島県教育庁文化課）

西健一郎（九州大学文学部助手）

上村佳典（北九州市埋蔵文化財調査室）

高木瑞穂（熊本県立水俣高等学校長）

前田安男（水俣市文化財保護委員長）

鶴山寅亀（石坂川小学校石飛分校）

神崎康輔（石坂川小学校石飛分校）

青崎和憲（鹿児島県立霧島青少年の家）

中村耕治（鹿児島県教育庁文化課）

松尾吉高（佐賀県教育庁文化課）

古森政次（阿蘇郡白水村白水小学校）

木﨑康弘（熊本県教育庁文化課）

浦田信智（熊本県教育庁文化課）

福田正文、橋本誠二、吉田雅人、光沢徳行、坂口圭太郎、平義隆、徳永貞紹、村上久和

阿蘇町教育委員会、一の宮町教育委員会、菊池市教育委員会、水俣市教育委員会、西原村教育委員会、波野村教育委員会、山鹿市立博物館、菊水町立歴史民俗資料館、水俣市石坂川小学校石飛分校、熊本市立博物館

土地所有者

大観峯遺跡：阿蘇町　黒流町牧野組合・小野田牧野組合

象ヶ鼻遺跡：一の宮町　中通牧野組合・木落牧場

伊野遺跡：菊池市木野　堀田耕一郎

石飛東遺跡：水俣市石坂川　島田実

調査事務局

佐々木正典（文化課課長補佐）

大塚　正信（前文化課主幹、経理係長）

柴田和馬（文化課主幹、経理係長）

花田隆二（前文化課参事）

森　貴史（文化課参事）

木下英二（文化課参事）

谷喜美子（文化課主任主事）

調査作業者

阿蘇郡阿蘇町

工藤正美　山本有義　日隈博敏　北里ユリ　北里ミツル

阿蘇郡一の宮町

吉岡正明　吉岡勝己　吉岡品子　吉岡勝子　吉岡キヨ子

吉岡宗雄　笹原栄子　笹原辰雄

菊池市大字原

赤星友子　上田幸子

水俣市石飛・越小場

岩井武美　秋山保　鶴田敦　森山逸雄　馬場紳也　南畝多美子　木場弘子　山中ミチヨ

渕上チヨ子　西本文子　豊田和子　島田智子　森トシエ

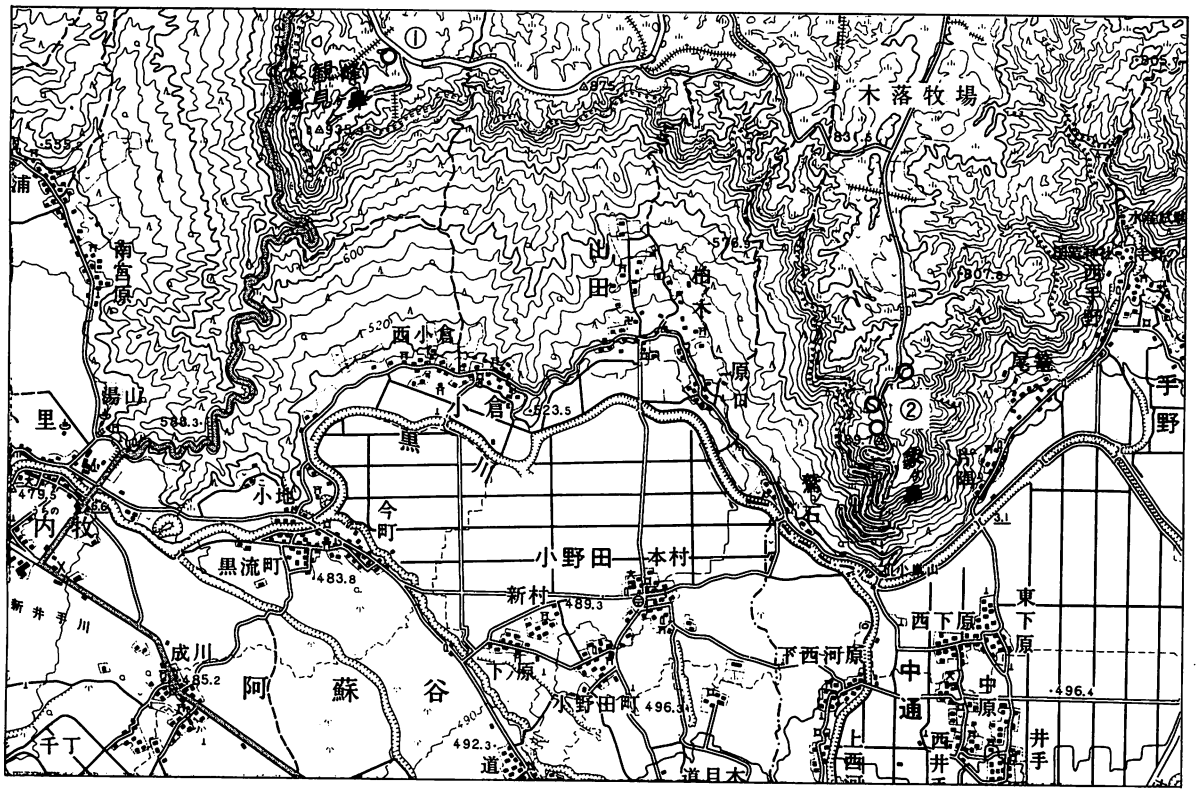
調査整理作業者

竹永幸代　住田幸恵　前田志磨江

第II章　大観峯遺跡

1．調査概要

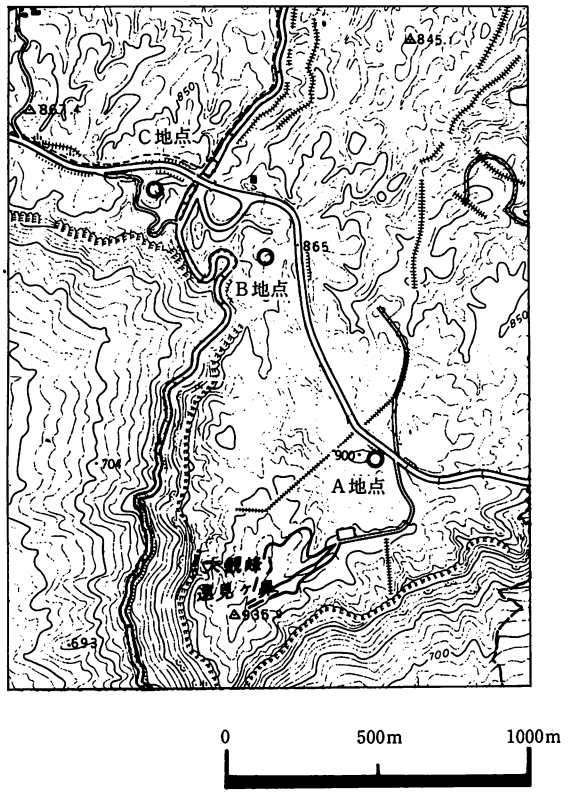
大観峯遺跡は行政区、熊本県阿蘇郡阿蘇町大観峯に位置する。阿蘇山火口丘の北外輪上に立地し、頂上は遠見ケ鼻（標高935.9m）で大観峯と通称されている。頂上に向う登山道が設けられカルデラを眺望する絶好の地点である。今回の調査地は主要道路（通称ミルクロード）からこの大観峯への登山道の入り口にあたり、大観峯Ａ地点とした。標高は約900m上に位置している。



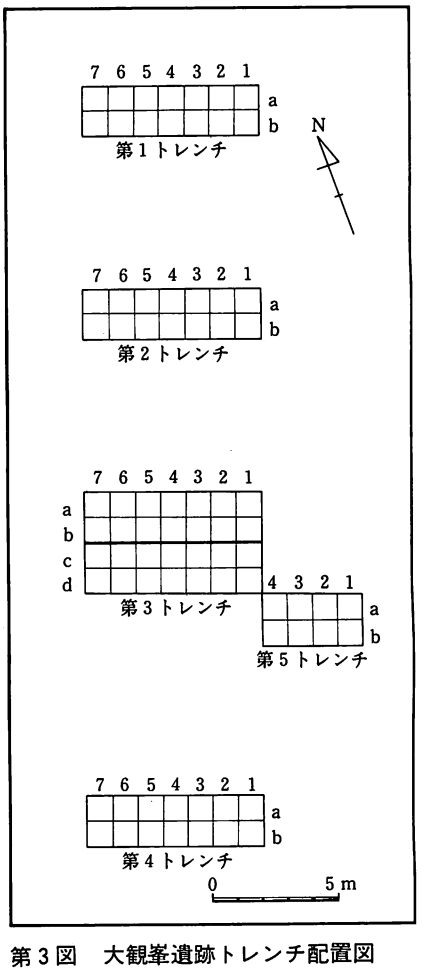
第Ｉ図　遺跡位置図　　1.大観峯遺跡　2.象ヶ鼻遺跡

登山道や休憩所の駐車場の造成工事に必要な土砂が採土されたため、ローム層が露出していた。この露出面から多くの石器が採集され、遺跡の発見となったものである。

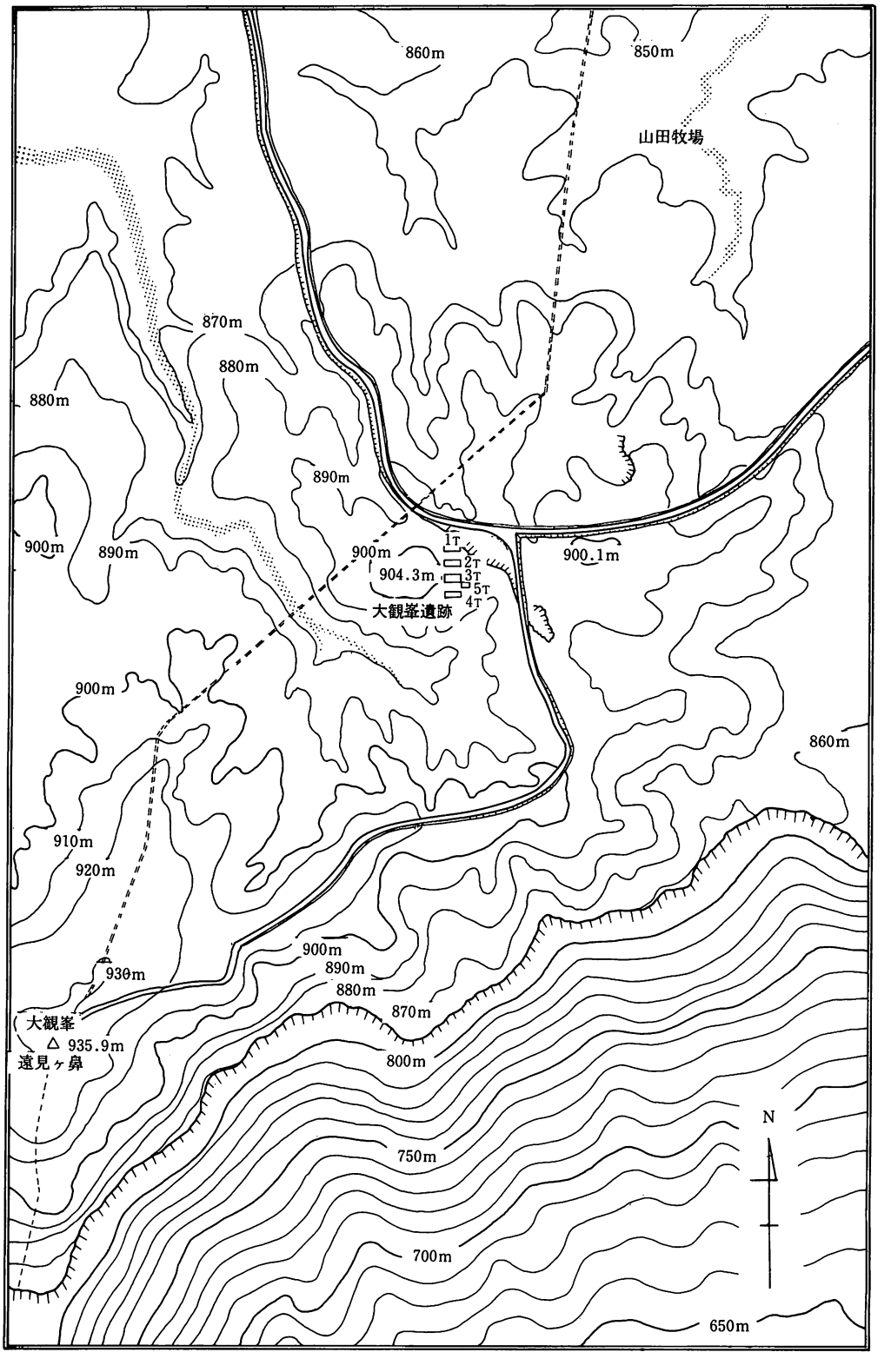
一帯は広大な牧草地がつづき、牧野組合によって放牧と採草が行なわれている。起伏する谷部には湧水があり、黒川・白川の最上流の水源である。北外輪に起伏する尾根で多く石器が採集され遺跡として確認されているが、後記する同郡一の宮町象ケ鼻遺跡も一連の遺跡として捉えられる。今回の調査地A地点周辺でも、数ケ所から石器が採集されているが、何れも採土による削平地や崖面の自然崩壊による露頭面から出土している。北側の二カ所をB地点・C地点と呼称したい。調査はA地点に5カ所とB地点に1カ所のトレンチを設けて実施した。

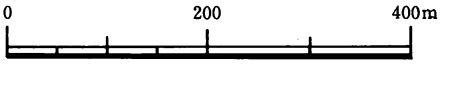


第2図　大観峯遺跡位置図



第3図　大観峯遺跡トレンチ配置図





第4図　大観峯遺跡地形図

2．Ａ地点の調査

Ａ地点は土地の削平によって、東西約30m、南北約35mの平坦地となっている。旧地表から数mの深さで採土されたものである。この平坦地に第１～５トレンチを設定した結果、ほぼ中央部にあたる第３トレンチと第５トレンチに石器が出土した。

(1) 層　位

平坦地から南側及び西側へは急傾斜であるが、第４トレンチの南側と西側の断面では旧地表に近い部分から残されている。

〈第４トレンチ南側層位〉

第Ｉ層　黄褐色土が一部残存する。サラサラした土質でＡｈ（アカホヤ）である。付近一帯は約10～15cmの厚さで上下を黒色土にパックされた状態で明確に認められる。従って、この南側断面では「アカホヤ」や、その上位にある所謂「黒ボク土」も削平されていることになる。

第II層～第Ｖ層　一般に「アカホヤ」の下にある「黒ニガ土」「黒褐色粘質土」に相当するものと判断されるが、「黒ニガ土」と「赤ニガ土」とがくり返し堆積している。このように「黒ニガ土」が阿蘇北外輪一帯で数枚に分離される事は、その堆積原因が阿蘇火山起源であることを証明するものといえよう。さらに、将来、各層の時間差が求められたとすれば、旧石器時代～縄文時代の接点時期から縄文早・前期にかけての時期を細分する有効な鍵層と成るであろう。

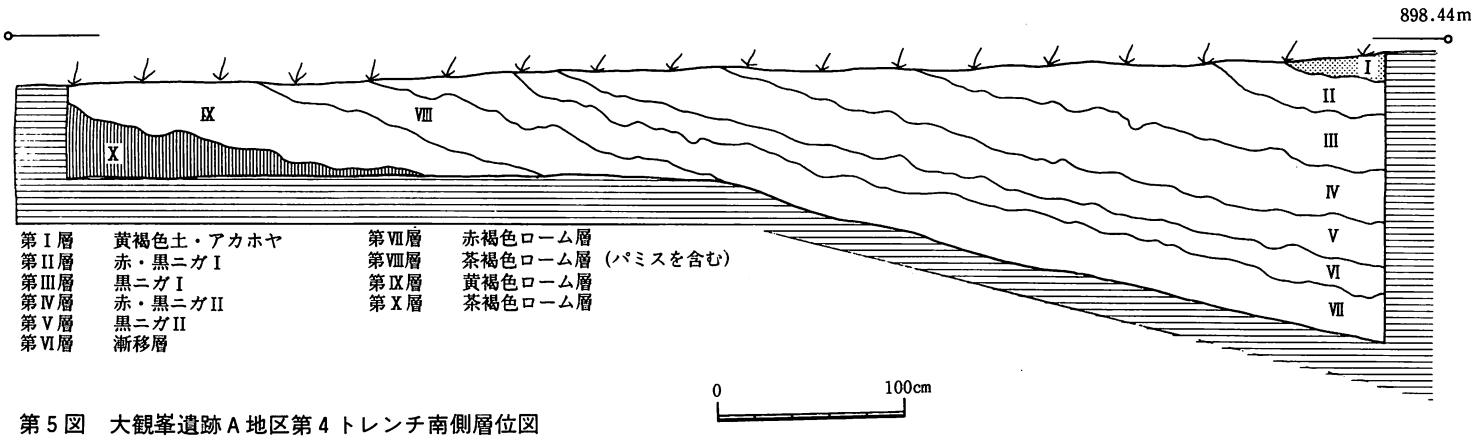
第VI層　赤褐色粘質土が続くが、第VI層には第Ｖ層からの黒色の滲みがあり、暗褐色の色調が見られる。

第VII層　赤褐色粘質土で固い。

第VIII層　第VII層にくらべて色調にやや変化があり茶褐色を呈している。粘質土であり、少量ではあるがパミス状のものが含まれている。

第IX層　やや明るく黄褐色を呈するローム層である。

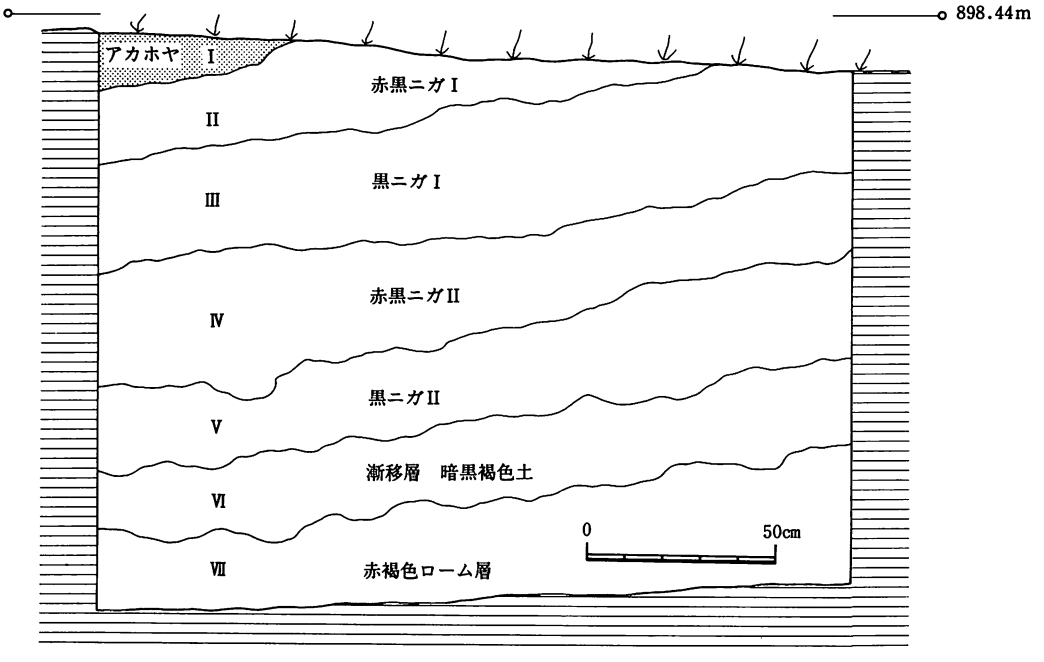
第Ｘ層　同じ土質が続くが色調は茶褐色を呈する。



第５図　大観峯遺跡Ａ地区第４トレンチ南側層位図

〈第４トレンチ西側層位〉

第４トレンチ西側土層でも一番上位に一部「アカホヤ」が残存して見える。そして、第II層から第VI層まで約20～30cmの厚さで「黒ニガ土」と「赤ニガ土」が繰り返しながら整然と堆積している。



第６図　大観峯遺跡第４トレンチ西側層位図

〈第３トレンチ南側層位〉

第３トレンチは一部深掘りを実施し土層の観察を行った。削平によって上位を失している。現地表から第Ｉ層とした。

第Ｉ層　茶褐色粘質土であり、水分を多く含むと黒褐色の色調が強くなる。今回の調査での石器包含層である。本来的には30～40cmの厚さを有していたものと思われる。

第II層　黄褐色ローム層で一部黄褐色を呈する細かなパミスを含んでいる。この第Ｉ層・第II層が第４トレンチ南側層位のどの層に相当するか判断が必要である。現場での肉眼的観察では第４トレンチの第Ｘ層と第３トレンチの第Ｉ層とが最も近いと判断できた。最終的に土質分析結果を待たねばならないが、第３トレンチ第II層に含まれている黄褐色の小さなパミスに「ＡＴ」の可能性がもたれる。

第III層・第IV層　赤茶褐色を呈し、非常に固く、砂礫のようなパミスが凝結している。このパミスは第III層が粗くはいり、第IV層は非常に密である。双方は阿蘇火山の噴出物と考えられる。

第Ｖ層　非常に固い黒褐色のパミスであり、暗色帯のように見える。

第VI層　約15cmの厚さで、粘質が非常に強い黄褐色のロームである。

第VII層　赤褐色の軽石がブロック状にはいっている。柴田喜太郎氏の指摘された赤色軽石層[註]に相当すると判断できる。

第VIII層　第VI層に非常に類似した黄褐色粘土層で約40～50cmの厚さがある。

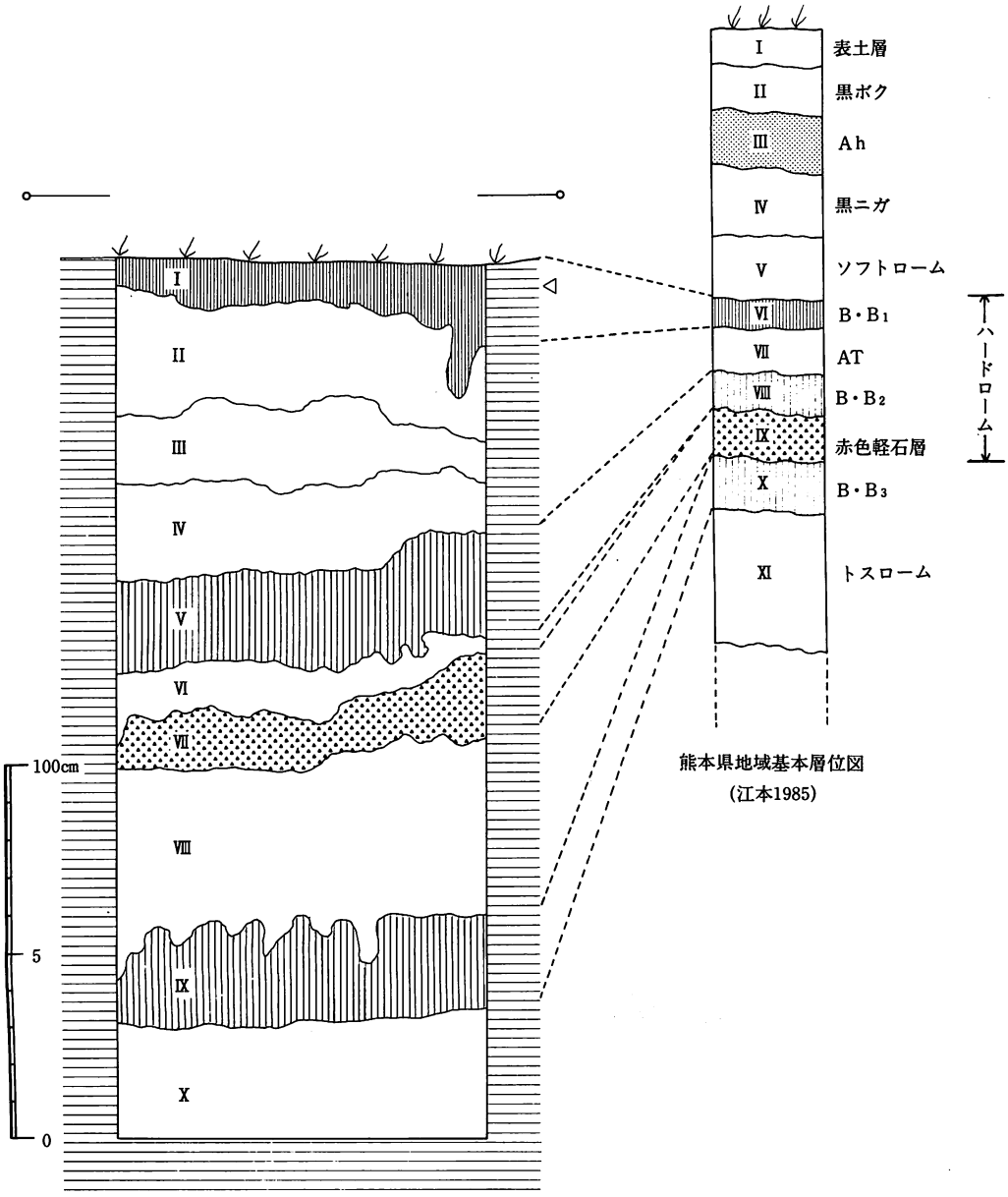
第IX層　黒褐色を呈する粘質土で約20～30cmの厚さがある。キメの細かい土質で固い。阿蘇地方で一般的に語られる所謂、暗色帯に相当しよう。

第Ｘ層　粘質が非常に強い黄褐色粘質土である。鳥栖ロームの最上位層と考えられる。

以上が各層の特色であるが、道路工事などで生じた周辺の切り通し面では黒ずんでいるため数枚の暗色帯があるように見える。第3トレンチ南側層位の中で茶褐色・黒褐色を呈する土層は第Ⅰ層・第Ⅴ層・第Ⅸ層である。第Ⅹ層から下位には暗色帯は観察されない。したがって、阿蘇地方で一般的に語られる暗色帯は第Ⅸ層であろう。

第7図では熊本県地域基本層位図との比較を試みてみた。今回の調査での石器包含層は第3トレンチ第Ⅰ層茶褐色粘質土であるが、阿蘇地方で述べている「ソフトローム」の下部から「ハードローム」の上部に位置づけできよう。「ＡＴ」が第Ⅱ層から第Ⅳ層の中に含まれているとすれば石器群の包含層は「ＡＴ」後で間を長くしない時期と思われる。

註．柴田喜太郎「熊本県松橋町曲野遺跡の堆積物―曲野遺跡および関連地域の堆積物に含まれる火山噴出物の検出と対比」　1984



第7図　大観峯遺跡Ａ地区第3トレンチ南側層位図

(2)遺物出土状況

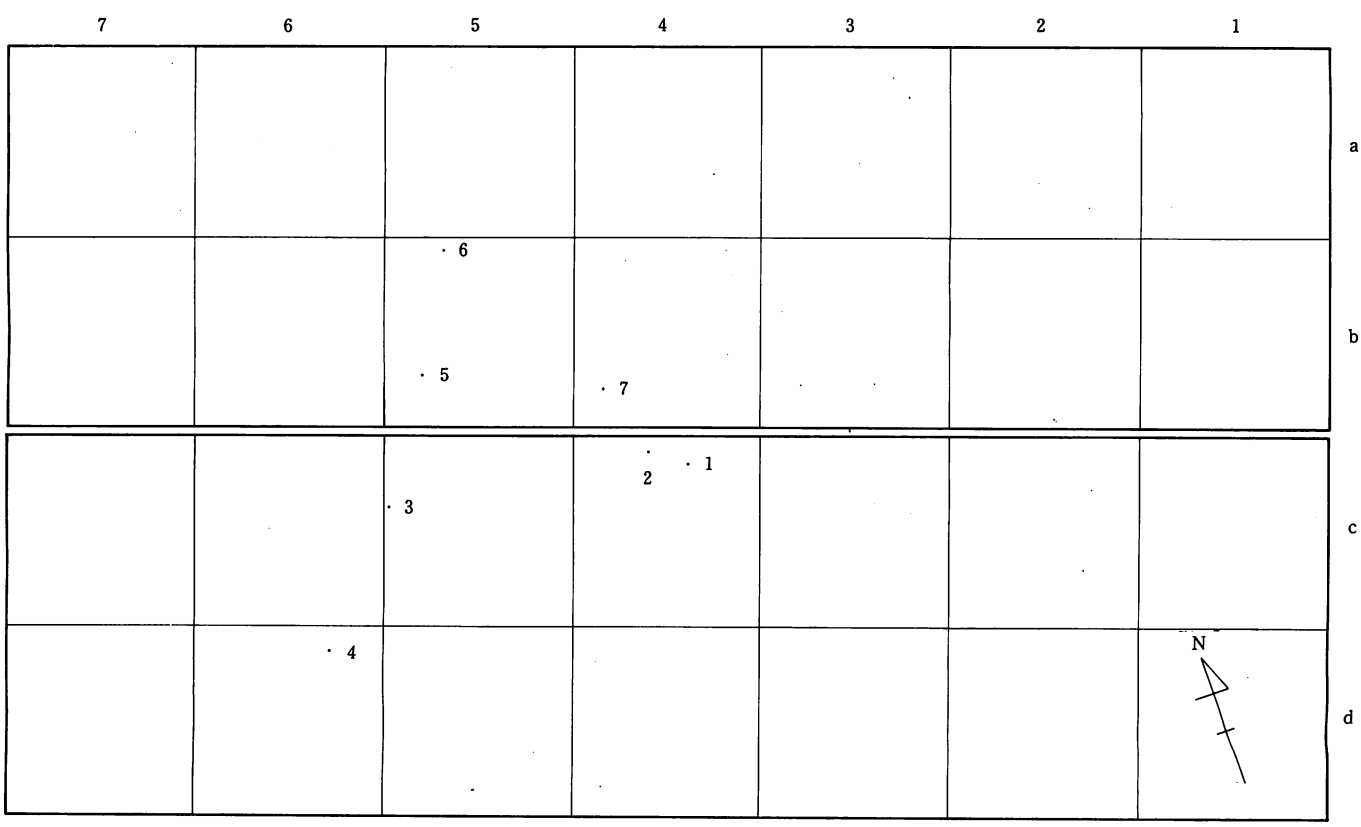
第１～５トレンチ調査の中で遺物が出土したのはほぼ中央部にあたる第３トレンチと第５トレンチであった。遺物の集中部は第３トレンチのｂ・ｃ―4・5グリッドと第５トレンチのｂ―2・3グリッドに見られた。出土石器のレベル差は第３トレンチで14.3cm、第５トレンチは20.5cmであった。レベル差が少ないことから単一の包含層と判断される。

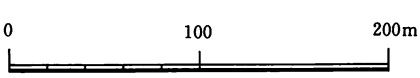
(3)出土遺物

出土した石器は砕片まで含めて10点であった。この中から６点を報告したい。(01～06)

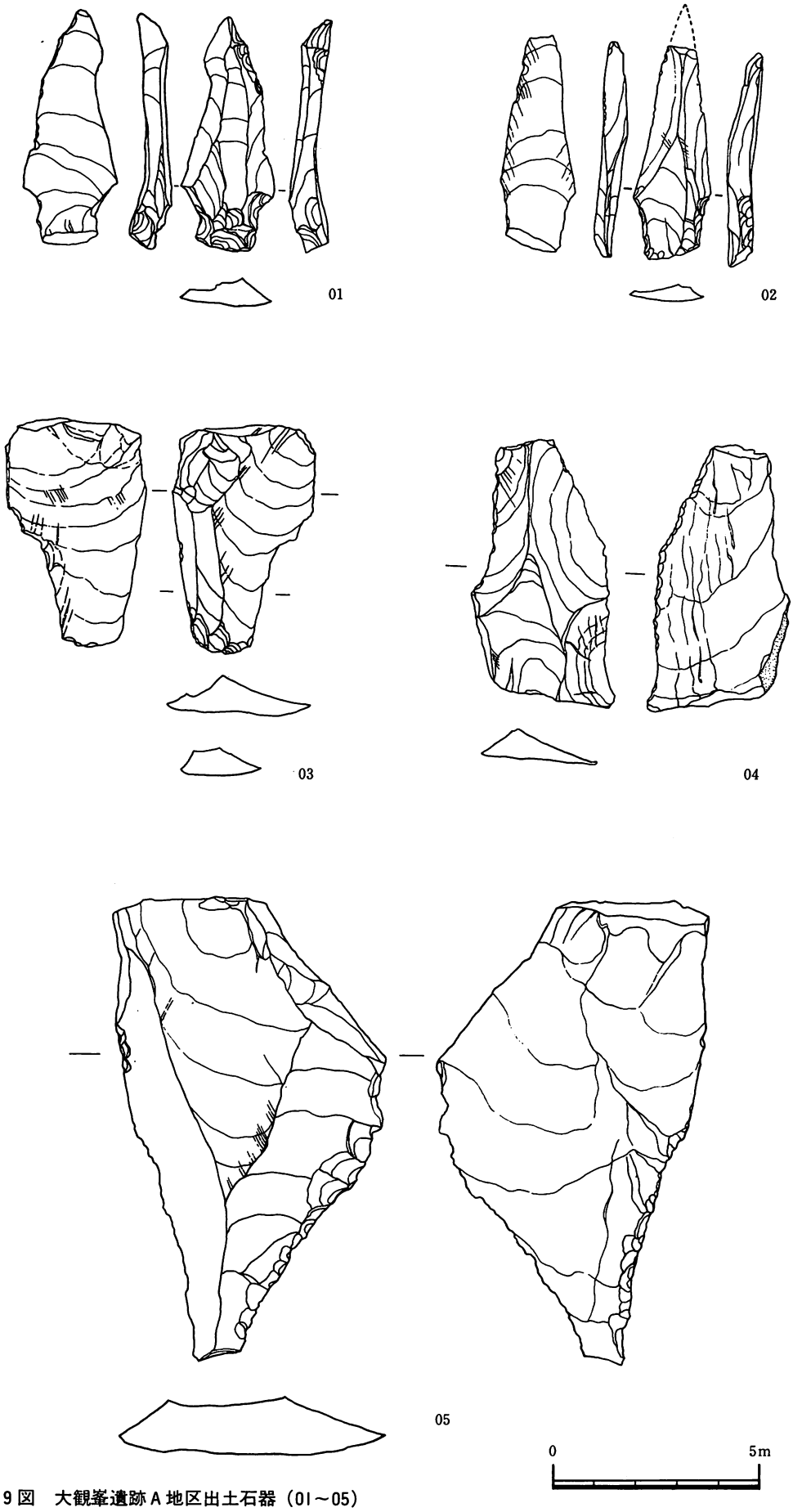
A．剝片尖頭器（01・02）

(01) はやや歪な縦長剝片を素材として、打面部を残している。基部調整は裏面側から急角度の剝離を行い、主要剝離の打面部から表面に対しての調整剝離も行っており、階段状剝離痕を呈している。右側の先端から肩部にかけても裏面から細かなブランティングを施し、先端を尖らしている。石質はキメが細かく淡黄褐色を呈している。流紋岩と判断される。(02)も剝片尖頭器である。石質は淡灰褐色を呈し、新しい割れ口が黒色を呈することから安山岩と判断される。素材は断口が三角形を呈する縦長剝片である。主要剝離打面を残し、簡単な基部加工を施している。先端部を欠失しているのでブランティングが充分に観察できないが、右側縁端にわずかであるが剝離痕がみられるので、(01) と同じ様な二次加工を施していたものと思われる。





第８図　大観峯遺跡Ａ地区第５トレンチ石器出土状況図



第９図　大観峯遺跡Ａ地区出土石器（01～05）

B．エンドスクレーパー（03）

不定形の剝片を素材としている。主要剝離打面を残しており、側縁への加工も見られない。刃部は下縁につくられ、ゆるやかな曲線を見せる孤刃で、エンドスクレーパーである。

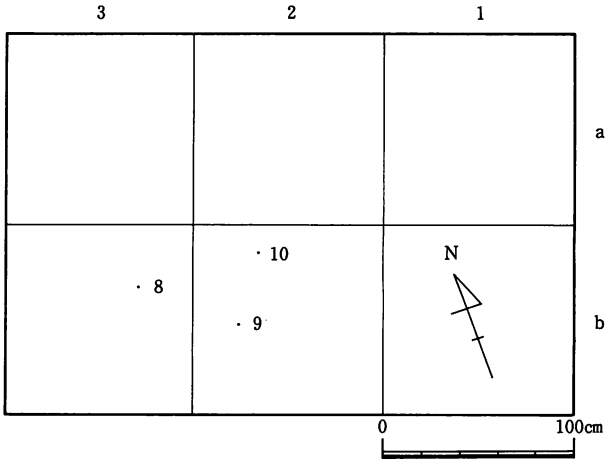
C．サイドスクレーパー（04・05）

（04）は打面を残し、やや幅広の縦長剝片を素材としている。石材は流紋岩である。右側縁に表面から細かな剝離を行い刃部を形成している。左側縁への加工は行われていない。

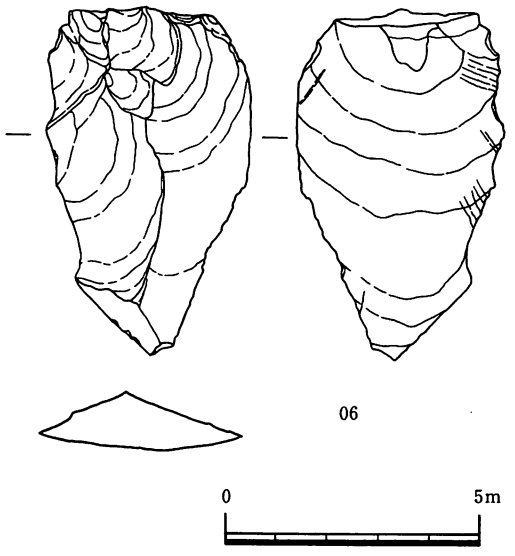
（05）は大型の不定形剝片を素材としている。石材は流紋岩である。主要剝離打面は残されている。両側縁に刃部加工があるサイドスクレーパーで、右側縁は裏面から、左側縁は表面から剝離を行っている。

D．縦長剝片（06）

幅広の縦長剝片である。石材は安山岩と判断される。主要剝離の打面は平坦であり、表面に対するステップフレーキングが見られる。



第10図　大観峯遺跡A地区第5トレンチ石器出土状況図



第11図　大観峯遺跡A地区出土石器(06)

3．B・C地点の調査

(1)調査の状況

B地点はA地点の北西方向へ約750mのところにある。自然崩壊による地表の露頭面が生じ、その表面から石器片が採集されていたものである。

また、C地点は道路のカット面から石器片が採集されている。A地点と同じく「ハードローム」中に包含層があるものと思われる。B地点の調査が可能であったので、露出崖面の直ぐ上に2m×7mのトレンチを設けて調査を行った。

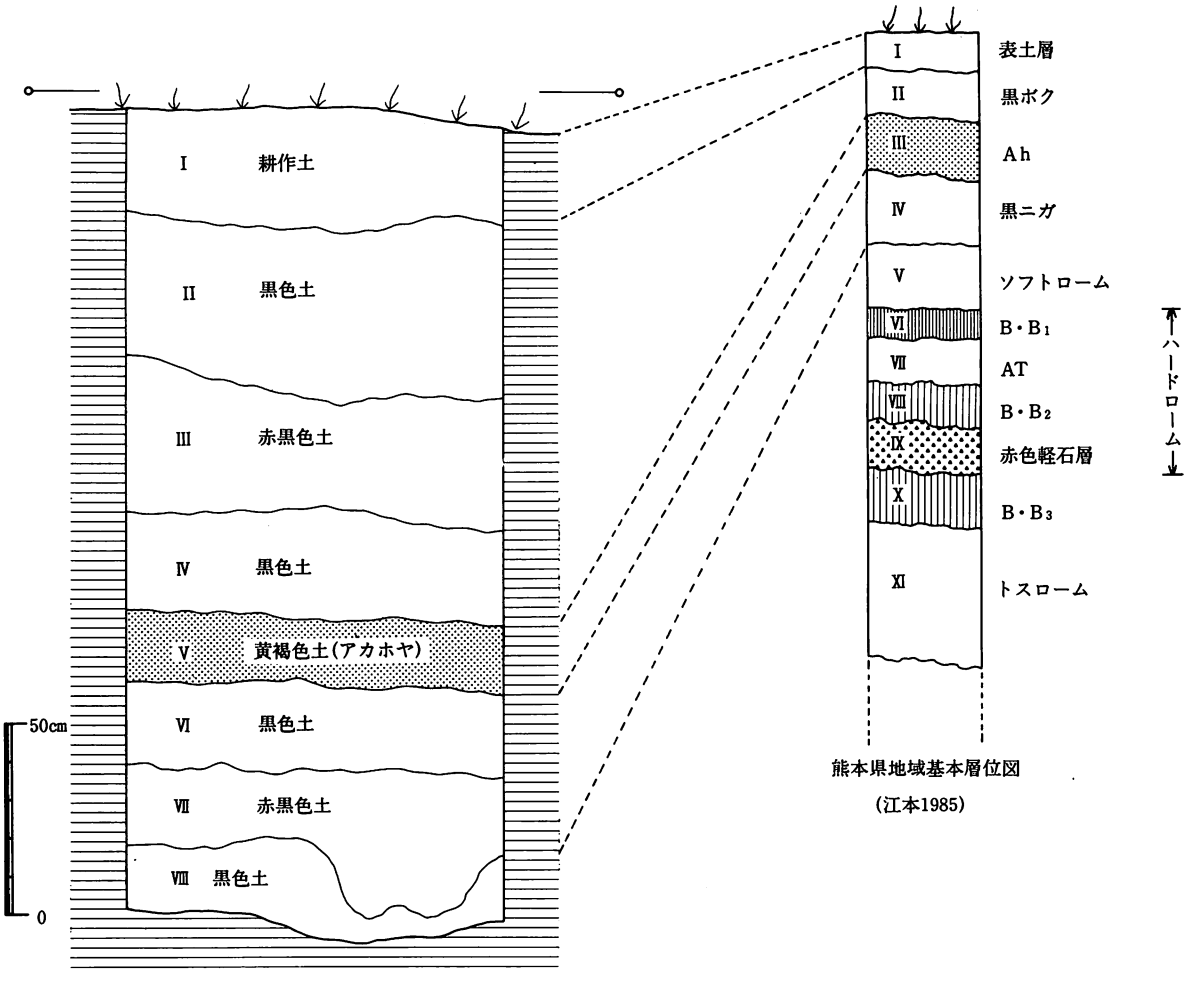
(2)調査の結果

深さ約2.2mを掘り進んだが遺物は出土していない。表土は牧草地改良工事のため約30cmの深さで天地替えが行われている。

第V層が黄褐色を呈する「アカホヤ」で15～18cmの一定した厚さで、見事にパックされている。

したがって、第II層～第IV層は所謂「黒ボク土」に相当するが、A地点の調査で「黒ニガ土」が数枚に分離される事実が確認された様に、ここでは「黒ボク土」が少なくとも3枚の層に分離される事が明らかになった。何れも阿蘇火山起源の火山灰であることは明白であろう。

第VI層から下位は「黒ニガ土」であり、A地点と同様に数枚に分離される。



第12図　大観峯遺跡B地区第Ⅰトレンチ南側層位図

B地点の調査は小規模なトレンチ調査であったため、掘り上げた土の置場の問題や、労務災害の危険性があることなどから、包含層へ行きつけず以上の層序状態を確認するに止まった。

4.まとめ

今回の調査は小規模であったが、大観峯遺跡で石器が出土するという事実を認定することができたし、石器包含層は単一であると判断される。そして、石器包含層の位置は、阿蘇地域で一般的に語られる「ソフトローム」の下部から「ハードローム」の上部部分であると判断される。すなわち「AT」よりも上位で、あまり長い間を置かない時期と判断される。

10点の石器の中に剥片尖頭器、掻器、削器の器種があり、大観峯遺跡の石器組成となるものである。

石材に流紋岩・安山岩を用いて、主要剥離打面を残した縦長剥片を石器素材とする特徴が捉えられる。そして、4～5cmを越える長さの縦長剥片を取得するための剥片剥離技術が展開している事実が述べられる。

また、剥片尖頭器の製作における基部加工技術と、先端部位に施すブランティング技法が展開している。

以上の事実に加えて、石器の集中的傾向が見られるが、集中部での石器や砕片の出土数量が非常に少ない。この遺跡地内において、石器製作過程を演じたとは思えない。むしろ、製品や製品に近い素材だけを搬入し生活を営んでいたように思える。

阿蘇周辺をはじめ熊本県地域に認めることのできない流紋岩や安山岩を石材として用いている事実は、特に大分県地域から搬入された石器群であるという捉え方を強めている。そして、遺跡は当時の季節的キャン

プサイトとしての性格が強いことが述べられよう。

また、今回調査し出土した石器がこの遺跡の石器組成の全てを示しているとはされまい。この遺跡から採集され報告された石器にナイフ形石器や台形石器がある。ナイフ形石器の中には二側縁にブランティングを施しているが、基部の片方は抉りが形成される特色を持つものがある。[註1]

これらのナイフ形石器や台形石器は大観峯遺跡の石器組成に加えて充分の資料である。それは最近の調査によって、このような石器組成がかなり確立的状況を呈してきているからである。「ＡＴ」直上期において、剝片尖頭器の出現＋ナイフ形石器＋台形石器＋削器・掻器らが出土している。そして、ナイフ形石器の一つの特徴に前記の基部の片方に抉りを施す事例が多いのである。

球磨郡山江村狸谷遺跡や水俣市石飛東遺跡の事例が知られ、球磨郡山江村大丸・藤ケ迫遺跡ではさらに三稜尖頭器の出土も伝えられている。[註2] 遠くでは鹿児島県指宿市小牧ⅢＡ遺跡の石器群に類似が認められる。[註3]

大観峯遺跡では以上のような石器組成が語られようし、過去、作成した熊本県地域の旧石器時代編年大系で述べれば、「ＡＴ」直上からの石器群として捉え、第Ⅲ－ｂ期の石器群とできよう。[註4]

註１．古森政次　「熊本県下新発見の旧石器時代遺跡について」『旧石器考古学』24号　1982

２．木崎康弘　『大丸・藤ヶ迫遺跡』熊本県教育委員会　1986

３．長野真一　「小牧３Ａ遺跡の紹介」『指宿央談』　1979

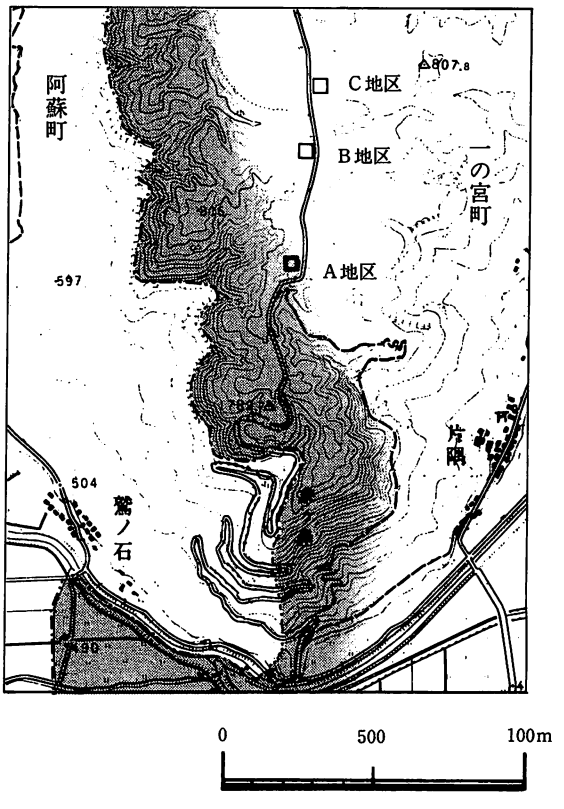
４．江本　直　「旧石器時代研究の現状と課題」『肥後考古』第５号　1985

第Ⅲ章　象ヶ鼻遺跡

1．調査概要

象ヶ鼻遺跡は行政区、熊本県阿蘇郡一の宮町中通字象ヶ鼻に位置する。阿蘇北外輪上に立地するが、前章、大観峯遺跡の南東約４㎞地点にあたり、海抜高度は約700mで約100m下がっている。南側の丘陵下の水田地との比高差約300mであり、平野部には著名な中通古墳群や手野の古墳群が存在する。中通集落から急峻な崖面を登って木落牧場へ通じる道路がつくられている。曲りくねった道路が尾根に登り直線化する地点で遺跡が発見されている。数カ所の道路の切り通し面で石器が採集されたものである。

Ａ・Ｂ・Ｃ地区と仮称するが、調査はＡ地区に３カ所のトレンチを設定し掘り下げた。いずれも石器包含層まで非常に深く、人力での調査では労務災害の危険性も高いため小規模で層位把握を主とした調査となった。



第13図　象ヶ鼻遺跡位置図

2．Ａ地区の調査

Ａ地区は採草地であり、背の低い笹竹が一面に繁っており、地表は大きな開発行為は受けていない。

石器の包含層まで非常に深い事が予想されたので道路カット面から見て、極力、層の薄い地点を選んで三ヶ所にトレンチを設定した。第１トレンチ（２ｍ×７ｍ)、第２トレンチ（２ｍ×７ｍ)、第３トレンチ（２ｍ×５ｍ）の規模で行った。

(1)層　位

〈第１トレンチ〉

このトレンチでは一部、3.50mの深さまで掘り下げている 第14図はこの北側層位図である。

第Ⅰ層　表土は暗褐色を呈し　植物根が著しい。

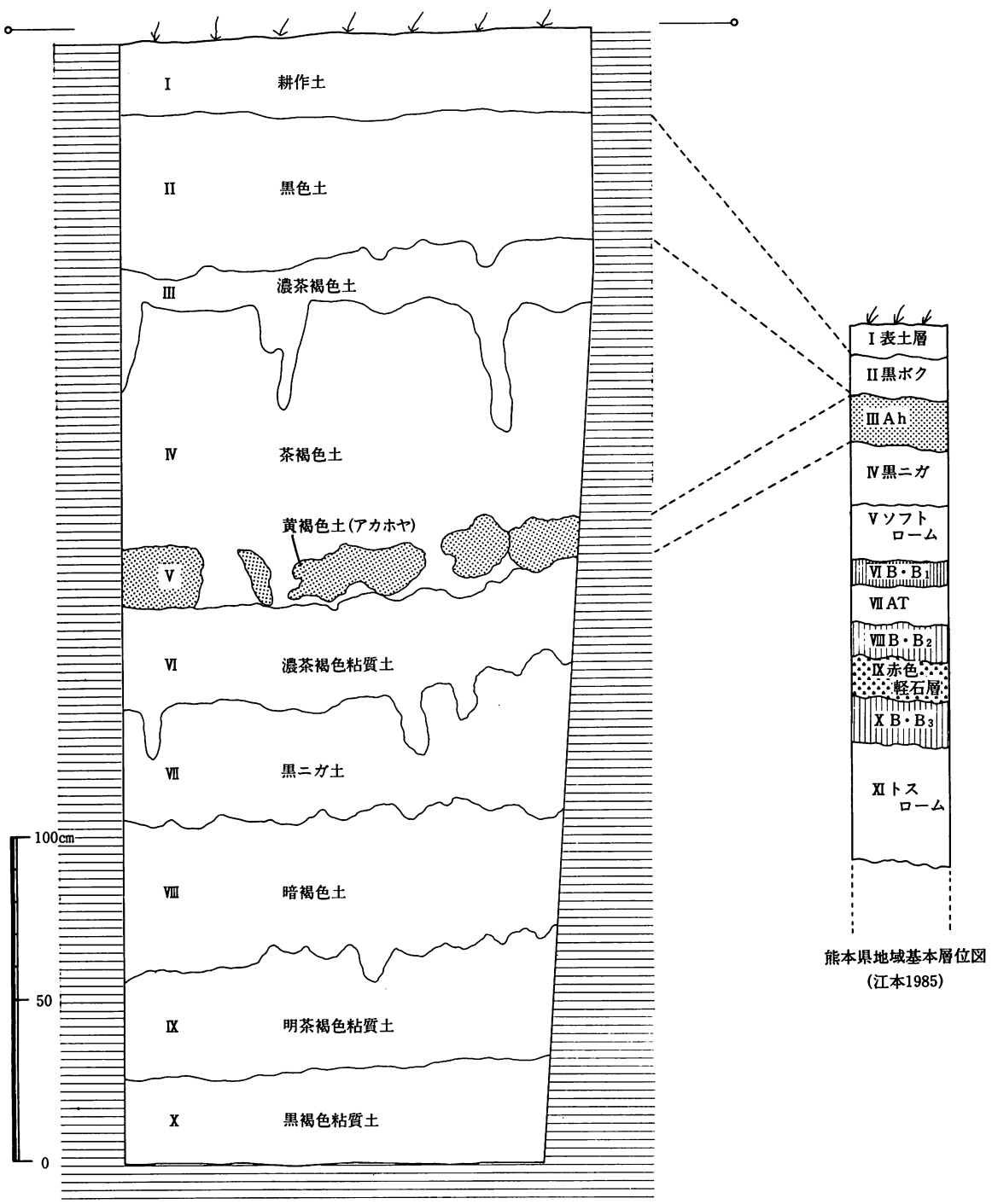
第Ⅱ層　黒色土で所謂「黒ボク土」である。

第Ⅲ層　濃茶褐色土で粘性は弱い。径約３～４㎜で茶色を呈するレンガクズ様の粒が多く混じっている。

第Ⅳ層　茶褐色土。やや粘性を有するが乾燥をするとサラサラとしている。熊本市周辺で指摘される第Ⅲ層黄褐色「キナコ」層に相当する。下部には第Ⅴ層の火山ガラス片がキラついている。

第Ⅴ層　黄褐色層。「アカホヤ」。約10～15cmの厚さがあり、付近一帯ではベルトを呈している。このトレンチでは間断があり、ブロック状に見える。上下の火山灰で厚くパックされ、「アカホヤ」の残存状態は非常に良好である。

第Ⅵ層　濃茶褐色粘質土層。所謂「アカホヤ」と「黒ニガ土」との間に存在する濃茶褐色の粘質土である。阿蘇外輪を離れると明確な層としては非常に捉え難い状況にある。下益城郡松橋町曲野遺跡の層位[註]で指摘をすることができた第Ⅲ－Ｃ層（黄褐色粘質土）～すなわち、第Ⅳ－ｂ層黒褐色粘質土の上位に認められる第Ⅳ－ａ層黄褐色粘質土に相当するものと考えられる。状況的には、この層は縄文早期押型文土器などを包含する例があり、10,000年前に近い時期の火山灰と判断される。



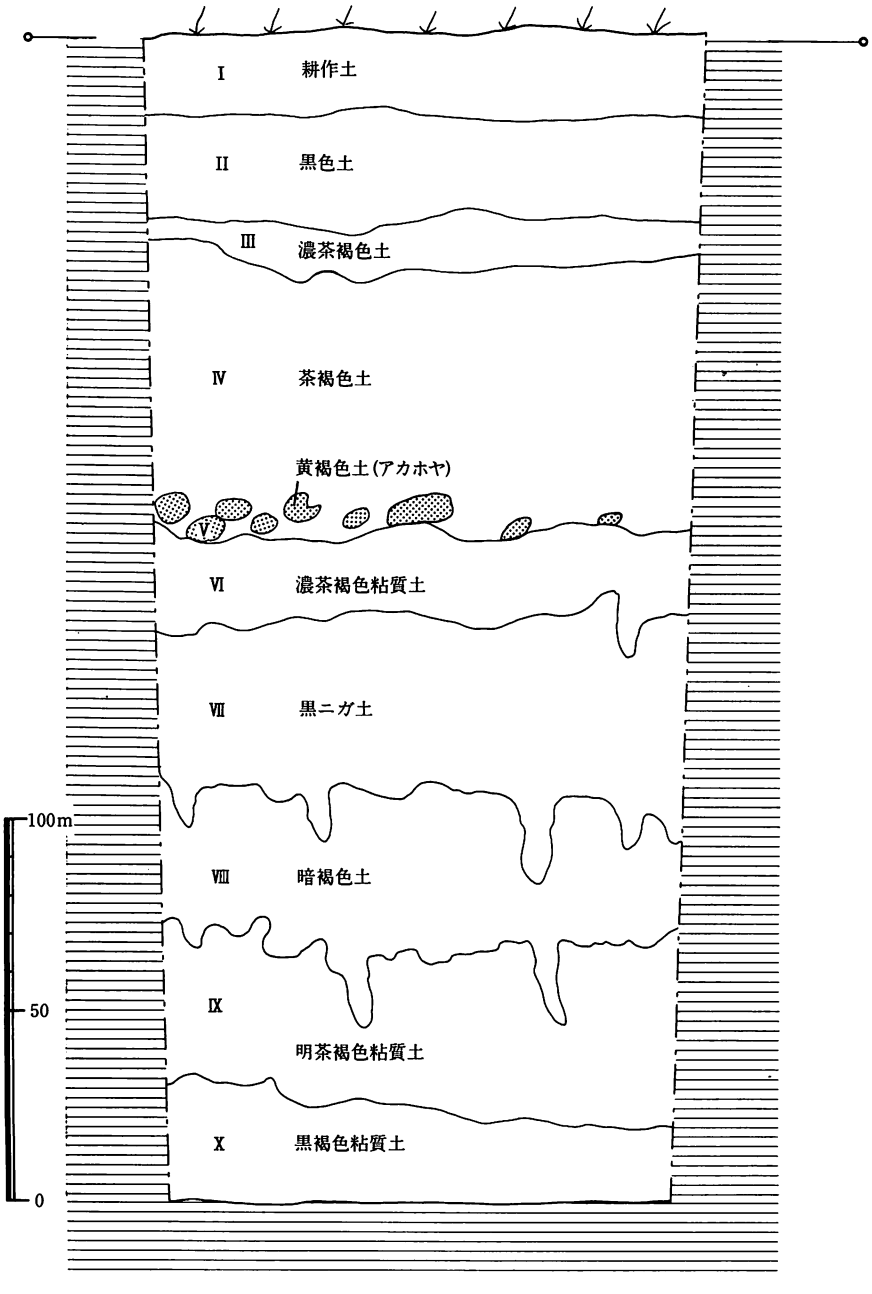
第14図　象ヶ鼻遺跡第Ⅰトレンチ北側層位図

第Ⅶ層　キメの細かい土質で黒色を呈する「黒ニガ土」である。

第Ⅷ層　暗褐色土。ゴチゴチした土塊で約40cmの厚さがある。所謂「ニガシロ」に類似している。崖面での採集石器の包含層と判断され、「ＡＴ」を含む可能性がある。

第Ⅸ層　明茶褐色粘質土層。粘質が非常に強い。

第Ｘ層　明茶褐色粘質土を主とするが、固い黒褐色の土塊がブロックではいっている。暗色帯として捉えることができよう。



第15図　象ヶ鼻遺跡第２トレンチ北側層位図

〈第２トレンチ〉

第１トレンチの北東部約50m地点に設定したが、ほぼ同じ層位状態を示している。

〈第３トレンチ〉

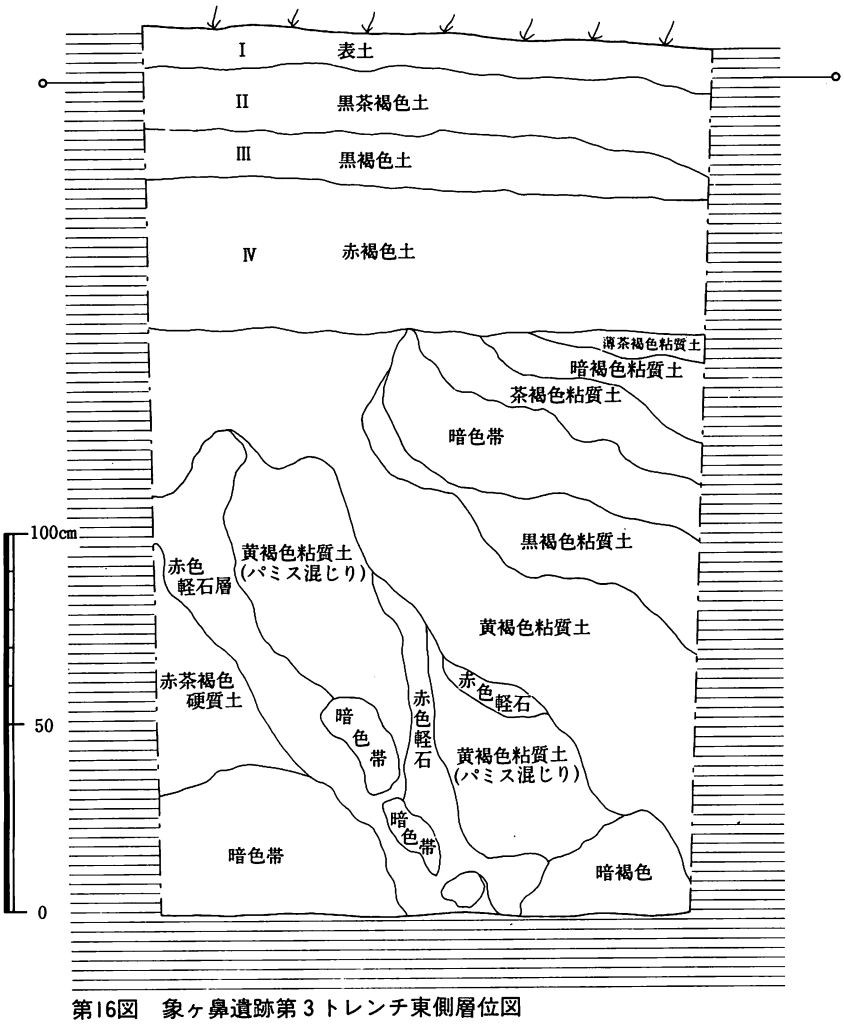
傾斜地にトレンチを設定したため複雑な土層を示している。現地表から約80cmは自然水の流路と考えられ、一度、深く流されてしまったあと、再度、流水作用により自然堆積をしたものと判断される。第Ⅴ層から層位が傾き、斜面地の状況を呈している。

(2)遺物出土状況

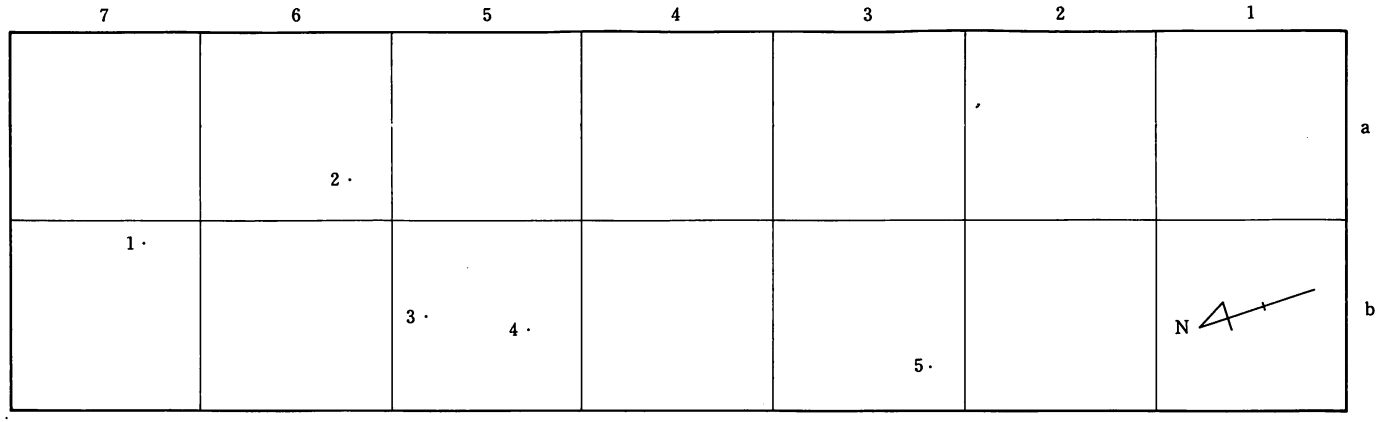
第１・３トレンチからは遺物は出土していない。第２トレンチで５点の遺物が出土している。第Ⅳ層～第Ⅵ層で縄文時代の押型文土器片と石鏃や剥片が出土している。

註

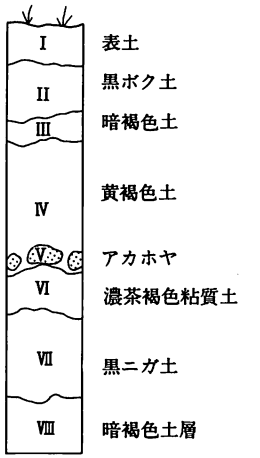
江本直「層位・旧石器時代遺物」『曲野遺跡Ⅱ』熊本県教育委員会　1983



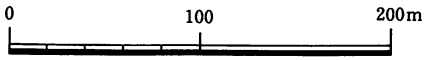
第16図　象ヶ鼻遺跡第３トレンチ東側層位図



平面分布状況



垂直分布状況



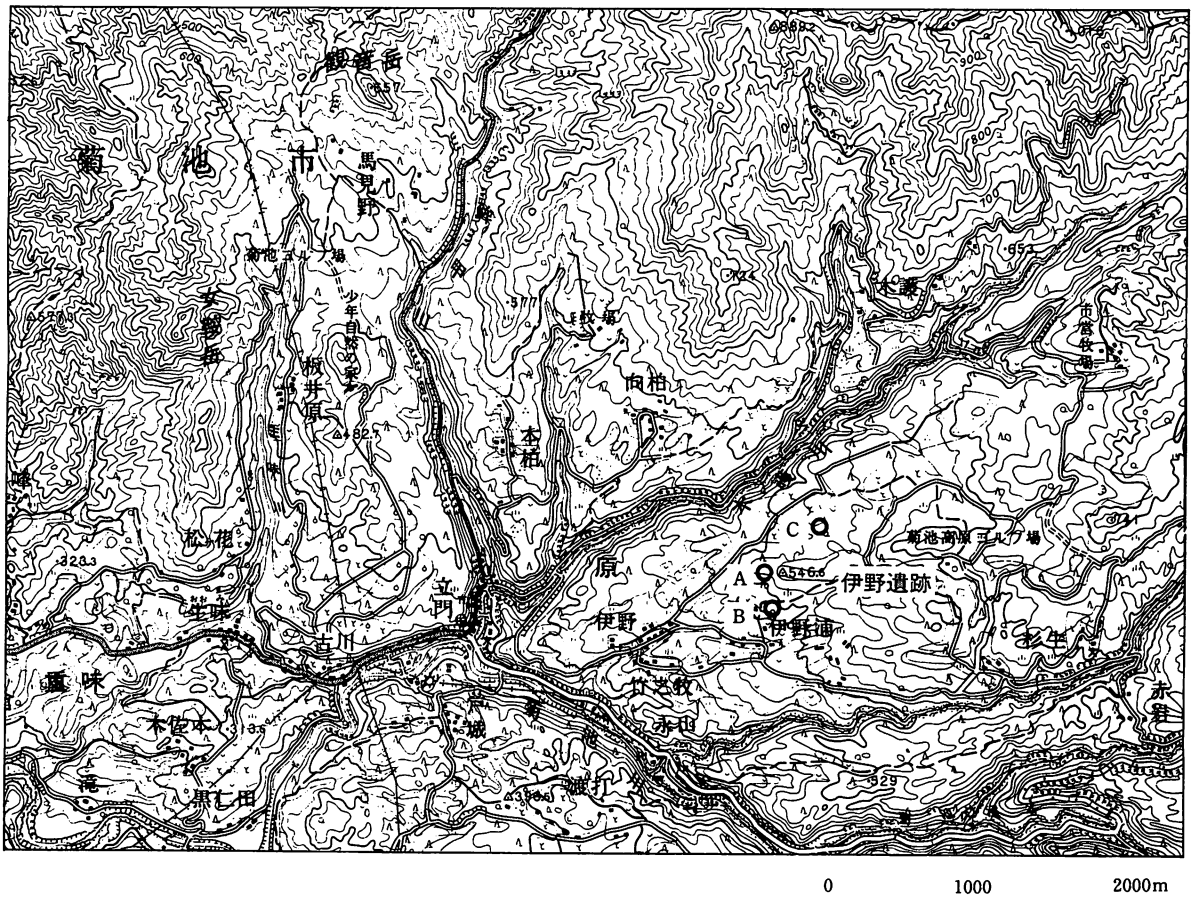
第17図　象ヶ鼻遺跡第２トレンチ遺物出土状況図

第Ⅳ章　伊野遺跡

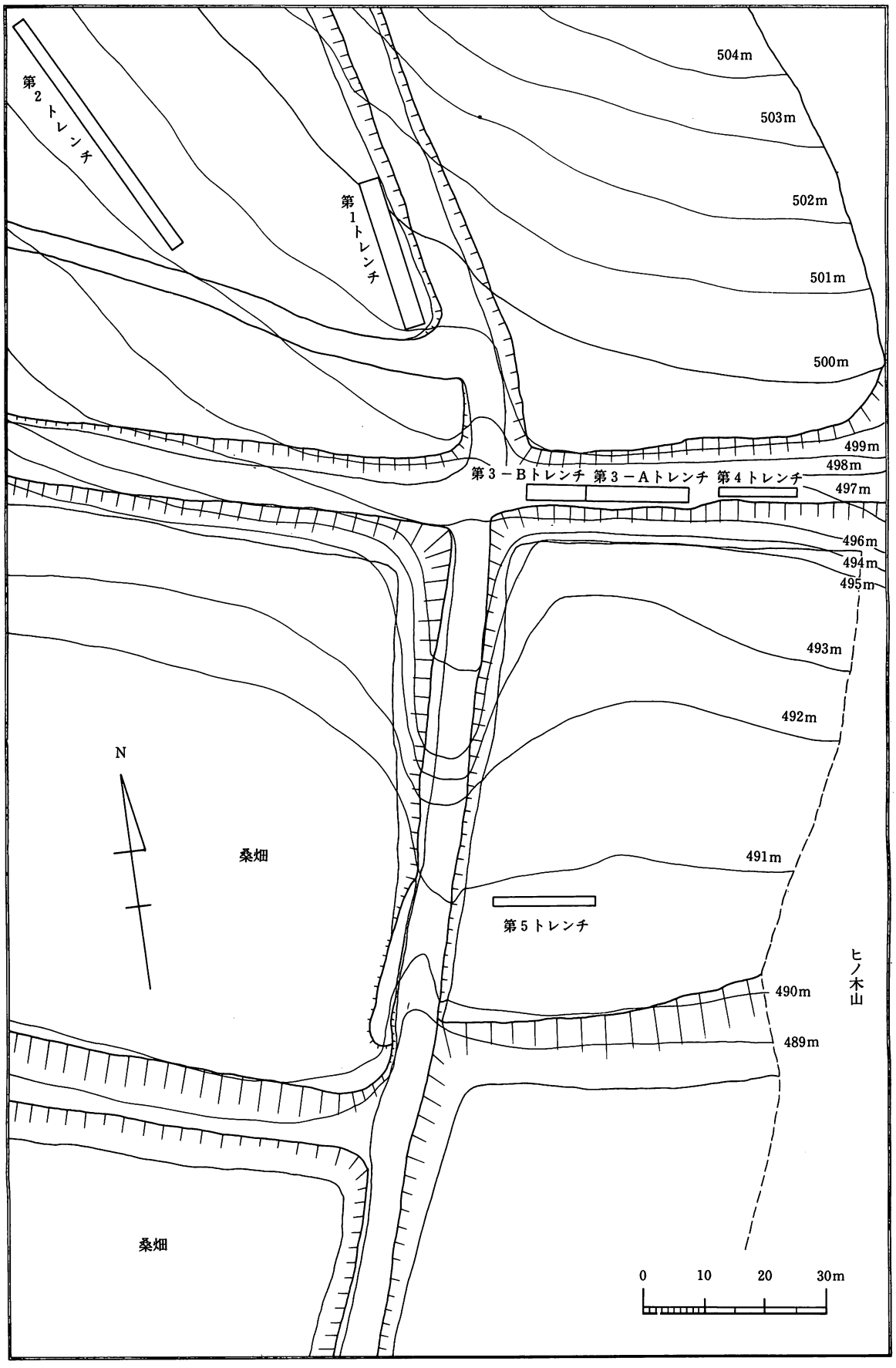
1．調査概要

伊野遺跡は行政区、熊本県菊池市大字原字伊野に位置する。菊池市街地から国道387号は約10km北東方向に進み立門に至る。この立門を左折し、県境の兵戸峠を越えると大分県へと向かう。立門を直進すれば清流と森林浴で著名な観光地菊池渓谷があり、道路は熊本県営有料道路菊池スカイラインと称され、阿蘇外輪を東進し大観峯らに繋がっている。

遺跡は立門から東へ直線にて約２km地点にあたる。阿蘇外輪から県境一帯は海抜1,000m前後の山地が続き九州山地を形成している。遺跡の裏手一帯は急峻な九州山地から次第に緩斜面が形成されるところであり、ゴルフ場や高原遊戯場がつくられ、レジャー施設のメッカとなっている。このゴルフ場の一角に国土地理院の標高546.6mを計る三角点が用意されている。三角点からの南・西方向への眺望は見事で、遠く金峰山・三の岳・小岱山・菊池台地らを眺めることができる。今回の調査地はこの三角点から見下す南向きの緩斜面上にあり、三角点との比高差は約50mである。一帯は桑畑や牧草地とされてきたが、さらに造成の手を加え樹木栽培も行なわれている。遺跡はこの造成工事の後、研究者が多量の石器を発見、採集したことにはじまっている。造成工事は多数のカット面を生じさせており、土層観察に最適でもあり、豊富な火山灰に恵まれて、



第18図　伊野遺跡位置図



第19図　伊野遺跡全体図

各層が明瞭な層序状態を示している。

出土層序を明確に把握することが可能であり、県内の遺跡の中でも最も良好な遺跡であるとの判断がなされた。尚、調査地の東側は深い迫地となり谷水がある。谷水は現在も伊野集落の上水道の一部にも使用され充分な水量である。

今回の調査地を伊野遺跡A地点として、小谷を越えた南側に細石核を出土したB地点がある。C地点は北東方向へ約500m地点で、ゴルフ場の造成工事面に石器が採集されている。以上、伊野遺跡A～C地点と称している。

調査地の造成は進入路から南斜面に対して、東側は4段、西側は3段に形成されている。

トレンチは遺物が多く採集されている地点の中で、旧地表以下が造成工事による削平を受けていない地区を選んで設定した。

第1・2トレンチは西側の一段目、第3・4トレンチは東側の2段目と3段目との間に僅かに残された平坦地（犬走り面）に設けた。第5トレンチは東側3段目の南端に設けた。

尚、西側の2段目のカット面や、東側4段目の西側カット面なども石器の採集される地点であるが、適当なトレンチの設定場所を選ぶことができなかった。

各トレンチの規模は下記のとおりである。

第1トレンチ　（2m×15m）、第2トレンチ　（1.5m×27m）

第3トレンチ　（1.5m×16m）、第4トレンチ　（1m×8m）

第5トレンチ　（1m×10m）

2.層位

〈第1トレンチ東側層位〉

第Ⅰ層　造成に伴う客土である。

第Ⅱ層　本来的には「黒ボク土」であるが、造成時に削り取られ、確認ができない。

第Ⅲ層　「アカホヤ」を含むキナコ状を呈する黄褐色土である。やや粘性がある。

第Ⅳ層　キメの細かい「黒ニガ土」である。約40～50cmと厚く安定した堆積状態である。第Ⅴ層や第Ⅵ層にかけて樹根による落ち込みが伸びている。

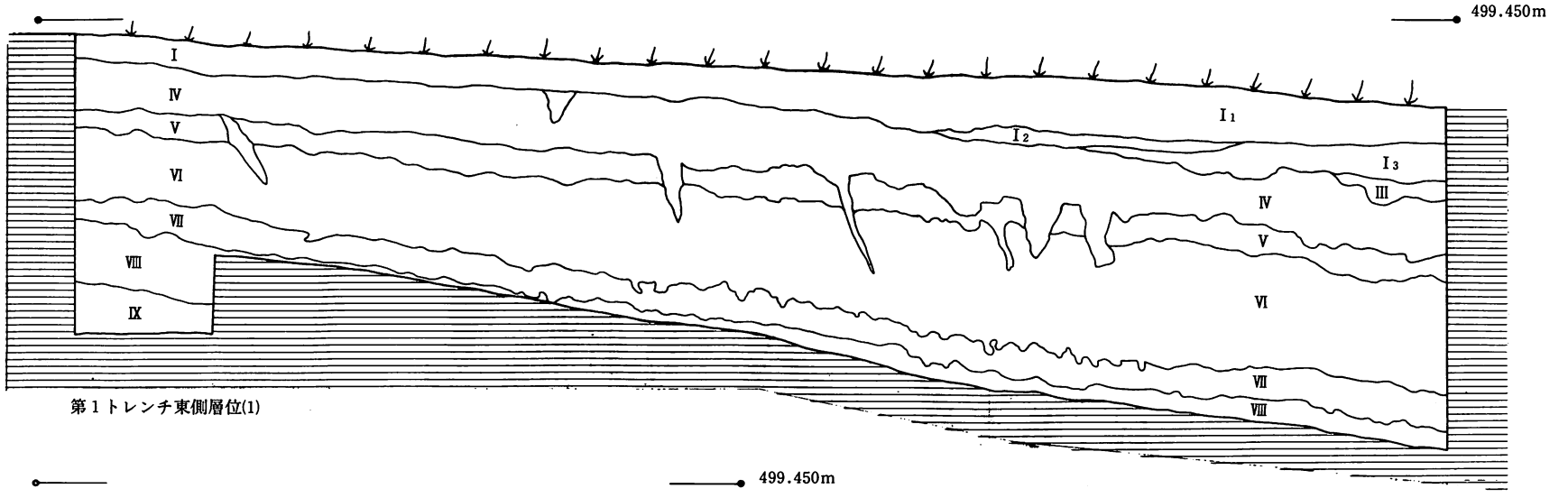
第Ⅴ層　暗褐色粘質土で「黒ニガ土」からの色調の滲みがあり漸移層とできる。

第Ⅵ層　黄褐色粘質土層。キメが細かく粘性がある。安定した堆積で最も厚いところでは100cmに近い。第Ⅶ層に比較すると軟らかく「ソフトローム」と呼称できる。

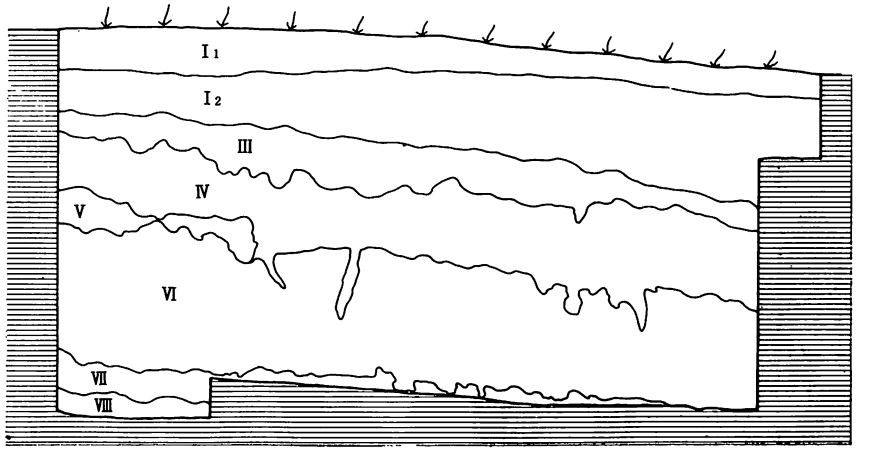
第Ⅶ層　茶褐色を呈する「ハード」な粘質土であり、第Ⅵ層の「ソフトローム」に対して「ハードローム」と呼べよう。約20mの厚さで起伏が見られる。「AT」火山ガラスを含む層と考えられる。

第Ⅷ層「黒色粘質土」。北側端で約40cmの厚さがある。所謂、「暗色帯：B・B」に相当する。

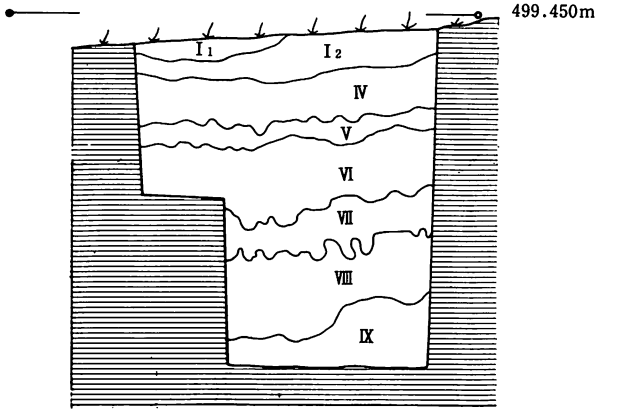
第Ⅸ層　赤褐色粘質土。粘質の非常に強い土質である。「暗色帯：B・B」の下位に位置しており「トスローム」と判断できる。



第１トレンチ東側層位(1)



第１トレンチ東側層位(2)



第１トレンチ北側層位

0　100m

第20図　伊野遺跡第１トレンチ層位図

〈第３トレンチ東側層位〉

第３トレンチ東側層位は県北地域層位の最も典型的な状態を示している。

第Ⅰ層　耕作土。

第Ⅱ層　黒ボク土。

第Ⅲ層　黄褐色土。（アカホヤ）

第Ⅳ層　黒ニガ土。

第Ⅴ層　暗褐色漸移土。

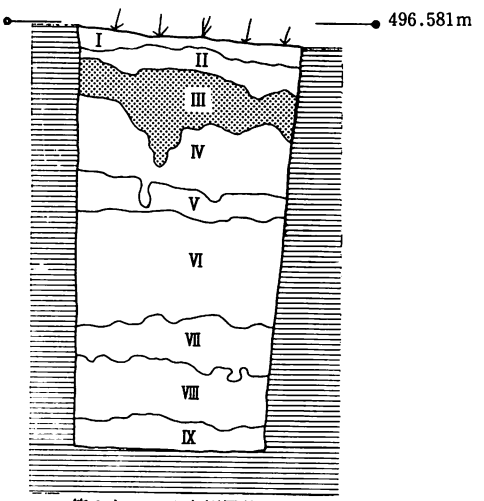
第Ⅵ層　黄褐色粘質土。「ソフトローム」

第Ⅶ層　茶褐色粘質土。「ハードローム」

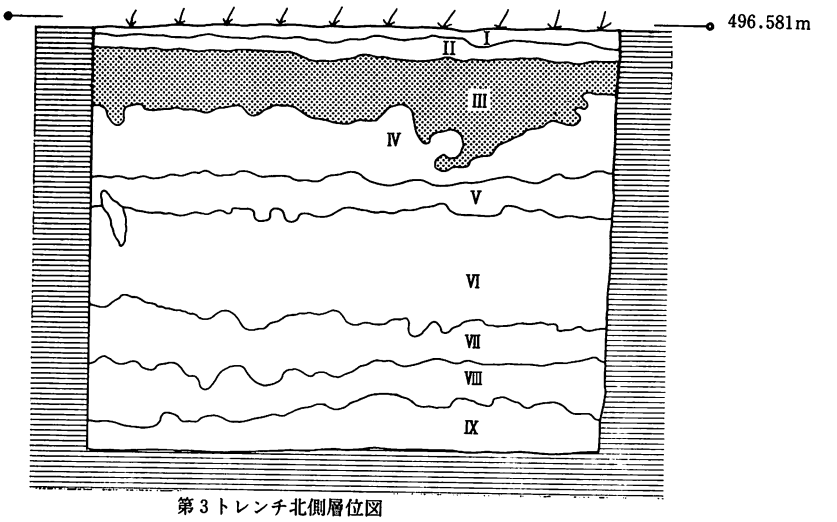
第Ⅷ層　黒褐色粘質土。「暗色帯：Ｂ・Ｂ」

第Ⅸ層　赤褐色粘質土。「トスローム」

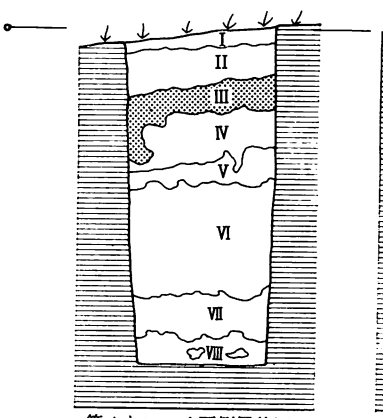
「ＡＴ」火山ガラスは第Ⅶ層に含まっていることが予想される。今回の調査の石器包含層は第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層であり、第Ⅵ層からの出土が最も多い。



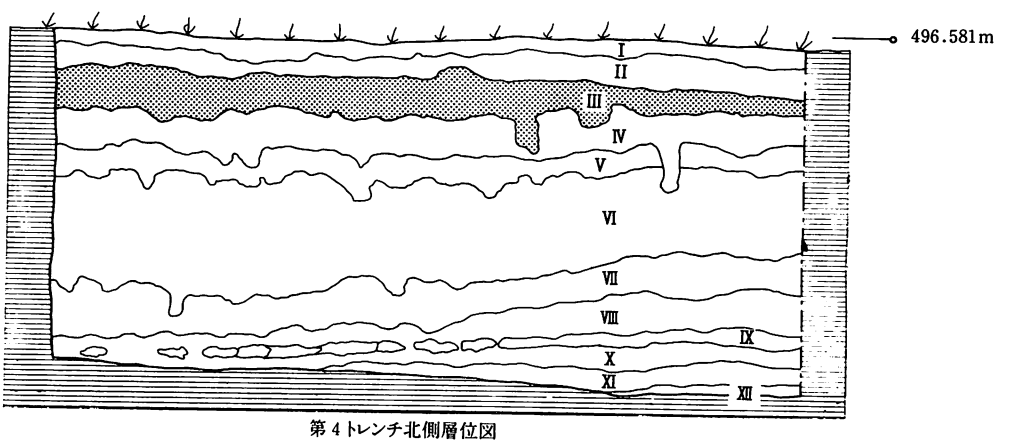
第３トレンチ東側層位図



第３トレンチ北側層位図



第４トレンチ西側層位図



第４トレンチ北側層位図

第21図　伊野遺跡第３・４トレンチ層位図

0　100cm

〈第４トレンチ北側層位〉

第４トレンチの西側層位は第３トレンチと同じ状態を示している。北側層位にやや変化が見られる。それは第Ⅶ～Ⅹ層までが、本来的には「ハードローム」に相当すると思われるものであるが、この部分は明らかに細分可能である。

第Ⅶ層　茶褐色の砂質層で固い。

第Ⅷ層　黒褐色を呈する粘質土であるが、この下に第Ⅸ層赤色軽石がブロック状に認められる。

第Ⅹ層　第Ⅷ層と同質に見える。

第Ⅺ層　キメの細かい黒色粘質土であり「暗色帯：Ｂ・Ｂ」とできる。

第Ⅻ層　赤褐色粘質土であり、「トスローム」に相当すると判断できる。

「ＡＴ」の火山ガラス・重鉱物は第Ⅶ・Ⅷ層に含まると思われる。

３.遺物の出土状況

《第１・２トレンチ》

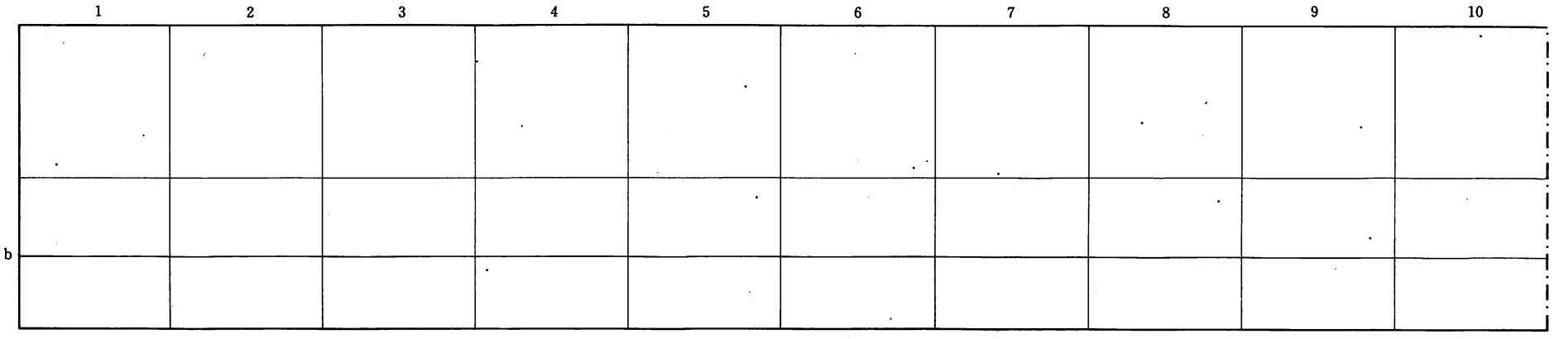
第１・第２トレンチは標高498～500m上に立地し、比較的平坦地が残されてた地区であり、植樹された樹木の間を縫ってトレンチを設定した。

第１トレンチは現地表から最大深さ2.5mまで掘り込んでおり、合計12点の石器類が出土している。内訳は第Ⅳ層「黒ニガ土」から１点、第Ⅴ層「暗褐色漸移層」４点、第Ⅵ層「ソフトローム層」から７点であった。出土数から見て、第Ⅵ層「ソフトローム」が本来の包含層と考える事ができよう。第Ⅴ層から出土した石器類の中に黒曜石製のスクレーパーがあり、顕著な刃部加工が見られる。このほかは剥片や砕片であり定形石器は出土していない。

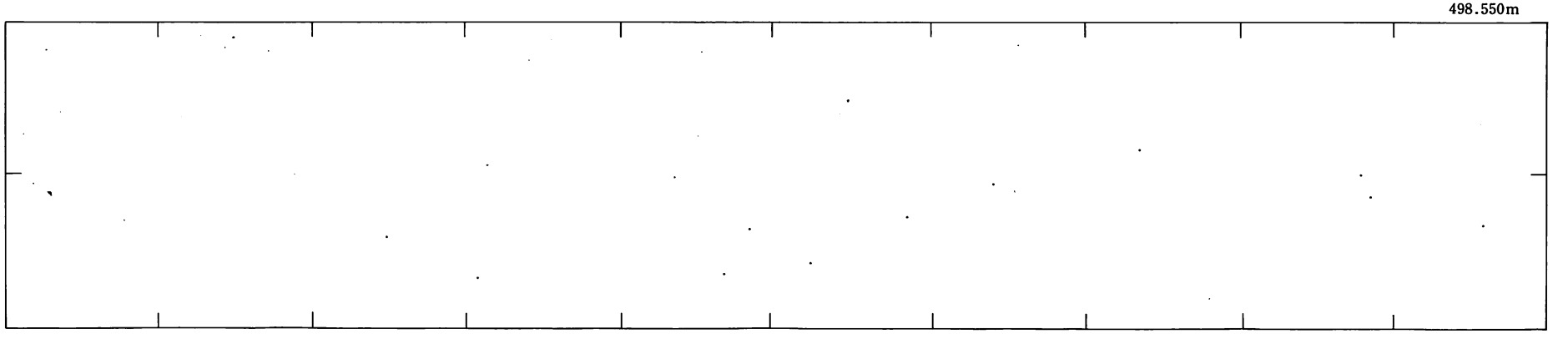
第２トレンチは、今回の調査で最も長い規模の設定ができたが、剥片・砕片類が数点出土したに止まった。この結果から、遺物の出土する集中地点は、第１トレンチ付近を西限として、第２トレンチ地点への拡がりは伸びないであろうとの判断ができた。尚、第１・第２トレンチから北側地点でも石器類はほとんど採集されていない。したがって、北側への拡がりも跡切れるものと思われる。

《第３トレンチ》

第３トレンチは標高497～498mを計る傾斜地に狭い平坦地が残されており、この平坦地に幅1.5m×長さ10mの規模でトレンチを設定した。南側のカット面から多量の石器類が採集されており、このトレンチから石器類が出土する可能性は強いと予想された。石器類の出土状況に応じて、西側へ可能な限りトレンチを延長する事を予定したが、調査を進めると石器類の集中が確実に拡がる事が確認された。したがって、当初のトレンチを第３－Ａトレンチとし、延長して設定したトレンチを第３－Ｂトレンチとした。



平面出土状況図

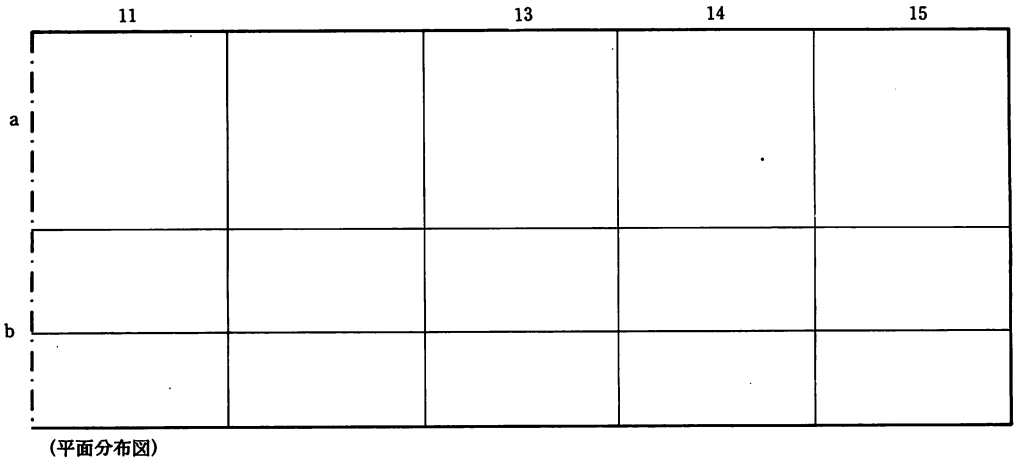


垂直分布状況図

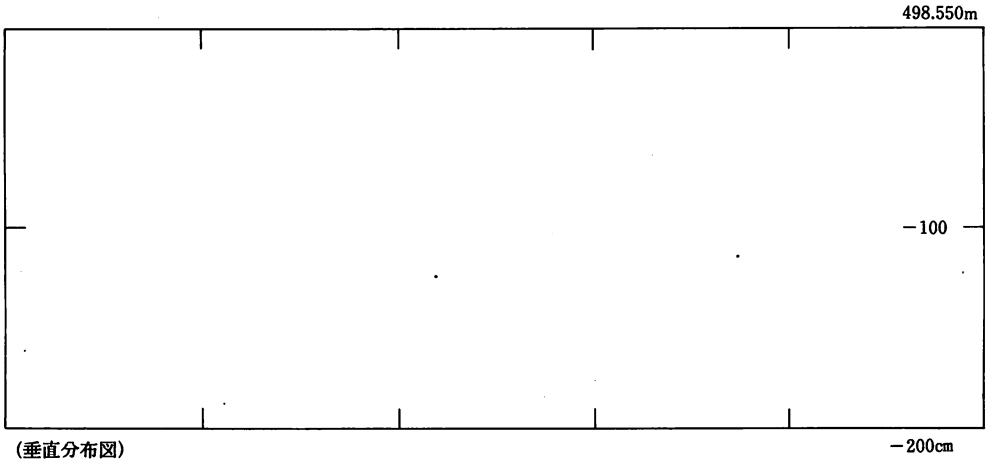
▲ナイフ形石器　□細石核
⊗スクレーパー　▯細石刃
□石　核　・剥　片

第22図　伊野遺跡第Ⅰトレンチ遺物出土状況図(Ⅰ)

0　100cm



(平面分布図)



(垂直分布図)

・剥　片

0　100cm

第23図　伊野遺跡第Ⅰトレンチ遺物出土状況図(2)

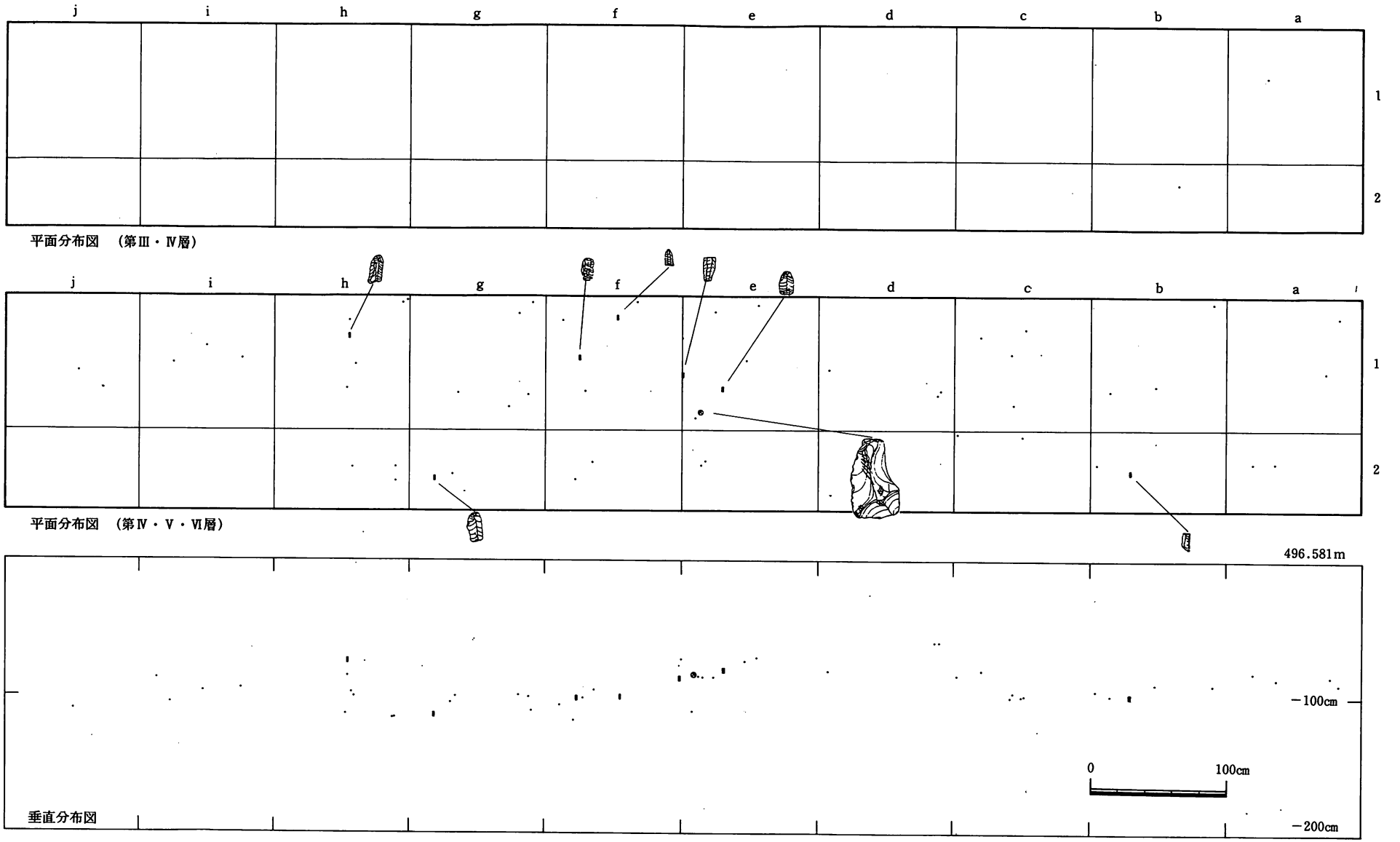
〈第３－Ａトレンチ〉

第３－Ａトレンチは３枚の平面分布図を作成した。第Ⅲ・Ⅳ層には縄文時代の土器片や石鏃が含まっている。第Ⅳ層～第Ⅴ層には細石核・細石刃が出土しているが、細石器は一部第Ⅵ層にも出土している。出土量から主要な包含層は第Ⅳ層と第Ⅴ層と判断される。

第Ⅵ層は中半から下部に石器類の出土する集中傾向がある。第Ⅵ層下部も第Ⅶ層に近づくに従い出土量が非常に少なくなっている。第Ⅶ層は量的に少ないが２ヵ所の集中傾向が見られる。

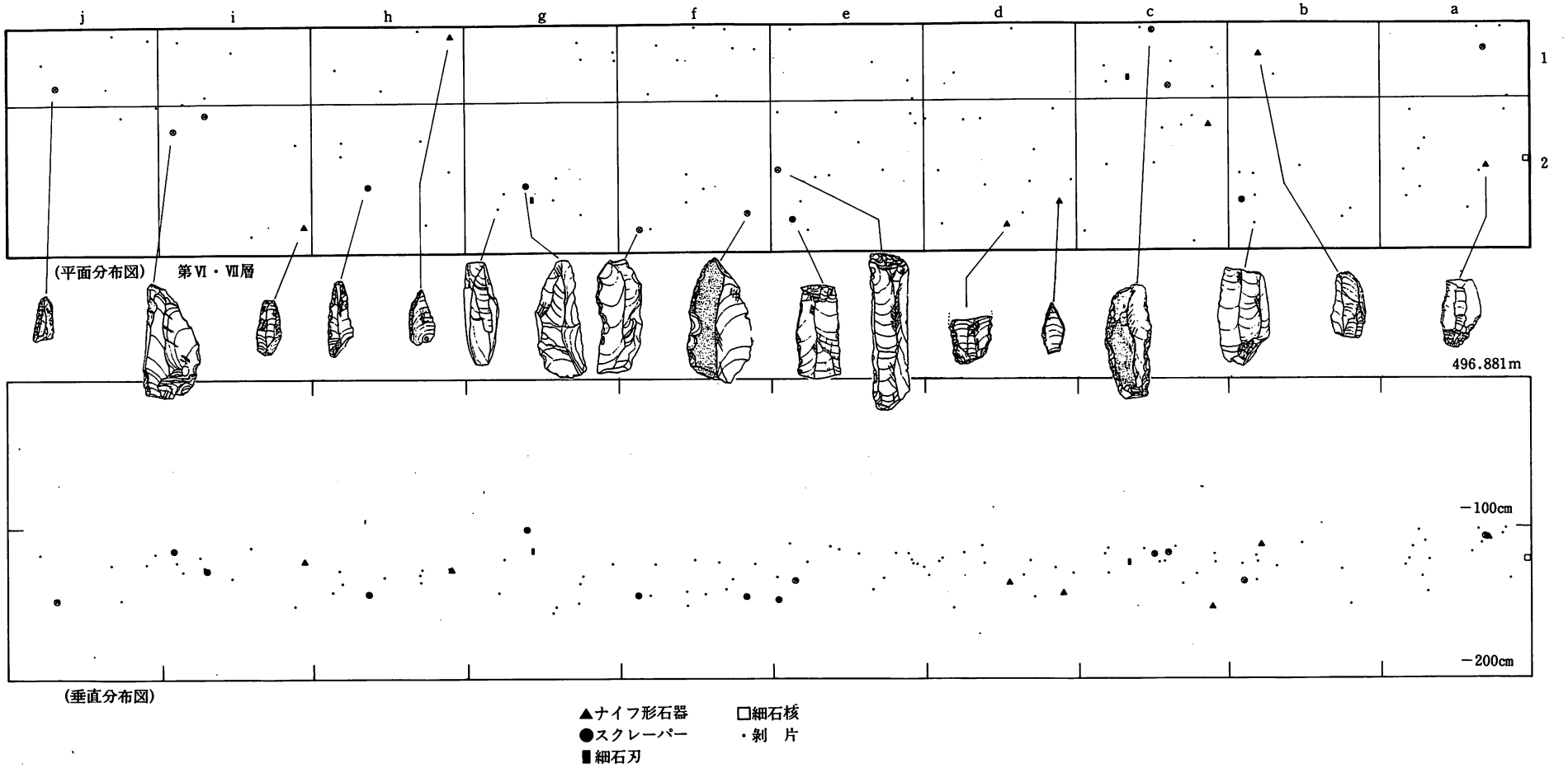
〈第３－Ｂトレンチ〉

第Ⅴ層からは少ない出土量であったが、第Ⅵ層に集中分布が見られた。第Ⅵ層は約70～80cmの厚さがあるが上下を通して出土しており、第Ⅶ層は少量であった。

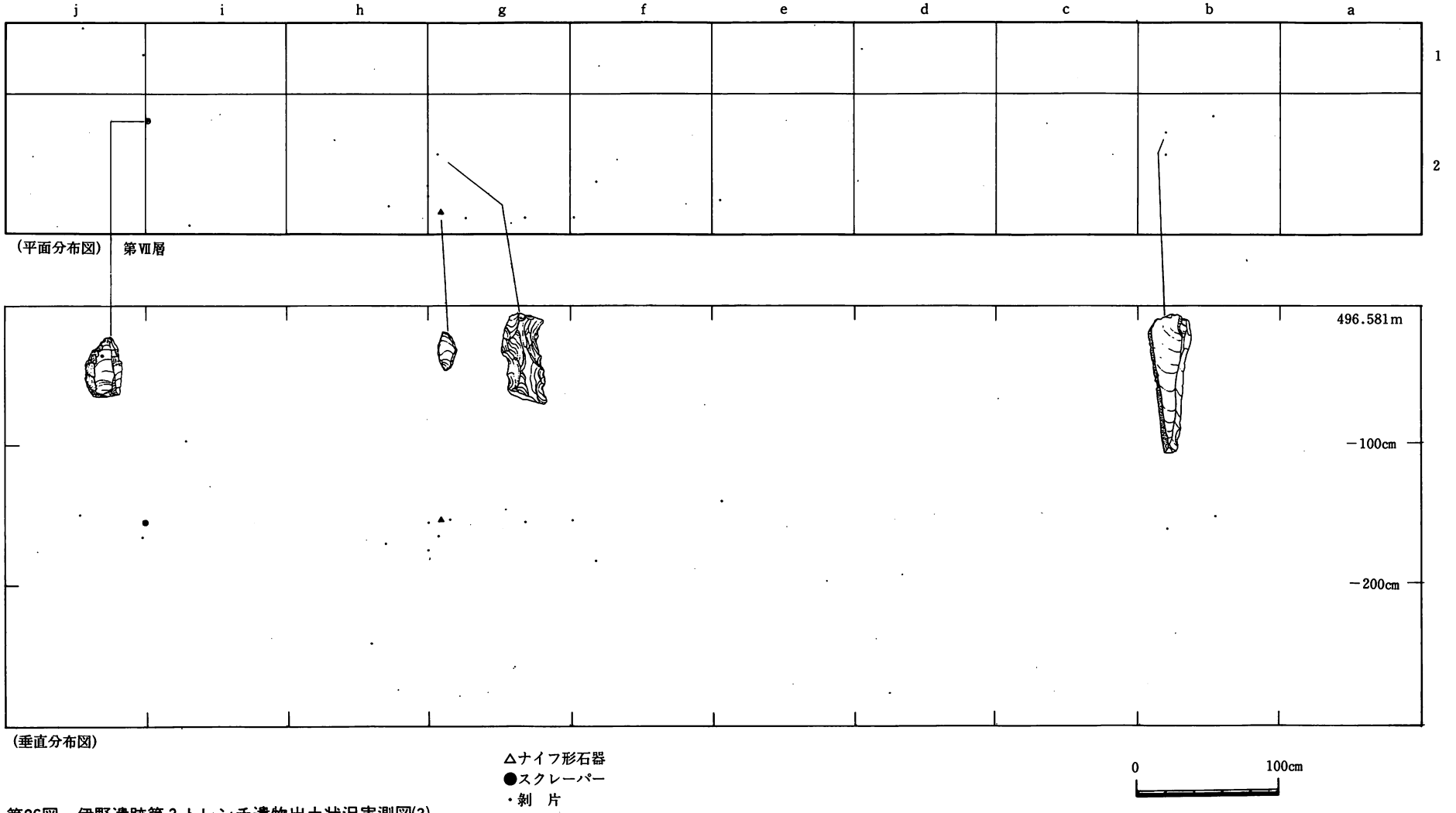


第24図　伊野遺跡第３－Ａトレンチ遺物出土状況実測図(1)

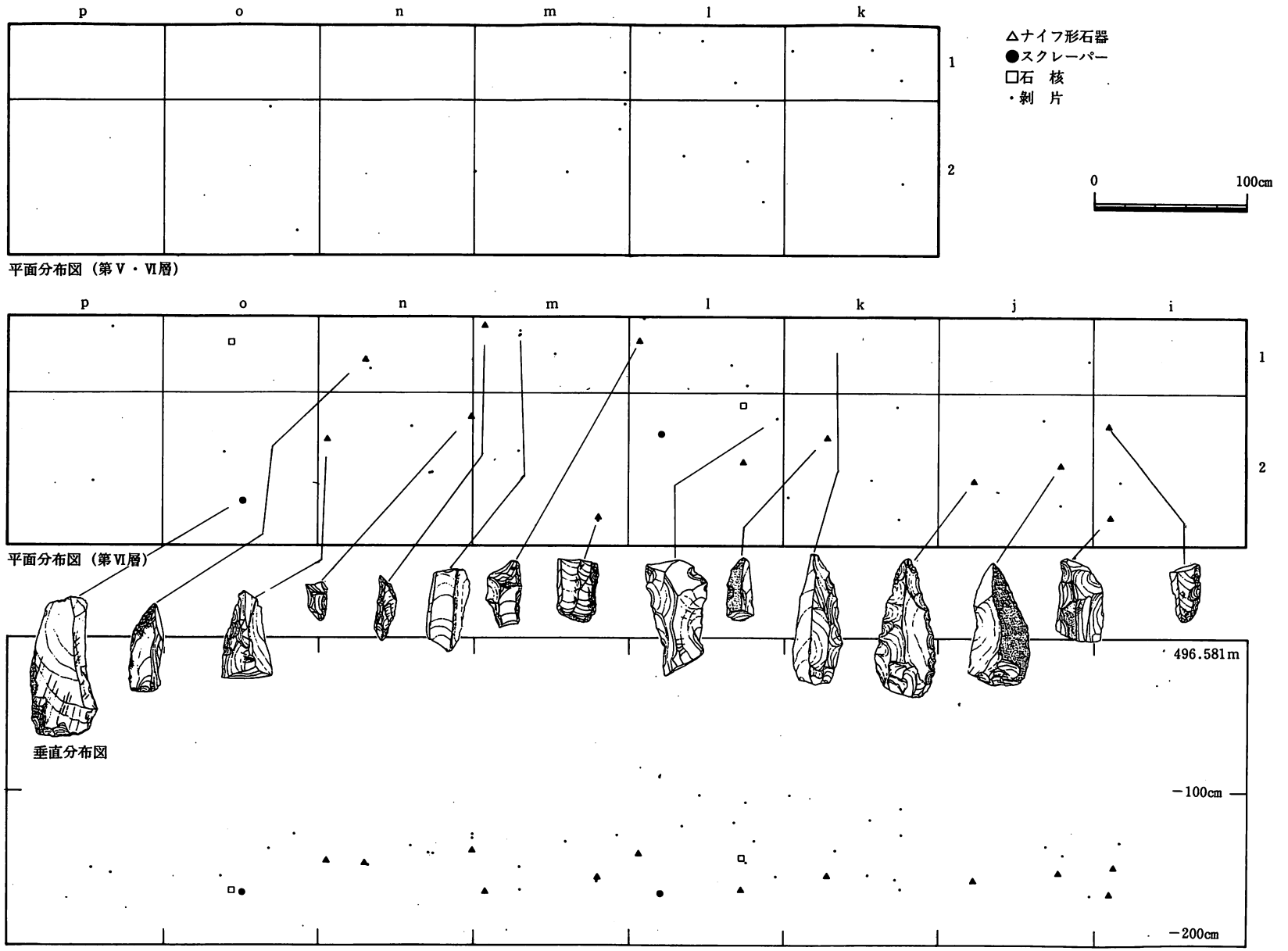
・剥片　●掻器　▮細石刃



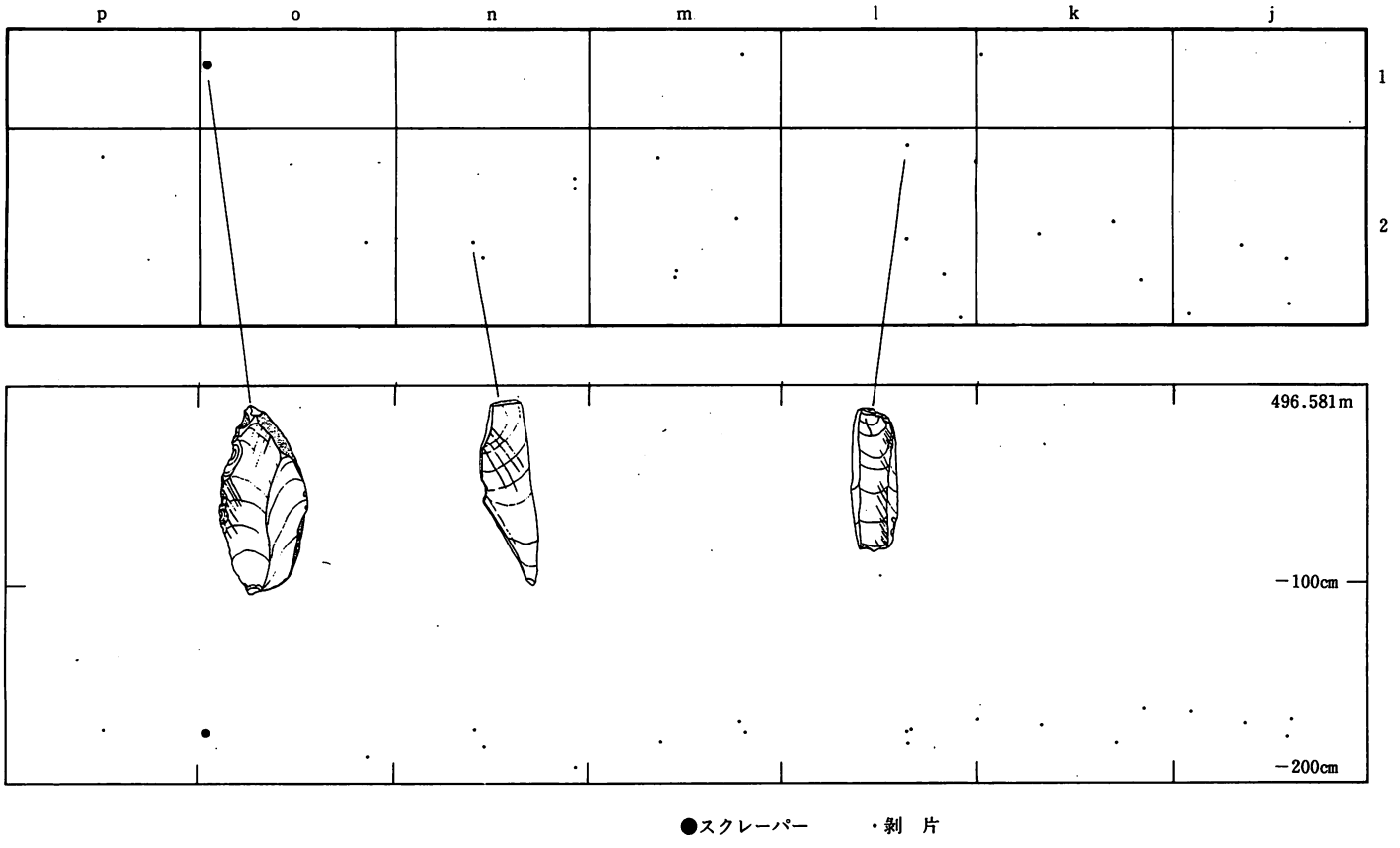
第25図　伊野遺跡第３－Ａトレンチ遺物出土状況実測図(2)



第26図　伊野遺跡第３トレンチ遺物出土状況実測図(3)



第27図　伊野遺跡第３－Ｂトレンチ遺物出土状況実測図(1)



第28図　伊野遺跡第３－Ｂトレンチ遺物出土状況実測図(2)

〈第４トレンチ〉

第３トレンチの出土状態から東側へも拡がる可能性が充分もたれたため、第４トレンチの設定を予定したが、第３トレンチ設定地よりもさらに狭い犬走り面であるため、幅１ｍ×長さ10mの小規模トレンチを設定した。

第Ⅳ層から第Ⅵ層の上部にかけては全体的に拡がって出土している。第Ⅵ層下部から第Ⅶ層では、東側での出土が少なくなり、西側に集中する傾向が見られた。

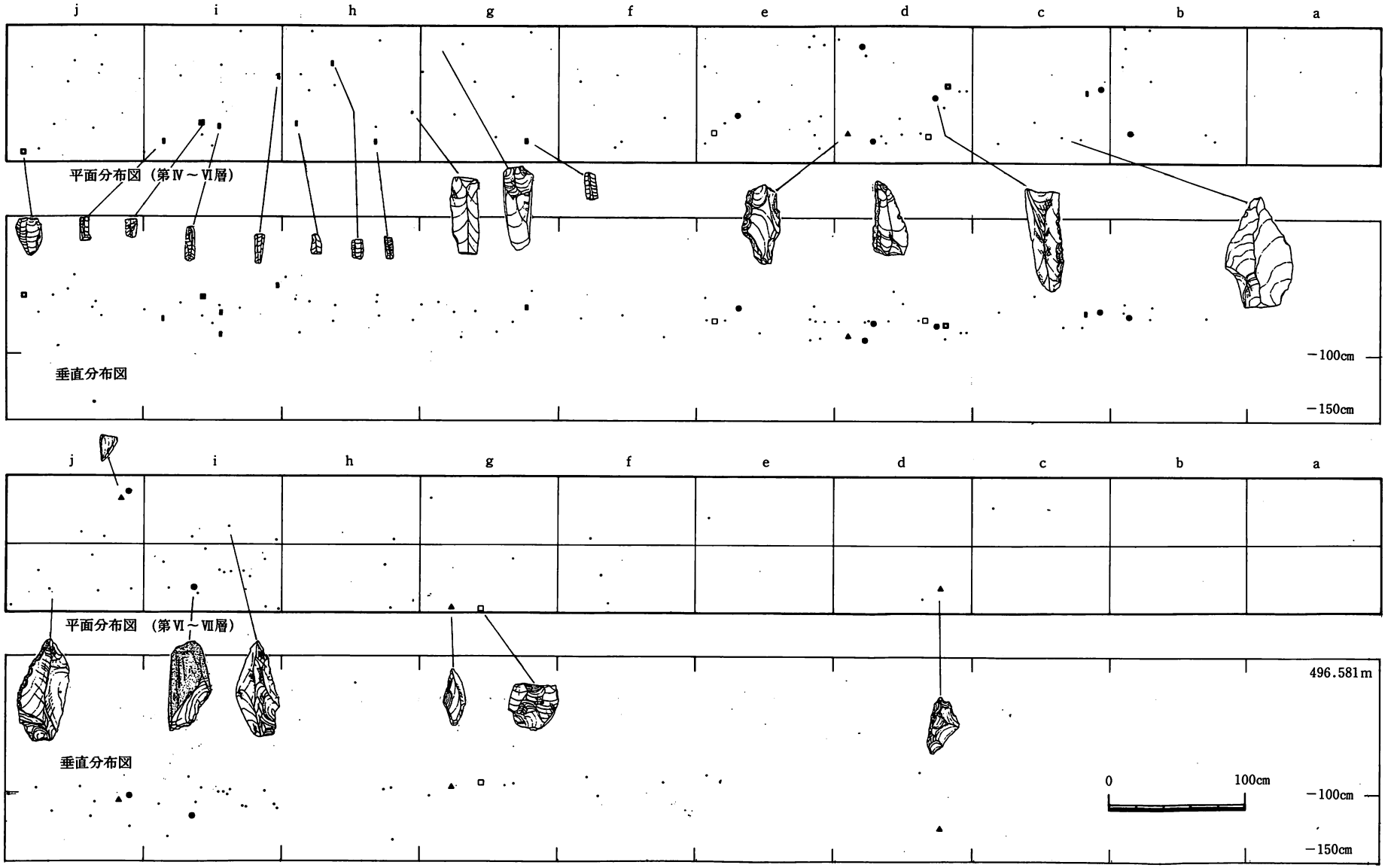
４．出土遺物

(1)第３－Ａトレンチ出土遺物

〈第Ⅴ層〉

Ａ．細石刃（01）

良質の黒曜石の大きめの細石刃である。頭部と先端を折断している。



第29図　伊野遺跡第４トレンチ遺物出土状況実測図

▲ナイフ形石器　●スクレーパー　▮細石刃　□細石核　□石核　・剥片

〈第Ⅵ層〉

A．細石刃（02～09）

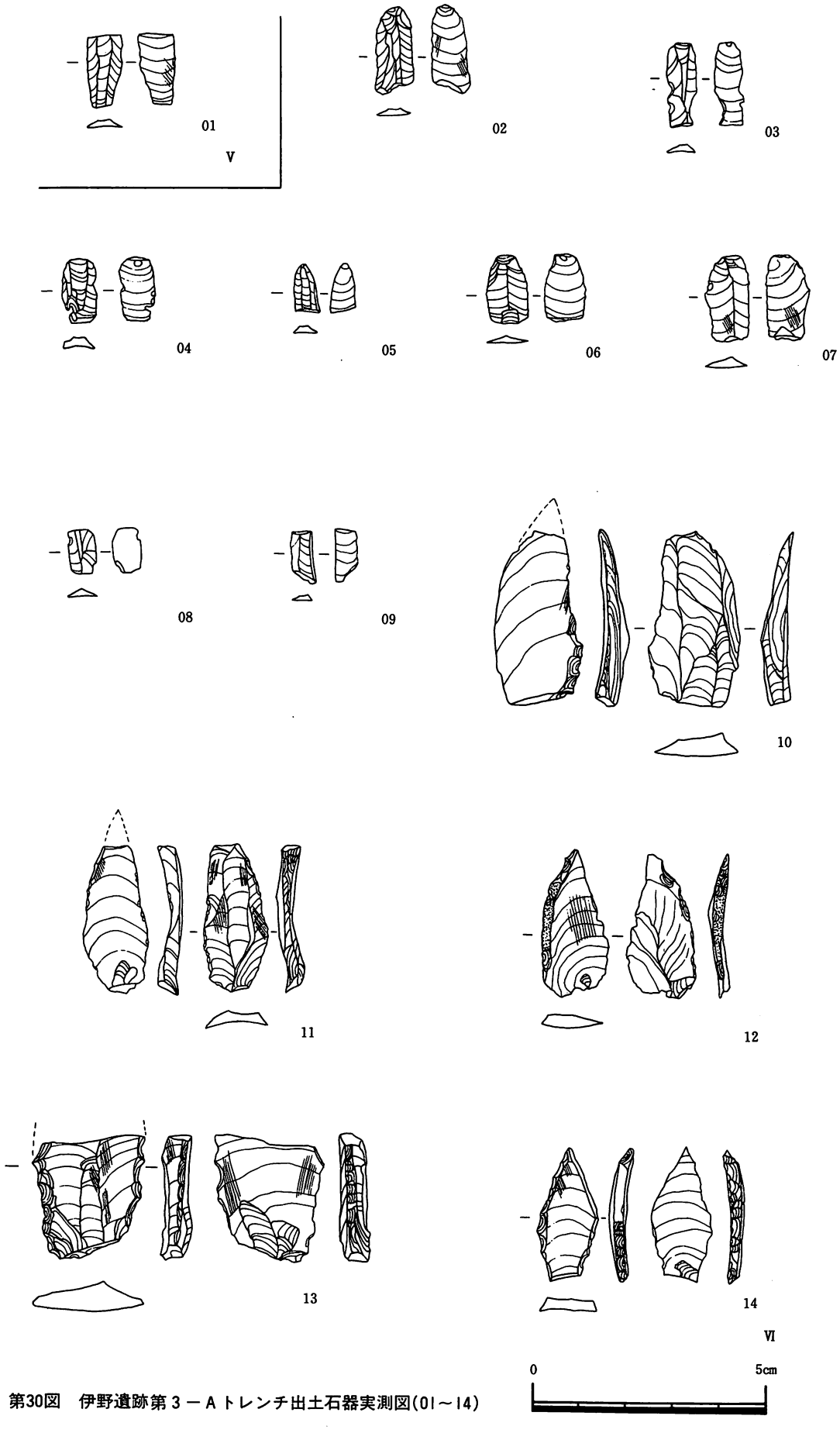
第Ⅵ層の上部から8点の細石刃が出土している。何れも良質の黒曜石で、頭部が残るものが6点あり、(02・06・07）は幅広である。

B．ナイフ形石器（10～14）

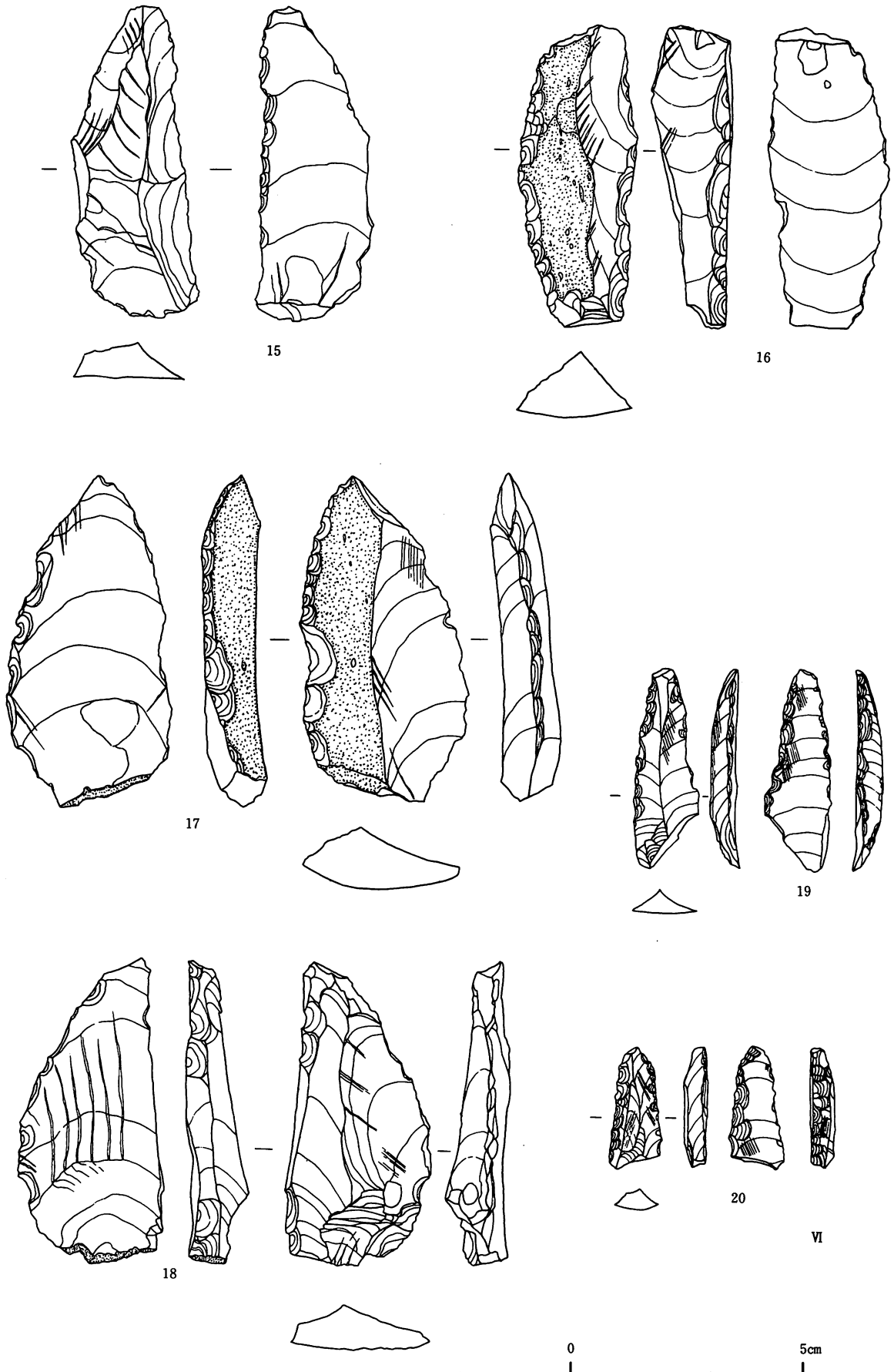
⑽は風化の著しい黒曜石を用いている。先端を欠失しているが、先端から背にかけての細かなブランティングが見られる。ブランティングは左側縁の一部にも施されている。⑾は良質の黒曜石の縦長剥片を素材としている。主要剥離の打面を残し、先端から肩に急角度のブランティングがある。⑿は薄い剥片を素材としている。先端と側縁の一部にブランティングを施しており、刃部の刃こぼれがめだつ。⒀は良質の黒曜石の縦長剥片を用いている。上半を欠失しているが、両側縁に綿密なブランティングがある。裏面にバルブカットをなす平坦剥離を施している。⒁は良質の黒曜石の縦長剥片を素材としている。先端を鋭く尖らし、両側縁に綿密なブランティングを行っている。基部を欠失しているが、バルブカットの痕跡が見られる。

C．削器（15～29）

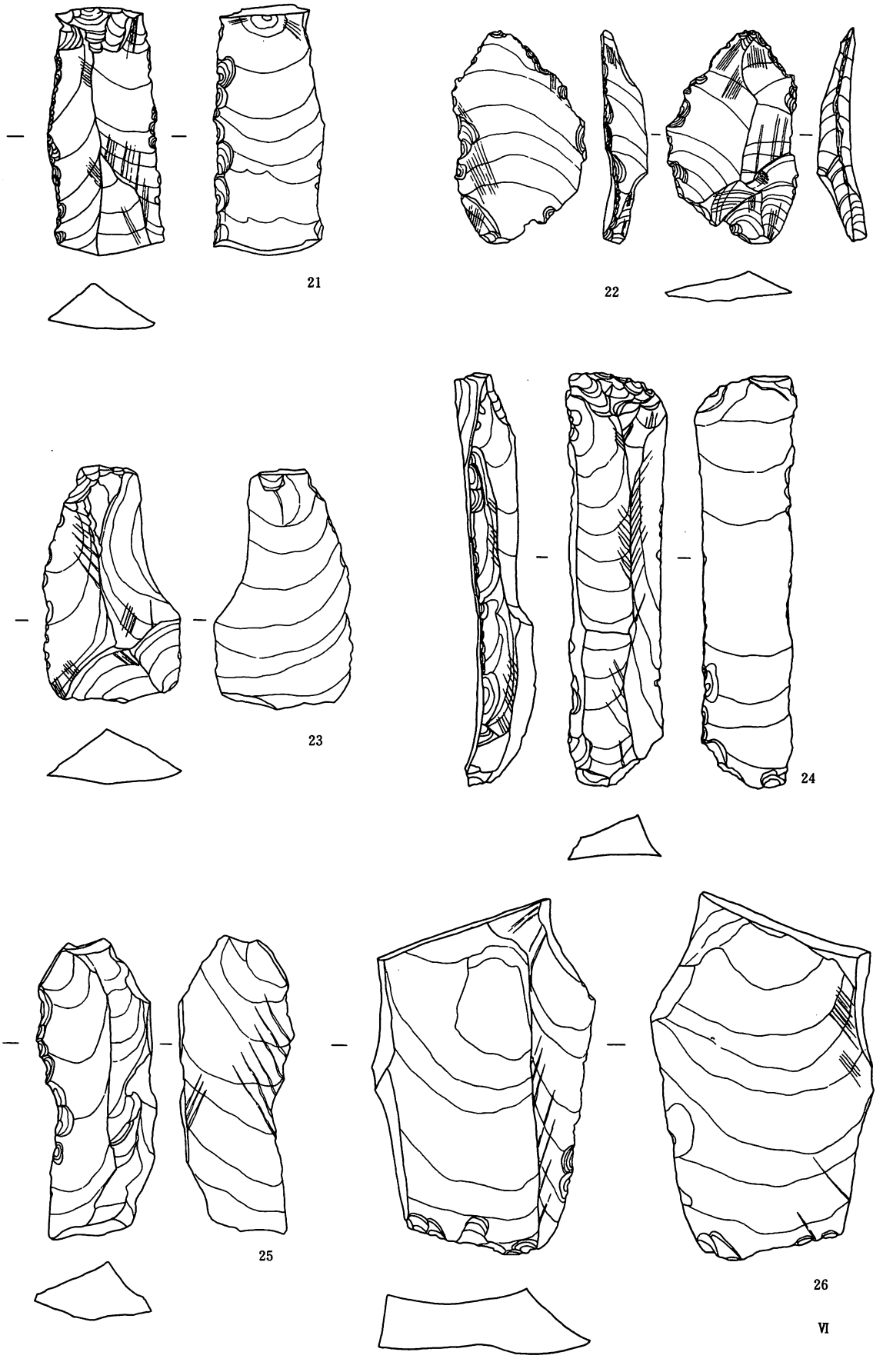
⒂は安山岩のいく分弯曲する縦長剥片が素材である。打面を残しており、右側縁に表面から角度の浅い剥離を行っている。ブランティングとしては粗雑でありスクレーパーの刃部として捉えるべきであろう。⒃は安山岩で断口が三角形を呈する縦長剥片が素材である。主要剥離打面は自然平坦面であり、表面の一面には自然面が残る。裏面から両側縁にスクレーパーの刃部加工を施している。⒄は安山岩の幅広の縦長剥片が素材である。主要剥離打面は自然平坦面で、表面の一面にも自然面が残る。刃部加工は左側縁が裏面から、右側縁は表面から行っている。刃部形成剥離には粗い部分と細かく密なところとがある。⒅も安山岩の幅広の縦長剥片が素材である。主要剥離打面は自然平坦面で、表面にステップフレーキングをなす平坦剥離が見られる。右側縁に表面から粗い剥離が見られ、スクレーパーの刃部形成と見れようか。左側縁は鋭いため、右側縁をブランティングと捉えれば一側縁加工のナイフ形石器とできようか。⒆は良質の黒曜石の縦長剥片を素材としている。断口は三角形を呈する。下縁を欠失しており基部加工の状況を見れないが、元もとは二側縁加工のナイフ形石器であったと思われる。ナイフ形石器が折れたあとの再利用石器の可能性がもたれる。⒇は⒆と同様の石器である。断口が三角形を呈する良質の黒曜石で、右側縁は角度の浅い剥離でスクレーパー刃部とできる。ナイフ形石器の再利用が考えられる。(21)は良質の黒曜石で、大形の縦長剥片が素材である。断口は三角形を呈し、主要剥離打面は平坦面である。表面には平坦剥離も見られる。右側縁は表面から粗く、左側縁は裏面から細かい刃部加工を施している。(22)は不定形の薄い剥片が素材で、打面はカットされている。右側縁は表面から、左側縁は裏面からそれぞれ粗い刃部加工を行っている。(23)は頁岩の縦長剥片が素材である。主要剥離打面を残すが、一部平坦剥離が見られる。左側縁に裏面から細かいスクレーパー刃部剥離を行っている。右側縁は鋭く、ブレイドとの兼用の機能をもつ石器に思える。(24)は安山岩の厚い縦長剥片が素材である。左側縁に裏面から細かいスクレーパー刃部加工を施している。綿密な平坦剥離によって打面を除去し、エンドスクレーパーの刃部とした感がある。左側縁は鋭いためブレイドの機能もあろう。多種機能を有する石器として捉えられよう。(25）は断口が三角形を呈する幾分歪な縦長剥片が素材である。主要剥離打面も残すが、左側縁に粗いスクレーパー刃部加工が見られる。(26)は頁岩の頭部が厚く、幅広の縦長剥片が素材である。右側縁と下縁に粗い刃部形成剥離を加えている。(27)は良質の黒曜石の縦長剥片が素材である。主要剥離打面を残し、打面にはパンチ痕跡が見られる。左側縁は裏面から急角度の剥離であり、ブランティングと判断される。一側縁加工のナイフ形石器として捉えて充分と思われるが、刃部に大小の剥離があり、スクレーパーとして再利用された石器と判断される。(28)は安山岩の厚い横長剥片を素材としており、左側縁にやや急角度の剥離がある。先端が折れ鋭い刃部に見える。(29)は安山岩で器長が10cmを越え



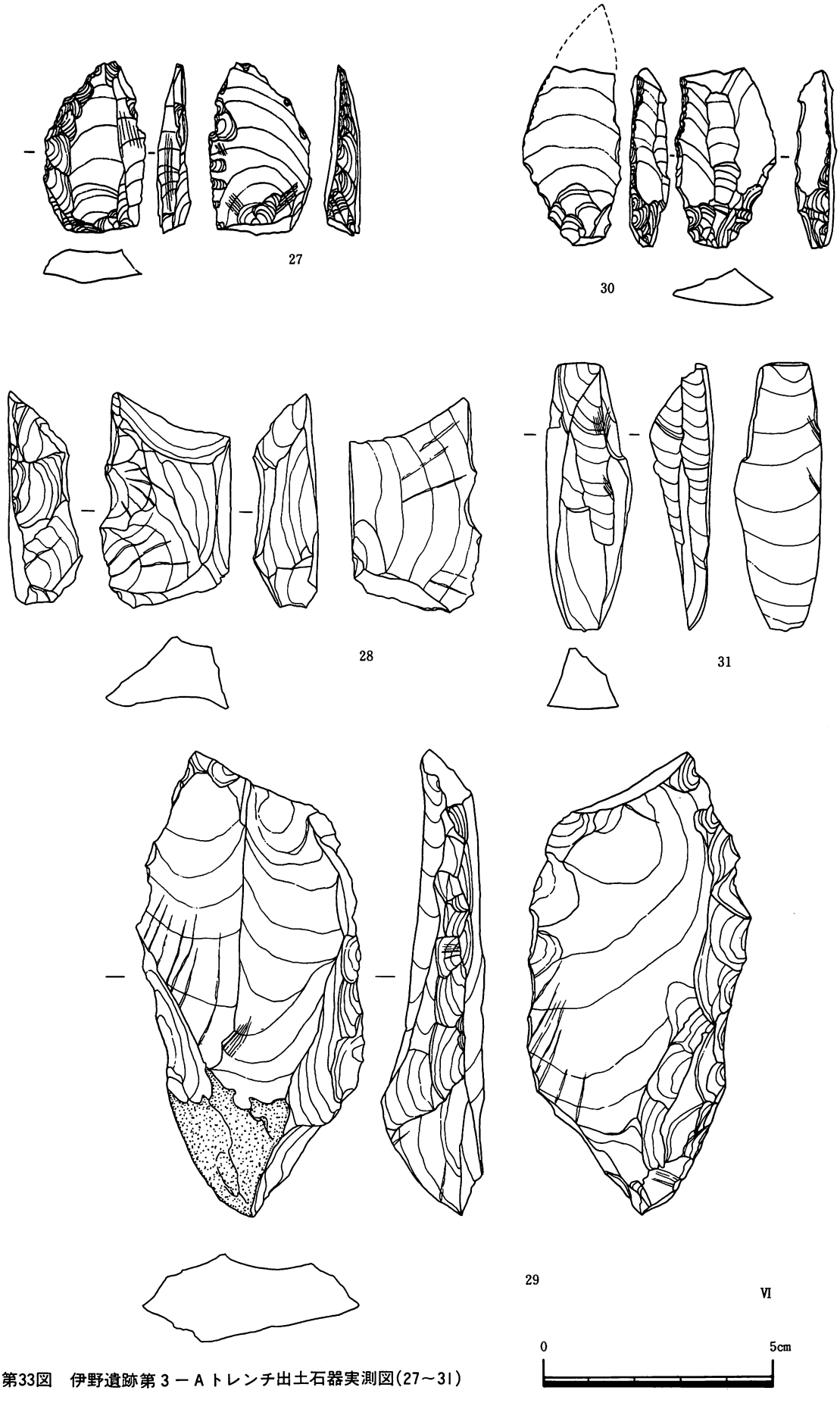
第30図　伊野遺跡第３－Ａトレンチ出土石器実測図(01～14)



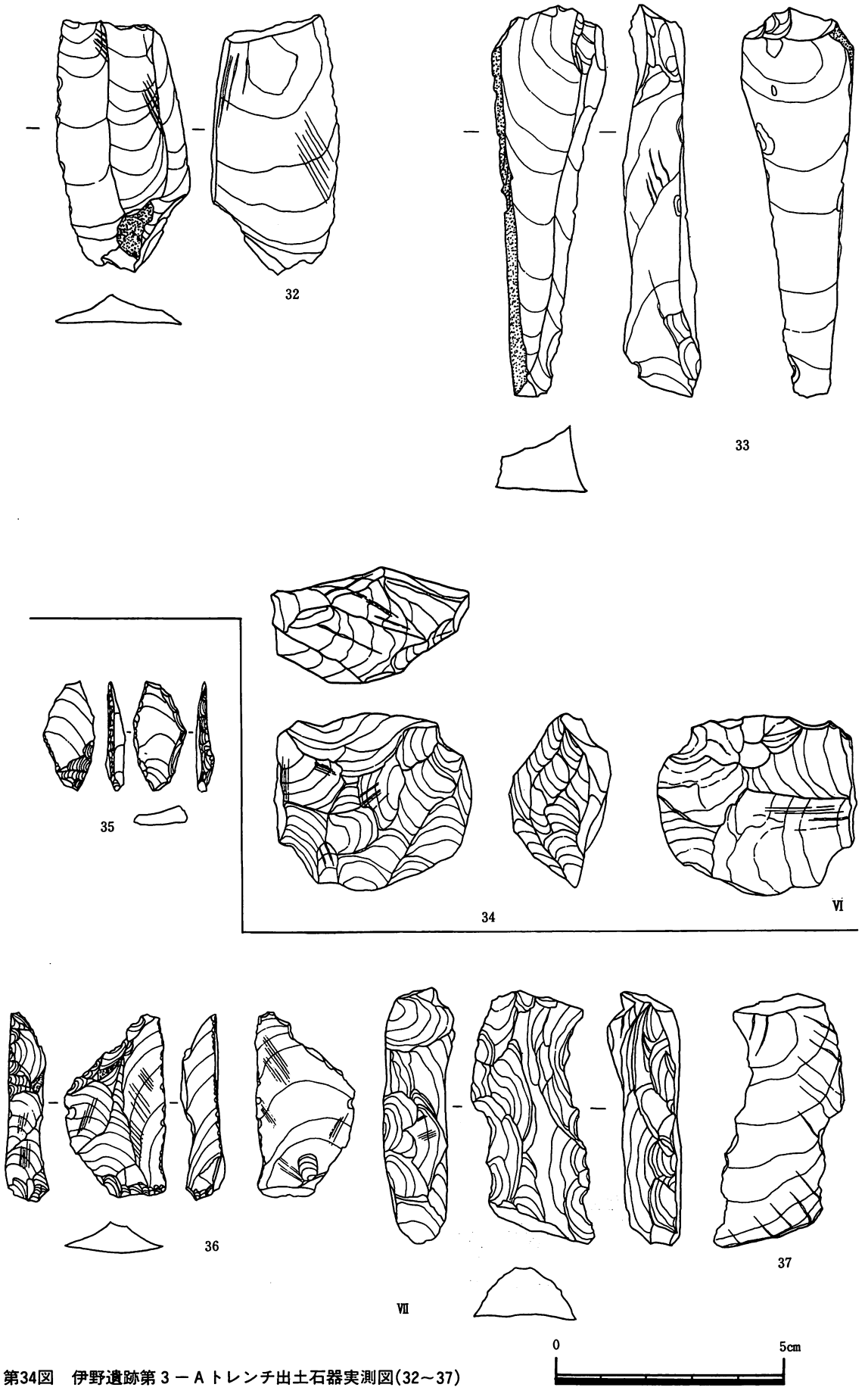
第31図　伊野遺跡第３－Ａトレンチ出土石器実測図(15～20)



第32図　伊野遺跡第３－Ａトレンチ出土石器実測図(21～26)



第33図　伊野遺跡第３－Ａトレンチ出土石器実測図(27～31)



第34図　伊野遺跡第３－Ａトレンチ出土石器実測図(32～37)

る。両側縁に粗いスクレーパー刃部を形成している。

D．剝片尖頭器（30）

黒曜石の縦長剝片を素材としている。綿密な調整剝離を施し基部を形成している。先端を欠失しているが、残された両側縁には細かな調整剝離が見られる。小形であり基部加工のナイフ形石器か剝片尖頭器として捉えられる石器であるが、両側縁に細かい剝離が続くことから剝片尖頭器として呈示しておきたい。

E．彫器（31）

頁岩の縦長剝片が素材である。右側縁に主要剝離打面から樋状剝離を行ない刃部を形成している。

F．縦長剝片（32・33）

（32）は安山岩でやや寸づまりの縦長剝片である。主要剝離打面は平坦面で、表面の一部に自然面が残る。（33）は安山岩の厚い縦長剝片である。主要剝離打面は調整剝離を行っている。断口は台形状にあり、左側面には自然面が残る。

G．石　核（34）

安山岩の石核で小剝片を剝取している。打面の転移が多い。

〈第Ⅶ層出土遺物〉

A．ナイフ形石器（35・36）

（35）は小形のナイフ形石器である。良質の黒曜石の縦長剝片を素材としている。二側縁に綿密なブランティングがあり、裏面基部には平坦剝離を行っている。(36)も良質の黒曜石が素材である。左側縁の先端から背にかけてブランティングを行ない、下縁にも調整剝離を施している。鋭い両側縁を刃部としており、部分加工のナイフ形石器とできよう。

B．三稜尖頭器（37）

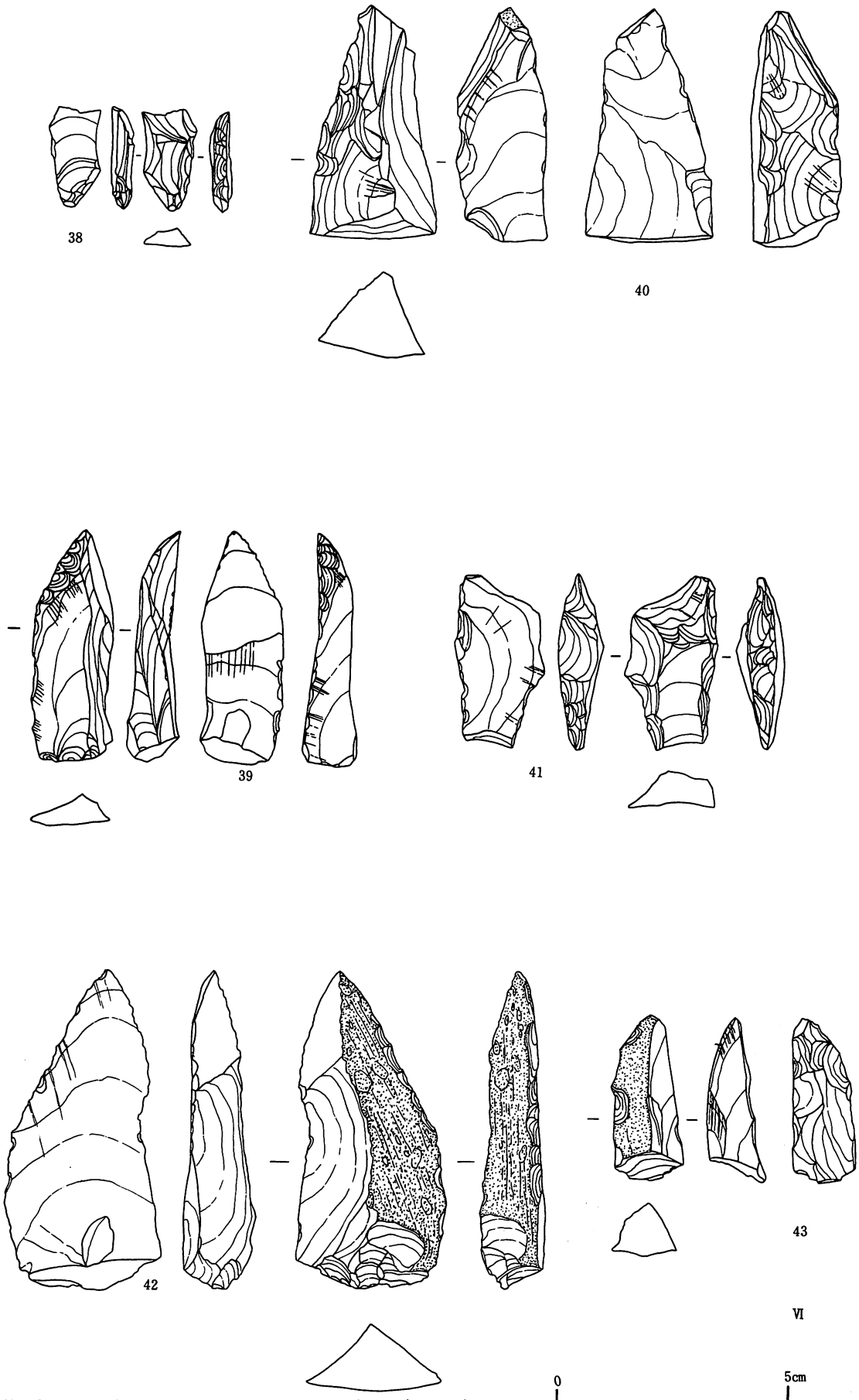
頁岩の厚い縦長剝片を素材としている。先端を欠失するが、裏面から両側縁に剝離を加えており、二面加工の三稜尖頭器として捉えておきたい。

(2)第３－Ｂトレンチ出土遺物

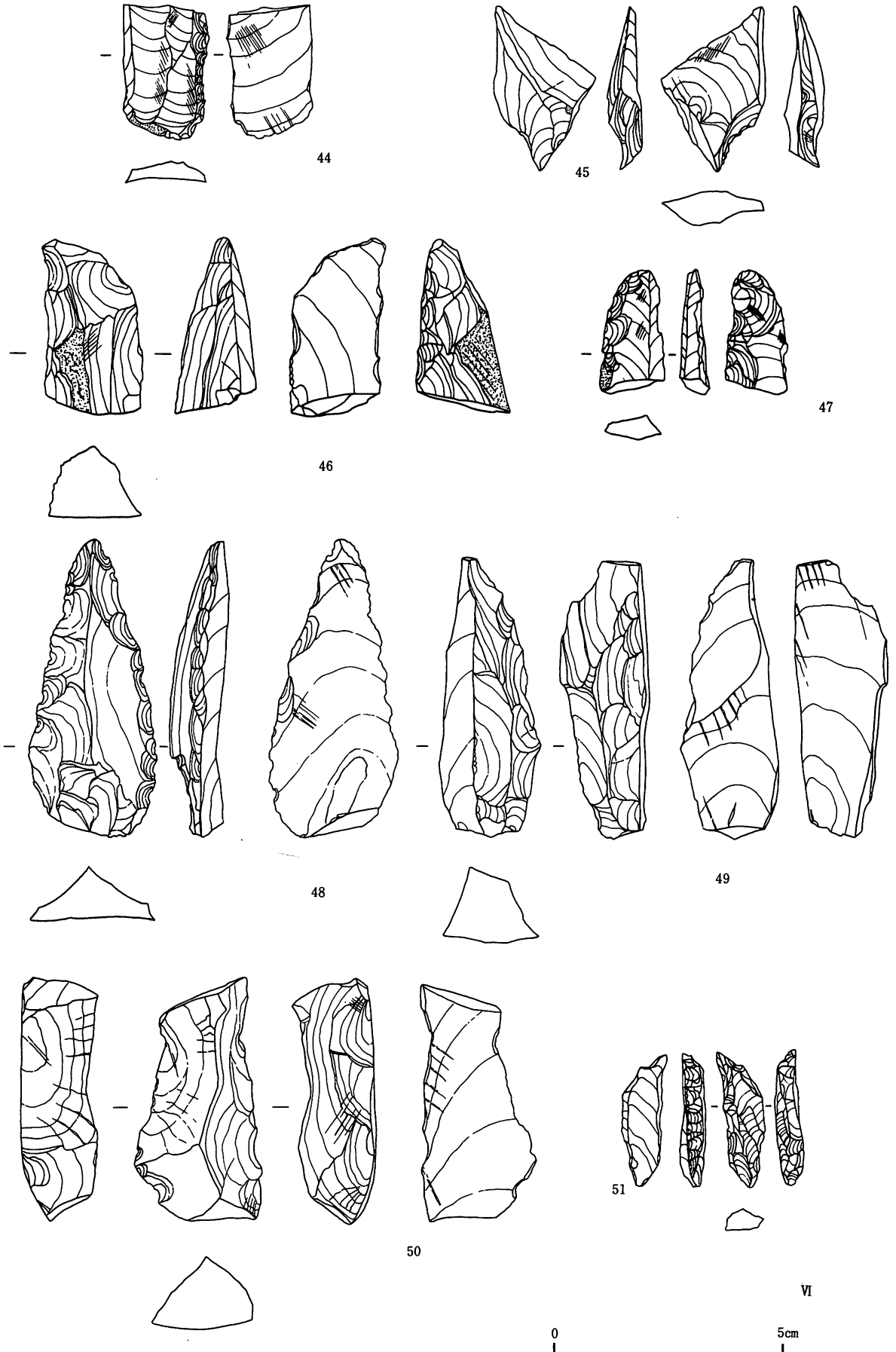
〈第Ⅵ層〉

A．ナイフ形石器（38～47・51）

（38）は黒曜石の不定形剝片を素材として、二側縁にブランティングを施した小形の石器である。裏面基部に平坦剝離を行ない、左側縁上半部は折断加工により平坦面を形成している。刃部は斜行せず台形石器様にある。(39)は断口が三角形を呈する頁岩の縦長剝片が素材である。左側縁に細かなブランティングを施し先端を尖らせている。打面を残し下縁の調整は粗雑である。一側縁加工のナイフ形石器である。(40)は断口が三角形を呈する安山岩が素材である。左側縁にブランティングがあり、下半部と欠失したナイフ形石器として捉えておきたい。(41)は頁岩の横長剝片を素材としている。両側縁に急角度のブランティングを施している。刃部は直線的ではないが斜行し、切り出し状を呈するナイフ形石器である。尚、基部位を欠失している。(42)は平面形及び断口とも三角形を呈する安山岩の縦長剝片を素材としている。主要剝離は平坦打面で表面に自然表皮が残る。主要剝離打面から平坦剝離で下縁の調整を行ない、右側縁にブランティングを施している。左側縁を刃部とするナイフ形石器として捉えておきたい。（51）は良質の黒曜石を素材としている。二側縁加工を施し、柳葉形のナイフ形石器を目的として製作がはじめられている。しかし、製作途中で上半が折れたため、その折れ口にブランティングを加えている。右側縁に短いが刃部が残されており、結果的に



第35図　伊野遺跡第３－Ｂトレンチ出土石器実測図(38～43)



第36図　伊野遺跡第３－Ｂトレンチ出土石器実測図(44～51)

変形のナイフ形石器をつくりあげている。

B．二次加工のある剥片（43～47）

いづれも剥片に調整剥離が見られる。(43・46）は安山岩で、(44・45・47）は良質の黒曜石である。(44)の右側縁のブランティングは綿密であり、一側縁加工のナイフ形石器の可能性がもたれる。

C．尖頭器（48）

断口が三角形を呈する安山岩の縦長剥片が素材である。二側縁に裏面から綿密な調整剥離を施している。主要剥離打面やバルブは残しているが、打面から表面に平坦剥離を加え基部調整を計っている。先端の尖りも形成され、尖頭器として捉えておきたい。

D．三稜尖頭器未製品（49・50）

二点の石器は何れも断口が三角形を呈する安山岩の縦長剥片が素材である。(49）は一面、(50）は二面に対する剥離痕跡が見られ、(49）の剥離痕跡は細かい。両者とも三稜尖頭器の未製品とできよう。

E．削　器（52・53）

(52）は安山岩の横長剥片が素材である。右側面は表皮が残る。左側縁にスクレーパー刃部加工があり、上半部は裏面から粗く、下半部は表面から細かな調整剥離を行っている。(53)は打面を残す幅広の剥片を素材としている。両側縁及び下縁に粗いスクレーパー刃部加工を行っている。黄褐色の色調を呈しパティナが非常に進んでいる。

F．掻器（54）

安山岩の幅広の縦長剥片が素材である。主要剥離打面は自然平坦面で、表面には一部自然表皮が残っている。下縁に裏面からの刃部加工があり直刃をなしている。両側縁にも細かな刃部加工があり、削器兼用石器と判断できる。

G．縦長剥片（55～60）

何れも安山岩の縦長剥片で、主要剥離打面は自然平坦面である。(58)は表面に２本の稜線が走り端正な形状を示し、卓越した石刃剥離技術が展開していたことをものがたる。

H．剥片石核（61・62）

双方とも厚手の安山岩の剥片から小剥片を剥取したものである。打面は転移し複剥離打面である。

I．彫器（63）

厚手の安山岩が素材である。断口は三角形を呈するが、その一つの稜に対して平坦打面から数度の樋状剥離を施している。

(3)第４トレンチ出土遺物

〈第Ⅳ・Ⅴ層〉

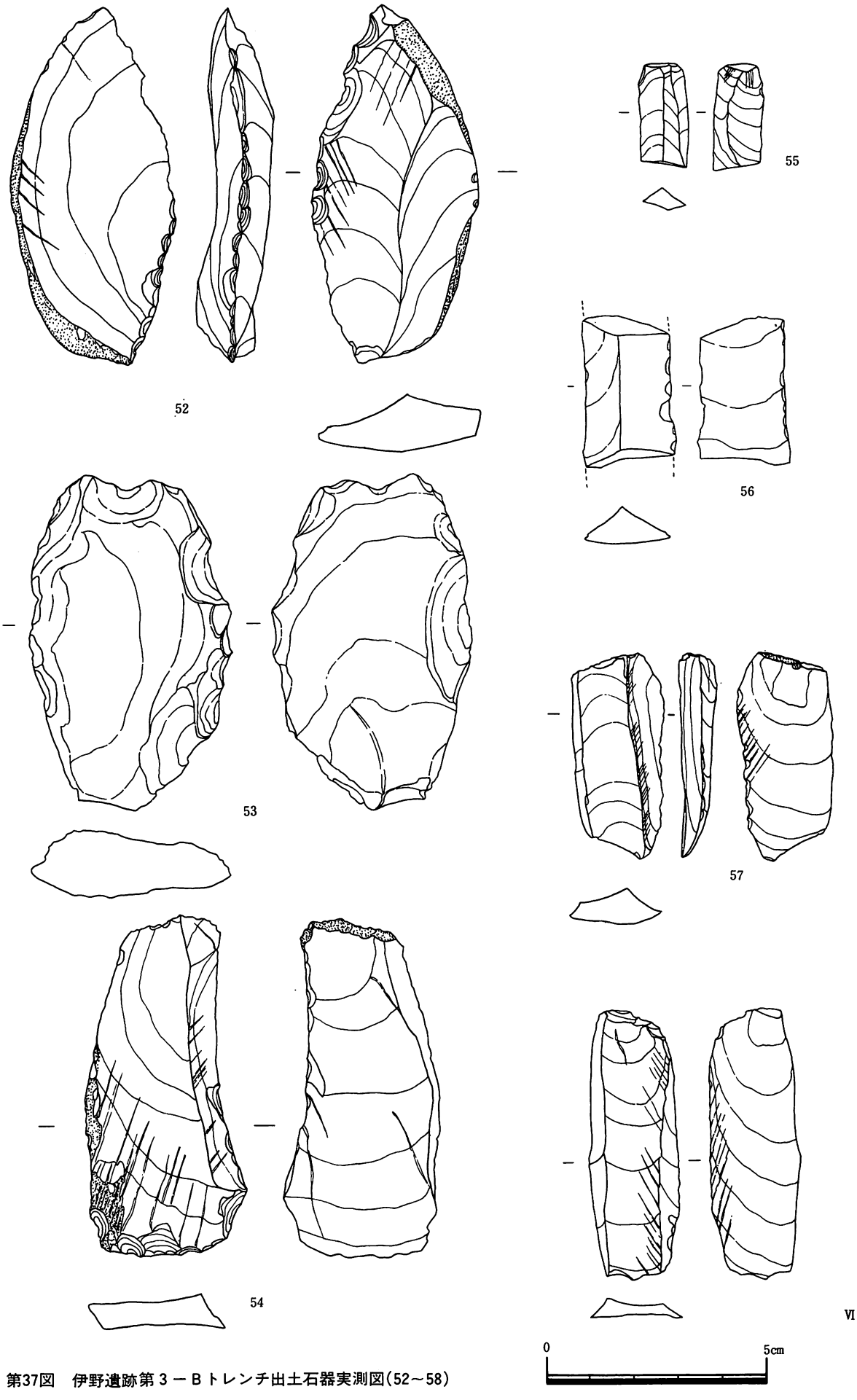
A．細石刃（64～69）

６点の細石刃が出土している。何れも良質の黒曜石を使用している。(64・67・69）は頭部が残り、(66・67）は断口が台形となり厚手であるが、(65・69）は逆に非常に薄い。

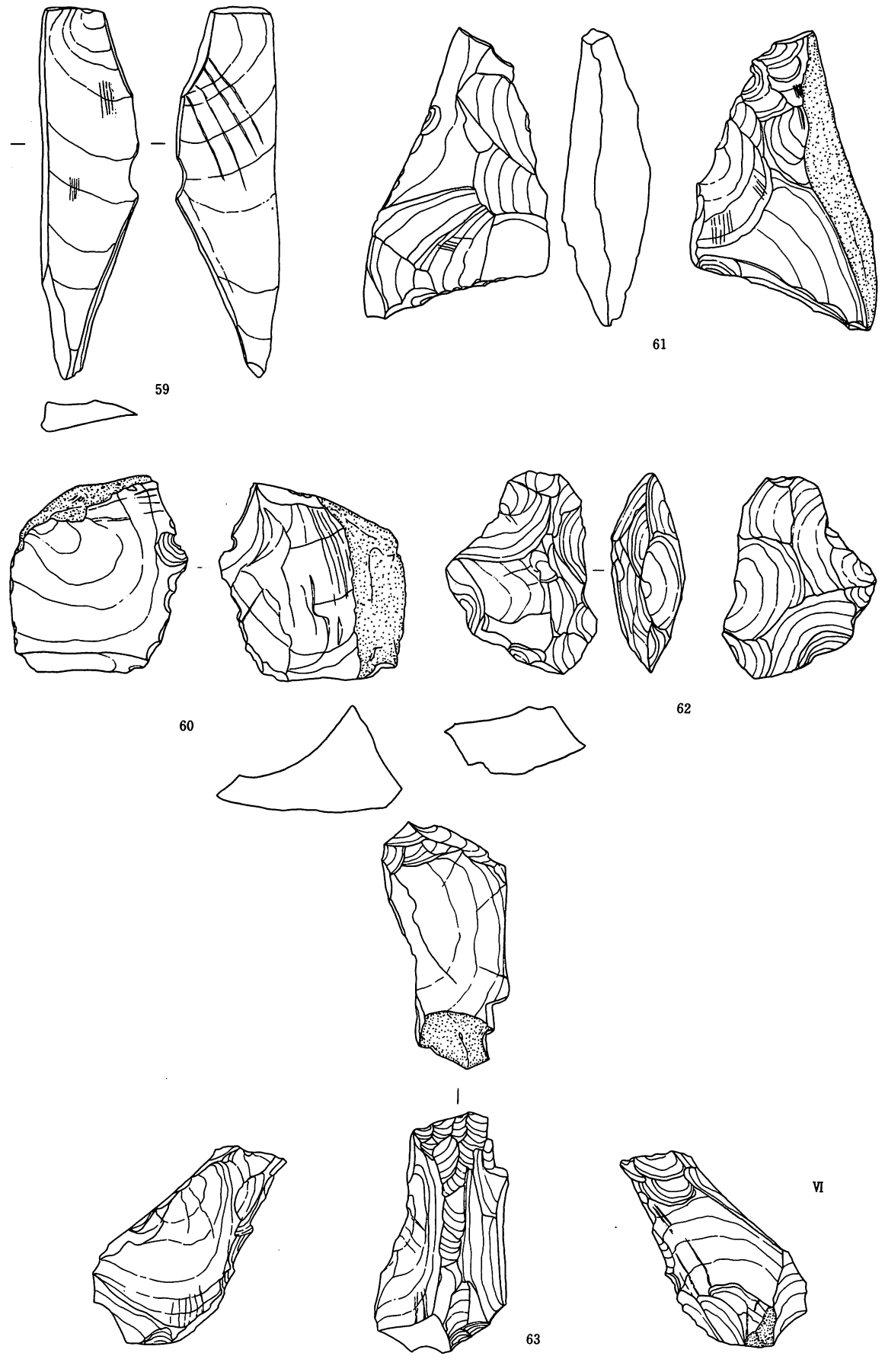
B．細石核（70・71）

(70）は良質の黒曜石で、細石核の残核である。角礫を用いたものと思われ、調整剥離を加えて、細石刃剥取の打面を形成している。細石刃の剥取面は正面と一側面の二面に実施されている。

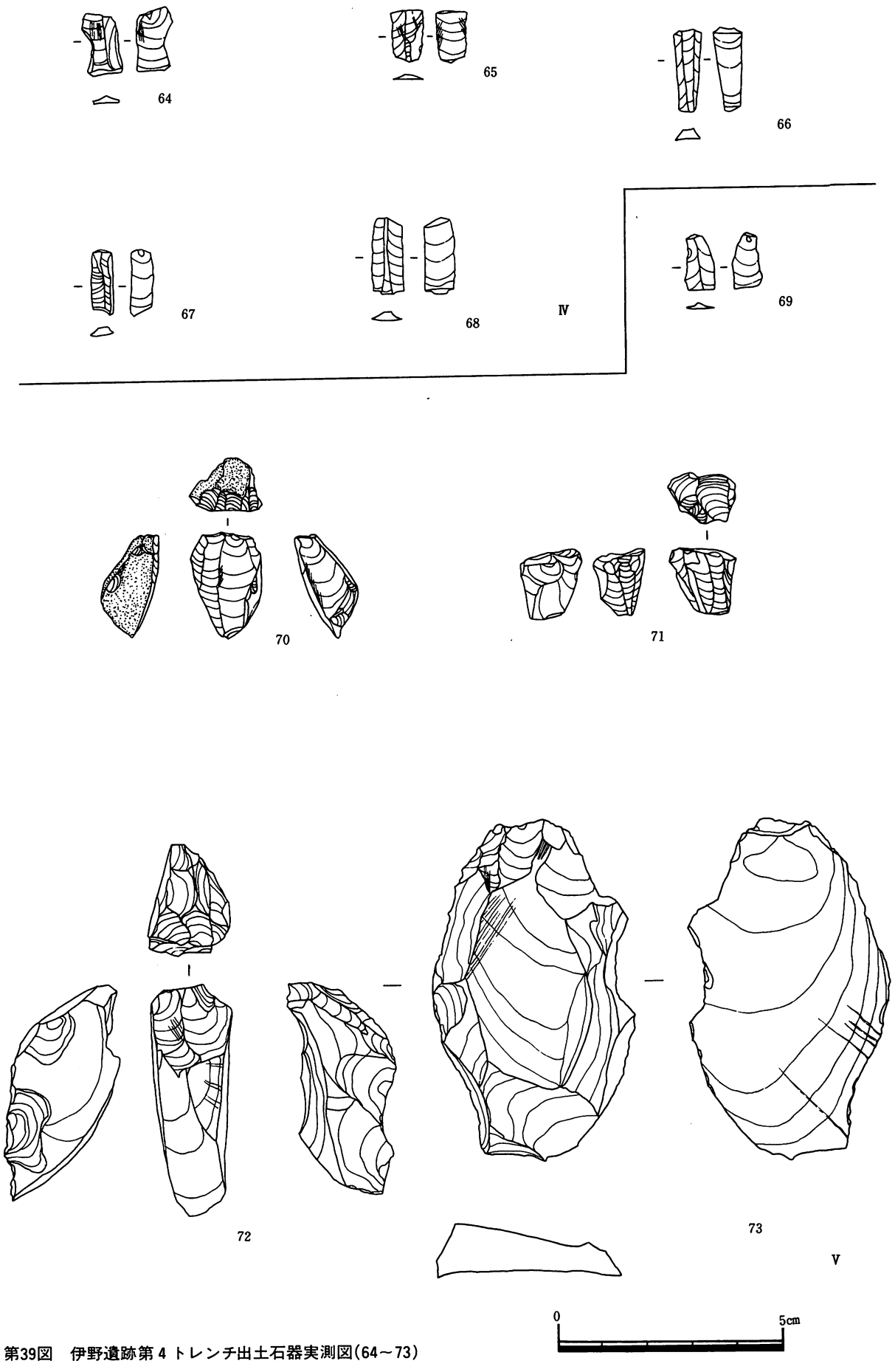
背面と残りの側面は自然面であり、調整剥離は行なわれていない。(71）も（70）と同じくシマ模様が見られる黒曜石を用いている。残核である。調整剥離を実施し、細石刃剥取打面を形成し、正面から片方の側面に



第37図　伊野遺跡第３－Ｂトレンチ出土石器実測図(52～58)



第38図　伊野遺跡第３－Ｂトレンチ出土石器実測図(59～63)



第39図　伊野遺跡第４トレンチ出土石器実測図(64～73)

かけて数条の剝取痕が見られる。背面、及び残りの側面は自然面である。

C．彫器（72）

厚手の安山岩の剝片が素材である。二度の大きな調整剝離を行い刃部形成面を作成している。つづいて、樋状剝離打面を調整し、一条の樋状剝離を実施している。

D．削器（73・74）

双方とも安山岩の不定形の大形剝片が素材である。(73) は裏面から粗いスクレーパー刃部加工を行ない、(74) は両側縁と下縁に刃部加工を実施している。

〈第Ⅵ層〉

A．細石刃（75～78）

第Ⅵ層上部に4点の細石刃が出土している。何れも良質の黒曜石で、(76) には歯こぼれが見られる。

B．小石核（79）

良質の黒曜石であり、複剝離打面から多数の小剝片が剝取されており、最後に頭部をカットしている。このカットで平坦打面を形成し細石核のブランクが意図された可能性がある。

C．ナイフ形石器（80・81）

(80) は良質の安山岩を用いている。先端を尖らし基部を形成しており、菱形の形状をとる。裏面から急角度のブランティングを行ない、基部には簡単な平坦剝離が見られる。(81)は良質の黒曜石でナイフ形石器の先端部である。鋭い先端で刃部には細かい刃こぼれがある。二側縁加工で柳葉形を呈するナイフ形石器と思われる。

D．剝片尖頭器（82）

頁岩の縦長剝片を素材としている。基部を形成し、両側縁には裏面から調整剝離を行っている。

E．尖頭器（83・84）

(83) は安山岩の断口が三角形を呈する縦長剝片が素材である。両側縁に調整剝離を行ない、先端を尖らせている。主要剝離打面から平坦剝離を行ない基部調整を実施している。尖頭器として捉えられる。(84)も同様の素材で、主要剝離で生じた抉りがあり、基部調整に用意された感がある。剝片尖頭器の素材と判断したい。

F．三稜尖頭器（85）

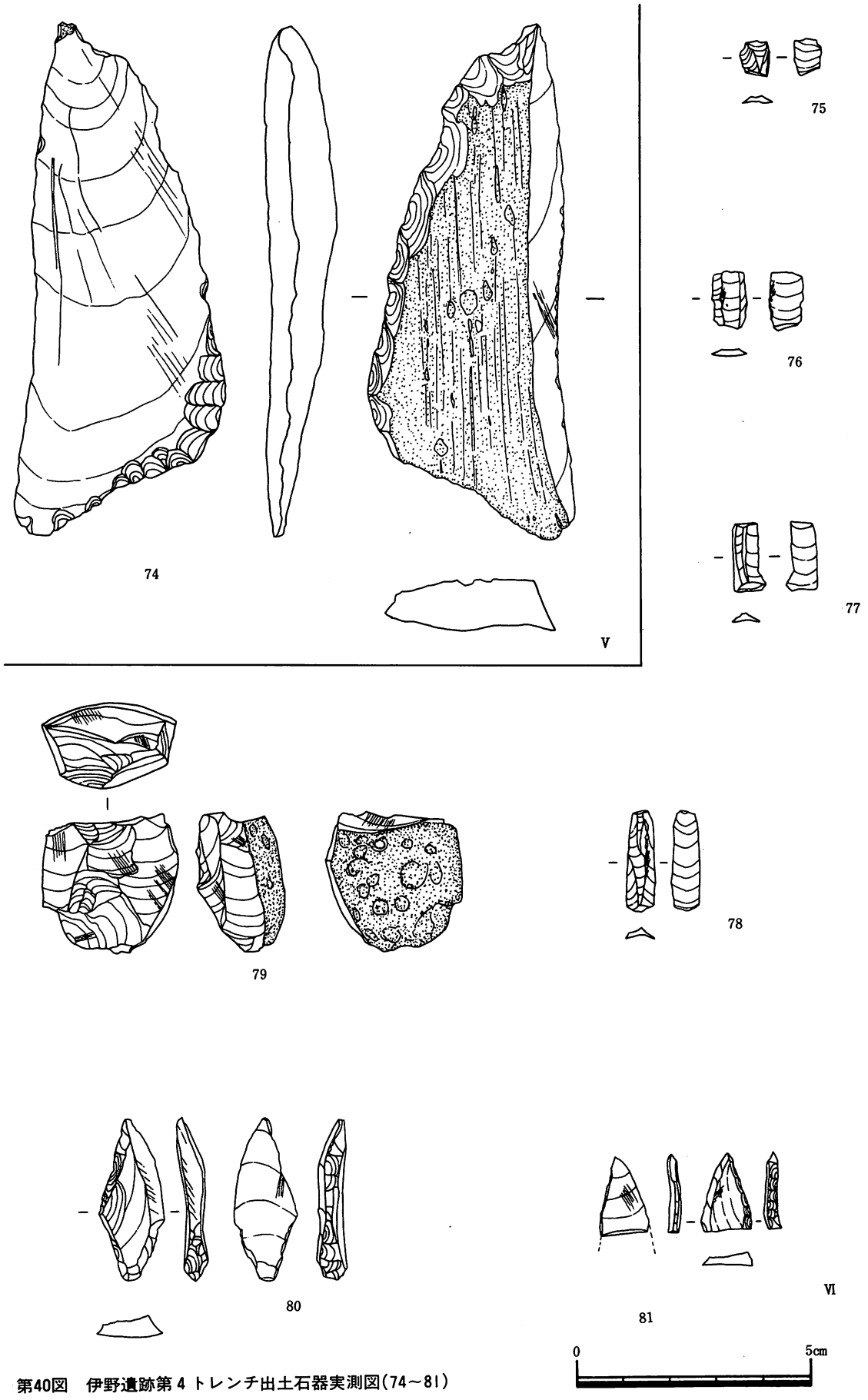
安山岩のぶ厚い縦長剝片を素材としている。上半部を欠失しているが、右側縁に急角度の剝離が続いている。基部を二度の大まかな剝離で形成したものと判断され、三稜尖頭器もしくは剝片尖頭器とできよう。

G．削器（86～90）

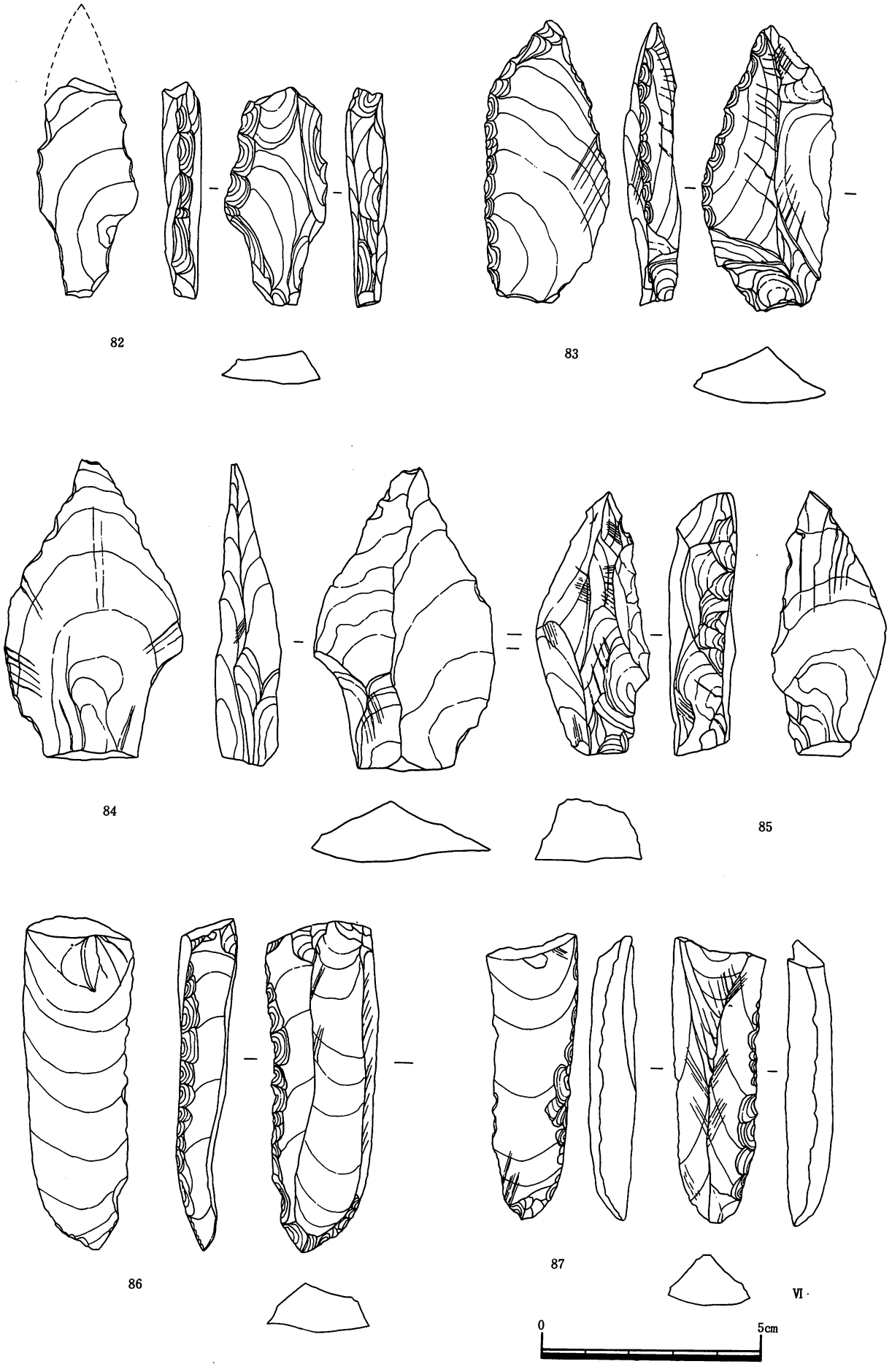
(86) は安山岩の端正な縦長剝片が素材である。左側縁から下縁にスクレーパー刃部加工が行なわれている。左側縁は鋭い縁辺のままであり、ブレードとして使用された可能性がある。スクレーパーとの兼用石器と判断される。(87)は断口が三角形を呈する安山岩の縦長剝片が素材である。両側縁にスクレーパー刃部加工を施しており、左側縁は表面から、右側縁は裏面からの剝離である。(88) は安山岩の剝片が素材である。裏面に数多くの剝離が行なわれている。片面だけの剝離であり、先端の尖りも形成されていない。三稜尖頭器や両面加工の製作途中の石器とも思われるが真意を定かにしない。両側縁はスクレーパーの刃部状にあり、削器としておきたい。(89)は安山岩の縦長剝片が素材である。胴部の断口は台形を呈し厚い。右側縁に急角度の調整剝離があり、下縁にも細かな剝離が見られる。(90)は不定形をした安山岩のぶ厚い剝片が素材である。左側縁と下縁にスクレーパー刃部を施している。

H．剝片（91～93）

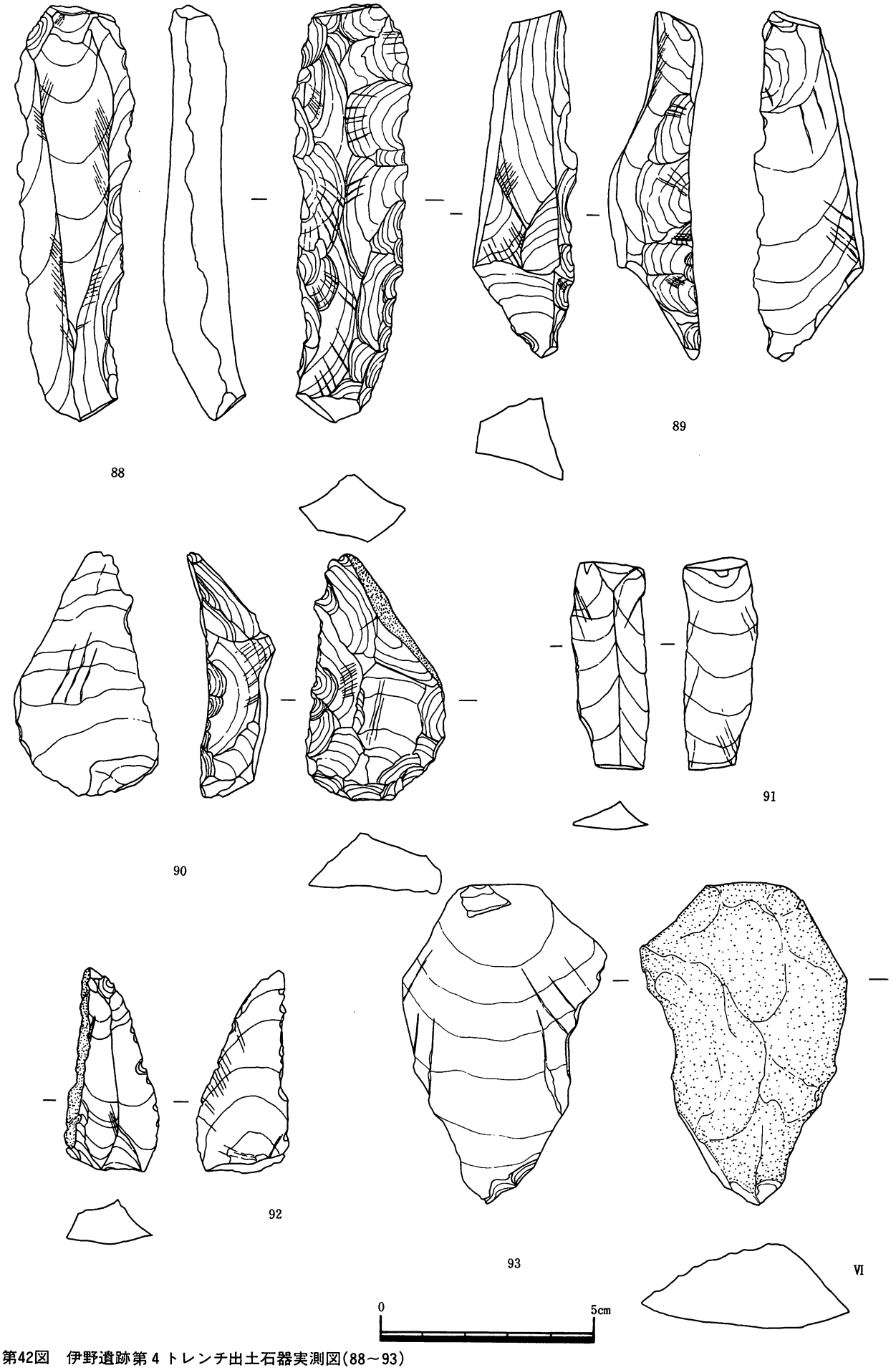
何れも縦長剝片である。(91・92) には刃こぼれが多く認められる。(93) は表面が自然表皮でありファー



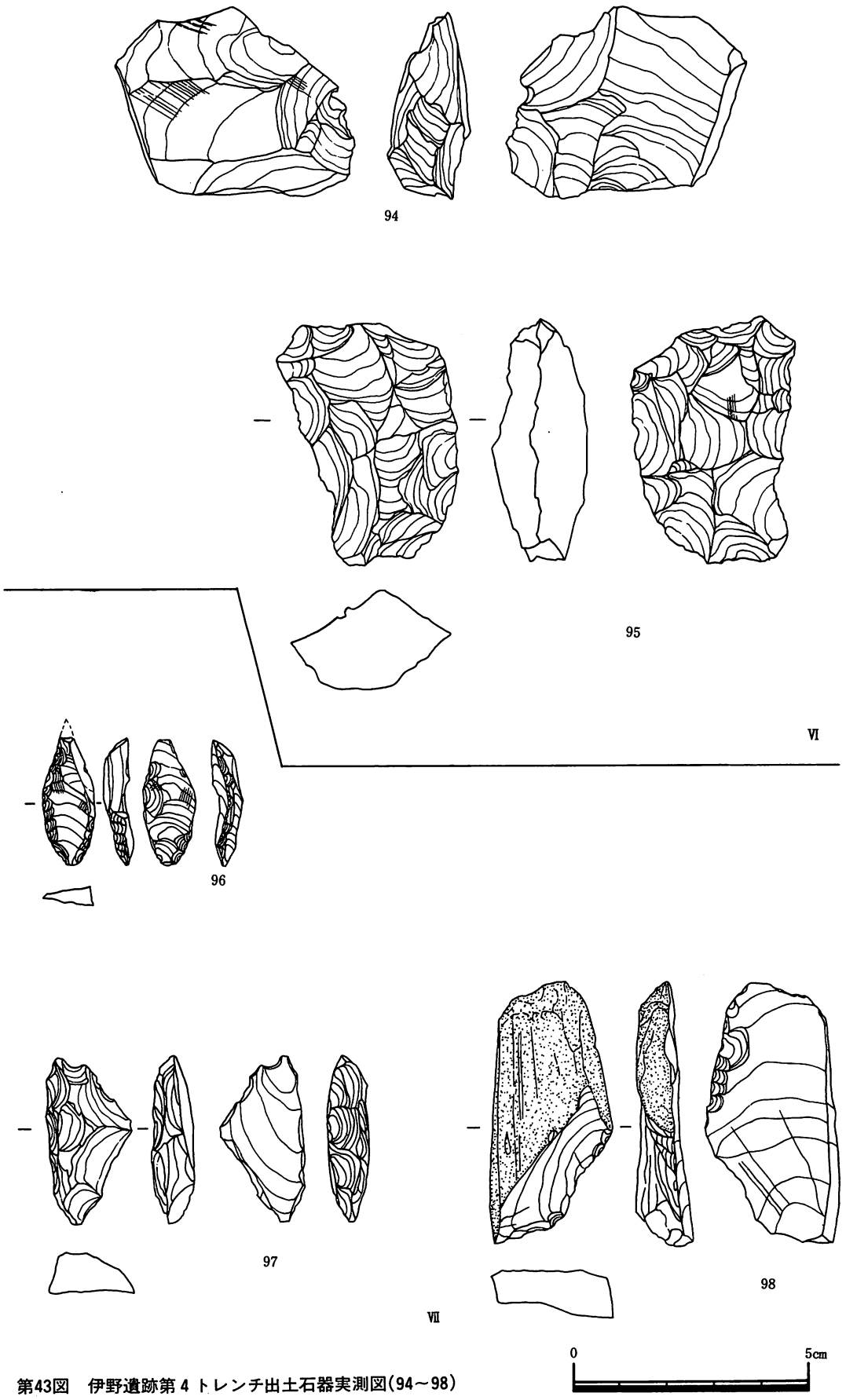
第40図　伊野遺跡第４トレンチ出土石器実測図(74～81)



第41図　伊野遺跡第４トレンチ出土石器実測図(82～87)



第42図　伊野遺跡第４トレンチ出土石器実測図(88～93)



第43図　伊野遺跡第４トレンチ出土石器実測図(94～98)

ストフレークである。

Ⅰ．石核（94・95）

（94）は安山岩、（95）はチャートである。双方とも小剝片を剝取している。複剝離打面であり、調整打面は見られない。

〈第Ⅶ層〉

A．ナイフ形石器（96・97）

（96）はチャートの縦長剝片を素材としている。二側縁加工を施し、裏面加工も行っている。先端を欠失しているが、鋭い尖りを形成していたものであろう。（97）は非常に質の悪い黒曜石を用いており、パティナの進化が著しい。不定形剝片が素材で、二側縁加工を施し切り出し状のナイフ形石器である。

B．削器（98）

安山岩の不定形剝片を素材としている。右側縁と下縁にスクレーパー刃部加工を行っている。

5、まとめ

伊野遺跡出土遺物割合表

器種 / 出土層	ナイフ形石器	細石核	石（剝片）・（小）核	細石刃	三稜尖頭器（未製品）	剝片尖頭器	削器（掻器）	彫器	剝片	縦長剝片	合計
第Ⅳ層				3							3
第Ⅴ層		2		4			2	1			9
第Ⅵ層	18		6	12	5	3	23	1	3	7	78
第Ⅶ層	3				(1)		1			1	6
合計	21	2	6	19	6	3	26	2	3	8	96

(1)＜第Ⅳ層の石器群＞

第Ⅳ層から出土した石器類の中で主なものとしてとり上げたのは細石刃3点である。第Ⅳ層は本来的に縄文時代早期遺物を出土する事例が多く、例えば、上益城郡益城町櫛島遺跡や、下益城郡城南町沈目遺跡・同郡松橋町曲野遺跡などで「押型文土器」「塞ノ神式土器」「円筒土器」などが出土している。これらの土器群と細石器とが共伴する事例を聞くことはなく、新しい時期の細石器は「もう一時期古い縄文土器」との共伴が考えられよう。しかしながら、熊本県内ではこの「もう一時期古い土器」の検出例が殆んどなく、今回の伊野遺跡の調査ではこのことが一つのテーマともされた。

成因的には第Ⅳ層は阿蘇火山起源の火山灰と考え、遺物の出土状況からみても一万年前後に生じたものと推定してきている。将来の明確な出土事例を待たねばならないのが実情であるが、今回の調査で3点の細石刃が出土した事実により、細石器の終末期様相、それに縄文土器との共伴などの事例が、この第Ⅳ層下部で求められる可能性は強まったといえよう。

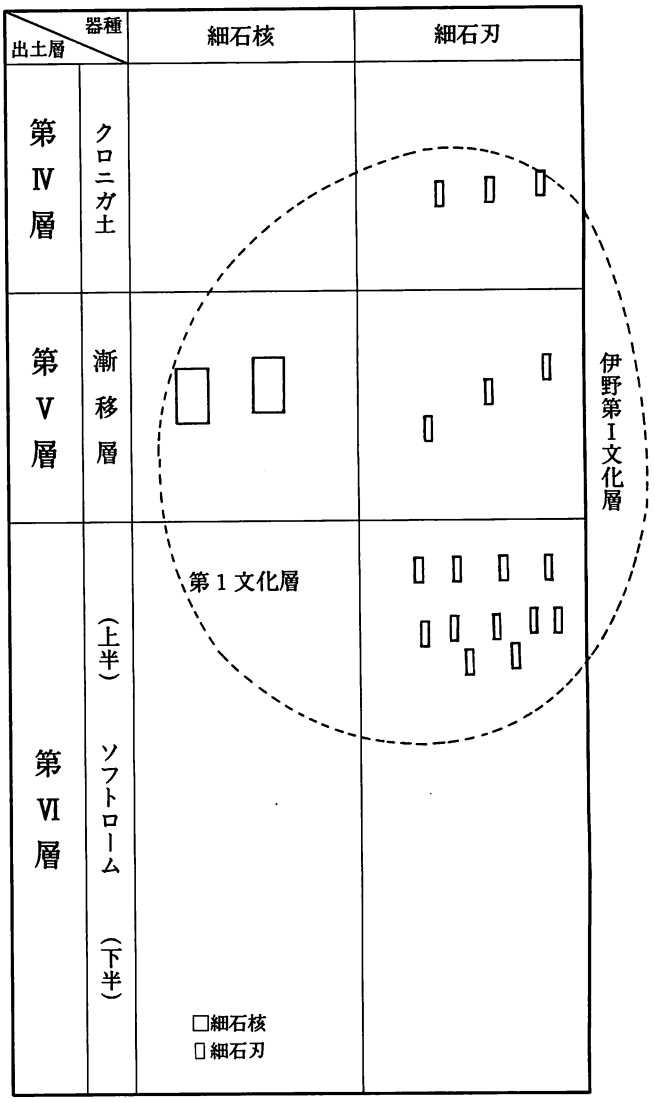
(2)＜第Ⅴ層の石器群＞……伊野第1文化層の設定

第Ⅴ層から出土した主な石器には細石核・細石刃・削器・彫器9点がある。細石核2点は第Ⅴ層からだけ出土しているが、細石刃は第Ⅵ層からも出土し

細石刃 4点	細石核 2点	削器 2点	彫器 1点

ており、合計12点を数える。両者の出土状況を模式的に示すと次表のように示される。

一般的に細石核は形状・重量などから考えて細石刃よりも原位置を保ち易いと判断できる。今回の調査では細石刃の出土数は第Ⅵ層上半部に集中している。将来に精密な分析・検討は事例の増加を待たねばならないが、総体的に、第Ⅵ層上半から、第Ⅴ層、それに第Ⅳ層下半にかけての細石器を主とするところを伊野第１文化層として捉えておきたい。尚、伊野第１文化層における確実な共伴遺物として削器・彫器は加えておけよう。



細石核、細石刃出土状況模式図

(3)＜第Ⅵ層の石器群＞

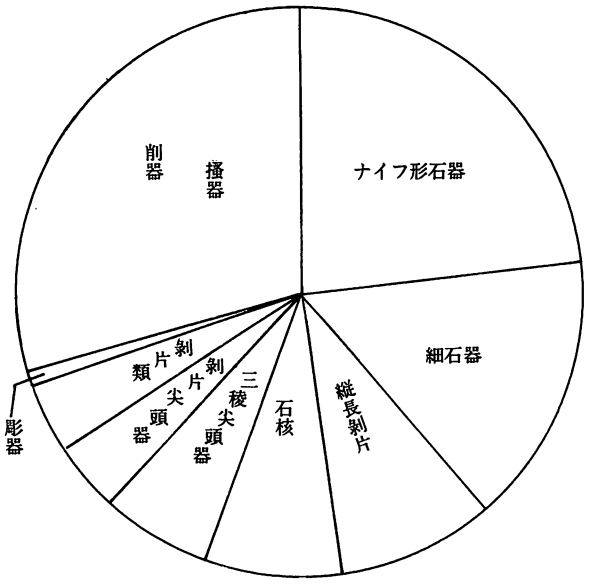
……伊野第２文化層の設定

第Ⅵ層は最も石器類の出土が多く、主な石器として９種78点をとりあげている。石器器種割合表と、石器石材の割合表は次図に示すとおりである。

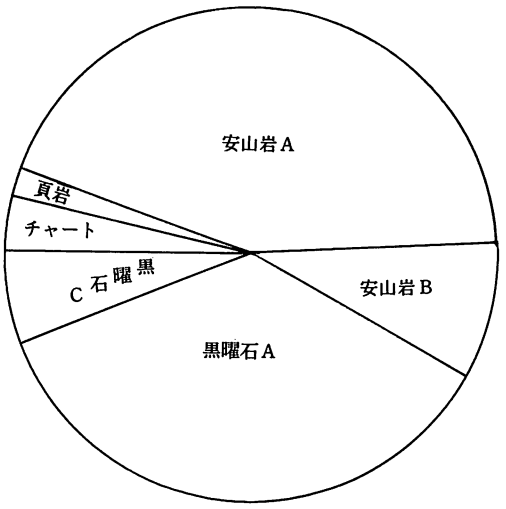
ナイフ形石器（18点）

ナイフ形石器の石材の割合については、第Ⅶ層出土の４点を加えて比率を求めると次表のとおりである。用いられている石材は安山岩と黒曜石であるが、両者とも異なった種類がある。

最も多いのは黒曜石Ａと分類したもので、所謂、西北九州原産と判断される黒色の良質のものである。阿蘇郡小国地区を中心とした地域に原産する



第Ⅵ層出土石器(器種)割合表



第Ⅵ層出土石器・石材割合表

気泡のはいるものを黒曜石Bと称しているが、今回の出土遺物には含まれていない。原産地が不明の黒曜石Cが僅少認められる。

安山岩Aは一般的にサヌカイトと称されるもので西北九州、特に佐賀県小城地方の安山岩に類似している。このほかのものを安山岩Bとしている。

次にナイフ形石器の出土高度を模式的に示すと下図となる。特に示される集中分布位置の確認は明確にできないが、漠然としたヴィーナス曲線的傾向は指摘することができよう。

つづいて、第Ⅶ層出土のナイフ形石器を含めて、9種類の形態分類を試みてみた。

A型…所謂、九州型ナイフ形と称される。先端が鋭く尖り、柳葉形を呈する。急斜の二側縁加工を綿密に施している。

B型…斜直線的な刃部を有し、二側縁加工を施している。

C型…切り出し状を呈するナイフ形石器であり、二側縁加工が綿密である。

D型…刃部の傾斜が少なく台形石器に類似する。

E型…縦長剥片を素材として、二側縁及び下縁に粗雑な調整剥離を行っている。

F型…縦長剥片の側縁に簡単なブランティングを施し、一部、下縁への平坦剥離が見られる。

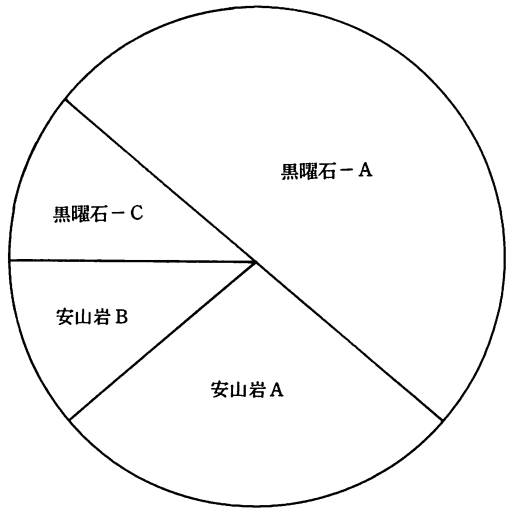
G型…同じく縦長剥片を素材として、先端と側縁の一部にブランティング加工がある。

H型…G型に類似するが、ブランティングは一側縁におわっている。

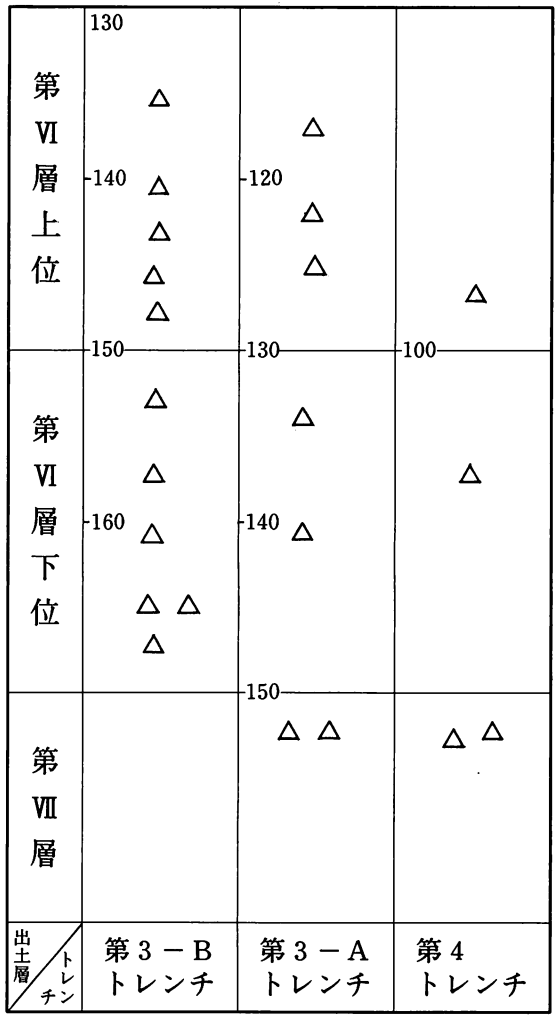
I型…縦長剥片を素材として背と下縁にブランティング加工がある。

以上の様に分類を行ない出土層に併せてみると次頁表となる。傾向的に下位からB・C型を中心とするAグループ、A・B・E・H型を中心とするBグループ、D・E・F型を中心とするCグループとに分けられそうである。

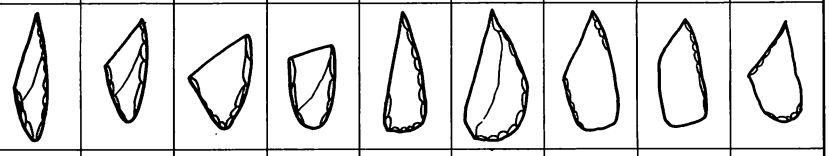
概括的にAグループは小形の切り出し状の刃部を有するナイフ形石器を中心とする。Bグループは綿密な二側縁のブランティングを施し、柳葉形を呈するナイフ形石器が加わる。E・H型に見られるように大型の縦長剥片を素材として、粗雑なブランティングを施すことを特長として述べられる。



ナイフ形石器石材別割合表



ナイフ形石器出土高度表

A型	B型	C型	D型	E型	F型	G型	H型	I型
								
九州型 柳葉形	斜直縁型	切り出し状	台形状	粗雑な二側縁加工 下縁加工	部分加工 一側縁と下縁加工	部分加工 先端と左側縁加工	部分加工 一側縁加工	背と下縁加工
㊶	⑭ ㉟ ㊵ ㊶ ㊻	㊼	㊳ ㊶	⑬ ㊴ ㊹	㊵ ㊷ ㊸ ㊻	⑩ ⑪	⑫ ㊺ ㊼	㊱

伊野遺跡、ナイフ形石器形態分類表

Cグループは多くが一側縁の部分加工を施すナイフ形石器群として捉えられる。そして、小型の台形石器に類似するものがある。

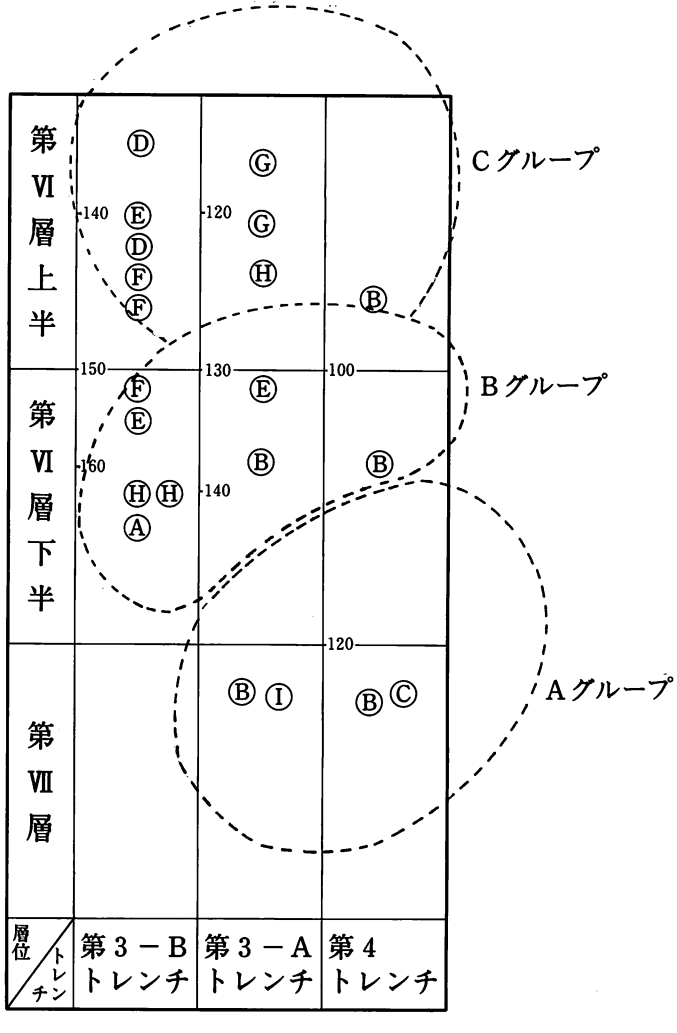
長幅表は次頁上図に示す通りである。点数が少なく多くを読めないが、第Ⅵ層上半部に長さの変化があり、第Ⅵ層下半部にやや幅の変化が見られる。

次にナイフ形石器以外の石器を加えて、第Ⅳ層～第Ⅶ層の出土高度をまとめると次頁下表で示される。

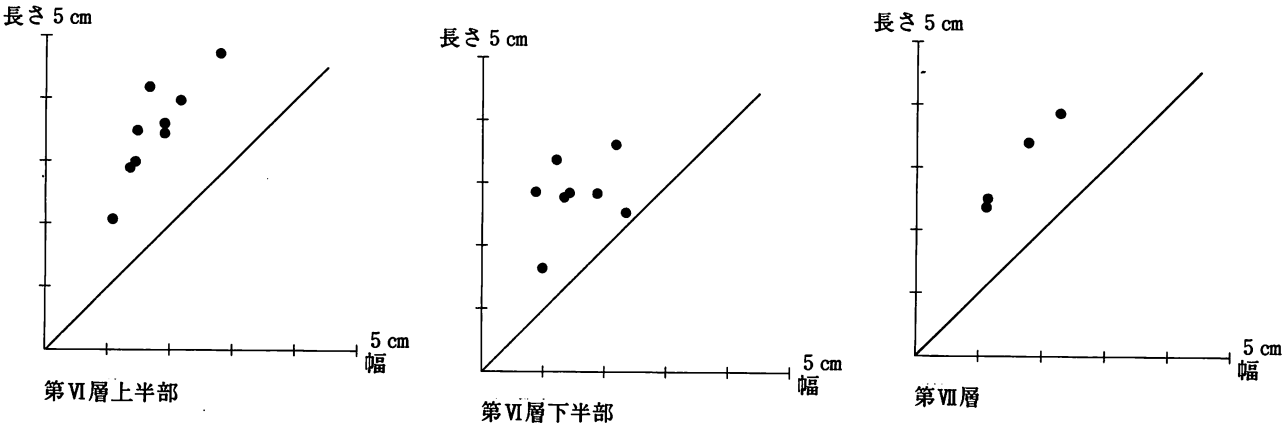
第Ⅳ層～第Ⅵ層上半・上位において細石器を中心とする石器群が捉えられ、伊野第1文化層とできる。また、第Ⅶ層の石器群も切り出し状ナイフ形石器を中心としており、最下位の文化層として独立して捉えられる。

さて、先に伊野第2文化層として設定した第Ⅵ層については、さらに分化現象を捉えることができようか。

ナイフ形石器については上半部と下半部でA・Bグループに分離傾向が見られるが、石器組成ではこの傾向を明確にはできない。



大型の縦長剥片を素材とした削器・掻器は類似した出土状態を示し、三稜尖頭器や剥片尖頭器も分離根拠が見られない。また安山岩の石核は上下を通して出土している。このように、この第2文化層の分化を行うことは困難を示すとされよう。ナイフ形石器にはグループ分化傾向がわずかに認められるため将来に作業を



ナイフ形石器長幅表

待ちたい。以上のように第Ⅵ層については一枚として、伊野第２文化層としてまとめておきたい。

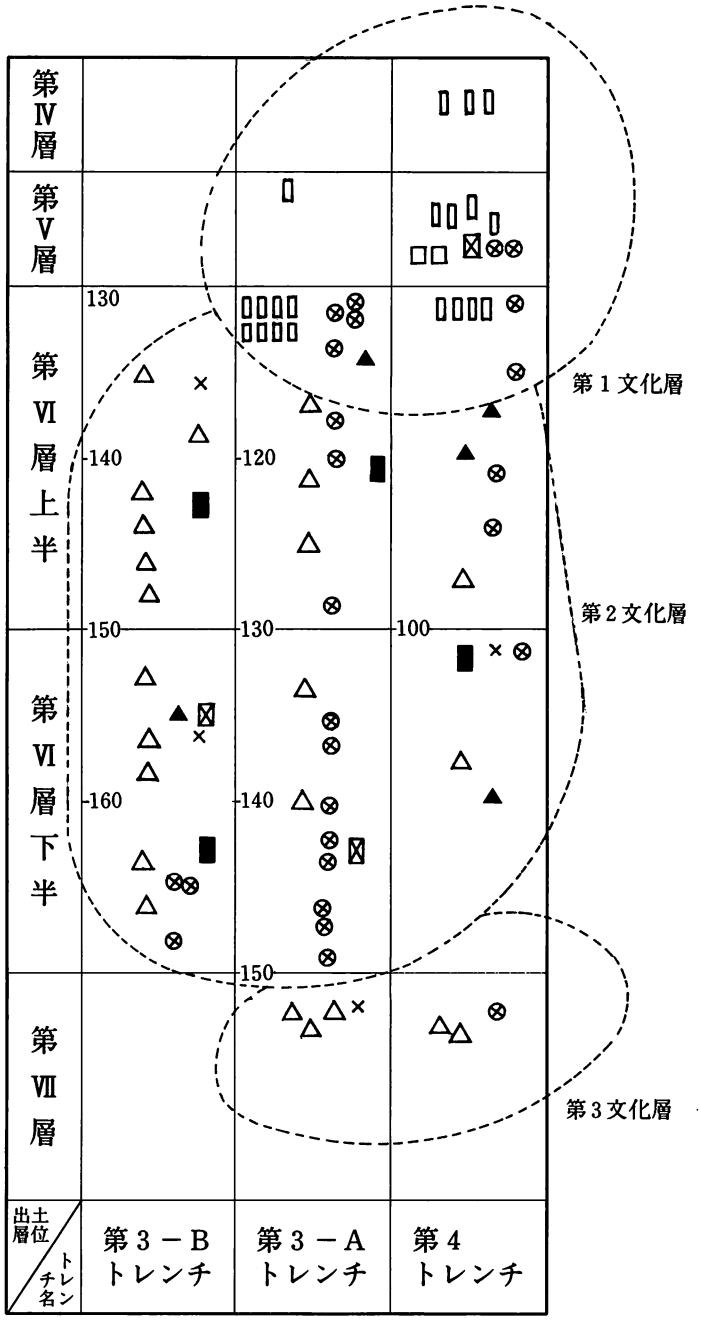
(4)＜第Ⅶ層の石器群＞
…伊野第３文化層の設定

小形の切り出し状ナイフ形石器を中心とする第Ⅶ層の石器群を伊野第３文化層として捉えておきたい。

最後に伊野遺跡の地質分析結果によって、「ＡＴ」火山灰を示す「火山ガラス」「重鉱物」の出土するピークは第Ⅶ層に検出されている。

したがって、伊野第３文化層は「ＡＴ」降下後間をおかない時期。伊野第２文化層はその後から約１万５千年前の長期の文化層としておきたいし、将来的には文化層の分化が進められよう。

第１文化層は第２文化層の後、縄文文化出現までの時期として捉えられる。



△ナイフ形石器
▯細石刃
□細石核
⊗スクレーパー
×三稜尖頭器
▲尖頭器
⊠彫　器
■石　核

出土石器一覧表（01～51）

図版番号	石器番号	器種名	出土トレンチ	出土層	出土高度	石質	全長	最大幅	最大厚	重量	備考
第30図	01	細石刃	第3トレンチA	第Ⅴ層	−87.1cm	黒曜石A	1.48cm	0.71cm	0.19cm	0.21g	S-20
第30図	02	細石刃	第3トレンチA	第Ⅵ層	−75.9cm	黒曜石A	1.82cm	0.80cm	0.23cm	0.33g	S-06
第30図	03	細石刃	第3トレンチA	第Ⅵ層	−123.5cm	黒曜石A	1.70cm	0.52cm	0.14cm	0.19g	S-38
第30図	04	細石刃	第3トレンチA	第Ⅵ層	−102.2cm	黒曜石A	1.28cm	0.65cm	0.24cm	0.21g	S-14
第30図	05	細石刃	第3トレンチA	第Ⅵ層	−107.9cm	黒曜石C	0.90cm	0.50cm	0.10cm	0.07g	S-17
第30図	06	細石刃	第3トレンチA	第Ⅵ層	−84.5cm	黒曜石A	1.31cm	0.82cm	0.18cm	0.25g	S-25
第30図	07	細石刃	第3トレンチA	第Ⅵ層	−115.4cm	黒曜石A	1.75cm	0.91cm	0.19cm	0.31g	S-51
第30図	08	細石刃	第3トレンチA	第Ⅵ層	−116.1cm	黒曜石A	0.90cm	0.51cm	0.15cm	0.09g	S-94
第30図	09	細石刃	第3トレンチA	第Ⅵ層	−103.9cm	黒曜石A	1.09cm	0.40cm	0.08cm	0.06g	S-40
第30図	10	ナイフ形石器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−113.7cm	黒曜石C	3.50cm	1.90cm	0.48cm	3.45g	S-20
第30図	11	ナイフ形石器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−123.6cm	黒曜石A	3.10cm	1.37cm	0.26cm	1.47g	S-110
第30図	12	ナイフ形石器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−129.6cm	黒曜石A	2.99cm	1.33cm	0.28cm	0.87g	S-98
第30図	13	ナイフ形石器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−138.1cm	黒曜石A	2.50cm	2.38cm	0.54cm	3.69g	S-49
第30図	14	ナイフ形石器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−147.3cm	黒曜石A	2.80cm	1.26cm	0.28cm	1.18g	S-44
第31図	15	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−101.6cm	安山岩A	6.65cm	2.44cm	0.90cm	14.73g	S-95
第31図	16	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−120.7cm	安山岩A	6.32cm	2.56cm	1.65cm	22.81g	S-36
第31図	17	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−146.3cm	安山岩A	6.80cm	3.60cm	1.24cm	28.30g	S-81
第31図	18	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−116.0cm	安山岩A	6.49cm	3.12cm	1.26cm	20.70g	S-120
第31図	19	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−144.6cm	黒曜石A	4.17cm	1.30cm	0.54cm	2.48g	S-106
第31図	20	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−148.4cm	黒曜石A	5.63cm	1.02cm	0.47cm	1.31g	S-123
第32図	21	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−136.9cm	黒曜石A	5.23cm	2.31cm	1.12cm	14.07g	S-72
第32図	22	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−138.0cm	黒曜石A	4.40cm	2.71cm	0.74cm	6.80g	S-26
第32図	23	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−84.6cm	頁岩	4.91cm	2.89cm	1.10cm	13.50g	S-22
第32図	24	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−148.1cm	安山岩A	8.59cm	2.21cm	1.24cm	27.98g	S-73
第32図	25	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−145.9cm	安山岩A	6.19cm	2.63cm	1.59cm	21.97g	S-86
第32図	26	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−129.3cm	安山岩B	7.83cm	4.92cm	2.04cm	59.70g	S-118
第33図	27	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−156.0cm	黒曜石A	3.54cm	2.14cm	0.69cm	5.78g	S-3
第33図	28	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−109.1cm	安山岩A	4.50cm	2.81cm	1.41cm	18.85g	S-3
第33図	29	削器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−118.7cm	安山岩B	11.3cm	4.87cm	2.23cm	93.31g	S-32
第33図	30	剝片尖頭器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−109.7cm	黒曜石C	3.82cm	2.13cm	0.76cm	5.94g	S-7
第33図	31	彫器	第3トレンチA	第Ⅵ層	−144.4cm	安山岩B	5.70cm	1.80cm	1.31cm	13.09g	S-97
第34図	32	縦長剝片	第3トレンチA	第Ⅵ層	−120.7cm	安山岩A	5.30cm	2.75cm	0.90cm	14.11g	S-25
第34図	33	縦長剝片	第3トレンチA	第Ⅶ層	−161.8cm	安山岩A	8.20cm	2.40cm	1.31cm	27.45g	S-16
第34図	34	石核	第3トレンチA	第Ⅵ層	−120.4cm	安山岩A	2.10cm	4.23cm	3.79cm	36.27g	S-6
第34図	35	ナイフ形石器	第3トレンチA	第Ⅶ層	−156.4cm	黒曜石A	2.41cm	1.11cm	3.20cm	0.82g	S-9
第34図	36	ナイフ形石器	第3トレンチA	第Ⅶ層	−154.5cm	黒曜石A	3.95cm	2.20cm	0.79cm	5.96g	S-30
第34図	37	三稜尖頭器	第3トレンチA	第Ⅶ層	−166.4cm	安山岩B	5.63cm	2.23cm	1.52cm	19.12g	S-6
第35図	38	ナイフ形石器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−138.4cm	黒曜石C	2.11cm	1.03cm	0.32cm	0.98g	S-12
第35図	39	ナイフ形石器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−149.7cm	安山岩B	4.30cm	1.65cm	1.13cm	7.80g	S-7
第35図	40	ナイフ形石器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−144.7cm	安山岩A	4.85cm	2.80cm	1.81cm	21.02g	S-6
第35図	41	ナイフ形石器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−141.2cm	安山岩B	3.70cm	1.92cm	0.89cm	5.92g	S-19
第35図	42	ナイフ形石器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−153.4cm	安山岩A	6.60cm	3.13cm	1.40cm	22.48g	S-33
第35図	43	ナイフ形石器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−157.1cm	安山岩A	3.40cm	1.20cm	1.41cm	5.01g	S-26
第36図	44	ナイフ形石器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−156.4cm	黒曜石A	2.89cm	1.81cm	0.46cm	3.62g	S-17
第36図	45	ナイフ形石器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−164.9cm	黒曜石A	3.65cm	2.20cm	0.78cm	3.68g	S-24
第36図	46	ナイフ形石器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−149.9cm	安山岩A	4.00cm	2.18cm	2.15cm	13.34g	S-38
第36図	47	ナイフ形石器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−166.2cm	黒曜石A	2.79cm	1.38cm	0.63cm	1.94g	S-36
第36図	48	尖頭器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−156.3cm	安山岩A	6.35cm	2.75cm	0.98cm	15.01g	S-31
第36図	49	未製品 三稜尖頭器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−138.3cm	安山岩A	5.99cm	1.92cm	2.33cm	20.41g	S-27
第36図	50	未製品 三稜尖頭器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−155.2cm	安山岩A	5.38cm	2.70cm	2.00cm	22.81g	S-25
第36図	51	ナイフ型石器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−165.7cm	黒曜石A	2.97cm	0.81cm	0.48cm	1.39g	S-13

出土石器一覧表（52～98）

図版番号	石器番号	器種名	出土トレンチ	出土層	出土高度	石質	全長	最大幅	最大厚	重量	備考
第37図	52	削器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−175.4cm	安山岩A	8.00cm	3.90cm	1.20cm	38.50g	S-2
第37図	53	削器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−166.2cm	安山岩A	7.23cm	4.50cm	1.52cm	59.00g	S-20
第37図	54	掻器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−166.3cm	安山岩A	7.55cm	3.58cm	1.30cm	33.55g	S-5
第37図	55	縦長剥片	第3トレンチB	第Ⅵ層	−144.7cm	安山岩A	2.40cm	1.03cm	0.60cm	1.41g	S-6
第37図	56	縦長剥片	第3トレンチB	第Ⅵ層	−133.2cm	安山岩A	3.32cm	2.01cm	0.85cm	6.22g	S-37
第37図	57	縦長剥片	第3トレンチB	第Ⅵ層	−149.5cm	安山岩A	4.57cm	2.03cm	0.95cm	7.14g	S-14
第37図	58	縦長剥片	第3トレンチB	第Ⅵ層	−184.7cm	安山岩A	6.17cm	2.03cm	0.45cm	6.97g	S-11
第38図	59	縦長剥片	第3トレンチB	第Ⅵ層	−174.0cm	安山岩A	7.91cm	2.16cm	1.15cm	15.81g	S-4
第38図	60	縦長剥片	第3トレンチB	第Ⅵ層	−155.4cm	安山岩A	4.09cm	4.15cm	2.10cm	28.36g	S-28
第38図	61	剥片石核	第3トレンチB	第Ⅵ層	−165.4cm	安山岩A	6.48cm	3.91cm	1.72cm	33.84g	S-3
第38図	62	剥片石核	第3トレンチB	第Ⅵ層	−144.0cm	安山岩A	4.45cm	3.85cm	1.42cm	17.51g	S-23
第38図	63	彫器	第3トレンチB	第Ⅵ層	−154.3cm	安山岩A	5.25cm	2.83cm	2.90cm	30.50g	S-1
第39図	64	細石刃	第4トレンチ	第Ⅳ層	−63.0cm	黒曜石A	1.40cm	0.70cm	0.12cm	0.13g	S-14
第39図	65	細石刃	第4トレンチ	第Ⅳ層	−63.0cm	黒曜石A	1.10cm	0.65cm	0.08cm	0.06g	S-14
第39図	66	細石刃	第4トレンチ	第Ⅳ層	−51.0cm	黒曜石A	0.80cm	0.60cm	0.30cm	0.33g	S-18
第39図	67	細石刃	第4トレンチ	第Ⅴ層	−63.3cm	黒曜石A	1.41cm	0.49cm	0.17cm	0.11g	S-27
第39図	68	細石刃	第4トレンチ	第Ⅴ層	−68.0cm	黒曜石A	1.63cm	0.64cm	0.17cm	0.19g	S-35
第39図	69	細石刃	第4トレンチ	第Ⅴ層	−61.0cm	黒曜石A	1.15cm	0.60cm	0.08cm	0.06g	S-22
第39図	70	細石核	第4トレンチ	第Ⅴ層	−58.5cm	黒曜石C	2.31cm	1.71cm	1.12cm	3.96g	S-1
第39図	71	細石核	第4トレンチ	第Ⅴ層	−80.0cm	黒曜石C	1.58cm	1.45cm	1.18cm	2.15g	S-68
第39図	72	彫器	第4トレンチ	第Ⅴ層	−62.8cm	安山岩A	5.30cm	2.45cm	1.68cm	21.82g	S-30
第39図	73	削器	第4トレンチ	第Ⅴ層	−73.5cm	安山岩A	7.53cm	4.55cm	1.52cm	50.67g	S-76
第40図	74	削器	第4トレンチ	第Ⅴ層	−74.0cm	安山岩A	10.85cm	4.16cm	1.39cm	58.82g	S-77
第40図	75	細石刃	第4トレンチ	第Ⅵ層	−73.0cm	黒曜石A	0.70cm	0.52cm	0.16cm	0.01g	S-15
第40図	76	細石刃	第4トレンチ	第Ⅵ層	−76.3cm	黒曜石A	1.14cm	0.62cm	0.06cm	0.06g	S-23
第40図	77	細石刃	第4トレンチ	第Ⅵ層	−75.0cm	黒曜石A	1.38cm	0.62cm	0.12cm	0.14g	S-10
第40図	78	細石刃	第4トレンチ	第Ⅵ層	−87.0cm	黒曜石A	2.04cm	0.58cm	0.21cm	0.20g	S-16
第40図	79	小石核	第4トレンチ	第Ⅵ層	−109.2cm	黒曜石A	2.90cm	2.95cm	1.91cm	17.60g	S-12
第40図	80	ナイフ形石器	第4トレンチ	第Ⅵ層	−96.9cm	安山岩A	3.55cm	1.37cm	0.59cm	2.23g	S-10
第40図	81	ナイフ形石器	第4トレンチ	第Ⅵ層	−105.6cm	黒曜石C	1.59cm	1.00cm	0.30cm	0.37g	S-33
第41図	82	剥片尖頭器	第4トレンチ	第Ⅵ層	−88.2cm	安山岩B	4.85cm	2.29cm	0.83cm	9.02g	S-58
第41図	83	尖頭器	第4トレンチ	第Ⅵ層	−114.0cm	安山岩A	6.29cm	2.96cm	1.14cm	19.50g	S-39
第41図	84	尖頭器	第4トレンチ	第Ⅵ層	−81.8cm	安山岩B	6.71cm	4.12cm	1.39cm	25.38g	S-73
第41図	85	三稜尖頭器	第4トレンチ	第Ⅵ層	−101.3cm	安山岩A	5.82cm	2.55cm	1.43cm	21.66g	S-20
第41図	86	削器	第4トレンチ	第Ⅵ層	−90.0cm	安山岩A	7.49cm	2.49cm	1.22cm	22.81g	S-56
第41図	87	削器	第4トレンチ	第Ⅵ層	−80.0cm	安山岩A	6.44cm	2.0 cm	0.98cm	13.26g	S-66
第42図	88	削器	第4トレンチ	第Ⅵ層	−101.7cm	安山岩A	9.60cm	2.90cm	1.41cm	39.91g	S-32
第42図	89	削器	第4トレンチ	第Ⅵ層	−69.0cm	安山岩A	7.95cm	2.42cm	1.92cm	33.56g	S-46
第42図	90	削器	第4トレンチ	第Ⅵ層	−77.0cm	安山岩A	5.57cm	3.48cm	1.57cm	25.75g	S-59
第42図	91	剥片	第4トレンチ	第Ⅵ層	−77.2cm	安山岩B	4.70cm	1.80cm	0.83cm	6.21g	S-28
第42図	92	剥片	第4トレンチ	第Ⅵ層	−76.5cm	黒曜石C	4.55cm	2.21cm	0.92cm	8.36g	S-53
第42図	93	剥片	第4トレンチ	第Ⅵ層	−78.0cm	チャートC	7.36cm	4.75cm	1.62cm	49.90g	S-57
第43図	94	石核	第4トレンチ	第Ⅵ層	−76.0cm	安山岩A	4.33cm	4.80cm	1.70cm	35.80g	S-65
第43図	95	石核	第4トレンチ	第Ⅵ層	−76.3cm	チャートA	5.13cm	3.33cm	2.08cm	34.36g	S-44
第43図	96	ナイフ形石器	第4トレンチ	第Ⅶ層	−109.6cm	チャートA	2.59cm	1.09cm	0.44cm	1.21g	S-2
第43図	97	ナイフ形石器	第4トレンチ	第Ⅶ層	(−126cm) −126.2cm	黒曜石C	3.48cm	1.72cm	0.90cm	5.05g	S-2
第43図	98	削器	第4トレンチ	第Ⅶ層	−117.1cm	安山岩A	5.53cm	2.75cm	0.94cm	16.56g	S-29

第Ⅴ章　石飛東遺跡

1．調査概要

石飛(いしとび)東遺跡は行政区、熊本県水俣市大字石坂川字川又に位置し、一帯は石飛と称される。水俣市街から南東方向へ直線で約12kmの距離がある。水俣川支流石坂川の最上流地点で、標高約500m上の小盆地となし、小規模の水田地も形成されている。西側には標高735mを測る鬼岳があり、その西麓に湯出(ゆのつる)川が北流し、河岸には湯出温泉が営まれている。石飛の南は鹿児島県との県境であり、鹿児島県大口市・出水市に接している。大口市へ抜ける東側には標高578mの亀齢(きれい)峠がある。眺望に秀れたところで、遠く鹿児島県桜島や霧島連峰を遠望でき、水俣市街は眼下にある。

著名な出水市上場遺跡や大口市日東遺跡は県境をはさみ近距離の位置にあり、また三稜尖頭器を出土した水俣市グミの木段遺跡は県境にのる。

石飛一帯は丘陵地を開墾して茶畑が広く拡がっている。銘茶「水俣石飛茶」であり、高地栽培された緑茶は、こよなくまろやかな味が、高く賞されている。

昭和40年代前半期、茶畑の開墾と石坂川小学校石飛分校の建設作業に伴って、多量の遺物の発見があり、鹿児島県立出水高校の故池水寛治氏と考古学クラブによって数次に亘る発掘調査が実施されている。全国に先がけた旧石器時代遺跡の発掘調査であり、その成果は今日でも、日本の旧石器時代研究の礎とされている。

さて、今回の調査地はこの「石飛分校遺跡」の東へ約100mの位置にあり「石飛東遺跡」とした。石飛分校遺跡の周辺調査によって新たに確認できた地点であり、同様の成果が予想された。

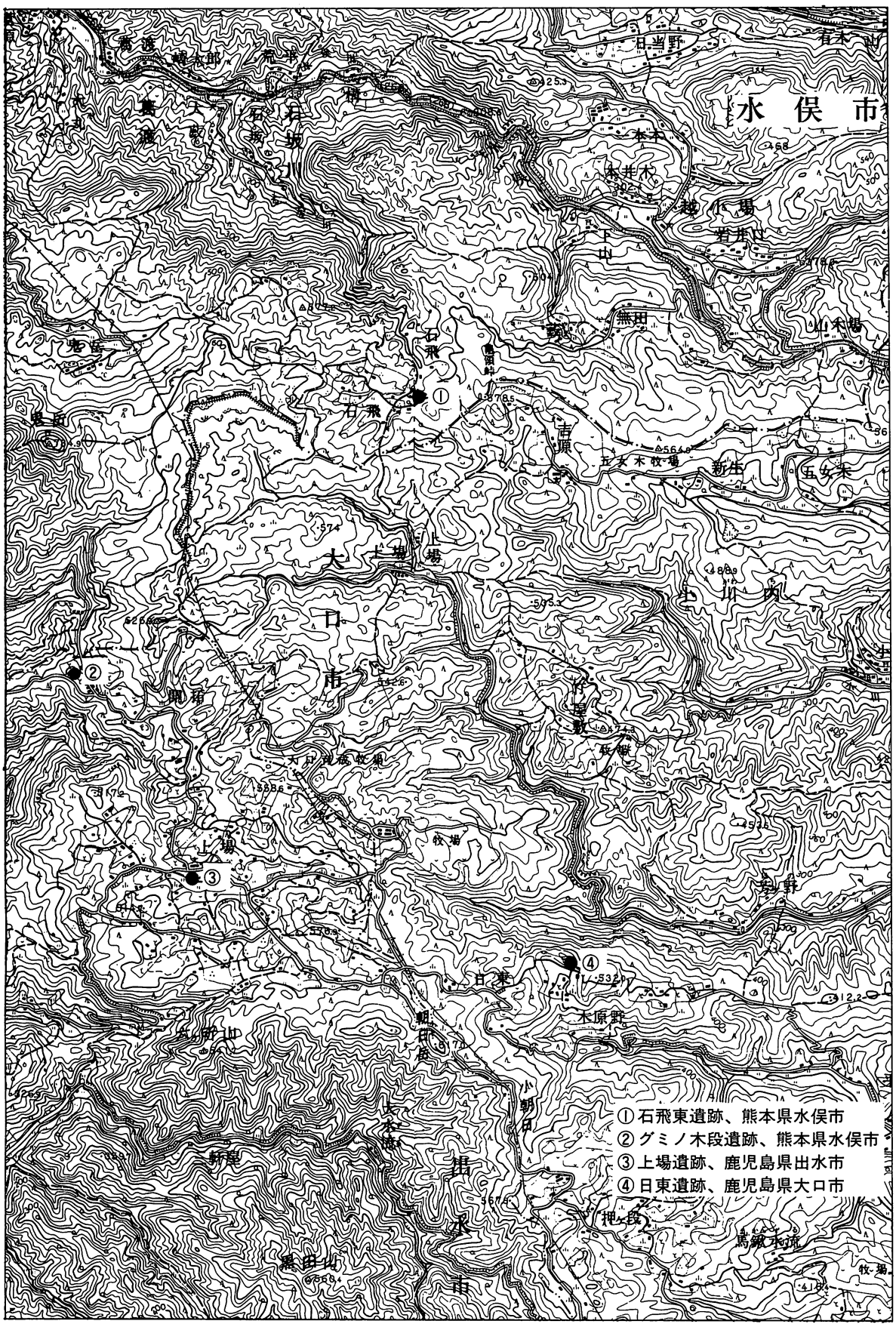
この土地は石飛在住の島田実氏が耕作し、養豚が営まれているが、作業中に土器、石器が採集されており、その中に三稜尖頭器が認められたのである。そして、豚舎横の削平面で新たに石器片を採集でき、また、「アカホヤ」以下の層は耕作等による破壊を左程受けずに残されていることが確認できたのである。加えて、発掘調査の承諾を受け、発掘届けほかの事務処理を終えて、昭和60年９月16日から発掘調査を開始することになった。

発掘調査は10m四方のトレンチを設定。第１～第３トレンチとし、それぞれのグリッドに区分して行った。各トレンチの調査を進めて、遺物は台地主幹に添って集中する傾向が見られた。この傾向に従って、調査範囲を狭めながら、許容される期間・費用の中で最大限可能な調査を進めた。

結果的に第１トレンチ４m×９m＝36m²、第２トレンチ５m×９m＝45m²、第３トレンチ６m×９m＝54m²、合計135m²で第Ⅴ層までを完掘できている。遺物は各層から出土し、縄文時代早期～旧石器時代「AT」前の石器まであり、貴重な資料の提示となろう。

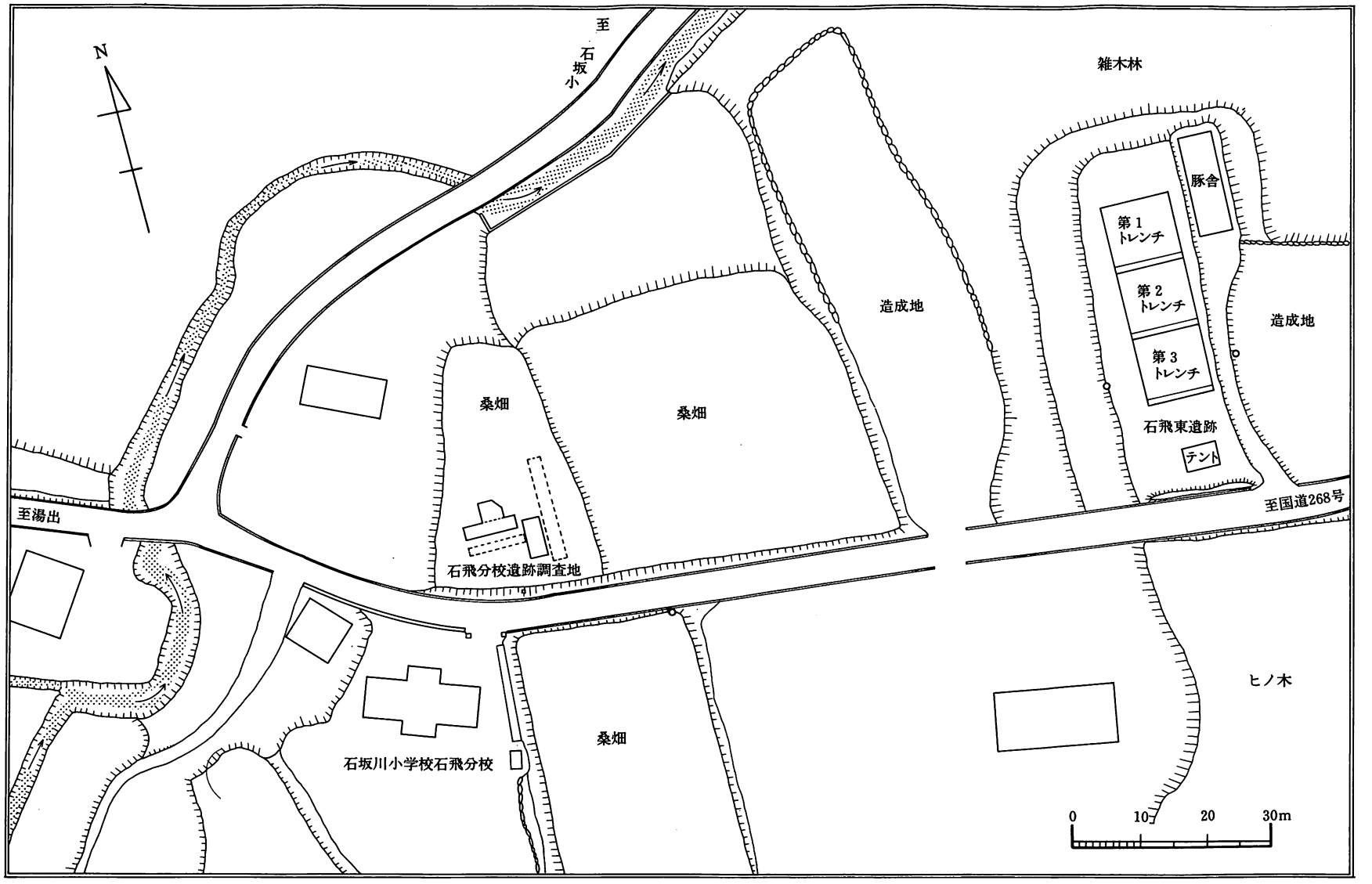
今回の調査は台地全体を網羅することはできなかったが、遺跡は台地一帯に拡がることは確実であり、発掘調査地以外は、耕作下に残されていることになる。

調査は約３ケ月を経て、昭和60年11月26日に終了し、埋め戻し作業を行った。このあと、熊本県文化財収蔵庫において、図面・遺物の整理からはじめ、報告書の作成にとりかかった。

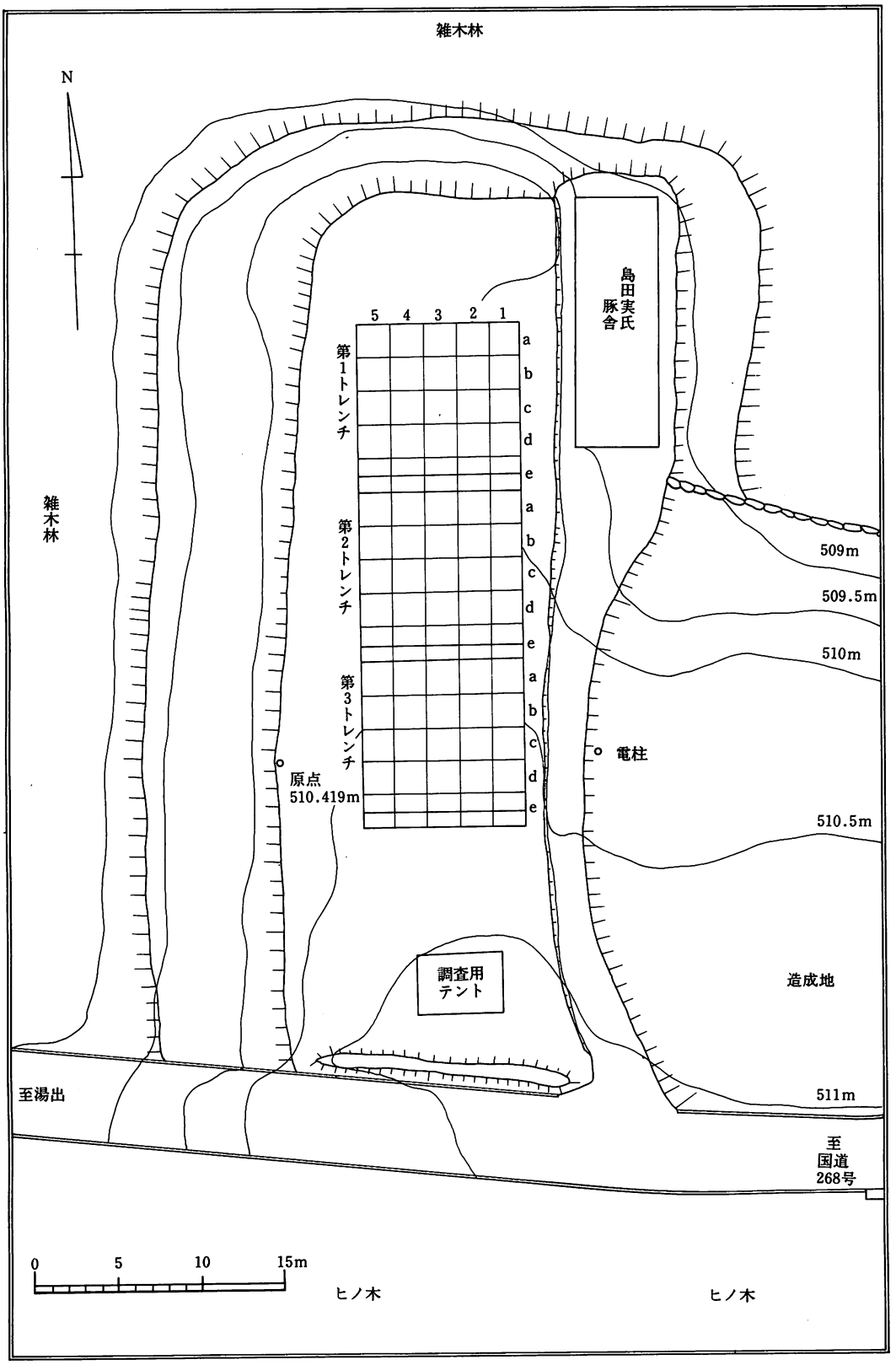


0 1000 2000m

第44図　石飛東遺跡位置図



第45図　石飛東遺跡平板測量図



第46図　石飛東遺跡全体測量図

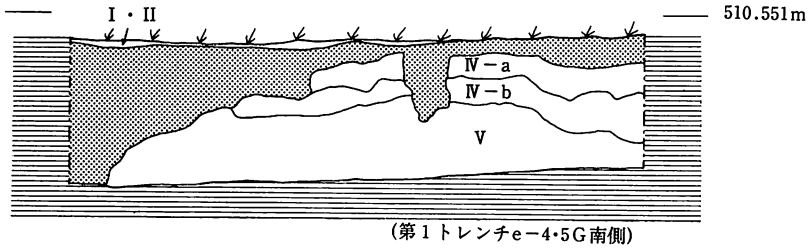
2、層　位

第3トレンチ、e—5グリッド南側の層位図で報告したい。(中央部は地質分析のためサンプリングを行っている。)

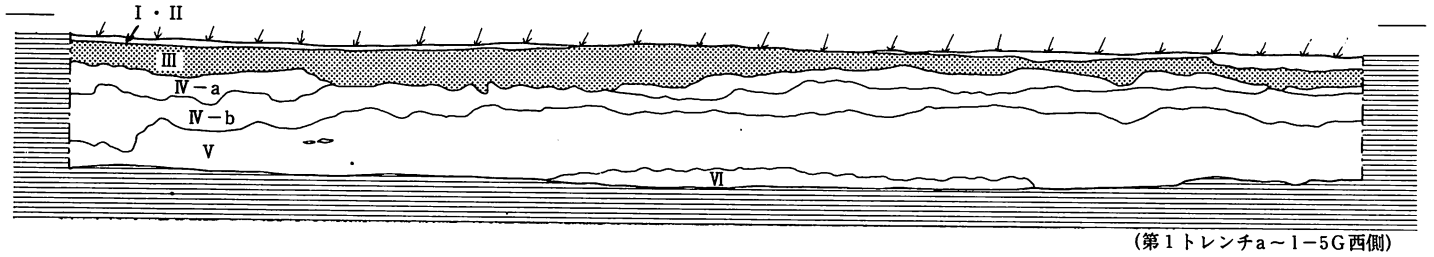
第Ⅰ層　耕作土層。本来的には耕作土の下に10～20cmの厚さで第Ⅱ層黒色土（黒ボク）が見られる。

第Ⅱ層　耕作によって撹乱されている。

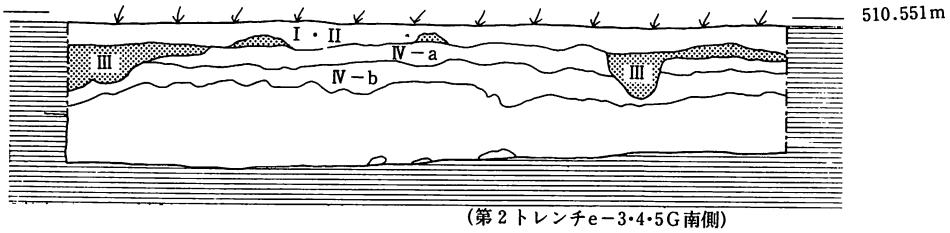
第Ⅲ層　黄褐色土層。イモゴと呼ばれる土で所謂、Ah「アカホヤ」である。約15～20cmの厚さが平均的であるが、30cm以上堆積している場合がある。その場合は、上半部（第Ⅲ—a層）……キナコ状、下半部（第Ⅲ—b層）……黄褐色パミスに分けられる。



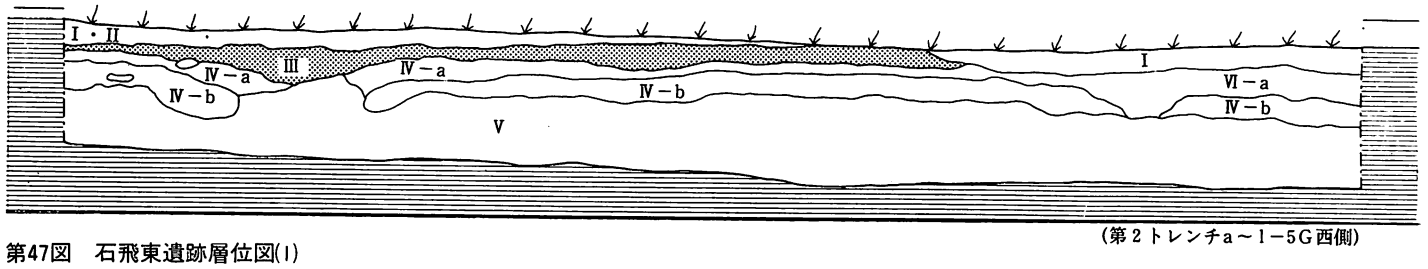
(第1トレンチe－4･5G南側)



(第1トレンチa～1－5G西側)



(第2トレンチe－3･4･5G南側)



(第2トレンチa～1－5G西側)

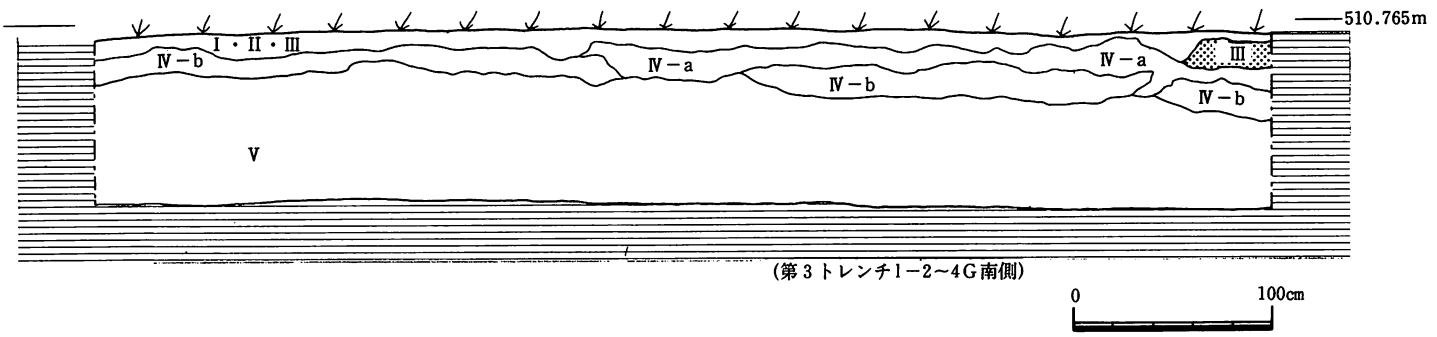
第47図　石飛東遺跡層位図(1)

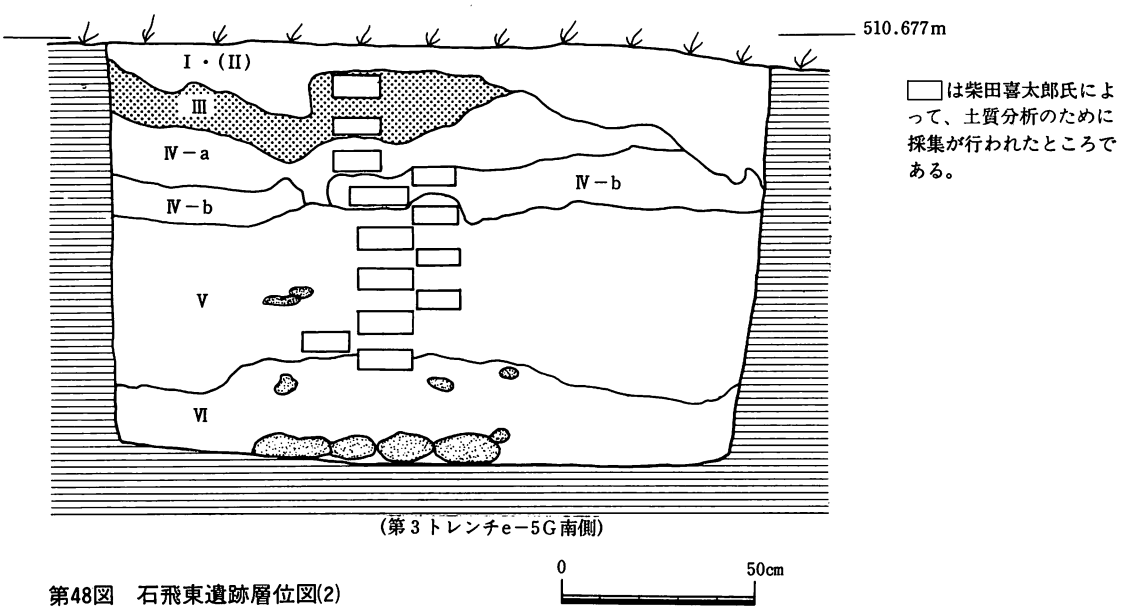
第Ⅳ—a層　薄茶褐色土で粘質がある。厚さは10cm内外で、堆積の認められないところも多い。

第Ⅳ—b層　黒色土でやや粘質がある。約10～15cmの厚さがあり、主として縄文時代早期遺物を含んでいる。

第Ⅴ層　茶褐色ローム層で粘質が強い。約60～100cmの堆積がある。黄褐色のパミスが上位から約20～30cmのところに少し見られる事があり、「ＡＴ」火山灰を含む層と考えられる。

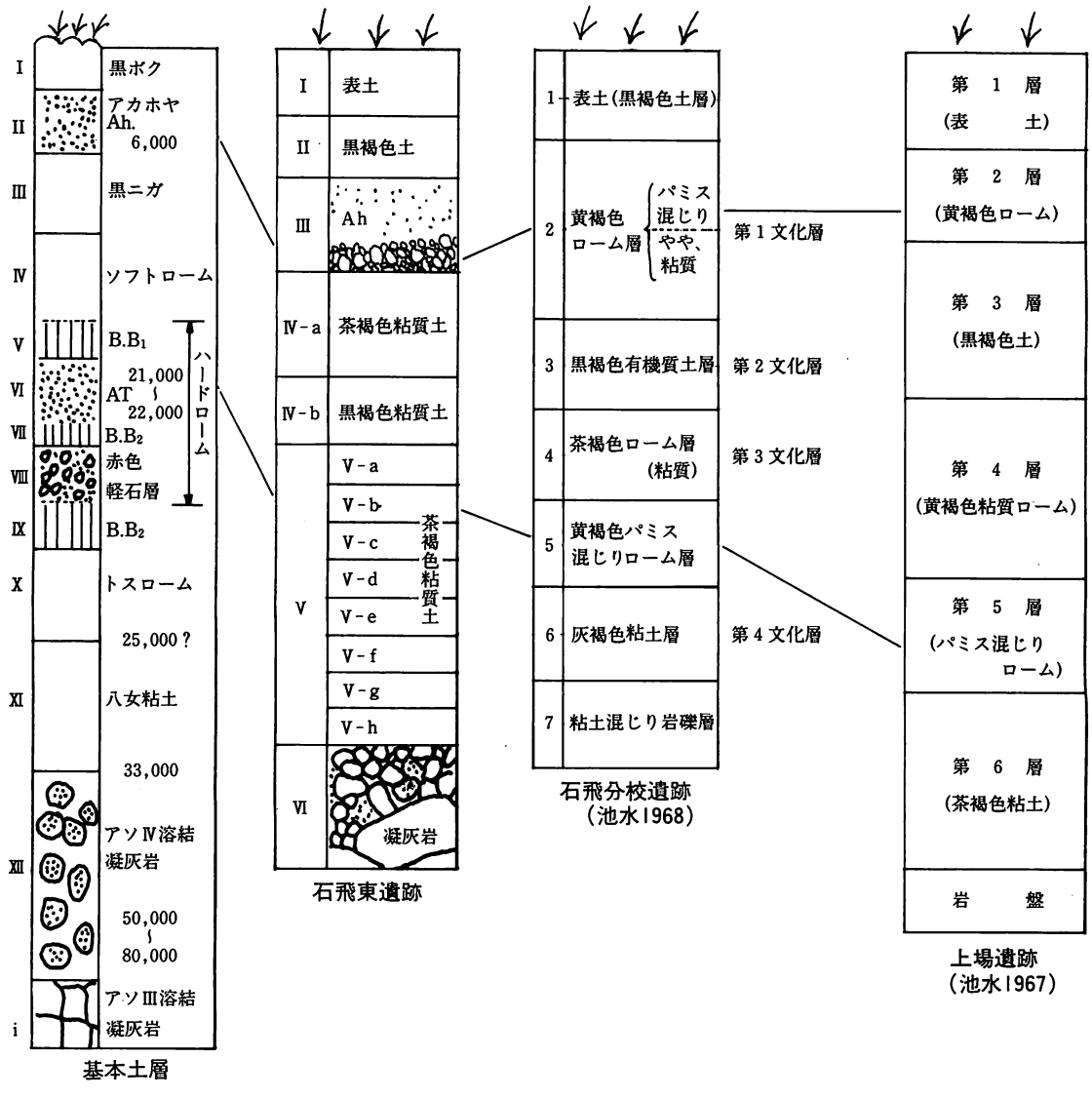
第Ⅵ層凝灰岩の礫層となる。上部には約４～５cm程度の凝灰岩の丸石がつまり、約20～30cmの厚さがある。この礫石の下は非常に固い凝灰岩の岩盤となっている。凝灰岩は近くの鬼岳火山起源との説がある。





第48図　石飛東遺跡層位図(2)

<層位対比図>



石飛東遺跡と石飛分校・上場遺跡との層位比較は順調に進めることができるが、後者で示される「第V層黄褐色パミス混じりローム層」は前者では明確な層としては確認することができていない。付近一帯で1～2cm大のパミスを見ることがありこれに相当するものかと考えられる。

石飛東遺跡では、「アカホヤ」の下に見られる茶褐色粘質土を第IV—a層としている。これは従来、県南地区を中心にいくつか確認できている現象で縄文早期土器を包含するローム層に相当すると判断され、下益城郡松橋町曲野遺跡で指摘できた第IV—a層（黄褐色粘質土）の事例もある。層準的にもその下層に黒褐色粘質土（第V—b層）が存在し、縄文早期遺物を包含していることが多い。そして、石飛東遺跡では、石飛分校・上場遺跡に見られる第V層黄褐色パミス混じりローム層が確認できないことと、前後の色調の分離ができないことにより、第VI層凝灰岩礫層に接するまでの全てを第V層としている。したがって、石飛東遺跡の第V層は、石飛分校・上場遺跡の第IV層～第VI層に相当することになる。

なお、今回の地質分析による結果は第V—a･b･c層相当に「AT」火山ガラス･重鉱物の出土ピークがあることが判明している。

3、遺物出土状況

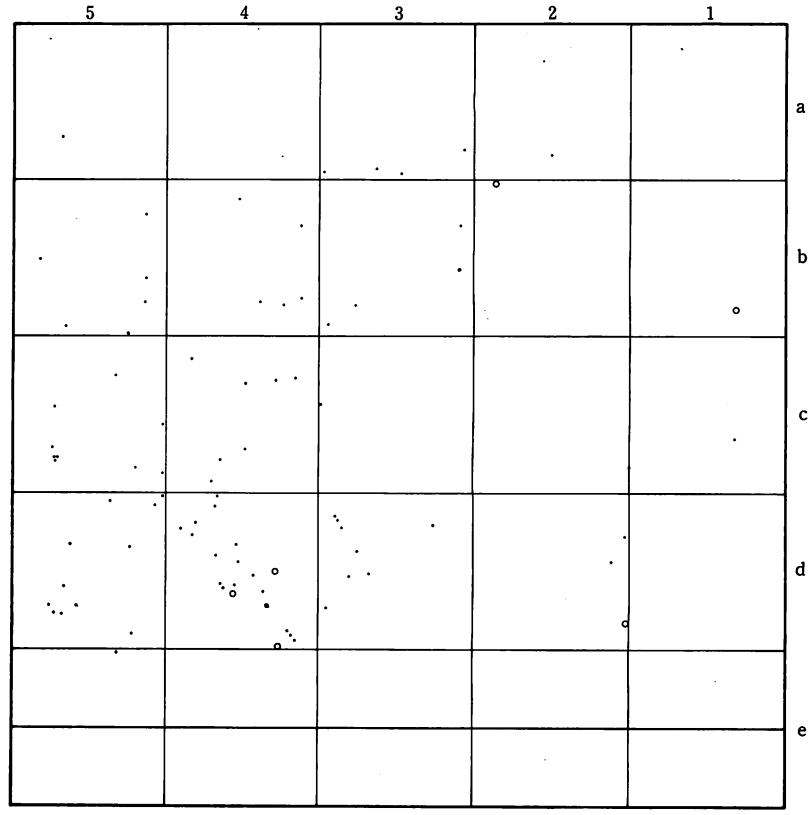
《第１トレンチ》

＜第Ⅲ層＞

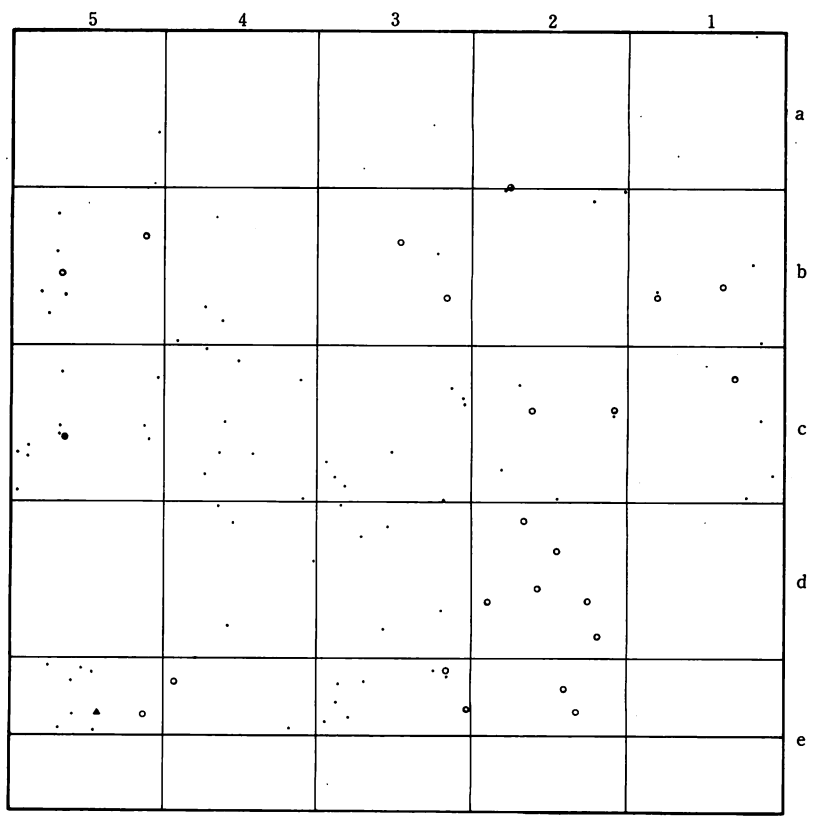
表土剝ぎを終了したのち、深さ10cm毎に第Ⅳ層上面まで掘り下げた。遺物出土分布状況図は一括してまとめたが、黒曜石を主とした剝片類や土器片はいくらか南側に集中する傾向がある。

＜第Ⅳ—a層＞

剝片類が全体的に散在するが縄文土器片はトレンチの南側地点に集中傾向が見られる。下層から上がったものであろう、第e—5グリッドに三稜尖頭器の破片１点が出土している。下層に旧石器時代遺物の包含層があろう事を示唆した石器である。



（第１トレンチ第Ⅲ層）



（第１トレンチ第Ⅳ－a層）

○土　器
△ナイフ形石器
×台形石器
▲三稜尖頭器
□石　核
□細石核
□細石刃
・剝　片

0　100cm

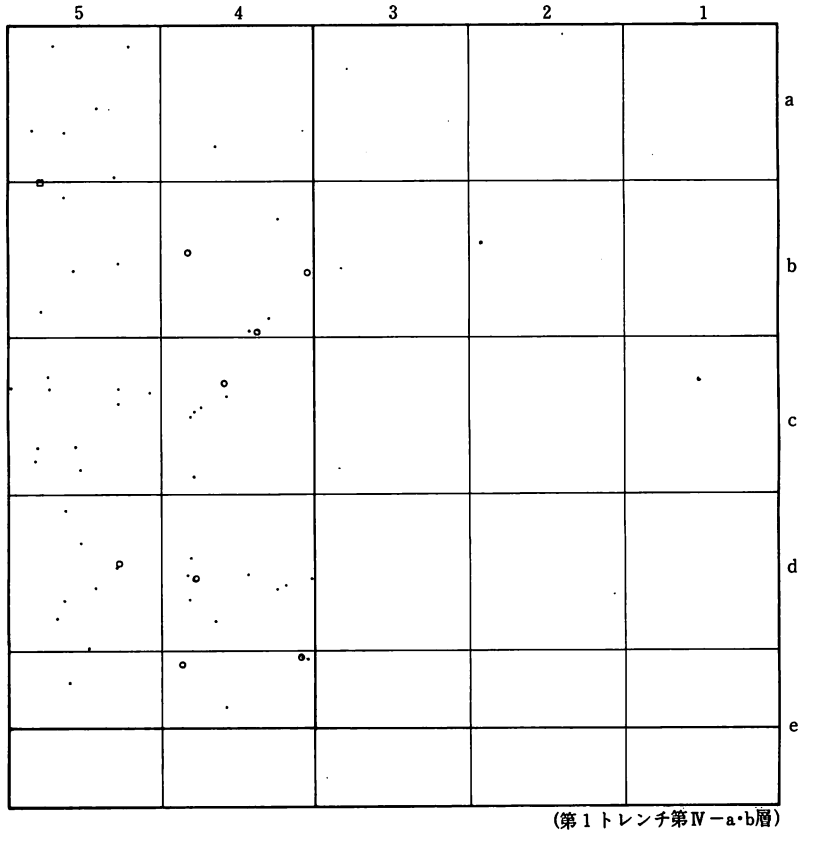
第49図　石飛東遺跡平面分布図（第１トレンチ第Ⅲ・Ⅳａ層）

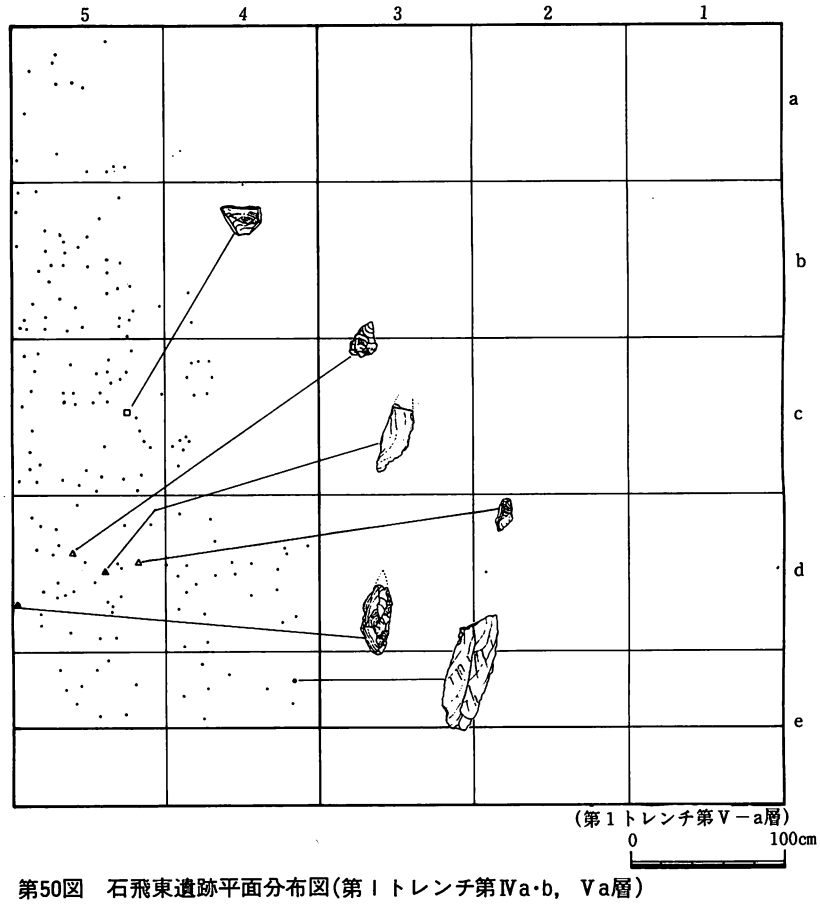
＜第Ⅳ—a・b層＞

以上の様に第Ⅲ層・第Ⅳ—a層の調査を進めた結果、第1トレンチにおいては、第Ⅲ層が約20～30cmと厚いこともあり、耕作などによる地形破壊も少なく、第Ⅲ層以下の包含層は良好に遺存されていると判断された。その中で、第Ⅳ層以下は西側の10グリッド＝36cm²に限定して調査を行った。第Ⅳ—a・b層は10cm掘りを進める中で、第Ⅳ—b層黒褐色粘質土がほとんどであるが、部分的に第Ⅳ—a層・茶褐色粘質土が入り混じる様な割合であった。出土する遺物は黒曜石の剥片、砕片が多く、縄文土器片も散在している。a—5グリッドに細石核1点が出土している。

＜第Ⅴ—a層＞

第Ⅴ層は機械的に10cm毎に掘り下げる調査を行った。上位から第Ⅴ—a層～第Ⅴ—h層までであり約80cm掘り下げた事になる。第Ⅴ—a層は調査区全体が集中分布地点として捉えられる。C・D—5グリッドに定形石器が集中し、ナイフ形石器・三稜尖頭器2点と細石核1点が出土している。e—4グリッドには黒曜石の大型の端正な縦長剥片が見られた。





○土器片
△ナイフ形石器
▲三稜尖頭器
●スクレーパー
□石　核
・剥　片

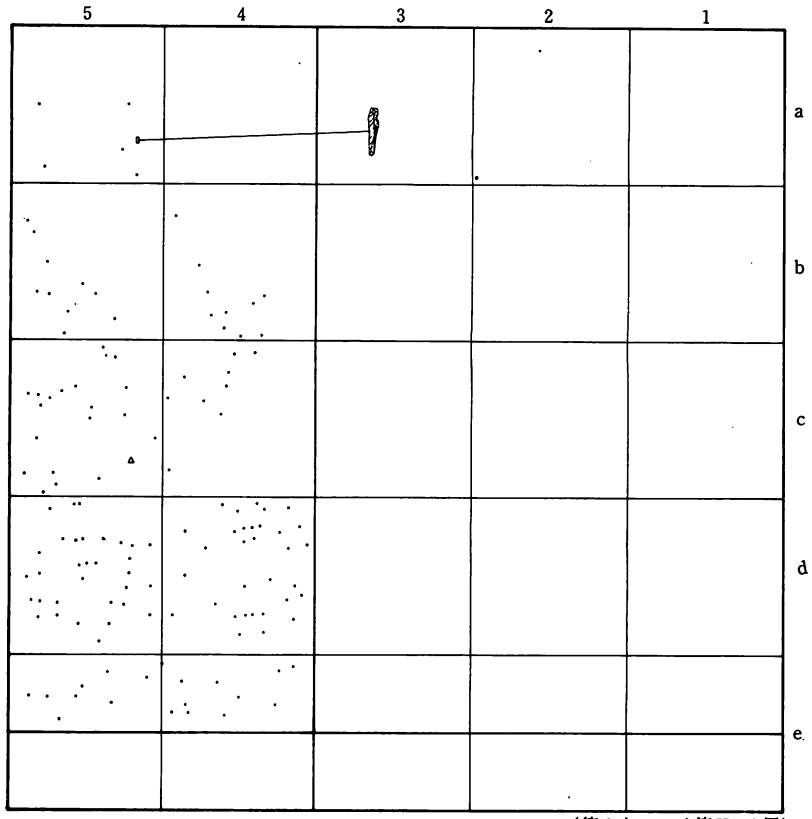
第50図　石飛東遺跡平面分布図(第1トレンチ第Ⅳa・b，Ⅴa層)

＜第Ⅴ—b層＞

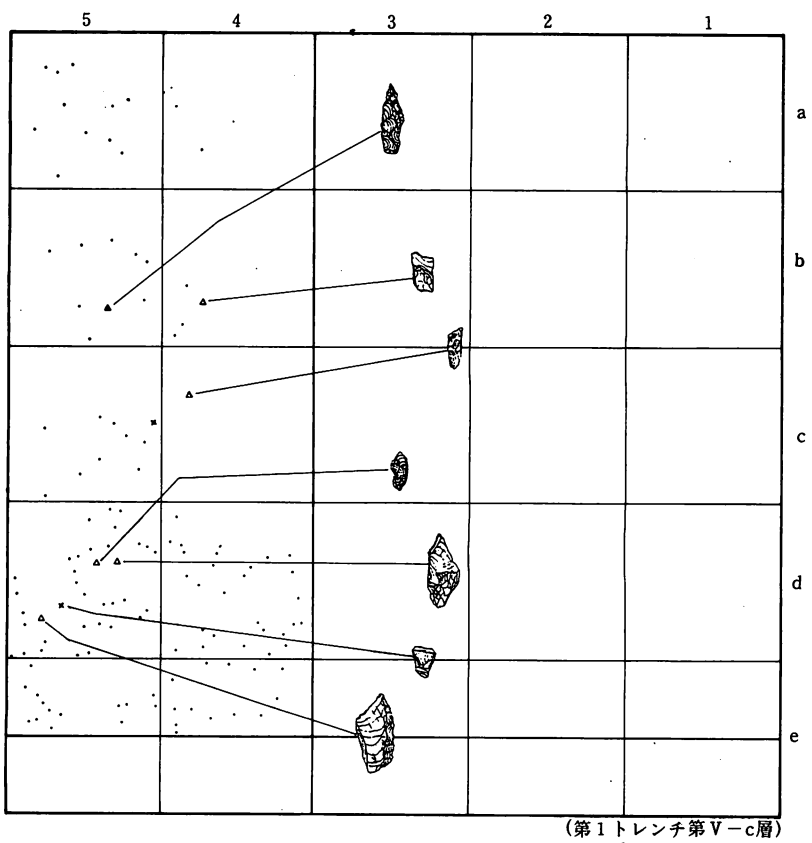
全体的に石器類の出土が多く、剥片・砕片が多い。主なものではc—5グリッドにナイフ形石器1点と、a—5グリッドに細石刃1点見られた。

＜第Ⅴ—c層＞

石器類はd・e—4・5グリッドに集中分布し、北側がやや薄れている。定形石器の集中分布地点が2ケ所にあり、d—5グリッドとb・c—4・5グリッドで、ナイフ形石器（5点）、台形石器（2点）と三稜尖頭器1点が認められる。



（第1トレンチ第Ⅴ—b層）



△ナイフ形石器
×台形石器
▲三稜尖頭器
□細石刃
・剥　片

（第1トレンチ第Ⅴ—c層）

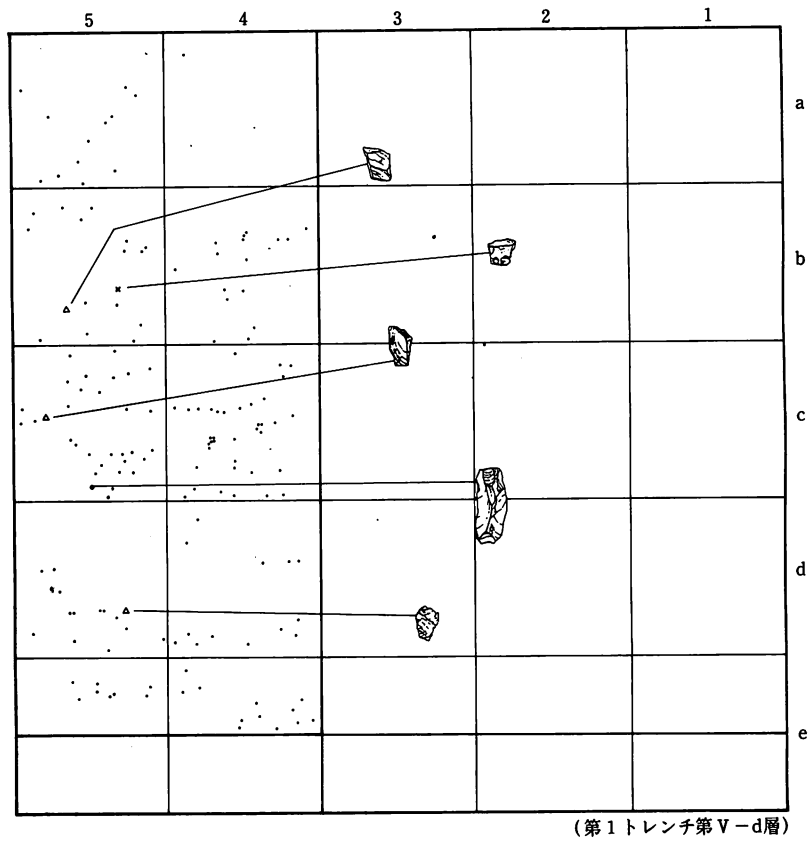
第51図　石飛東遺跡平面分布図（第1トレンチ第Ⅴb・Ⅴc層）　0　100cm

＜第Ⅴ－d層＞

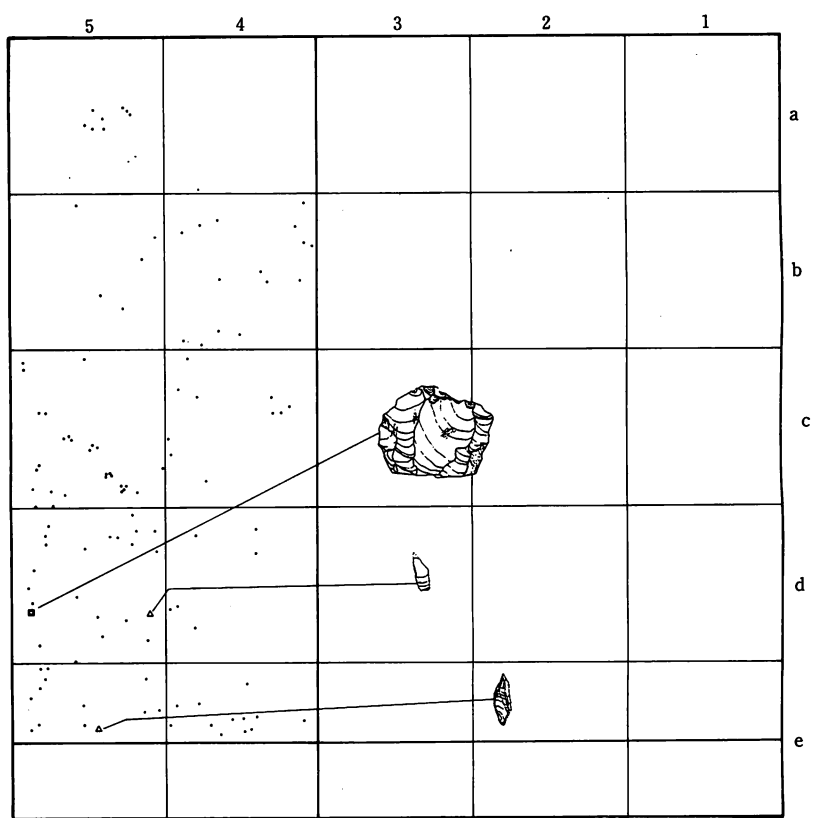
石器類は全体的に出土し、定形石器にはナイフ形石器3点と台形石器1点がある。c－5グリッドでは、定形石器の素材と思われる縦長剥片が出土している。

＜第Ⅴ－e層＞

石器類は全体的に出土する。凝灰岩の礫石が散在している。礫群として捉えてよいのかもしれないが、第Ⅵ層が凝灰岩の礫層であるため、人為的であるのかどうかの判断が困難であった。定形石器はd・e－5グリッドに集中し、ナイフ形石器2点と黒曜石の石核が出土している。



（第1トレンチ第Ⅴ－d層）



△ナイフ形石器
×台形石器
□石　核
・剥　片

（第1トレンチ第Ⅴ－e層）

0　100cm

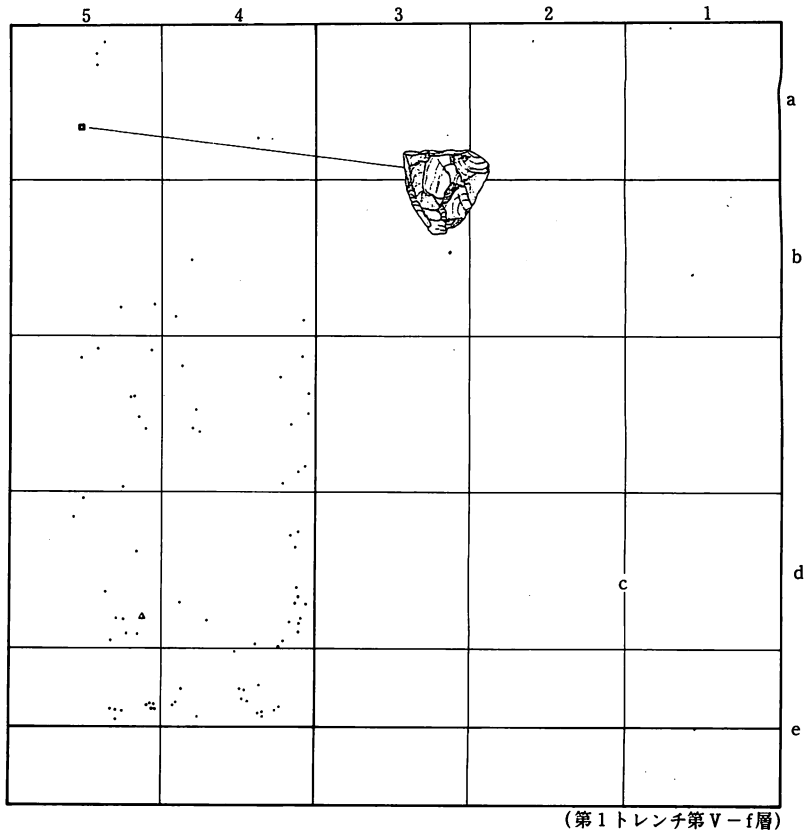
第52図　石飛東遺跡平面分布図（第1トレンチ第Ⅴd・Ⅴe層）

＜第Ⅴ－f層＞

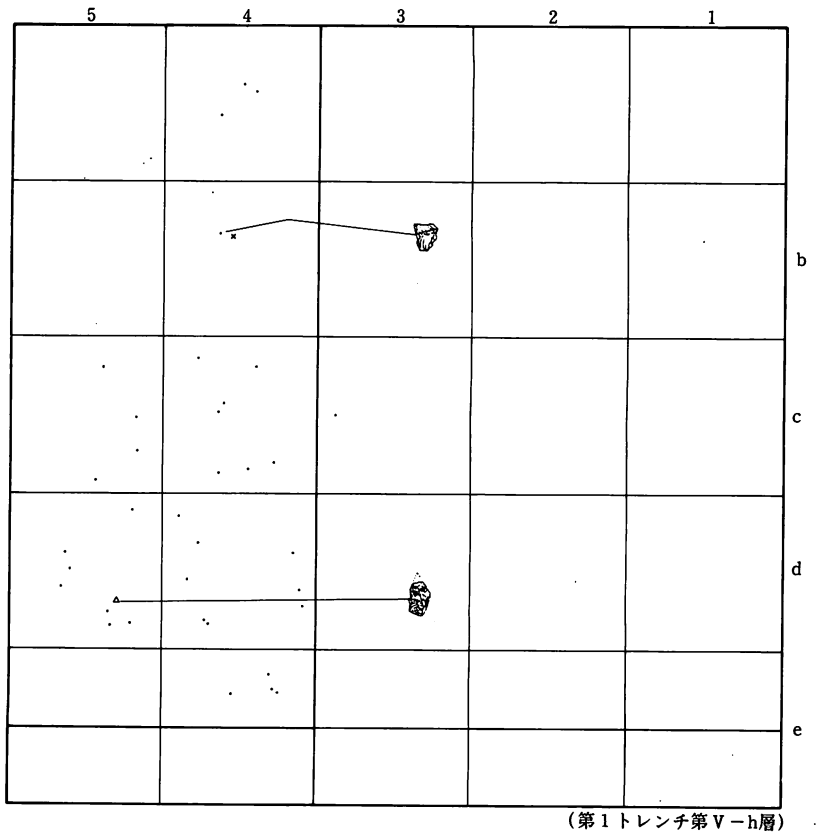
全体的に石器類の出土数が減少している。定形石器ではナイフ形石器・台形石器・石核各１点がある。

＜第Ⅴ－g層＞

石器類の出土はさらに少なくなるが、ナイフ形石器・台形石器各１点が出土している。掘り終えると完全な礫層となる。



（第１トレンチ第Ⅴ－f層）



△ナイフ形石器
×台形石器
□石　核
・剥　片

（第１トレンチ第Ⅴ－h層）

第53図　石飛東遺跡平面図分布図（第Ⅰトレンチ Vf・Vh層）

0　100cm

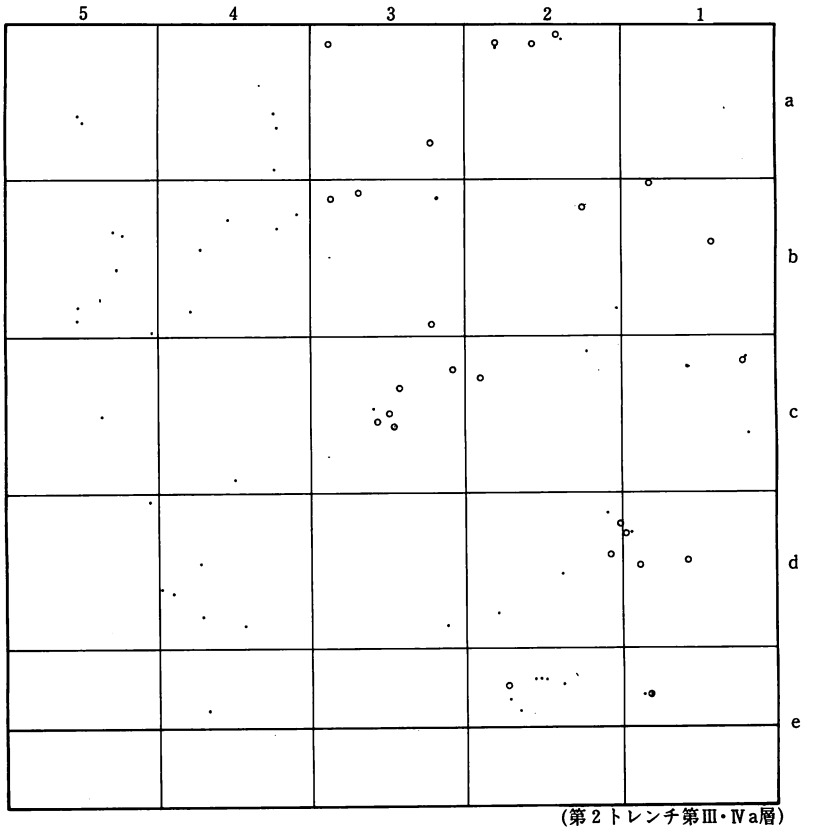
《第2トレンチ》

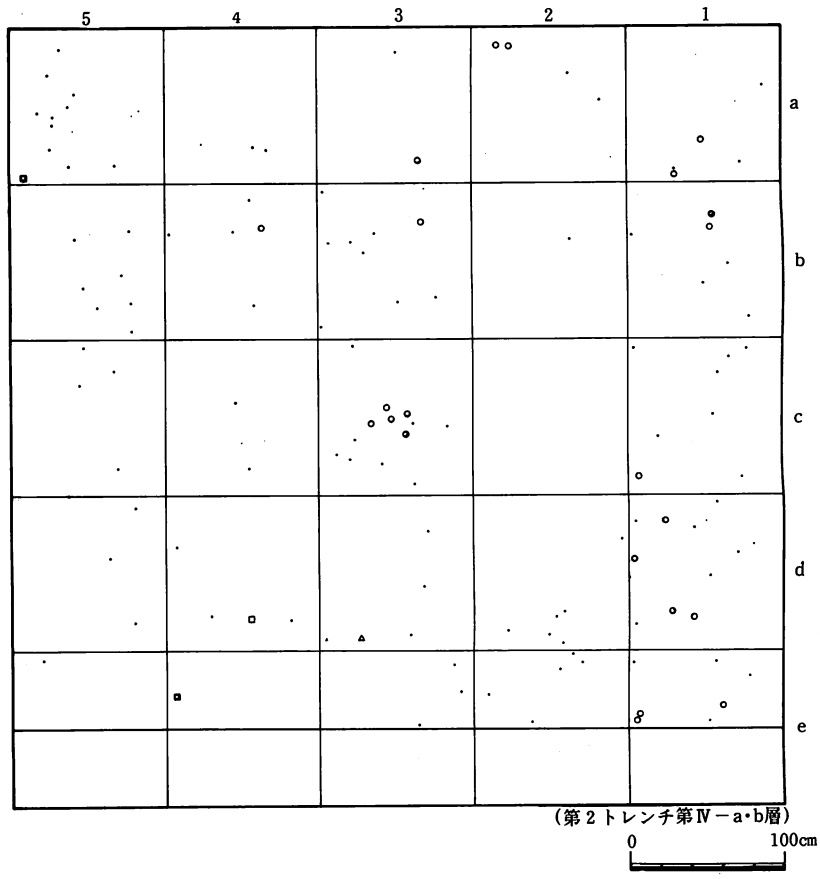
＜第Ⅲ・Ⅳ—a層＞

全体に縄文早期の土器片と剥片・砕片が出土している。

＜第Ⅳ—a・b層＞

縄文早期の土器片や石器類が混在している。石器類には石鏃・細石核・ナイフ形石器各1点がある。





○土器片
□細石核
□石　核
△ナイフ形石器
・剥　片
●スクレーパー

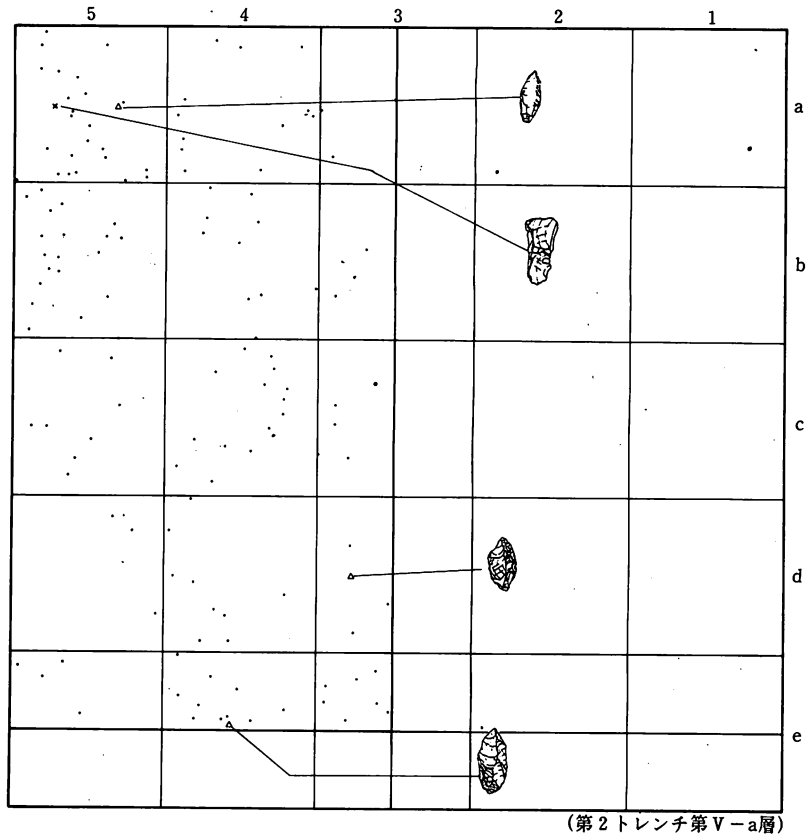
第54図　石飛東遺跡平面分布図(第2トレンチ第Ⅲ，Ⅳa，Ⅳa・b層)

＜第Ⅴ—a層＞

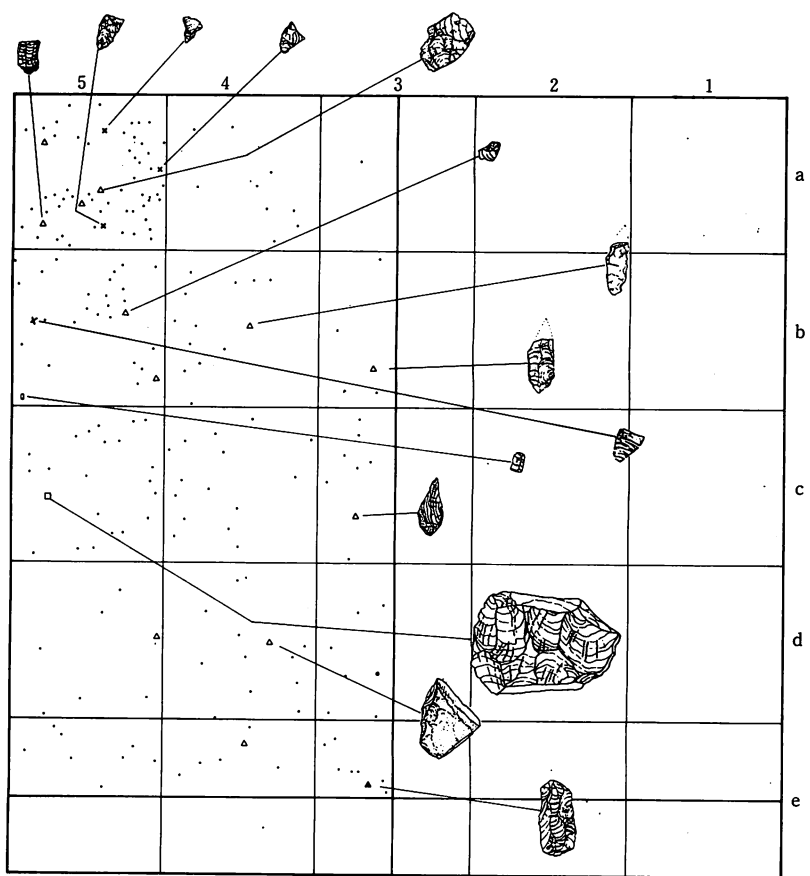
第Ⅴ層からはトレンチの中央から西側部分45m²を掘り下げて調査を行った。縄文土器片や細石器の出土がなくなる。石器類は全体的に出土し、定形石器としてはナイフ形石器3点と台形石器1点が出土している。

＜第Ⅴ—b層＞

石器類が大集中分布を示す。剥片・砕片はもとよりであるが、定形石器も大集中分布を見せる。ナイフ形石器13点、台形石器3点、三稜尖頭器1点がある。石核2点も出土しており、一時期の完全なベースとして捉えることができよう。



（第2トレンチ第Ⅴ—a層）



△ナイフ形石器
×台形石器
▲三稜尖頭器
□石　核
●スクレーパー
・剥　片

（第2トレンチ第Ⅴ—b層）

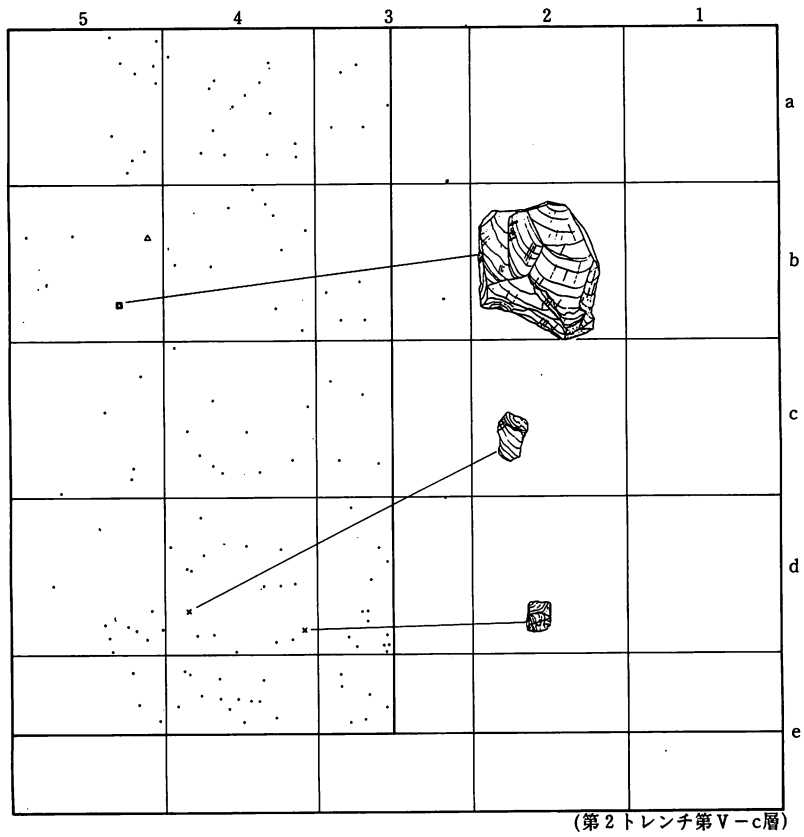
第55図　石飛東遺跡平面分布図（第2トレンチ第Ⅴa・Ⅴb層）　0　100cm

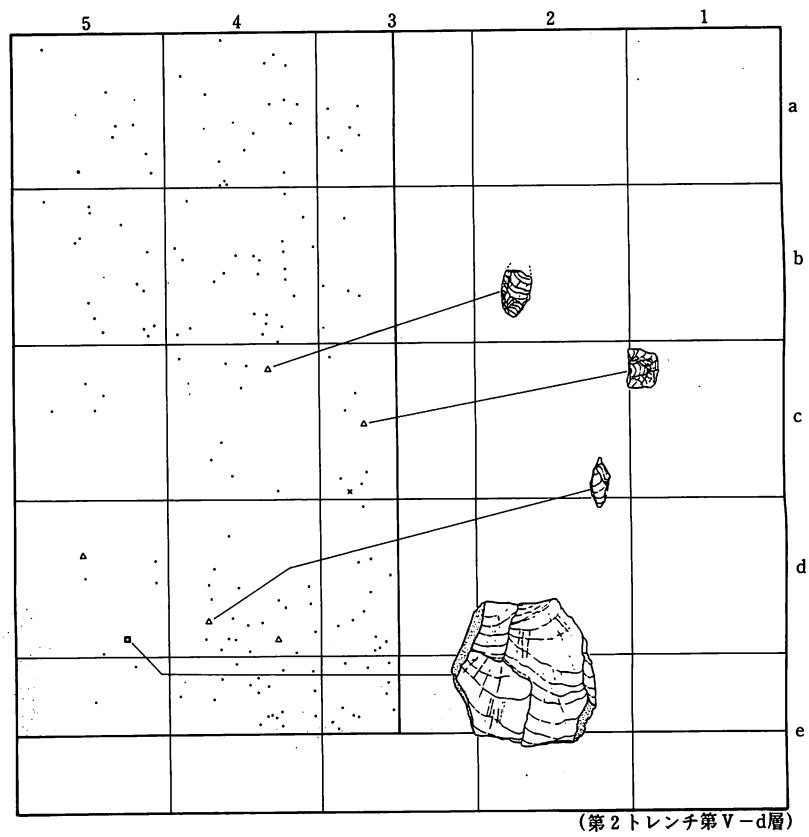
＜第Ⅴ－c層＞

全体的に石器類が出土し、全体が集中分布地点として捉えられよう。定形石器にはナイフ形石器１点、台形石器２点が出土している。

＜第Ⅴ－d層＞

全体的な石器類の集中分布が続いているが、北側と南側の２ケ所のブロックに分けられそうである。定形石器はナイフ形石器４点と台形石器２点が出土している。石核１点の出土もあり、安定した出土状態を示し、一時期のベースと判断される。





△ナイフ形石器
×台形石器
□石　核
・剥　片
●スクレーパー

0　100cm

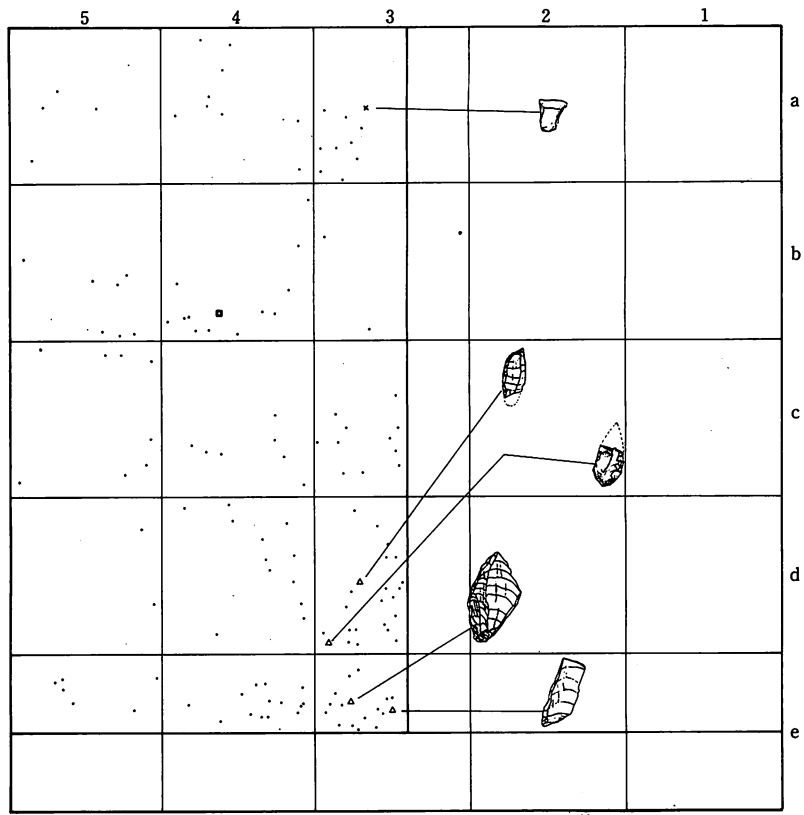
第56図　石飛東遺跡平面分布図(第２トレンチ第Ⅴc・Ⅴd層)

＜第Ⅴ—e層＞

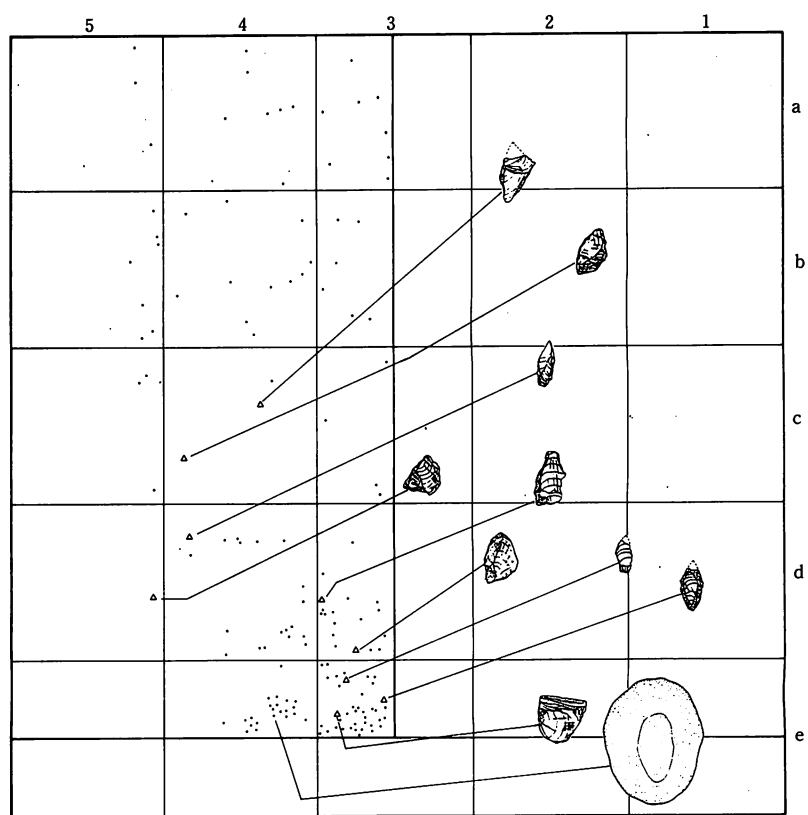
石器類の集中分布が続いている。北側は第Ⅵ層の凝灰岩の礫石が出はじめ、石器類は少なくなる。定形石器はd・e—3グリッドに集中し、ナイフ形石器・台形石器各2点が出土している。

＜第Ⅴ—f層＞

d・e—3・4グリッドに明確な集中分布状態が認められる。その中にナイフ形石器4点も含まっている。また、敲石の出土もあり、石器製作場所の可能性が強い。c・d—4・5グリッドでは剥片・砕片は少ないが、ナイフ形石器4点が集中している。



（第2トレンチ第Ⅴ—e層）



（第2トレンチ第Ⅴ—f層）

△ナイフ形石器
×台形石器
□石　核
・剥　片

0　100cm

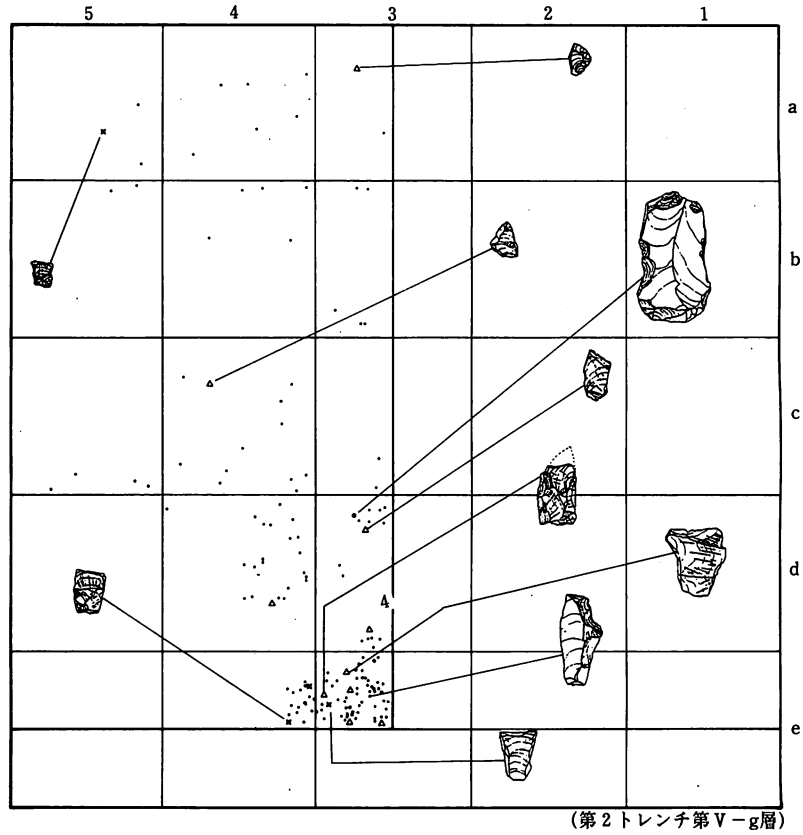
第57図　石飛東遺跡平面分布図（第2トレンチ第Ⅴe・Ⅴf層）

＜第Ⅴ—g層＞

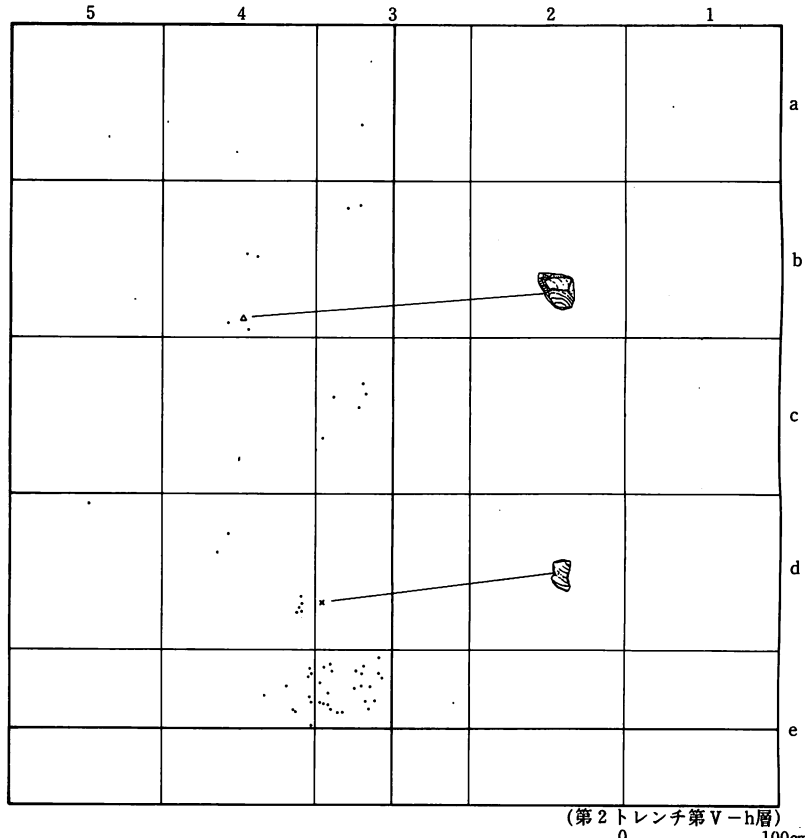
d・e—3・4グリッドに著しい集中分布があり、集中分布地点以外は石器類の出土数が少なくなっている。集中分布地点でナイフ形石器8点、台形石器7点がある。尚、集中分布地点を巡るかの様に礫石が見れるが、同じ石質でもあり直下の自然礫層との分離が困難であった。

＜第Ⅴ—h層＞

全体的に第Ⅵ層の凝灰岩の礫層が姿を見せ、石器類の出土はほとんどなくなっているが、d・e—3・4グリッドに最後の集中分布が捉えられる。ナイフ形石器・台形石器各1点が検出された。



（第2トレンチ第Ⅴ－g層）



△ナイフ形石器
×台形石器
□石　核
・剥　片

（第2トレンチ第Ⅴ－h層）

0　100cm

第58図　石飛東遺跡平面分布図（第2トレンチ第Ⅴg・Ⅴh層）

《第３トレンチ》

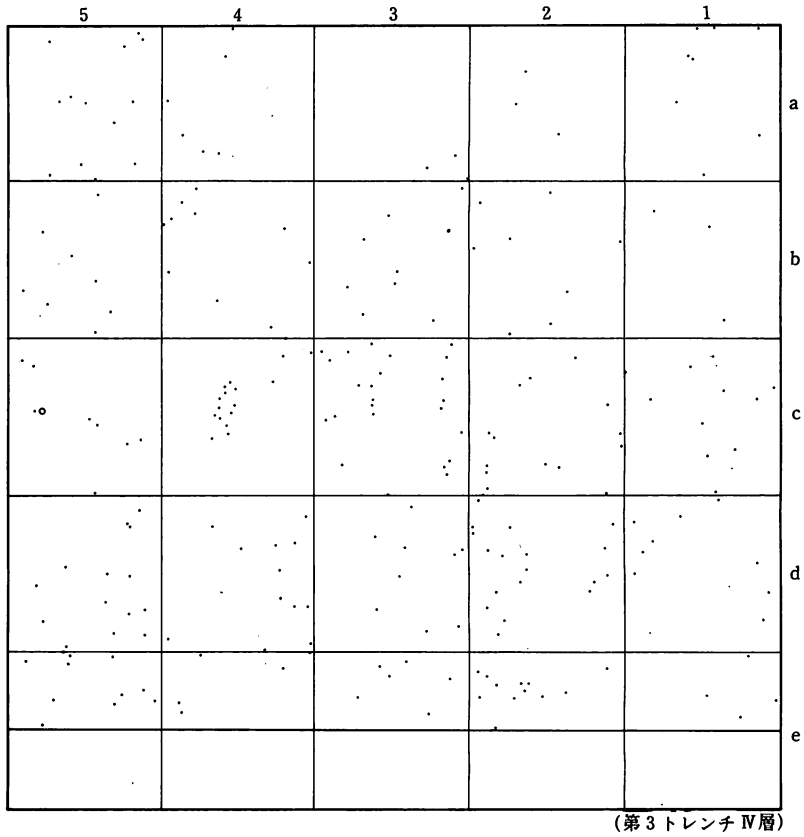
＜第Ⅳ層＞

第３トレンチの南側は整地作業によって約１m近くが削平され、低い地点へ客土されている。

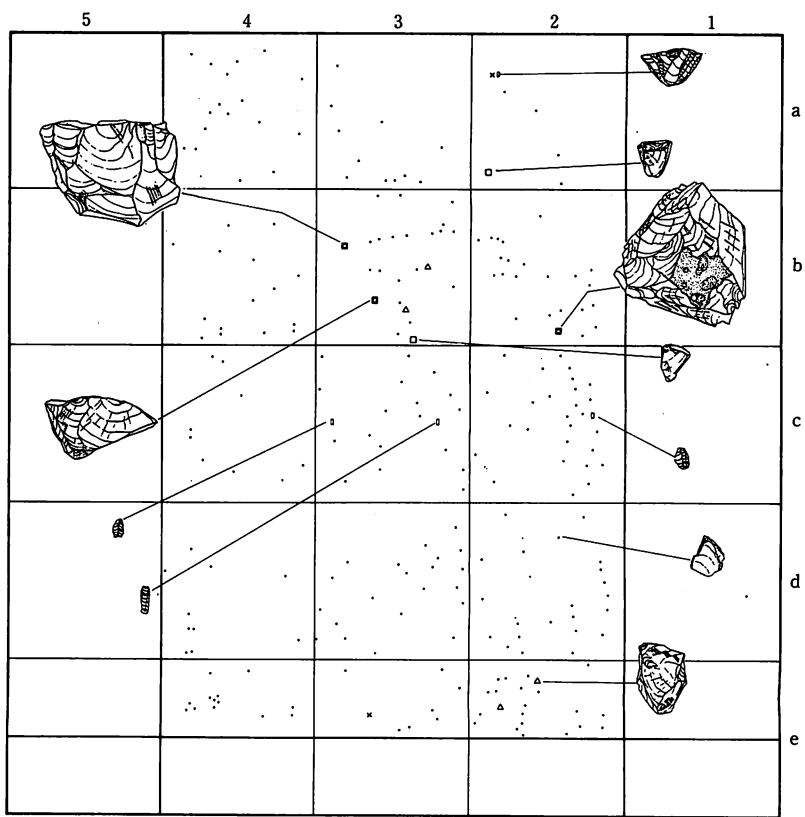
第３トレンチでは、第Ⅳ層以下は削平を受けずに残存している事が判明した。第Ⅳ—a・b層を一括したが、縄文土器片は少なく、剥片・砕片が多く散在している。

＜第Ⅴ—a層＞

第Ⅴ層は中央部の６×９m＝54m²を掘り下げて調査を行った。第Ⅴ—a層では全体が遺物の集中分布地点と判断され、特にb・c—2・3グリッドを中心に細石核・細石刃が集中している。



（第３トレンチⅣ層）



（第３トレンチ第Ⅴ—a層）

○土器片
△ナイフ形石器
×台形石器
□細石刃
▯細石刃
□石　核
・剥　片

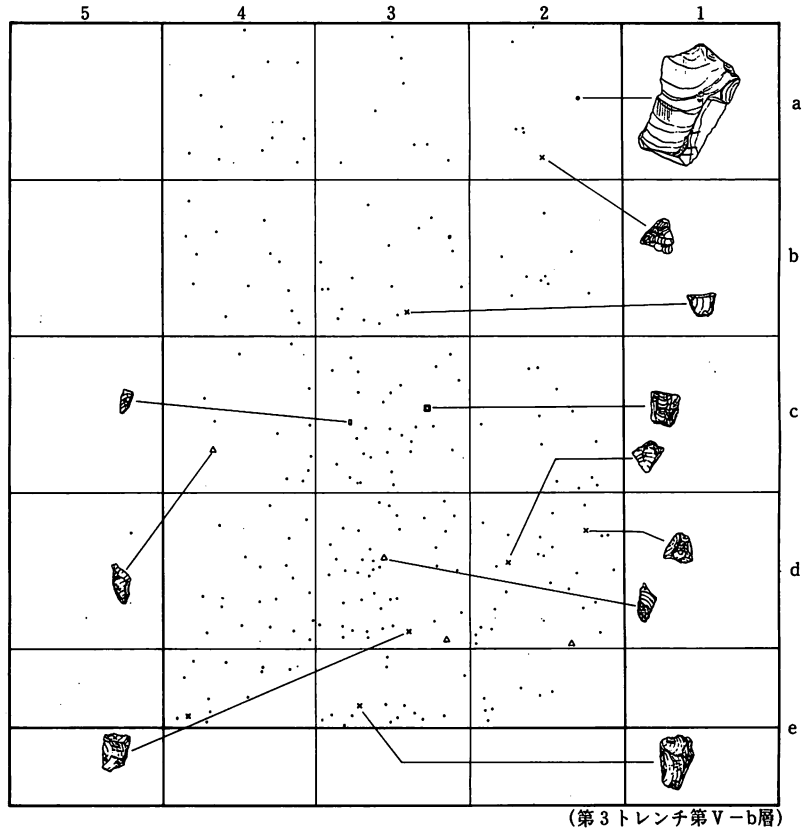
第59図　石飛東遺跡平面分布図（第３トレンチ第Ⅳ・Ⅴa層）　0　100cm

＜第Ⅴ—b層＞

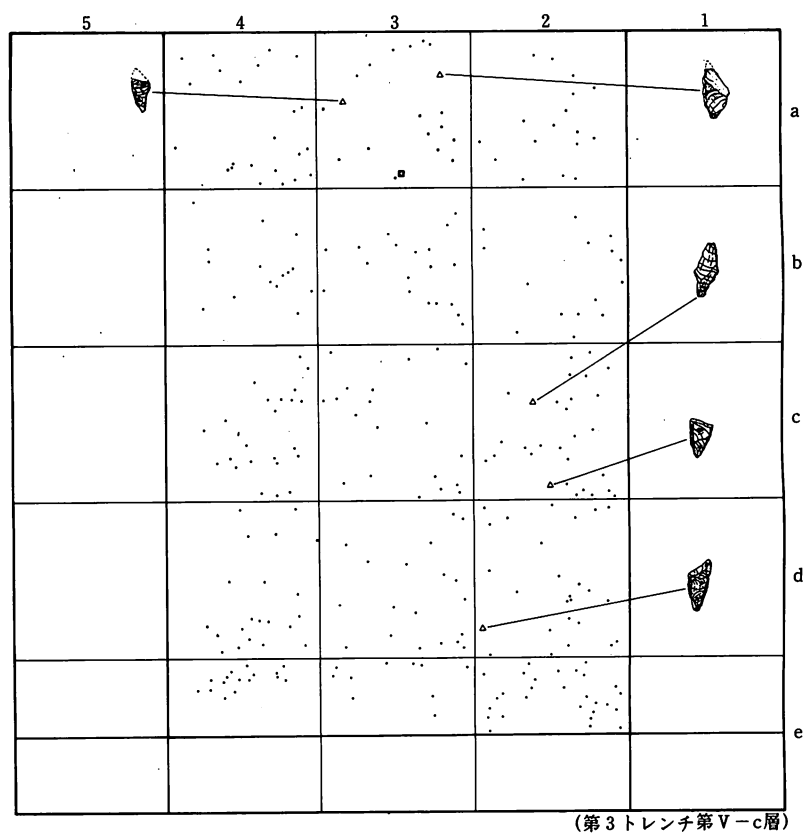
全体的に石器類が出土している。定形石器ではナイフ形石器と台形石器が多い。細石刃2点が出土しているが細石核の出土はない。

＜第Ⅴ—c層＞

全体的に石器類が出土する傾向が続いている。ナイフ形石器5点が出土している。



(第3トレンチ第Ⅴ—b層)



(第3トレンチ第Ⅴ—c層)

△ナイフ形石器
▮細石刃
×台形石器
□石　核
・剥　片
●スクレーパー

0　100cm

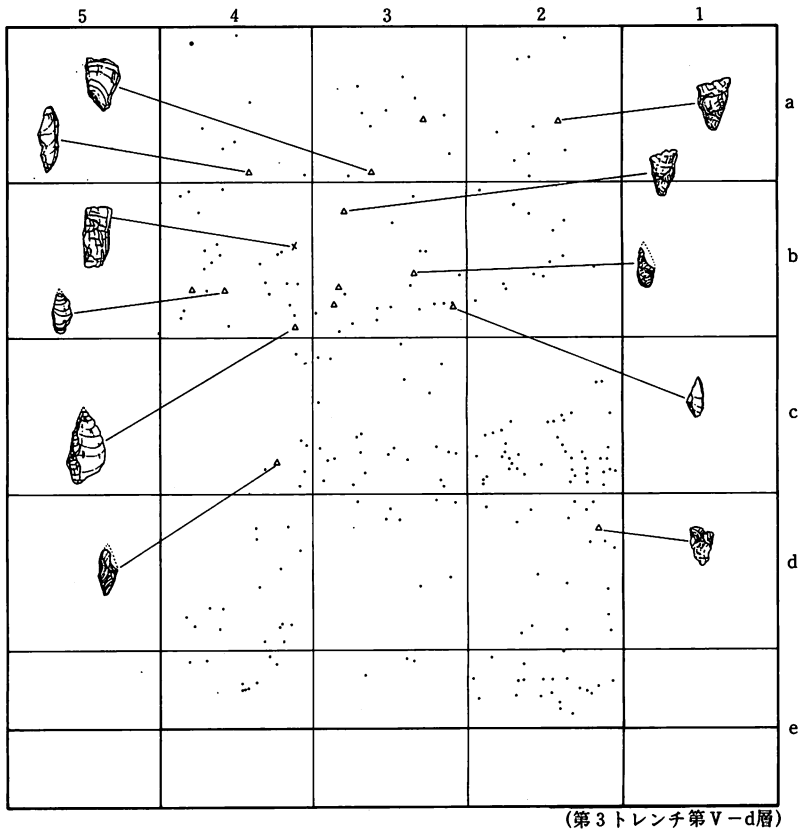
第60図　石飛東遺跡平面分布図(第3トレンチ第Ⅴb・Ⅴc層)

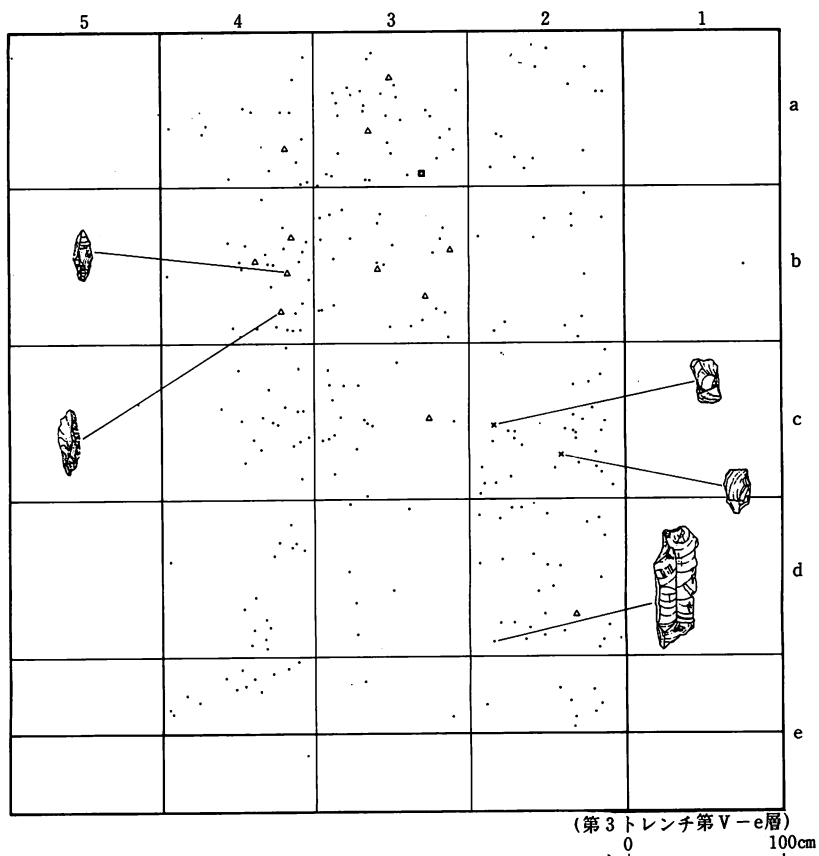
＜第Ⅴ—d層＞

全体的に石器類が出土しており、集中分布はさらに細かいブロックに分けられそうである。特にナイフ形石器の出土が多く10点を数える。

＜第Ⅴ—e層＞

石器類は濃密な分布状態を示している。定形石器もa・b—3・4グリッドを中心に集中分布しており、ナイフ形石器が殆どである。大小の凝灰岩の礫石が姿を見せている。





△ナイフ形石器
×台形石器
□石　核
・剥　片
●スクレーパー

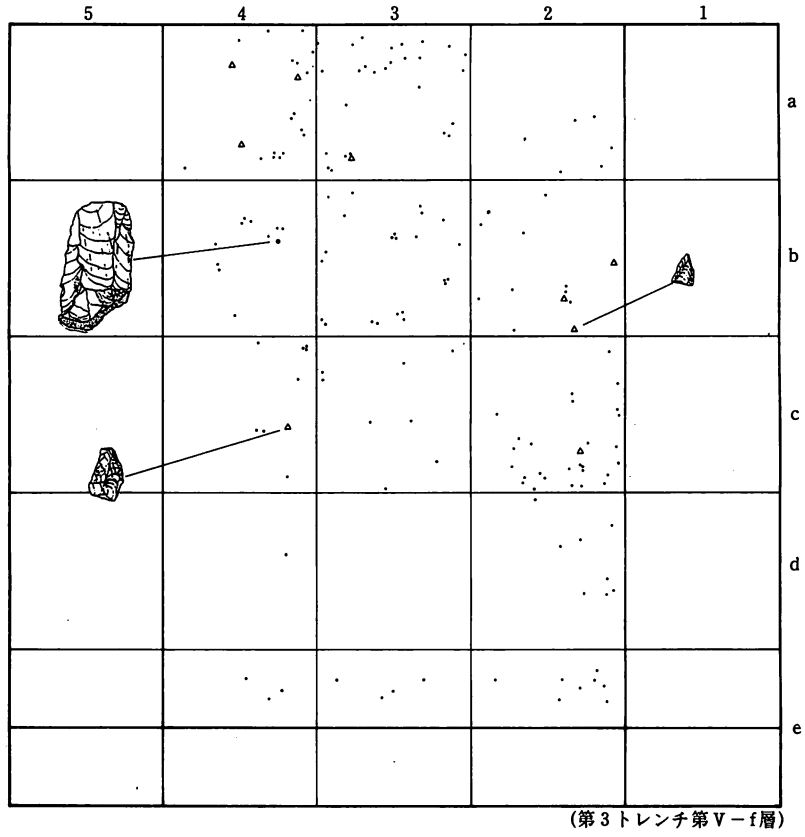
第61図　石飛東遺跡平面分布図(第3トレンチ第Ⅴd・Ⅴe層)

＜第Ⅴ—f層＞

石器類の出土量が少なくなる。しかし、剥片・砕片の出土数に比べて定形石器の出土量は多く９点あり、ナイフ形石器が８点で台形石器１点である。

＜第Ⅴ—g層＞

第Ⅵ層の凝灰岩の礫層に潜り込む様な状態で石器類が出土している。定形石器はb—4グリッドに台形石器１点だけ認められる。



第62図　石飛東遺跡平面分布図(第３トレンチ第Ⅴf・Ⅴg層)

4、出土遺物について

《第1トレンチ》

＜第Ⅴ—a層＞

A．ナイフ形石器（01～03）

（01･02）は小形の不定形剥片を素材として、粗雑なブランティングを施している。（03）は断口が三角形を呈する横長剥片を素材として、背には急角度のブランティングを施している。

B．三稜尖頭器（04）

（04）は三稜尖頭器として捉えられよう。先端を欠失するが、三面に粗い加工を施している。

C．縦長剥片（05）

断口は三角形を呈している。黒曜石の縦長剥片であり定形石器の素材として用意されたものであろう。

D．細石核（06）

黒曜石の細石核で厚みのある剥片を素材としたものと思われる。折断により生じた平坦面を細石刃の剥取打面としている。正面だけから細石刃をとりだしている。

＜第Ⅴ—b層＞

A．細石刃（07）

断口は三角形を呈し、頭部が残る。

＜第Ⅴ—c層＞

A．ナイフ形石器（08～12）

（08）は両側縁を折断加工し平坦面を形成している。（09）は小形の不定形剥片を素材としたもので、両側縁に綿密なブランティングを施している。左側縁には特徴的な抉りを施している。（10）は厚手の横長剥片が素材であり、切り出し状ナイフ形石器状にある。（11）も厚手の横長剥片を素材としている。右側縁に急角度の綿密なブランティングを施している。（12）は両側縁に折断を主調とした粗い加工を施している。

B．台形石器（13）

両側縁は折断を主調とした粗い加工を終えている。

C．三稜尖頭器（14）

良質の黒曜石を用いた三稜尖頭器である。裏面から綿密な二面加工を施し、裏面基部にも平坦剥離を施し、三面加工をなしている。

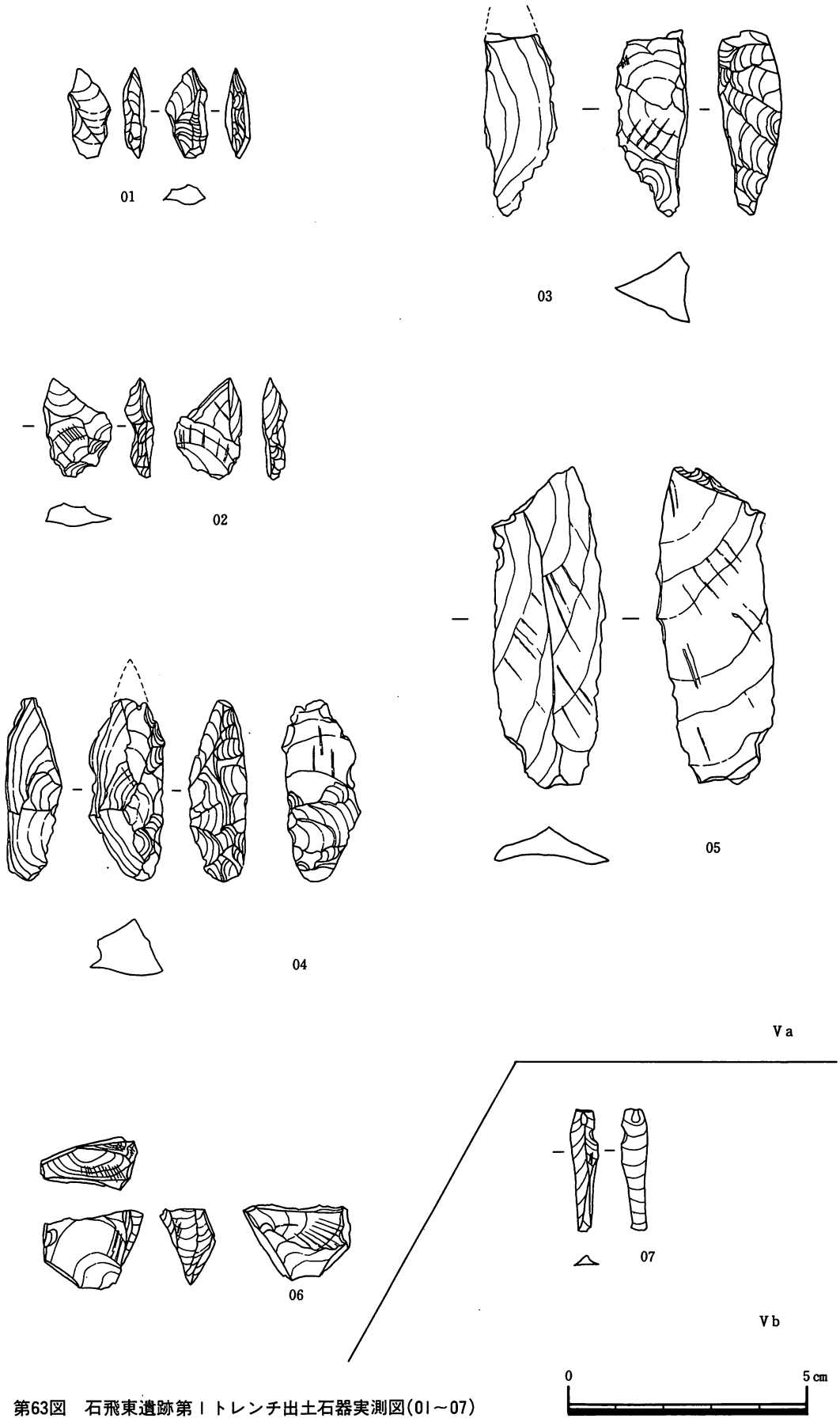
D．スクレーパー（15）

断口が三角形を呈する剥片を素材としている。表面には自然表皮も残るが、右側縁に表面から刃部加工を施している。

＜第Ⅴ—d層＞

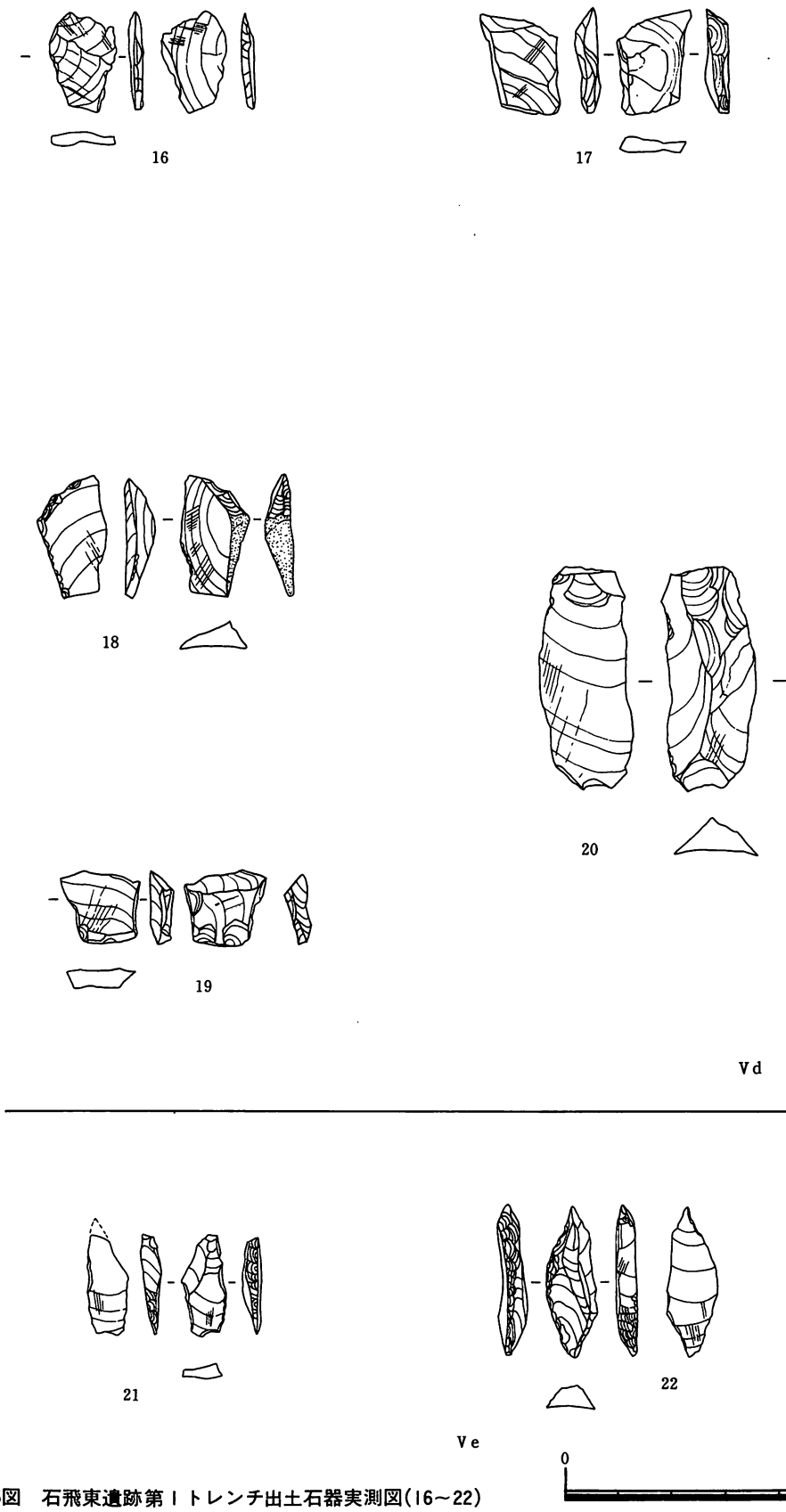
A．ナイフ形石器（16～18）

（16）は薄い横長剥片を素材としている。右側縁は折断により平坦面を形成し、左側縁に粗いブランティングを施している。（17）は打面を残し、不定形剥片を素材としている。右側縁は平坦な打面のままであり、左側縁は折断を主とした粗いブランティングである。下縁も折断により平坦化している。（18）は良質の黒曜石で、不定形剥片が素材である。背に部分的な粗いブランティングを施している。



第63図　石飛東遺跡第Ⅰトレンチ出土石器実測図(01～07)

第64図　石飛東遺跡第Ⅰトレンチ出土石器実測図(08～15)



第65図　石飛東遺跡第Ⅰトレンチ出土石器実測図(16～22)

B．台形石器（19）

不定形剝片が素材であり、両側は折断により平坦面を形成している。

C．縦長剝片（20）

自然平坦打面を残す小形の縦長剝片である。石質はチャートであり、定形石器の素材として用意されたものであろう。

＜第Ⅴ－e層＞

A．ナイフ形石器（21・22）

（21）は先端を欠失している。両側縁に裏面から細かい綿密なブランティングを行っている。石質はチャートである。(22)は良質の黒曜石が素材である。裏面から二側縁に綿密なブランティングを施している。基部を形成し、先端の右側縁にも細かな調整剝離を行って尖らしている。

B．石　核（23）

チャートの石核である。表皮を剝ぎ、二カ所に平坦打面を形成し、数度の剝片剝離を行っている。剝離された痕跡では、幅広の不定形剝片がとりだされている。

＜第Ⅴ－f層＞

石　核（24）

良質のチャートの石核である。剝取りによって生じた平坦面から剝離をくり返しており、転移打面である。不定形剝片の剝取りが多い。

＜第Ⅴ－h層＞

A．ナイフ形石器（25）

黒曜石の不定形剝片を素材としている。先端を欠失するが、二側縁にブランティングを施し整形している。

B．台形石器（26）

不定形剝片を素材としており、二側縁に折断を主とした粗い加工を施している。

《第2トレンチ》

＜第Ⅴ－a層＞

A．ナイフ形石器（27～29）

（27）はチャートの縦長剝片を素材としている。裏面から両側縁に急角度の綿密なブランティングを施している。(28)は厚みのある黒曜石の縦長剝片が素材である。右側縁は主要剝離前に生じている平坦面で、左側縁には綿密なブランティングを施している。また、裏面基部にはバルブカットをなす平坦剝離を行っている。(29)も厚味のある黒曜石の縦長剝片が素材である。断口は三角形を呈している。両側縁は粗いブランティングで仕上げている。

B．台形石器（30）

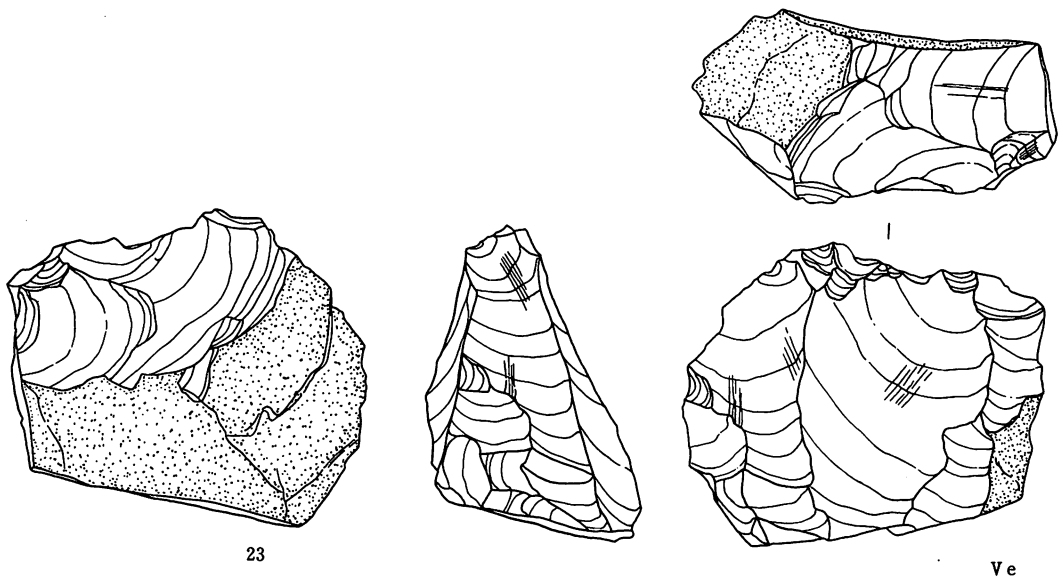
断口が三角形を呈する黒曜石の剝片が素材である。両側縁は折断を主とした加工で平坦面を形成している。下縁への加工は施していない。

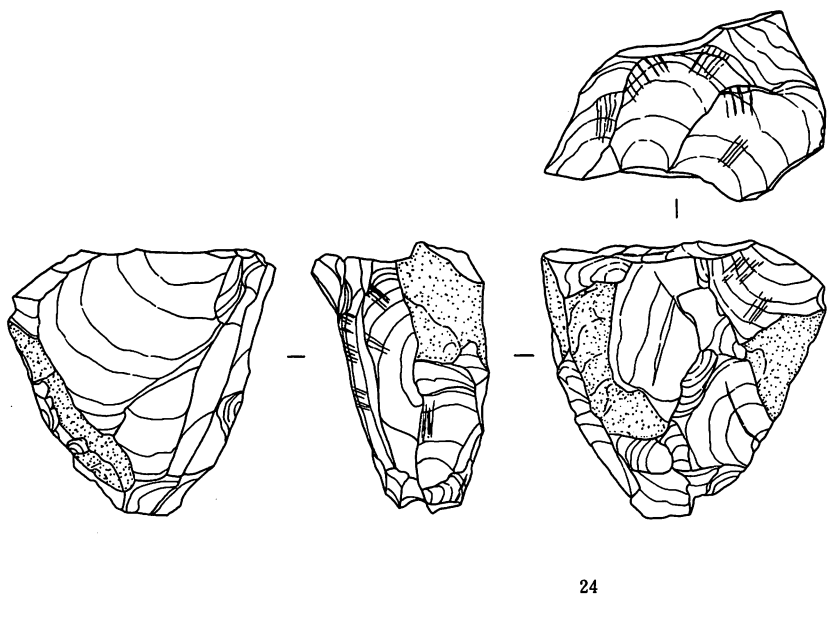
＜第Ⅴ－b層＞

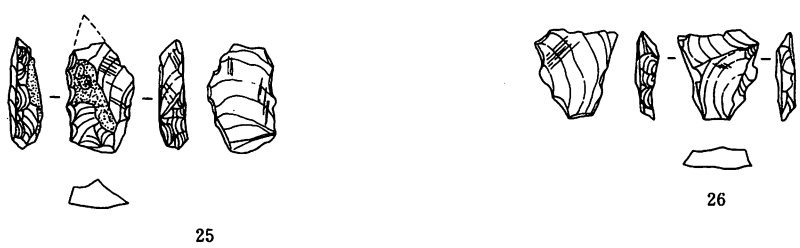
A.細石核（31・32）

（31）は黒曜石が素材である。粗い側面調整があり、細石刃剝取打面は調整剝離で形成している。細石刃の剝取りは正面だけである。(32)は良質の黒曜石が素材で、右側面は素材の主要剝離面である。細石刃剝取面は調整剝離によって平坦面を形成している。

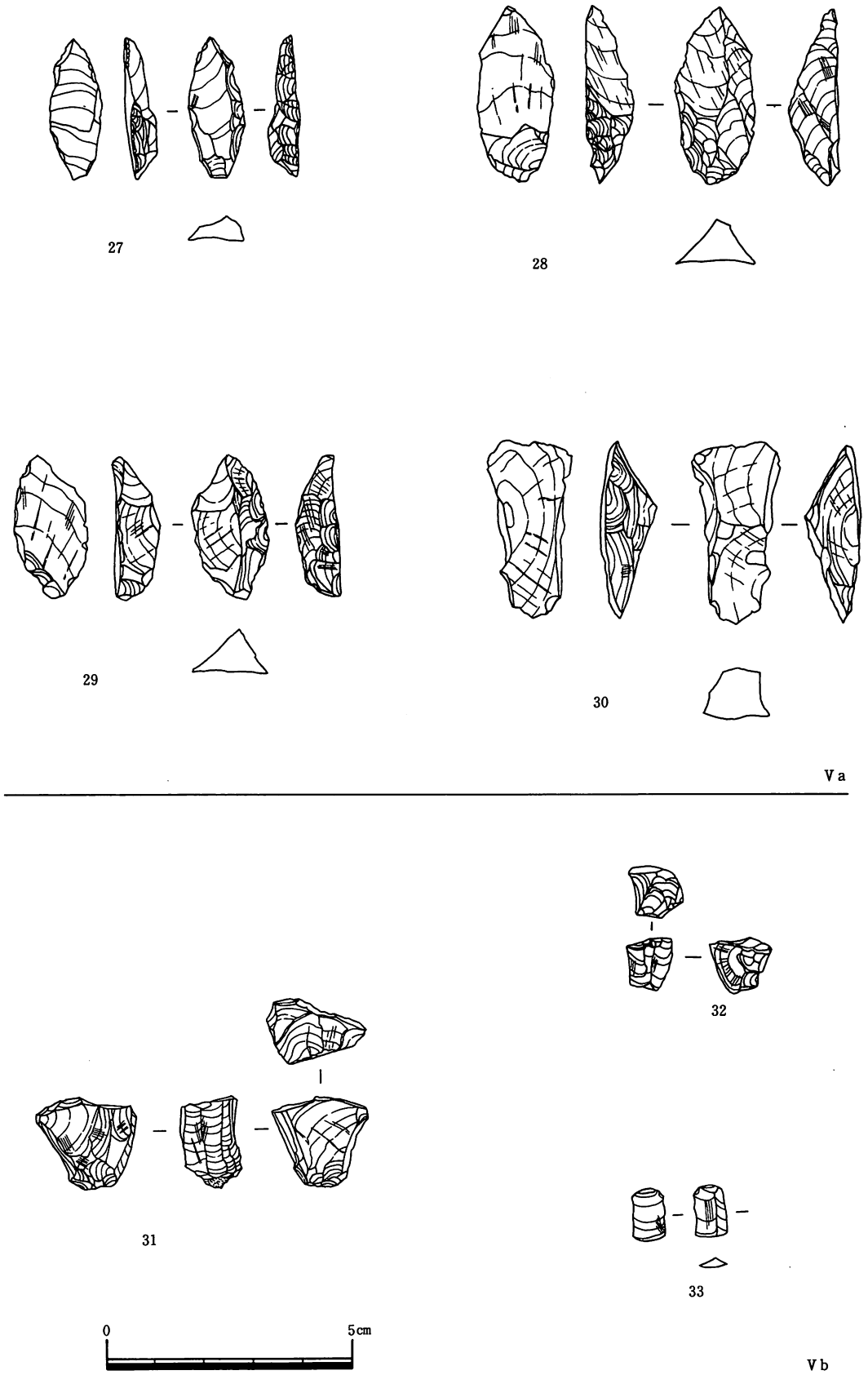
B．細石刃（33）







第66図　石飛東遺跡第Ⅰトレンチ出土石器実測図(23～26)



第67図　石飛東遺跡第２トレンチ出土石器実測図(27～33)

良質の黒曜石で頭部片である。

C．ナイフ形石器（34～39）

（34）は先端を欠失している。両側縁は裏面から急角度の綿密なブランティングを施している。（35）も先端を欠失している。両側縁と下縁に細かなブランティングが認められる。（36）は先端を鋭く尖らしている。二側縁にブランティングがある。右側縁は主要剥離前の平坦面を主調とするが、先端及び下縁近くに細かなブランティングが認められる。（37･38）はともに黒曜石の小形の不定形剥片が素材である。両側縁に折断を主とした粗い調整剥離が行なわれている。（39）は表面に自然面を残し、厚い剥片を素材としている。右側縁は一度、左側縁は二度の折断加工を主として平坦面を形成している。斜刃で鋭い刃部を有し、ナイフ形石器として捉えておきたい。

D．台形石器（40～45）

（40～42）は黒曜石の不定形剥片を素材としている。両側縁に折断加工を主とした調整剥離を行っているが、（41）の両側縁や（42）の右側縁は綿密に行っている。下縁に対する二次加工は行っていない。（43･44）は非常に小形である。双方とも粗い側縁加工であるが、（43）は下縁が尖り三角形の形状にある。（45）は剥片を折断しており、両側を平坦面にしている。下縁への加工は見られない。類台形石器としておきたい。

E．三稜尖頭器素材（46）

断口が台形を呈する黒曜石の剥片である。三稜尖頭器の素材であろう。

F．石　核（47）

上面と下面は大きな二度の剥離によって平坦面を形成。両設打面とし、双方から数多くの剥離を行っている。また、剥離で生じた平坦面を打面としての転移剥離も行なっている。

＜第Ⅴ－c層＞

A．剥　片（48）

黒曜石の大型の剥片である。表面は大きなポジティブ面で連続して剥取されたものと判断される。大型の石器をつくる素材である。

B．台形石器（49・50）

（49）は黒曜石の不定形剥片が素材である。左側縁は主要剥離前に生じている平坦面であり、右側縁は折断加工を主調として、細かなブランティングを加えている。（50･51）は剥片を折断し、両側縁を平坦化しており、（51）の右側縁には細かなブランティングが見られる。

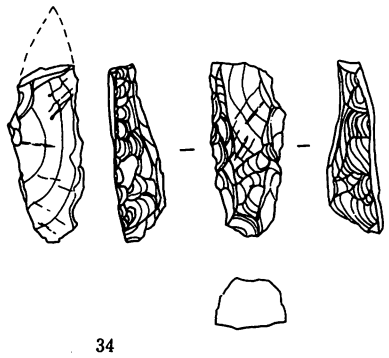
＜第Ⅴ－d層＞

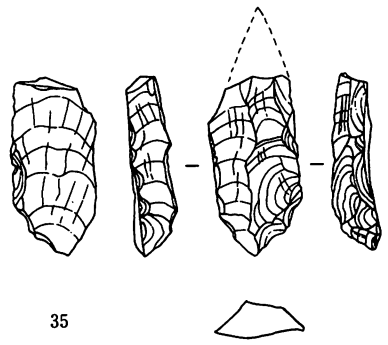
A．ナイフ形石器（52・53）

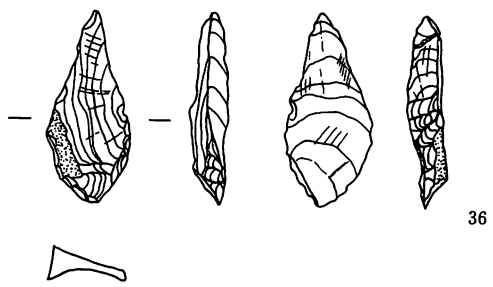
（52）は小形の端正なナイフ形石器である。チャートの横長剥片を素材としており、両側縁に裏面から綿密なブランティングを施している。（53）は黒曜石の縦長剥片を素材としている。両側縁にブランティングを行ない、裏面基部には平坦剥離がある。先端は欠失。

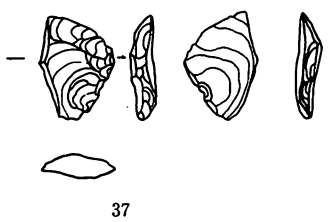
B．大型剥片（54）

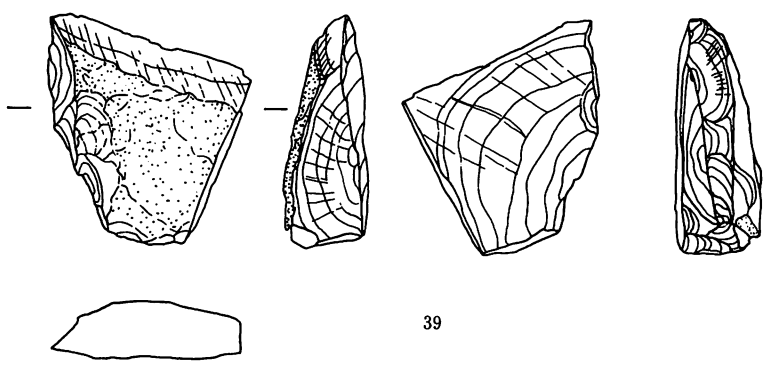
黒曜石の大型の石核から連続的に剥取された剥片である。主要剥離打面は自然平坦面であり、大型石器の素材であろう。



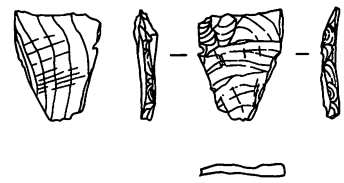




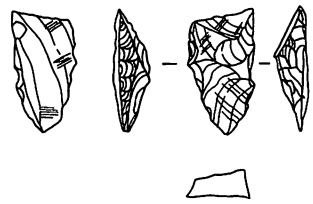




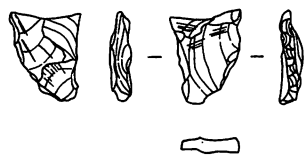
第68図　石飛東遺跡第２トレンチ出土石器実測図(34～39)



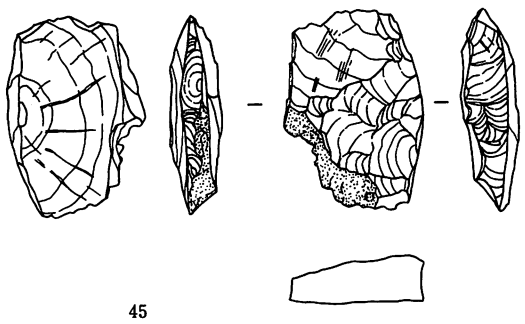
40



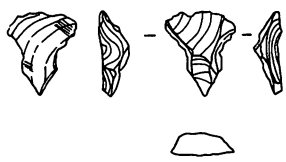
41



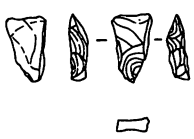
42



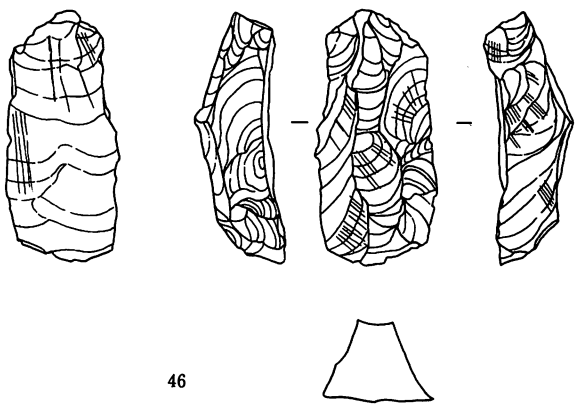
45



43



44

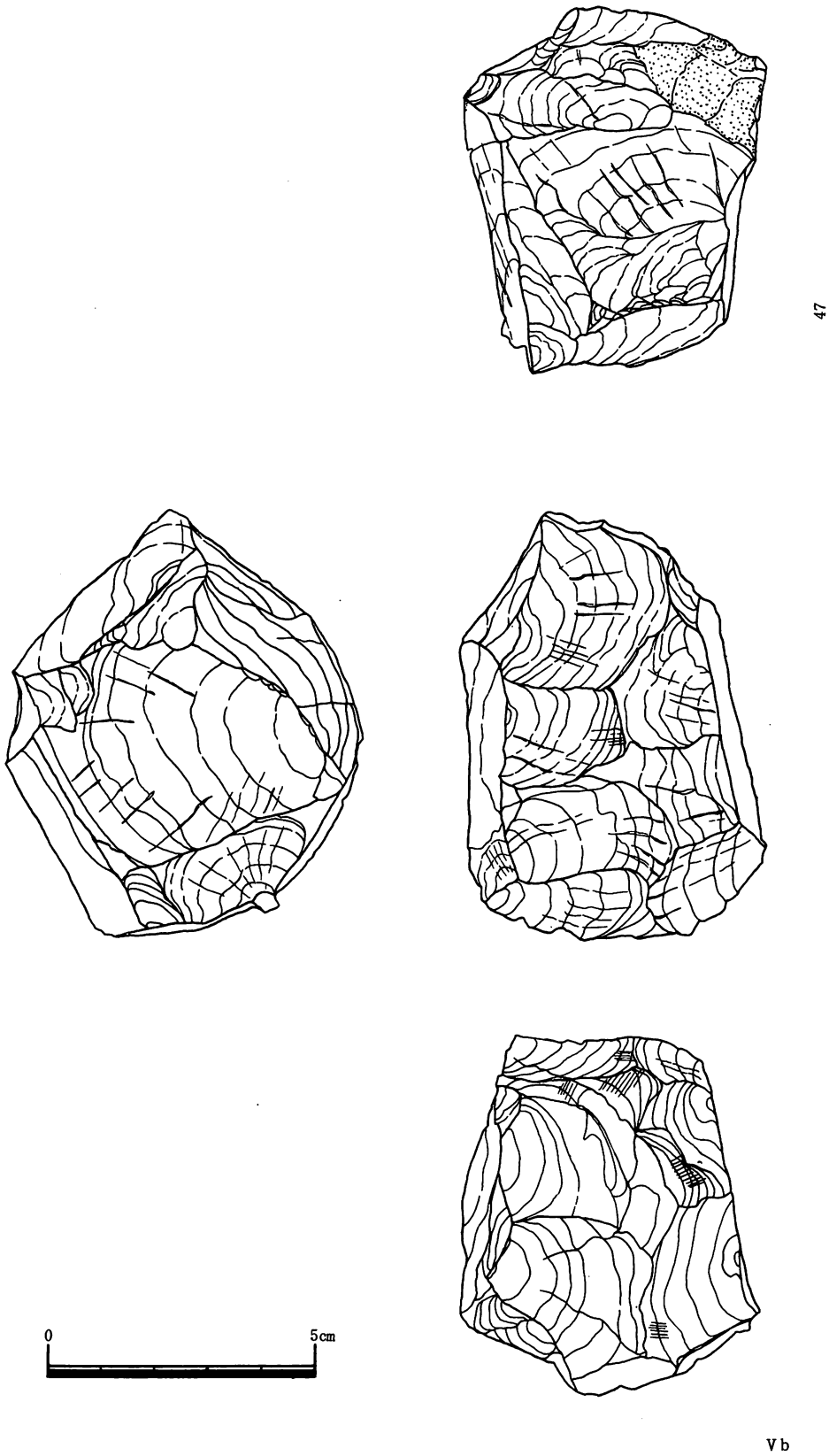


46

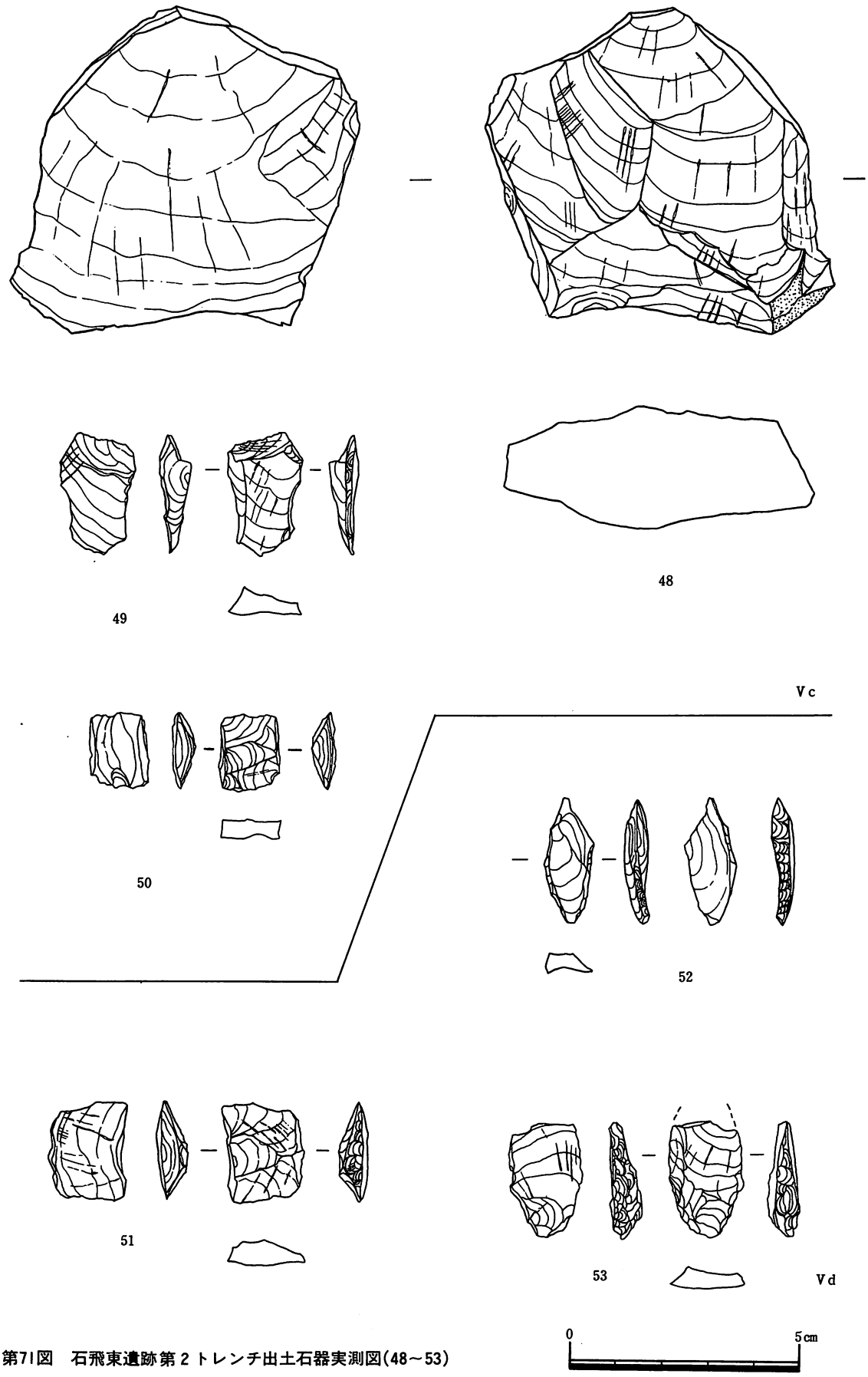
Vb

0 5cm

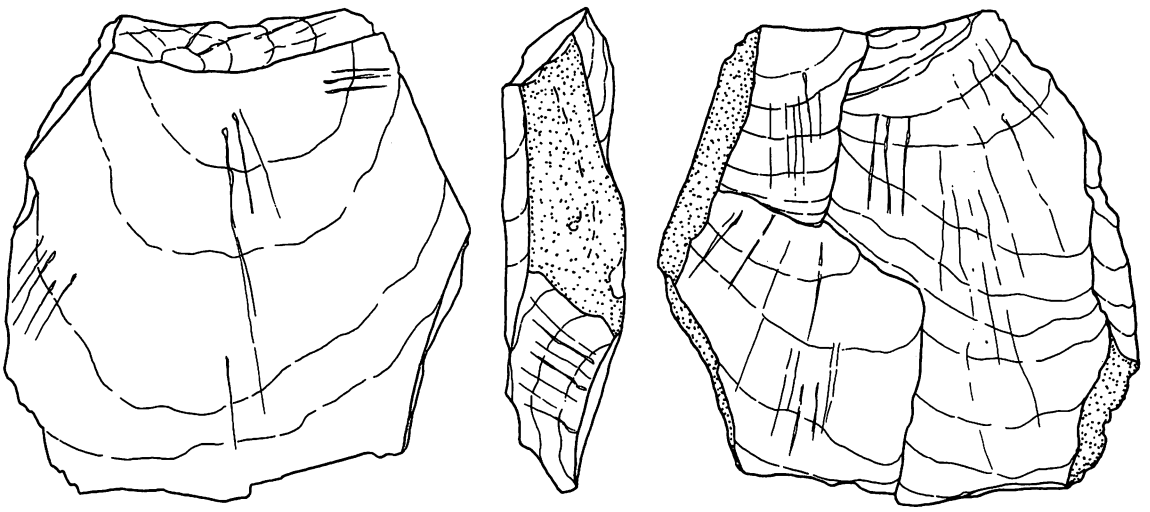
第69図　石飛東遺跡第２トレンチ出土石器実測図(40～46)



第70図　石飛東遺跡第２トレンチ出土石器実測図(47)

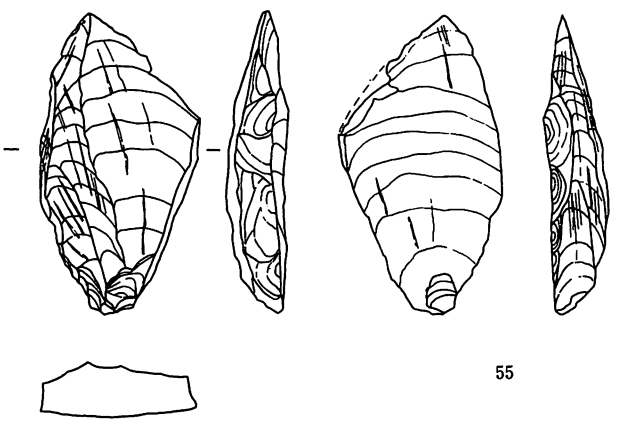


第71図　石飛東遺跡第２トレンチ出土石器実測図(48～53)

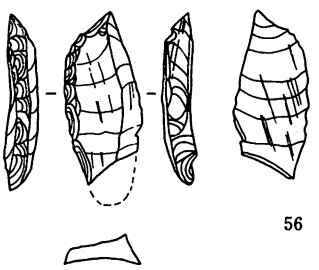


54

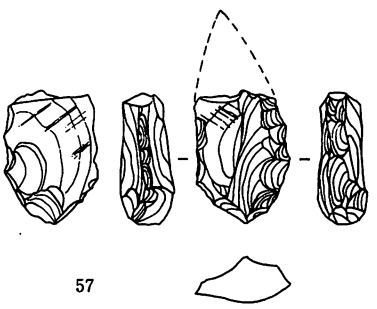
Vd



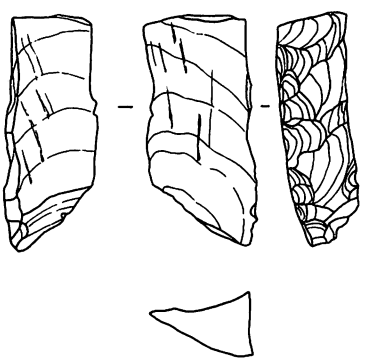
55



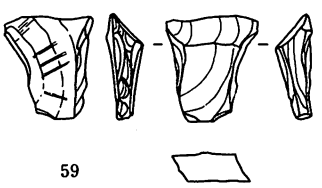
56



57



58



59

Ve

0 5cm

第72図　石飛東遺跡第２トレンチ出土石器実測図(54～59)

<第Ⅴ—e層>

A．ナイフ形石器（55～58）

（55）は黒曜石の不定形剥片が素材である。右側縁は主要剥離前の平坦面であり、右側縁にブランティングが見られる。（56）は黒曜石の縦長剥片を素材としている。左側縁に綿密なブランティングを行っている。下部位を欠失し、右側縁の二次加工は明らかでない。（57）は黒曜石の不定形剥片が素材である。両側縁に裏面から粗いブランティングを施している。（58）は断口が三角形を呈する縦長剥片が素材である。先端と下部を欠失するが左側縁にブランティングが見られる。

b．台形石器（59）

黒曜石の不定形剥片が素材である。両側縁は折断加工を主調として粗いブランティングを加えている。下縁は粗い折断加工である。

<第Ⅴ—f層>

A．ナイフ形石器（60～67）

（60）は小形の見事なナイフ形石器である。やや厚味のあるチャートの縦長剥片を素材としている。裏面から両側縁に細かく綿密なブランティングを施しており、先端の尖りも鋭い。（61）もチャートを用いた小形のナイフ形石器である。裏面から両側縁にブランティングを施し、右側縁の抉りが特徴的である。先端は欠失している。（62）は黒曜石の縦長剥片を素材としている。裏面から両側縁にブランティングを施すが、右側縁は浅い剥離である。（63～67）は何れも黒曜石の不定形剥片を素材としている。側縁にブランティングが見られる。

B．台形石器（68）

厚味のある黒曜石の不定形剥片を素材としている。側縁は折断加工により平坦面を形成。

D．敲　石（69）

砂岩質の礫石であるが、上・下面が荒れており石器製作用具・敲石に使用されたものであろう。

<第Ⅴ—g層>

A．ナイフ形石器（70～72）

何れも黒曜石の剥片を用いている。（71・72）は折断加工により両側縁を形成。（72）には顕著なブランティングが見られる。

B．台形石器（73～77）

（73～77）は何れも黒曜石の剥片を素材としている。剥片の鋭い縁辺を刃部として、両側縁に折断加工を施し、平坦面を形成している。台形石器として捉えておきたい。

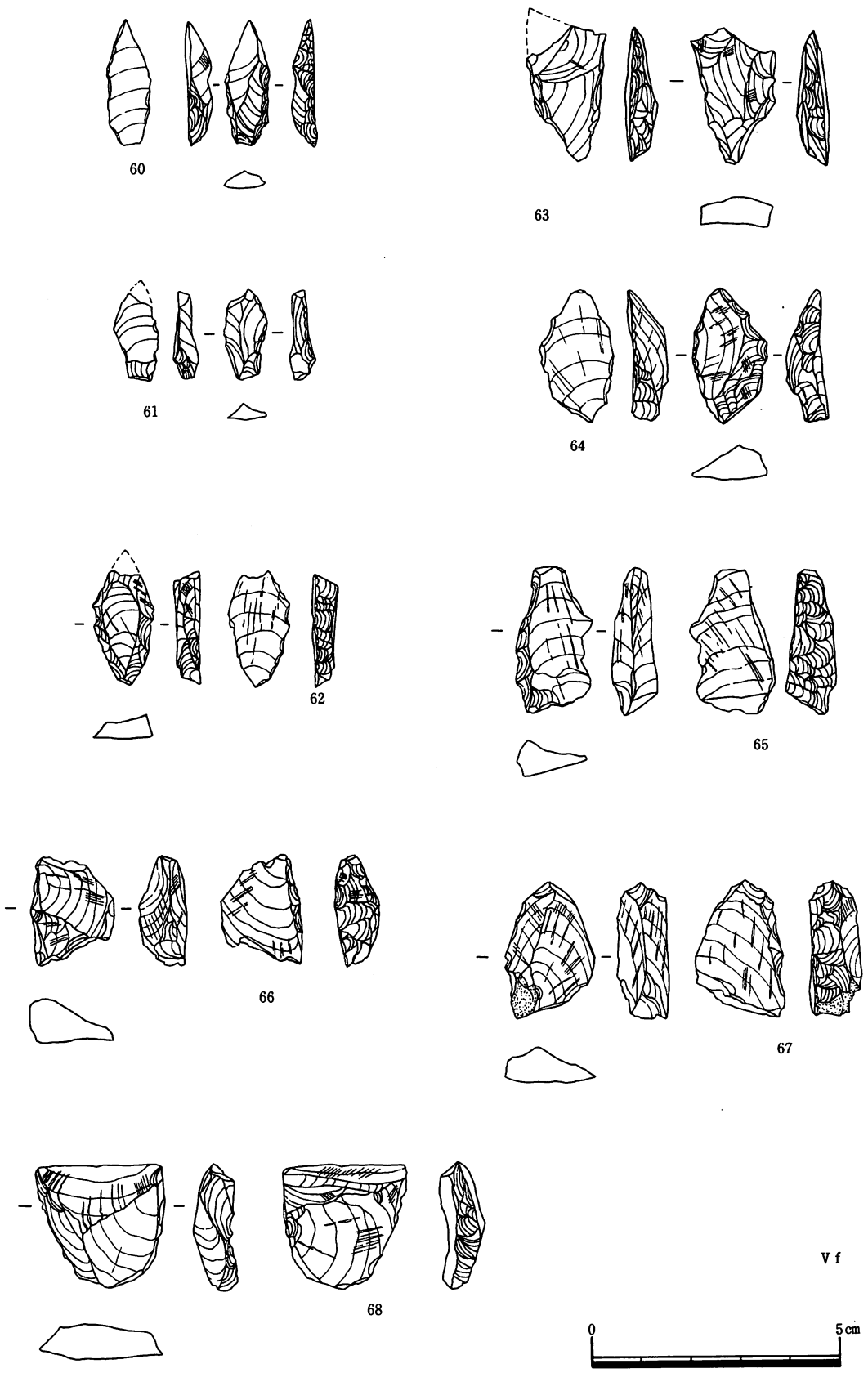
C．剥　片（78・79）

（78）は頁岩で、（79）はチャートの剥片である。（78）は軽い石質でスクレーパーとして捉えるべきかもしれない。

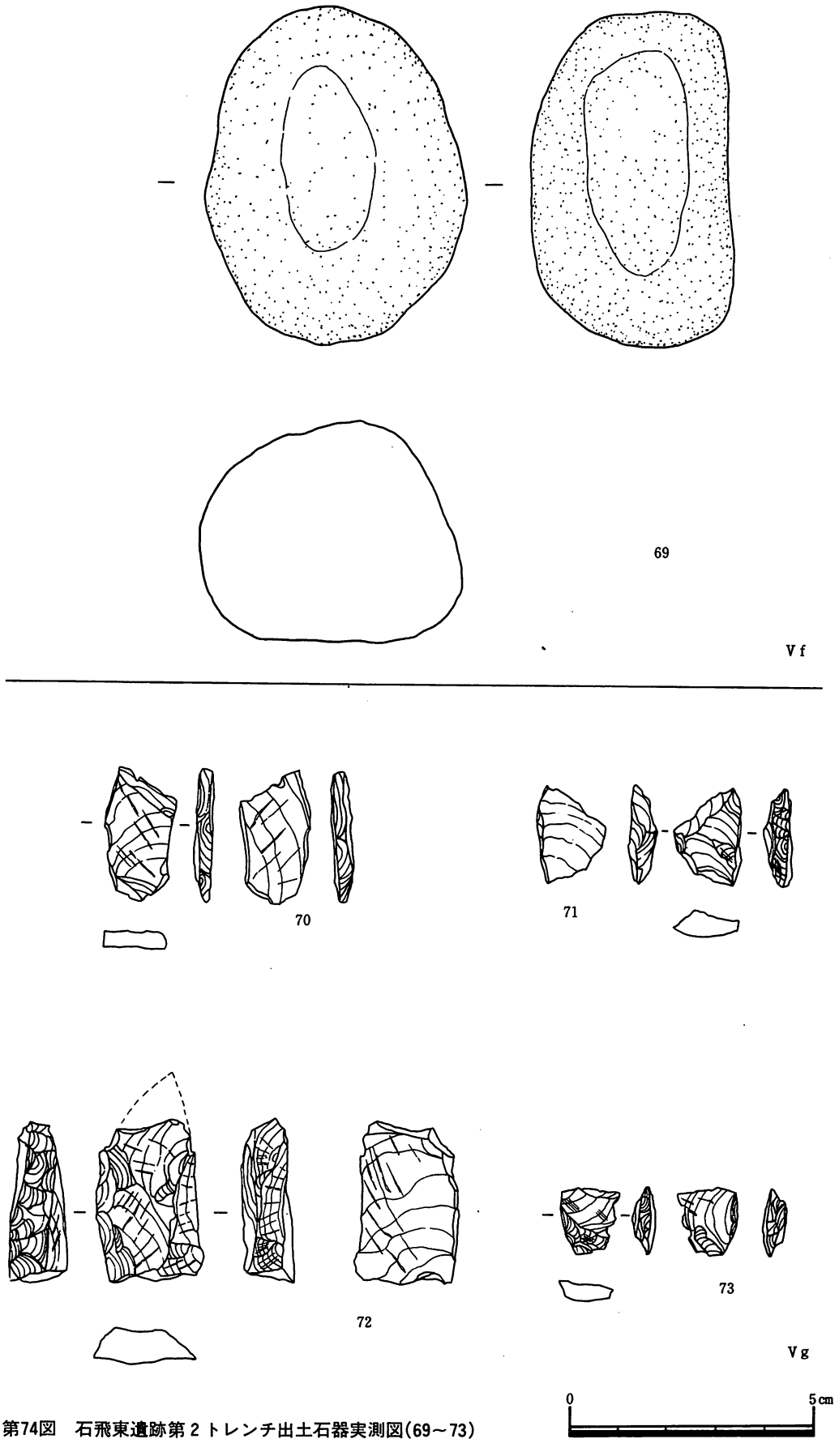
<第Ⅴ—h層>

A．台形石器（80）

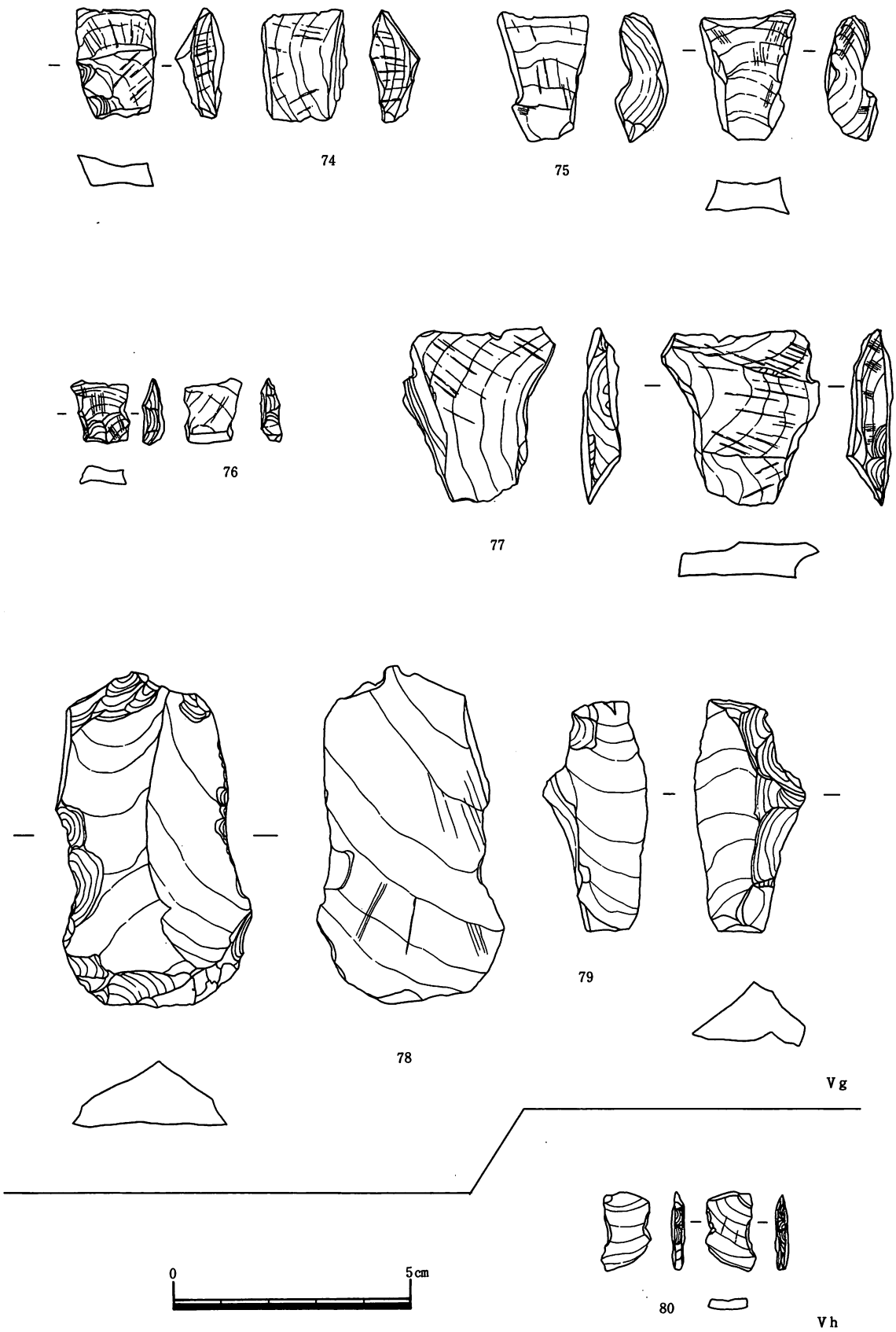
第Ⅴ—h層から定形石器1点が出土している。黒曜石の不定形剥片が素材であり、右側縁に細かく綿密なブランティングがある。左側縁と下縁は折断加工である。



第73図　石飛東遺跡第２トレンチ出土石器実測図(60～68)



第74図　石飛東遺跡第２トレンチ出土石器実測図(69～73)



第75図　石飛東遺跡第２トレンチ出土石器実測図(74～80)

《第3トレンチ》

＜第Ⅲ層＞

A．細石核（81）

良質の黒曜石の厚味のある剥片を素材としている。二面の細石刃剥取面がある。最初に打面を調整し、正面に対する細石刃の剥取りを行なう。次に正面を新たに調整し打面を準備し、その打面から上面への細石刃剥取を行っている。

＜第Ⅳ層＞

A．細石核（82）

良質の頁岩の剥片を素材としている。上面に調整打面を用意し、正面から細石刃を剥取っている。

＜第Ⅴ—a層＞

A．細石核（83～85）

（83）は良質のチャートで上・下面を平坦に剥離したのち、上面からの粗い剥離で全体を整形している。上面から数条の細石刃剥取を行っている。(84)はチャートの剥片が素材である。上面に打面を調整し、正面で細石刃剥取している。(85）も良質のチャートの剥片が素材である。

B．細石刃（86～88）

何れも良質の黒曜石で頭部片である。

C．石　核（89～91）

（89）は黒曜石の大型の石核である。表皮を剥ぎ、多数の平坦面を準備。この平坦面を打面として剥離を重ねている。(90)は良質の安山岩で大型の石核である。大型の剥片をとりその残核である。剥離によって生じた上面の平坦面を打面としているが、下面の打面形成は意識されていない。剥取り易い状況に応じて転移剥離が行なわれているが、不定形剥片の剥取痕跡が残る。(91)は黒曜石の石核である。上面から側面に対する剥離痕が見られる。小形の剥片をとりだすブランクとできよう。

D．ナイフ形石器（92）

（92）は黒曜石の不定形剥片を素材としている。右側縁は主要剥離前の平坦面であるが、左側縁及び、下縁に粗い剥離を施している。

＜第Ⅴ—b層＞

A．剥　片（93）

頁岩の大型の剥片である。定形石器の素材として充分であるが、両側縁に歯こぼれが見られこのままで使用されたのであろう。

B．細石核（94）

良質の黒曜石で上面に調整剥離打面を準備。　正面で細石刃を剥取している。

C．細石刃（95）

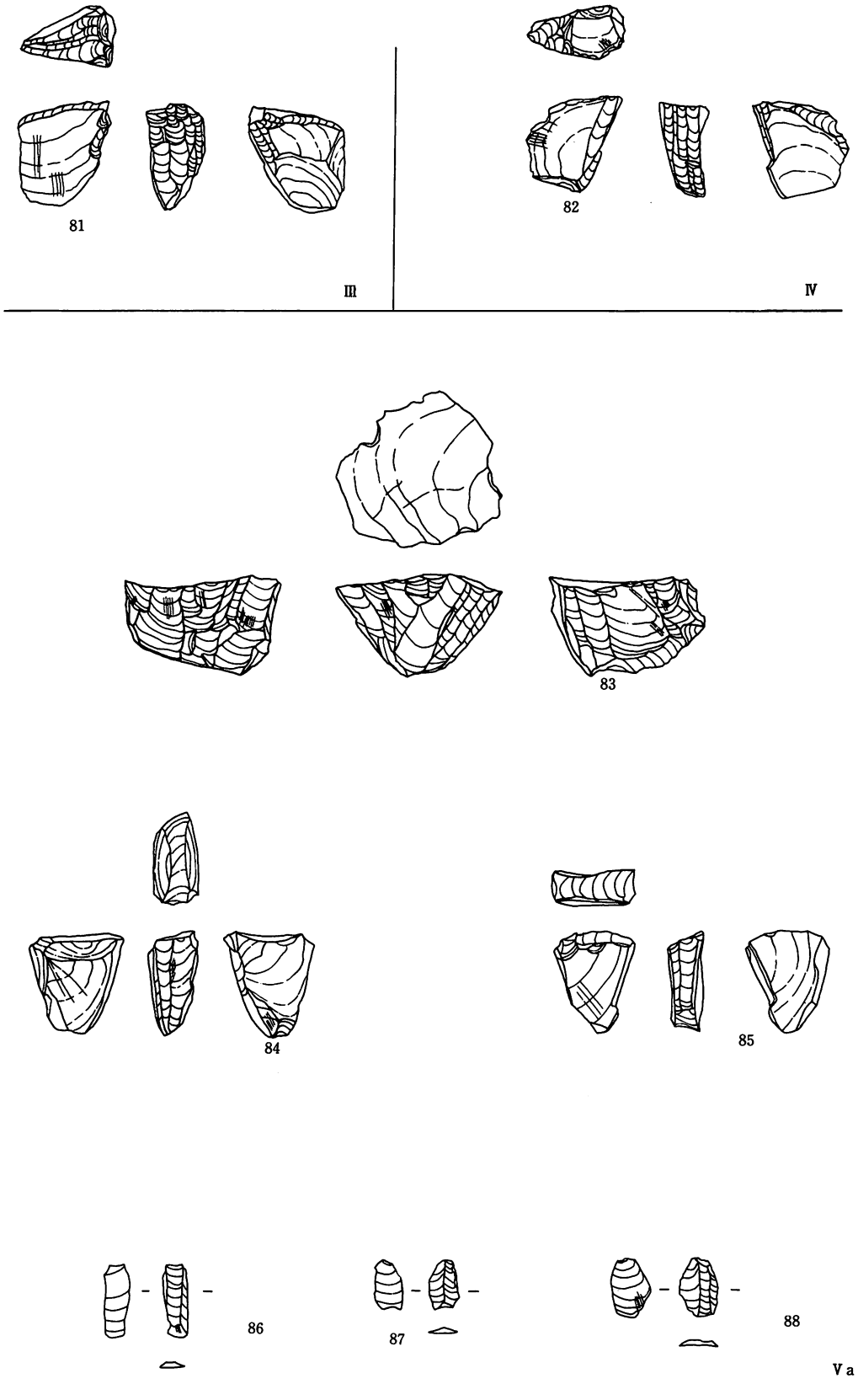
良質の黒曜石で下半部である。

D．ナイフ形石器（96・97）

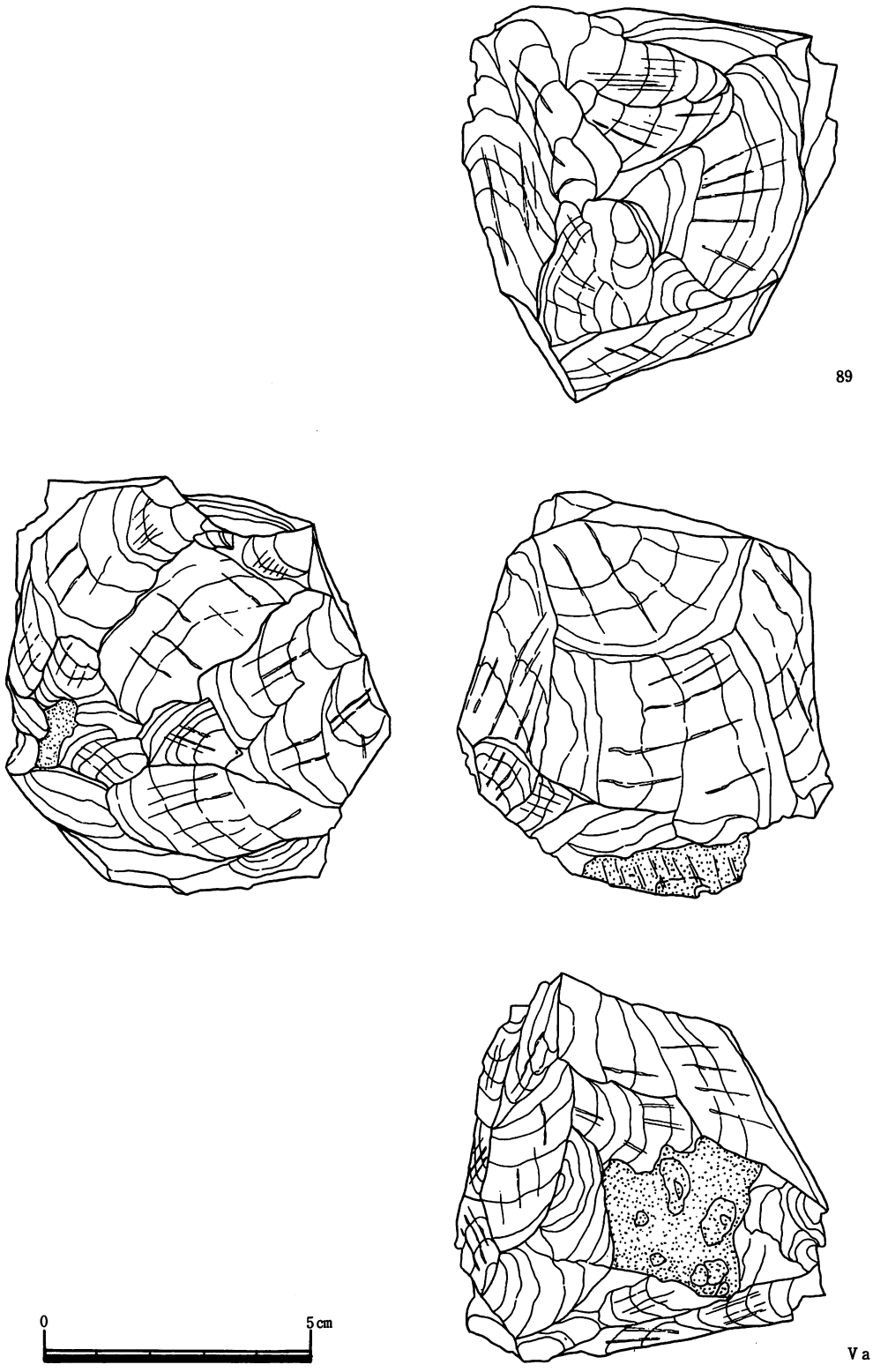
（96）は黒曜石の不定形剥片を素材としている。二側縁加工を施し、右側縁に抉りが見られる。(97）はチャートの不定形剥片が素材である。両側縁に急角度で綿密なブランティングがあり、基部表面には平坦剥離を加えている。

E．台形石器（98～103）

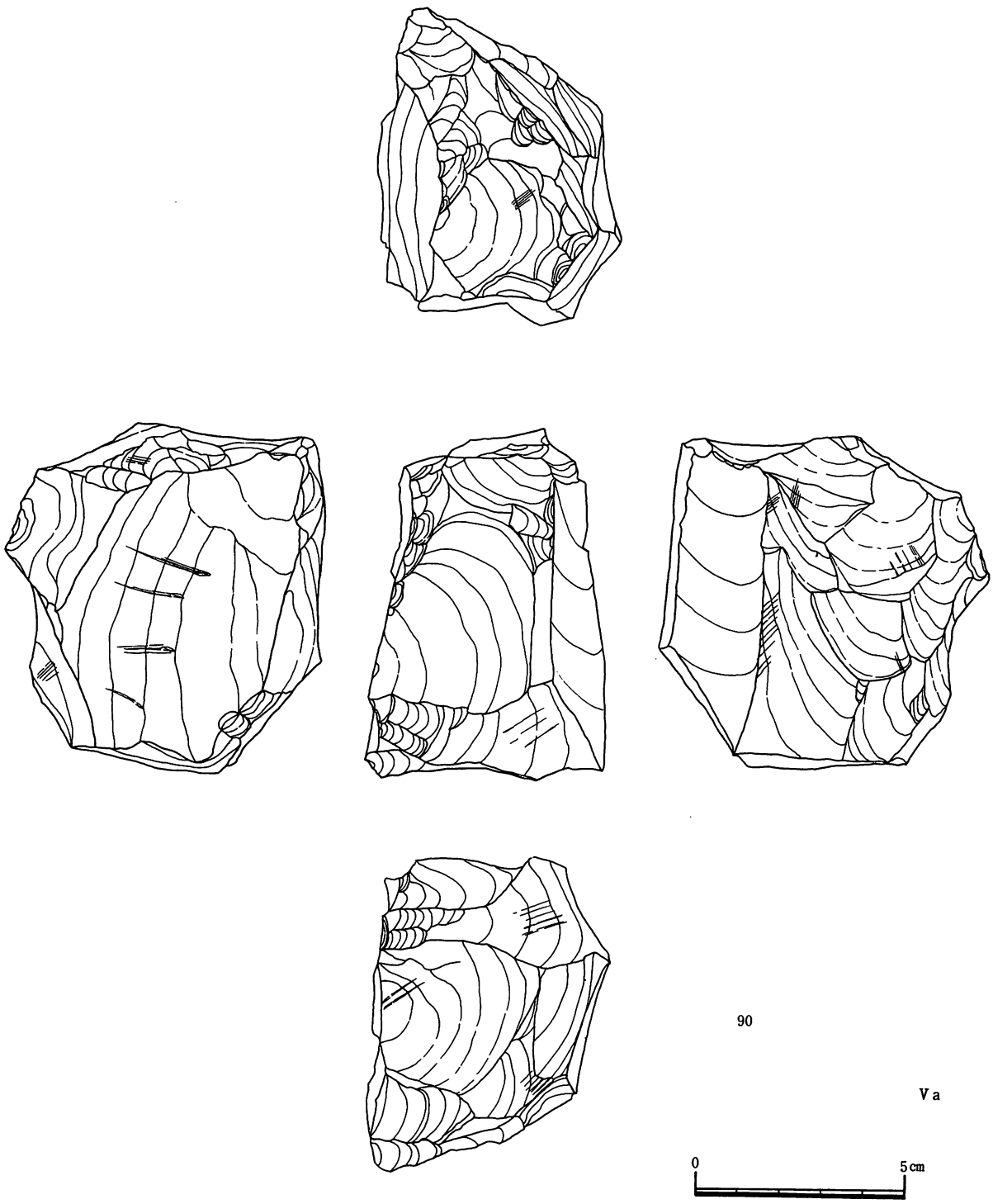
6点を台形石器とした。(98)は綿密なブランティングを両側縁から下縁に施しており、百花台型とできよう。



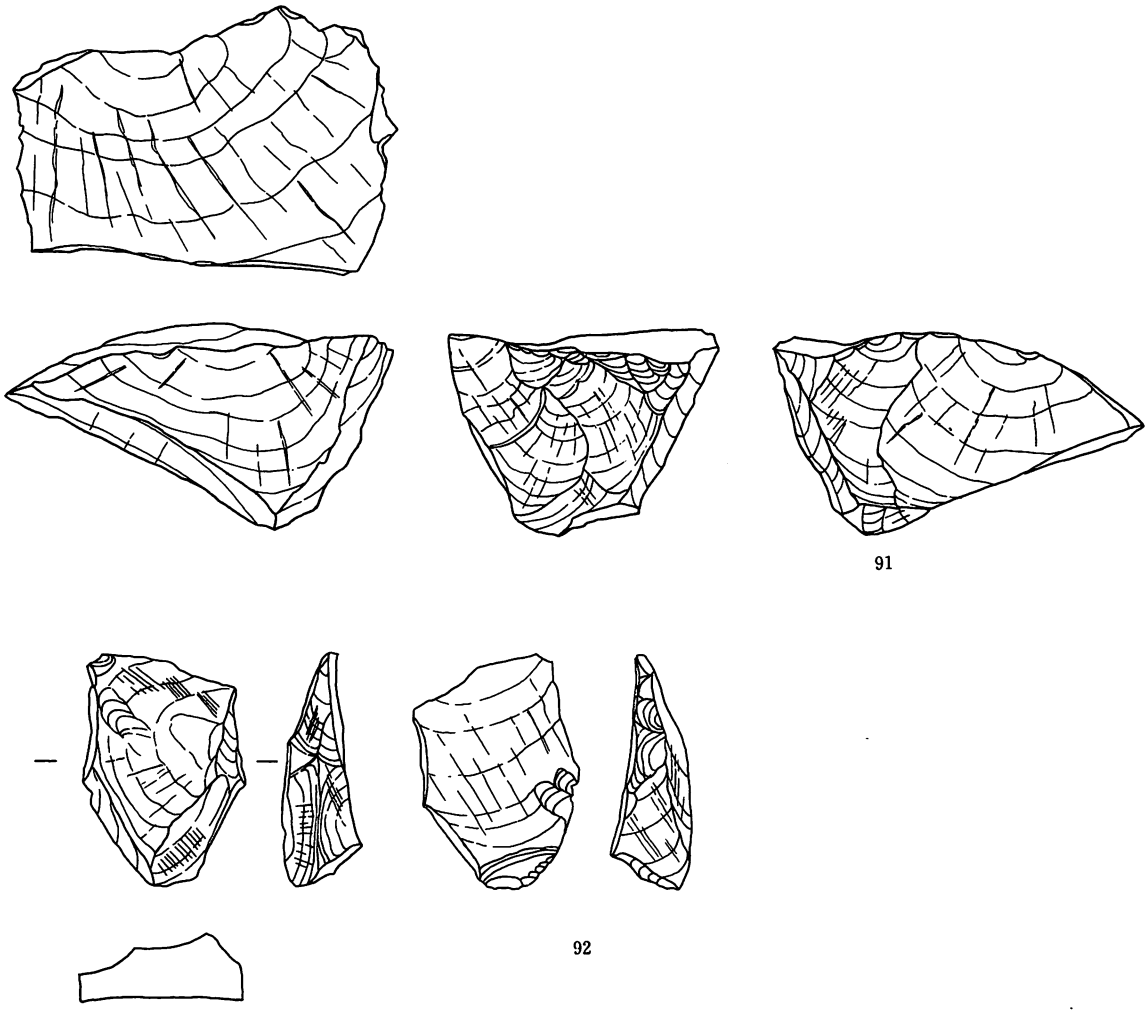
第76図　石飛東遺跡第３トレンチ出土石器実測図(81～88)

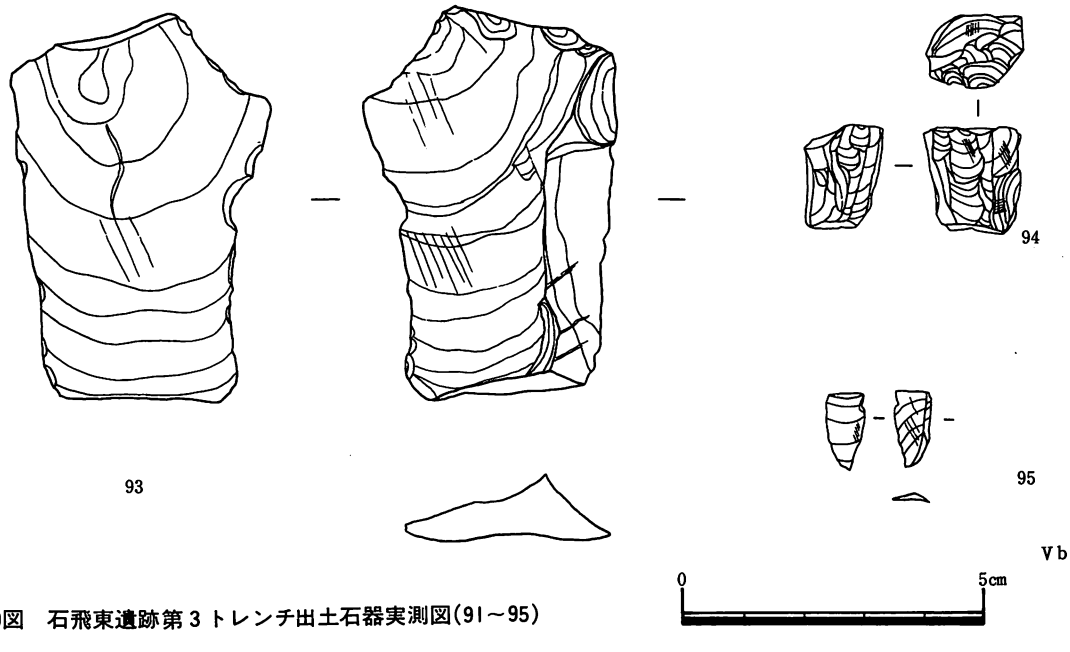


第77図　石飛東遺跡第３トレンチ出土石器実測図(89)

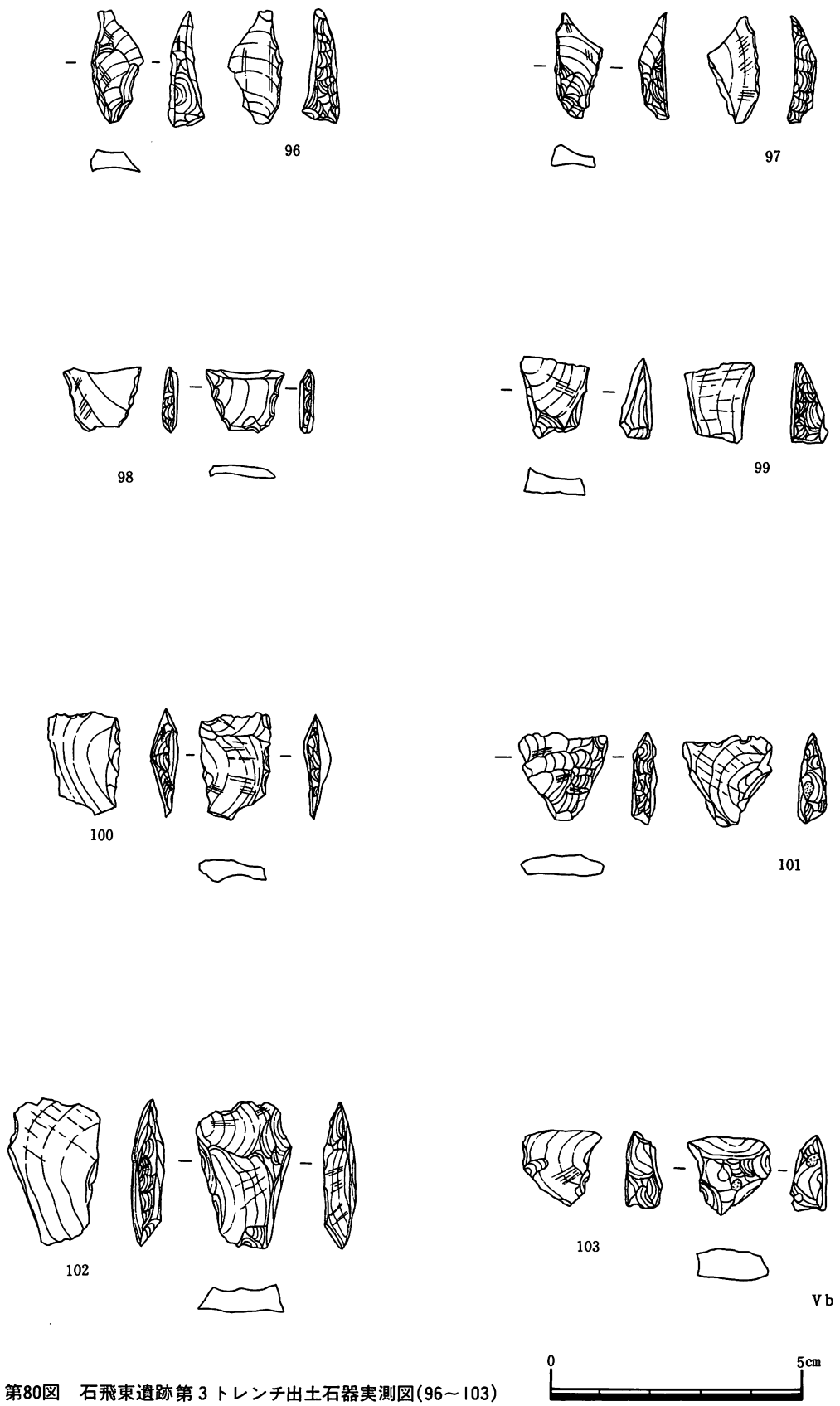


第78図. 石飛東遺跡第3トレンチ出土石器実測図(90)





第79図　石飛東遺跡第３トレンチ出土石器実測図(91～95)



第80図　石飛東遺跡第３トレンチ出土石器実測図(96～103)

＜第Ⅴ－c層＞

A．ナイフ形石器（104～108）

（104）がチャートで（105～108）は黒曜石の不定形剥片を素材としている。何れも二側縁加工を施すが、（105）は明確な基部を形成する。（106）は基部に抉りが認められる。

＜第Ⅴ－d層＞

A．ナイフ形石器（109～118）

（109）は断口が三角形を呈する黒曜石を素材としている。綿密な二側縁加工を施しており、鋭い先端も形成している。縦に長く端正な形状を示している。（110～112）は良質のチャートと黒曜石を用いた小形のナイフ形石器である。綿密な二側縁加工を施し、切り出しナイフ形石器状の形状をとっている。（113～115）はいずれも黒曜石の不定形剥片が素材であり、（115）の左側縁にはわずかであるが抉り調整が認められる。

B．類台形石器（119）

黒曜石の幅広の剥片を折断したもので、右側縁は一度、左側縁は二度の折断で平坦面を形成している。両側縁は平坦面が形成され、ブランティングを必要としない。台形石器の素材、刃部を有し機能的要因は充分である。

C．縦長剥片（120）

黒曜石で長さが5㎝を越える縦長剥片である。折断により、前の（119）であれば2～3個つくりだせる素材である。

＜第Ⅴ－e層＞

A．ナイフ形石器（121・122）

（121）はチャートの縦長剥片を素材としている。ブランティングにより基部を形成し、先端に数度の細かい剥離を施して鋭い先端としている。（122）は良質の縦長剥片が素材である。二側縁加工を行っているが左側縁はやや不充分に見られる。

B．台形石器（123・124）

何れも黒曜石で両側縁を粗い加工で平坦化している。下縁の加工は認められない。

C．縦長剥片（125）

黒曜石で、断口は三角形を呈する。右側縁に細かな剥離があることからスクレーパーとされた可能性がある。

＜第Ⅴ－f層＞

A．ナイフ形石器（126～128）

（126）は非常に小さいナイフ形石器である。良質の黒曜石の不定形剥片を素材としている。二側縁に細かなブランティングを施し、先端も鋭い。（127・128）は部分加工のナイフ形石器とできよう。

B．縦長剥片（129）

黒曜石の幅広の縦長剥片である。定形石器の素材であろう。

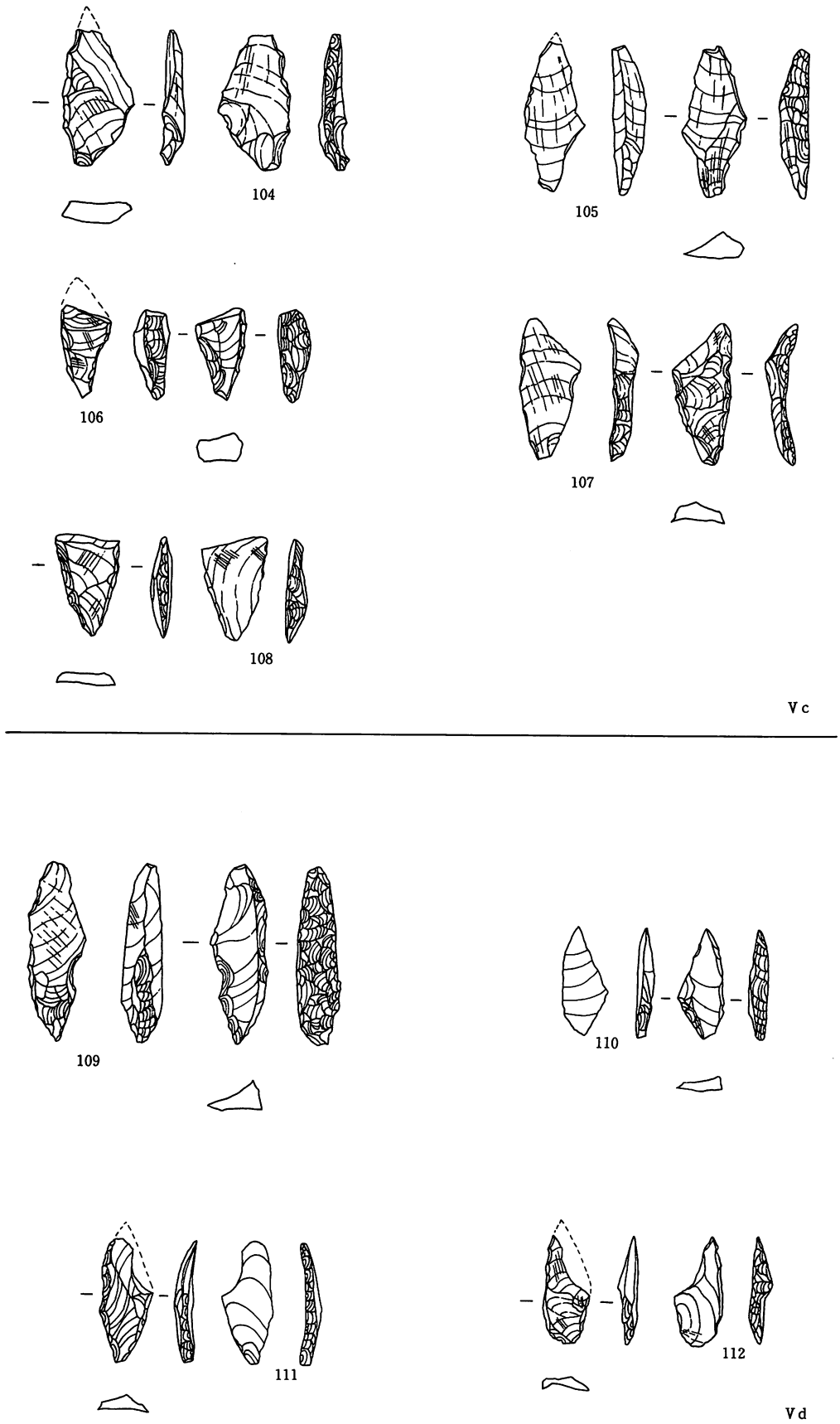
＜第Ⅴ－g層＞

A．ナイフ形石器（130・131）

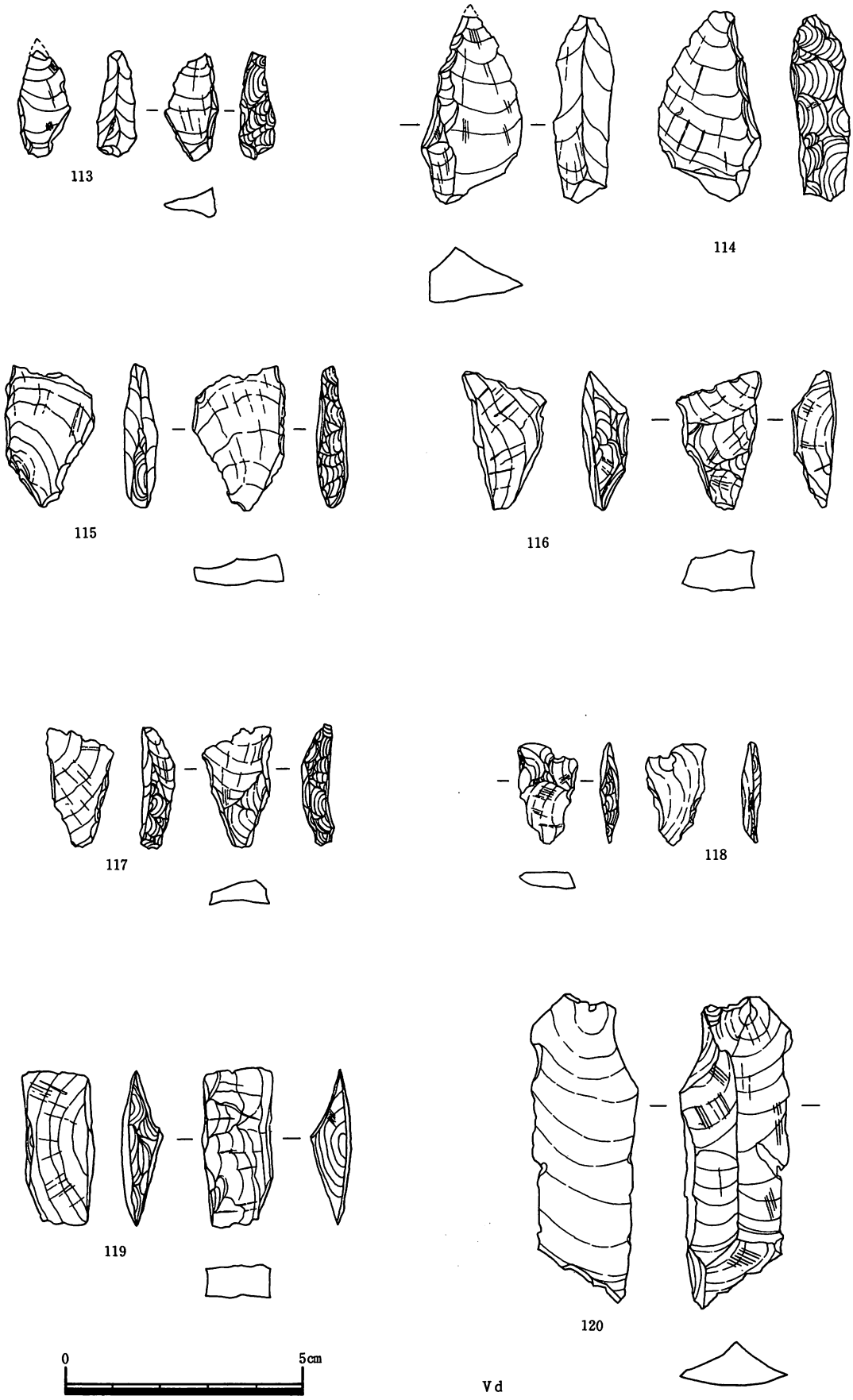
双方とも黒曜石の縦長剥片が素材である。（130）は粗い二側縁加工である。

B．類台形石器（132）

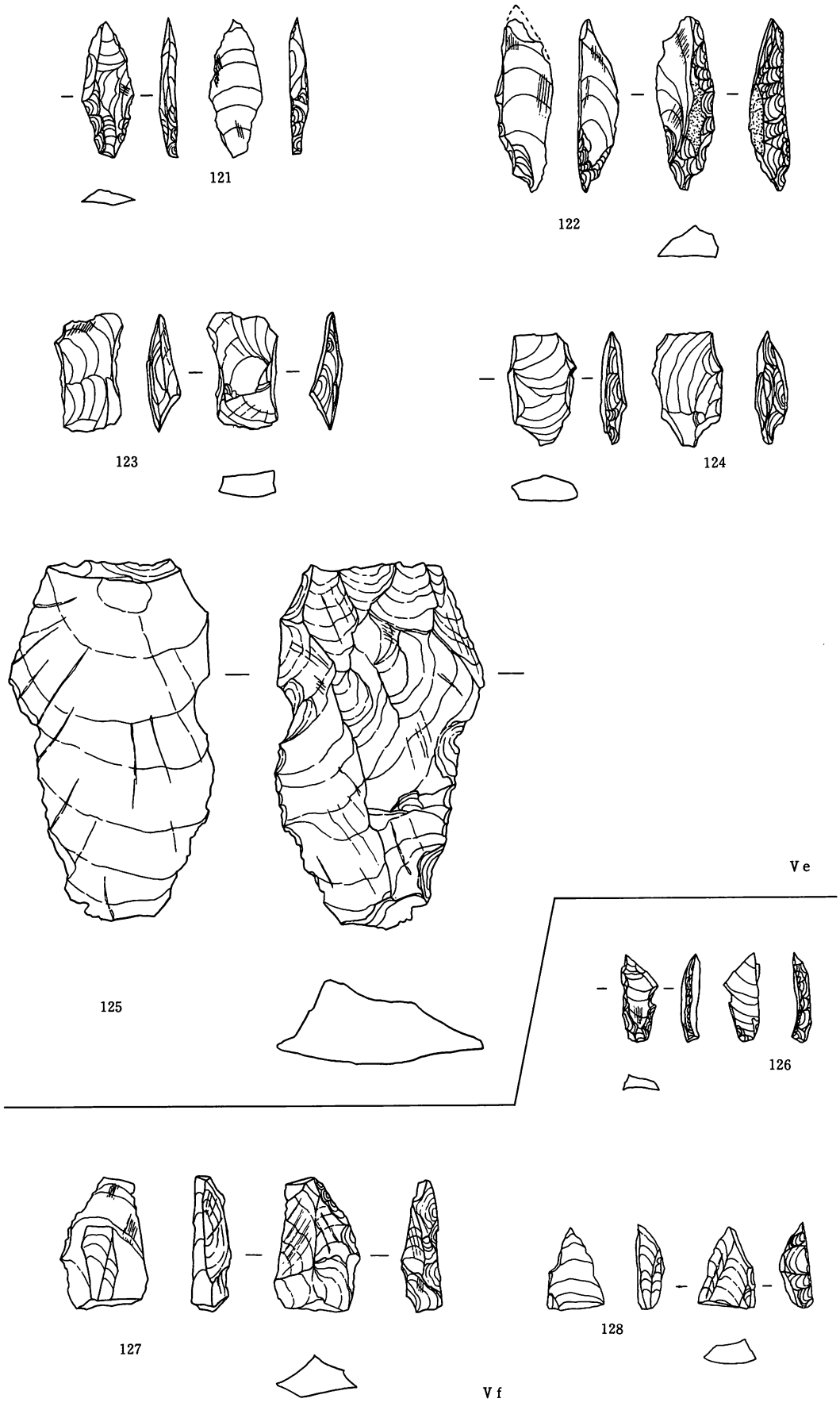
石質は黒曜石で、両側縁を折断し平坦に加工している。



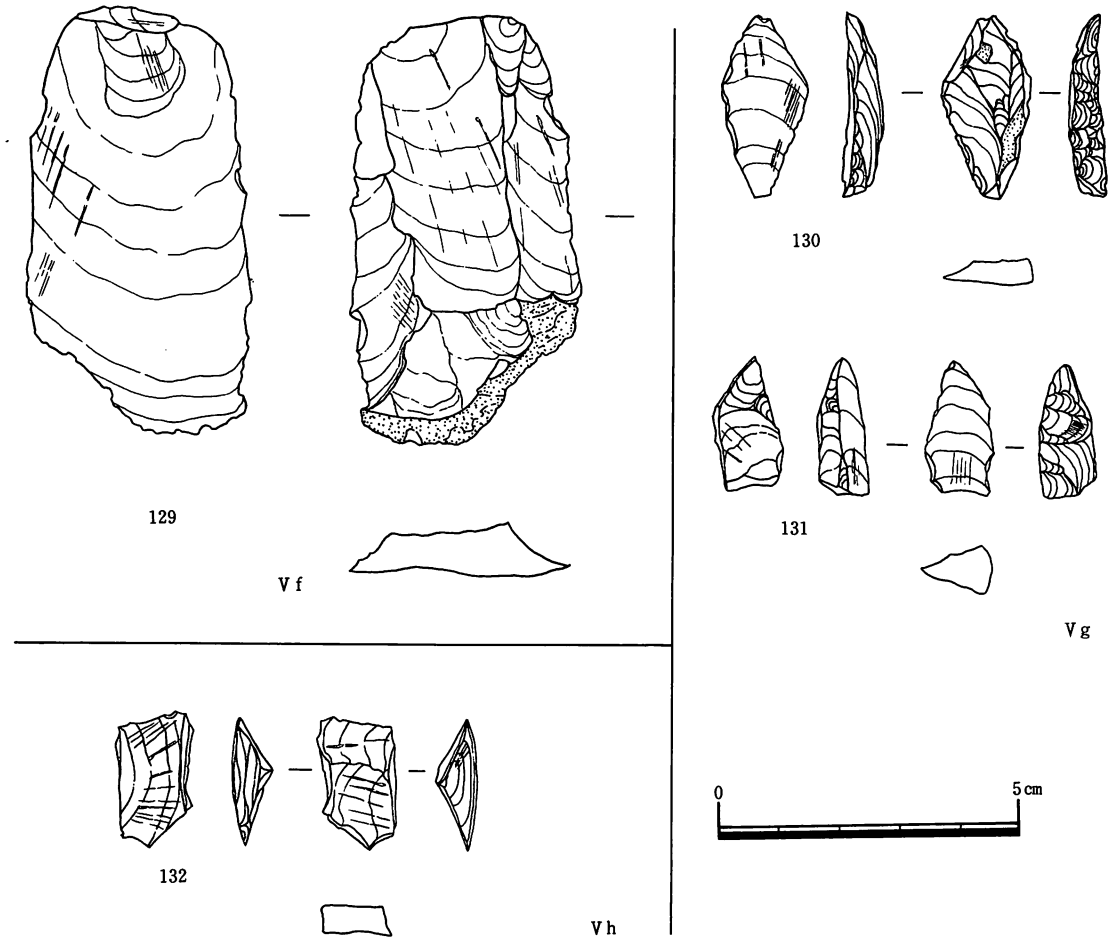
第81図　石飛東遺跡第３トレンチ出土石器実測図(104～112)



第82図　石飛東遺跡第３トレンチ出土石器実測図(113～120)



第83図　石飛東遺跡第３トレンチ出土石器実測図(121～128)



第84図　石飛東遺跡第３トレンチ出土石器実測図(129～132)

5．まとめ

(1)〈第Ⅲ・Ⅳ層の出土遺物〉

第Ⅲ層は「アカホヤ」であり、縄文時代の遺物を包んでいる。第Ⅳ－a・b層には縄文時代早期の遺物が出土している。押型文土器や円筒土器・条痕文土器それに石鏃・削器などの石器がある。

押型文土器は楕円押型と山形押型とがあり、文様には大小の変化がある。底部はすぼんで平底を呈するものが見られる。円筒土器は大型土器の破片があり、条痕文様がある。焼度はいささか不良で、胎土に長石粒が多い。そして、大型の条痕文土器がある。貝殻による粗い施文が器面にある。特徴的に口縁部内側に沈線がある。

第Ⅳ層は縄文早期遺物を主に含む層として捉えることができるが、石器類の中に細石器や稀にナイフ形石器などを含む事がある。ナイフ形石器は全く本来的な包含層とは異にすると判断されるが、最終末の細石器の存在は考えておかしくはないだろう。縄文時代の「古い時期」と終末期の細石器が共伴しこの層を包含層にする可能性は充分である。

石飛東遺跡出土石器分類表(1)

	層位＼器種		ナイフ型石器	三稜尖頭器	縦長剥片	細石核	細石刃	台形石器	削器	石核	剥片	敲石	合計
第1トレンチ	V－	a	2	2	1	1							6
		b					1						1
		c	5	1				1	1				8
		d	3		1			1					5
		e	2							1			3
		f								1			1
		h	1					1					2
	小計		(13)	(3)	(2)	(1)	(1)	(3)	(1)	(2)			(26)
第2トレンチ	V－	a	3	1		2	1	1					8
		b	6					6		1			13
		c	1					1		1			3
		d	2					1			1		4
		e	4					1					5
		f	8					1				1	10
		g	3					5			2		10
		h						1					1
	小計		(27)	(1)		(2)	(1)	(17)		(2)	(3)	(1)	(54)
第3トレンチ	Ⅲ					1							1
	Ⅳ					1							1
	V－	a	1			3	3			3	1		11
		b	2			1	1	6					10
		c	5										5
		d	10		1			1					12
		e	2		1			2			1		5
		f	3										4
		g						1					1
		h	2										2
	小計		(25)		(2)	(6)	(4)	(10)		(3)	(2)		(52)
	合計		65	4	4	19	6	30	1	7	5	1	132

石飛東遺跡出土石器分類表(2)

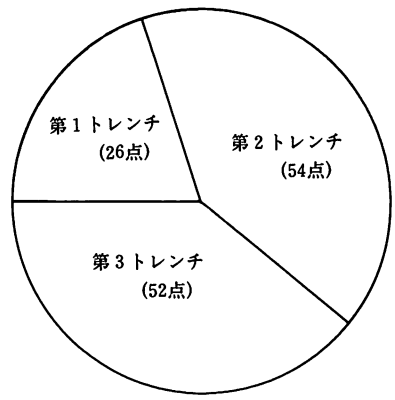
層位＼器種		ナイフ型石器	三稜尖頭器	縦長剥片	細石核	細石刃	台形石器	削器	石核	剥片	敲石	合計
第Ⅲ層					1 (1)							1 (1)
第Ⅳ層					1 (1)							1 (1)
第V層	a	6	3	1	6	4	1		3	1		25
	b	8			1	2	12		1			24
	c	11	1				2	1	1			16
	d	15		2			3			1		21
	e	8		1			3		1	1		14
	f	11					1		1		1	14
	g	3					6			2		11
	h	3					2					5
小計		(65)	(4)	(4)	(7)	(6)	(30)	(1)	(7)	(5)	(1)	(130)
合計		65	4	4	9	6	30	1	7	5	1	計 132

(2) 〈第Ⅴ層の石器群〉

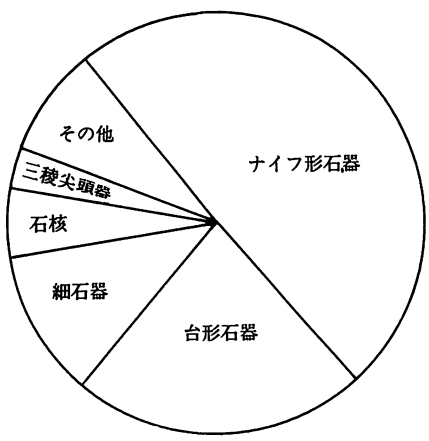
実測を行った132点の石器の割合は右図に示すとおりである。そして、器種別の分類と、石材の割合表は下に示すとおりである。黒曜石Bとしたものは、近くの鹿児島県大口市日東遺跡らで知られる原産地のものと判断される。気泡が多くはいり質としてはよくない。黒曜石Aとしたものが、良質で西北九州に原産をもつものと判断される。

第Ⅴ層は約80cmの厚さがあり、仮りに第Ⅴ－1文化層(30cm)＝第Ⅴ－a・b・c層、第Ⅴ－2文化層（30cm)＝第Ⅴ－d・e・f層、第Ⅴ－3文化層（20cm)＝第Ⅴ－g・h層に分ければ石器群様相に変化が見られようか。

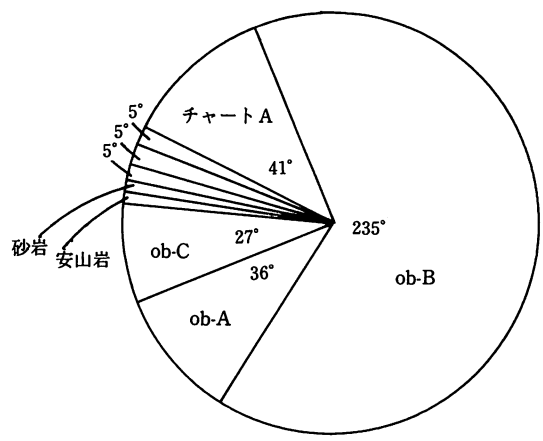
器種別の出土割合を見ると全体を通してナイフ形石器と台形石器の合計は過半数を大きく越えている。



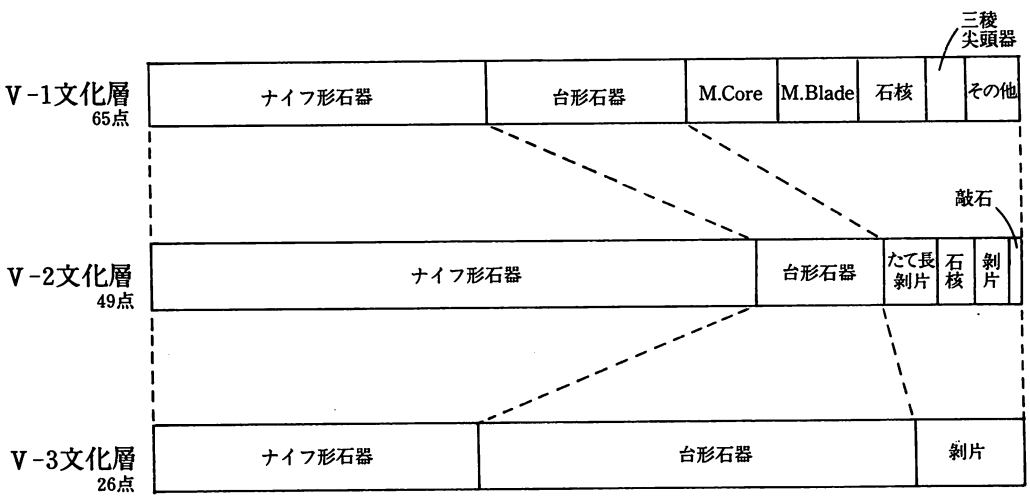
トレンチ別石器出土割合表



石器器種別割合表



石材割合表



文化層別器種割合表

ナイフ形石器形態分類

A型	B型	C型	D型	E型	F型	G型	H型	I型	J型	K型	L型
二側縁加工 柳葉形 九州型	二側縁加工 小形	二側縁加工 刃部が長く片方の側縁が短い	二側縁加工 幅広	二側縁加工 厚手	二側縁加工 抉りがある	二側縁加工 浅い斜刃で台形石器に近い	二側縁加工 胴長	二側縁加工 下縁加工なし	部分加工	二側縁加工 基部が丸い	二側縁加工で基部が尖がる
34 108	1 21 27 28 62 97 107 111	22 56 53	2 37 64 71 104 110 116 117 118	10 11 52 63 55 72 122 130	9 61 96 106 115	12 16 17 49 70 92 108	8	25 35 60 114 131	18 29 38 39 56 58 65 66 67 114 127 128	57 112 126	105 121

細石刃・細石核・三稜尖頭器は第Ⅴ－1文化層だけに出土している。そして、細石刃・細石核は第Ⅳ層にも出土している。したがって、細石核・細石刃は第Ⅴ－a・b層～第Ⅳ層にベースを置くと考えられ、石飛東遺跡第Ⅳ層文化層と捉えておきたい。

次にナイフ形石器と台形石器についてみてみたい。

ナイフ形石器をA型～L型の12種と、台形石器をA型～G型の7種に分け、出土層ごとに分離して作業を行った。

台形石器形態分類

A型	B型	C型	D型	E型	F型	G型
二側縁加工 下縁加工なし	二側縁加工 下縁短かく加工なし	二側縁加工、胴長 下縁加工なし	二側縁加工 下縁がやや尖がる	二側縁加工 尖がった基部を形成 三角形	二側縁加工 両側縁がやや抉れる	二側縁及び下縁加工 百花台型
13 19 45 50 51 74 76 100 132	26 40 68 73	30 75 102 119	41 42 44 103	43 101 124	59 77 80 99 123	98

ナイフ形石器は第Ⅴ－3文化層ではE・I型が主なるものである。切り出し状の形状をとり、二側縁加工は急角度で綿密なブランテイング加工を施している。基部調整は不充分である。

第Ⅴ－2文化層の段階で、ナイフ形石器のほとんどの形態が出揃い、切り出し状、特徴的な柳葉形、側縁に抉りが見られるもの、それに突出した基部加工を施すものもある。

ナイフ形石器の大盛行の時期として捉えられよう。

第Ⅴ－1文化層ではナイフ形石器が数的な減少傾向を見せ、かわりに石器組成に組み入れられる三稜尖頭器が加わる特色が述べられる。

台形石器は第Ⅴ－3文化層段階でA・B・F形態が見られ　二側縁加工を施すもので、下縁幅の大小や側縁にやや抉りが見られるなどの小さな変化はあるが、一般的に述べられる「日ノ岳型」台形石器に類似する。第Ⅴ－2文化層では基部を突出させたトライアングルの形状も見られ、平坦剥離技術展開をうかがわせる。「枝去木型」台形石器の存在もあろう。

		〈ナイフ形石器〉												〈台形石器〉						
第Ⅴ－1文化層	Ⅴ－a層		ⒷⒷⒷ		Ⓓ			Ⓖ			Ⓙ					Ⓒ				
	Ⅴ－b層	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ	Ⓓ		Ⓕ			Ⓘ	ⒿⒿ			ⒶⒶ	Ⓑ	Ⓒ	ⒹⒹⒹⒹ	ⒺⒺ	Ⓕ	Ⓖ
	Ⅴ－c層					ⒺⒺ	Ⓕ	ⒼⒼ	Ⓗ					ⒶⒶ						
第Ⅴ－2文化層	Ⅴ－d層	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ	ⒹⒹⒹⒹ	Ⓔ	Ⓕ	ⒼⒼ		Ⓘ	ⒿⒿ	Ⓚ		ⒶⒶ		Ⓒ				
	Ⅴ－e層		ⒷⒷ	Ⓒ	Ⓓ	ⒺⒺ	Ⓕ	Ⓖ			ⒿⒿ	Ⓚ	ⒾⒾ					Ⓔ	ⒻⒻ	
	Ⅴ－f層		Ⓑ		Ⓓ	Ⓔ	Ⓕ			Ⓘ	ⒿⒿⒿⒿⒿ	Ⓚ			Ⓑ					
第Ⅴ－3文化層	Ⅴ－g層				Ⓓ	Ⓔ		Ⓖ						ⒶⒶⒶ	Ⓑ				Ⓕ	
	Ⅴ－h層					Ⓔ				ⒾⒾ					Ⓑ	Ⓒ			Ⓕ	

形態別出土状況

第Ⅴ－1文化層では下縁と基部加工技術の展開が進みG型（百花台型）台形石器が認められる。

以上の様に見てくると、第Ⅴ－3文化層は「ＡＴ」前の石器群様相を見せるし、第Ⅴ－2文化層は「AT」並行から、「ナイフ形石器盛行期」的様相を如実に示している。第Ⅴ－1文化層はナイフ形石器の衰退期的様相を示し、三稜尖頭器が加わり、最終的に細石器の出現となろう。

石飛東遺跡　　**出土石器一覧表** (01～26)

図版番号	石器番号	器種名	出土トレンチ	出土層	出土高度	石質	全長	最大幅	最大厚	重量	備考
第63図	01	ナイフ形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-a層	509.784m	黒曜石A	1.80cm	0.80cm	0.40cm	0.57g	
第63図	02	ナイフ形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-a層	509.784m	黒曜石B	2.00cm	1.25cm	0.45cm	1.02g	
第63図	03	三稜尖頭器	第1トレンチ	第Ⅴ-a層	509.784m	黒曜石B	3.75cm	1.55cm	1.38cm	5.70g	
第63図	04	三稜尖頭器	第1トレンチ	第Ⅴ-a層	509.784m	黒曜石B	3.80cm	1.70cm	1.20cm	5.65g	
第63図	05	縦長剝片	第1トレンチ	第Ⅴ-a層	509.784m	黒曜石B	6.60cm	2.45cm	0.83cm	12.55g	
第63図	06	細石核	第1トレンチ	第Ⅴ-a層	509.747m	黒曜石B	2.20cm	1.52cm	0.98cm	3.24g	
第63図	07	細石刃	第1トレンチ	第Ⅴ-b層	509.674m	黒曜石A	2.90cm	0.60cm	0.20cm	0.22g	
第64図	08	ナイフ形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-c層	509.552m	黒曜石B	2.15cm	0.75cm	0.62cm	0.82g	
第64図	09	ナイフ形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-c層	509.632m	黒曜石B	2.03cm	0.83cm	0.47cm	0.75g	
第64図	10	ナイフ形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-c層	509.632m	黒曜石B	3.98cm	1.82cm	1.20cm	6.45g	
第64図	11	ナイフ形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-c層	509.632m	黒曜石B	4.43cm	2.05cm	1.13cm	7.95g	
第64図	12	ナイフ形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-c層	509.540m	黒曜石B	2.14cm	1.14cm	0.43cm	1.23g	
第64図	13	台形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-c層	509.632m	黒曜石B	1.68cm	1.30cm	0.42cm	0.67g	
第64図	14	三稜尖頭器	第1トレンチ	第Ⅴ-c層	509.576m	黒曜石A	3.66cm	1.25cm	0.89cm	2.92g	
第64図	15	スクレーパー	第1トレンチ	第Ⅴ-c層	509.594m	黒曜石B	5.15cm	2.90cm	1.13cm	15.47g	
第65図	16	ナイフ形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-d層	509.563m	黒曜石B	1.20cm	1.13cm	0.15cm	0.55g	
第65図	17	ナイフ形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-d層	509.524m	黒曜石B	1.75cm	1.40cm	0.38cm	1.10g	
第65図	18	ナイフ形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-d層	509.543m	黒曜石C	2.13cm	1.20cm	0.52cm	0.90g	
第65図	19	台形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-d層	509.524m	黒曜石B	1.25cm	1.42cm	0.38cm	0.75g	
第65図	20	縦長剝片	第1トレンチ	第Ⅴ-d層	509.543m	チャートA	3.90cm	1.65cm	0.68cm	4.87g	
第65図	21	ナイフ形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-e層	509.504m	チャートA	1.96cm	0.79cm	0.30cm	0.51g	
第65図	22	ナイフ形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-e層	509.556m	黒曜石A	2.76cm	0.89cm	4.60cm	0.76g	
第66図	23	石核	第1トレンチ	第Ⅴ-e層	509.504m	チャートA	5.20cm	5.50cm	2.79cm	101.50g	
第66図	24	石核	第1トレンチ	第Ⅴ-f層	509.422m	チャートA	4.40cm	4.62cm	2.98cm	57.30g	
第66図	25	ナイフ形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-h層	509.375m	黒曜石B	1.83cm	1.12cm	0.42cm	1.07g	
第66図	26	台形石器	第1トレンチ	第Ⅴ-h層	509.276m	黒曜石B	1.85cm	1.28cm	0.27cm	0.67g	

出土石器一覧表（27～79）

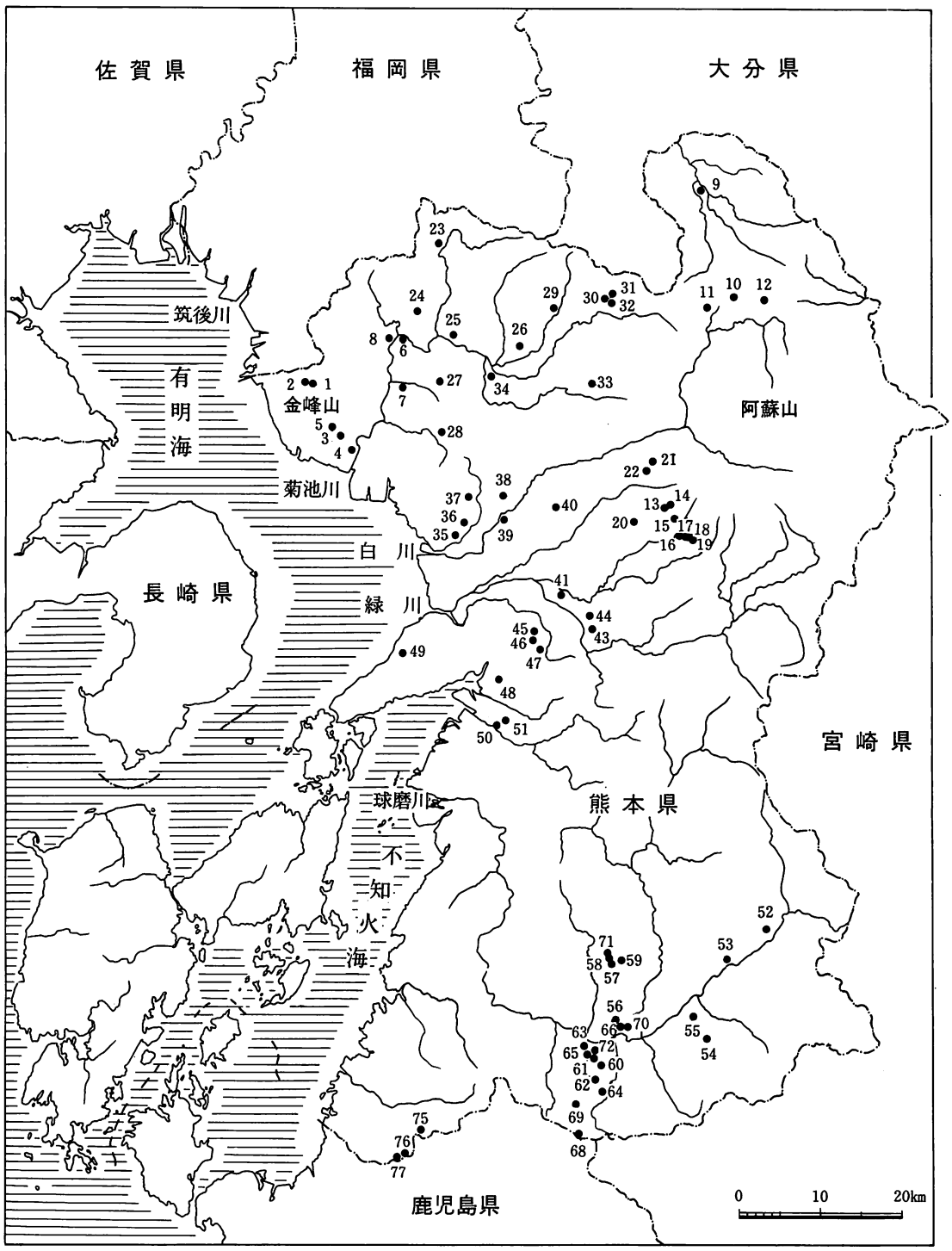
図版番号	石器番号	器種名	出土トレンチ	出土層	出土高度	石質	全長	最大幅	最大厚	重量	備考
第67図	27	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-a層	509.829m	チャートA	2.73cm	1.08cm	0.53cm	1.75g	
第67図	28	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-a層	510.009m	黒曜石B	3.51cm	1.17cm	0.92cm	3.99g	
第67図	29	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-a層	509.944m	黒曜石B	2.81cm	1.41cm	0.94cm	2.89g	
第67図	30	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-a層	509.829m	黒曜石B	3.55cm	1.75cm	0.96cm	5.32g	
第67図	31	細石核	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.748m	黒曜石A	1.70cm	1.95cm	1.20cm	4.04g	
第67図	32	細石核	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.818m	黒曜石A	1.00cm	0.92cm	0.89cm	1.17g	
第67図	33	細石刃	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.753m	黒曜石A	0.92cm	0.60cm	0.22cm	0.12g	
第68図	34	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.748m	黒曜石B	2.83cm	1.13cm	0.82cm	2.98g	
第68図	35	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.712m	黒曜石B	2.84cm	1.41cm	0.68cm	2.66g	
第68図	36	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.753m	黒曜石B	3.12cm	1.41cm	0.60cm	1.98g	
第68図	37	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.753m	黒曜石B	1.58cm	1.18cm	0.24cm	0.63g	
第68図	38	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.753m	黒曜石B	1.26cm	0.83cm	0.34cm	0.31g	
第68図	39	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.886m	黒曜石B	3.32cm	3.20cm	1.30cm	15.65g	
第69図	40	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.889m	黒曜石B	1.70cm	1.33cm	0.19cm	0.57g	
第69図	41	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.762m	黒曜石B	2.00cm	0.99cm	0.50cm	0.92g	
第69図	42	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.748m	黒曜石B	1.56cm	1.13cm	0.30cm	0.39g	
第69図	43	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.748m	黒曜石B	1.30cm	1.10cm	0.35cm	0.29g	
第69図	44	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.748m	黒曜石B	0.93cm	0.59cm	0.30cm	0.10g	
第69図	45	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.748m	黒曜石B	3.20cm	2.20cm	0.79cm	6.40g	
第69図	46	三稜尖頭器	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.904m	黒曜石B	4.15cm	1.88cm	1.22cm	9.60g	
第70図	47	石核	第2トレンチ	第Ⅴ-b層	509.753m	黒曜石B	5.10cm	7.05cm	6.36cm	275.00g	
第71図	48	石核	第2トレンチ	第Ⅴ-c層	509.686m	黒曜石B	7.48cm	6.51cm	2.12cm	122.76g	
第71図	49	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-c層	509.830m	黒曜石B	2.60cm	1.65cm	0.70cm	1.73g	
第71図	50	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-c層	509.830m	黒曜石B	1.50cm	1.23cm	0.40cm	1.03g	
第71図	51	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-d層	509.654m	黒曜石B	2.05cm	1.16cm	0.50cm	2.12g	
第71図	52	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-d層	509.662m	黒曜石A	2.63cm	1.00cm	0.48cm	0.97g	
第71図	53	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-d層	509.654m	黒曜石B	2.40cm	1.13cm	0.67cm	2.21g	
第72図	54	剥片	第2トレンチ	第Ⅴ-d層	509.765m	黒曜石B	7.90cm	8.85cm	2.20cm	132.86g	
第72図	55	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-e層	509.703m	黒曜石B	4.81cm	2.72cm	0.93cm	10.85g	
第72図	56	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-e層	509.692m	黒曜石B	2.73cm	1.20cm	0.50cm	1.63g	
第72図	57	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-e層	509.692m	黒曜石B	2.00cm	1.50cm	0.79cm	2.63g	
第72図	58	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-e層	509.703m	黒曜石B	3.83cm	1.83cm	1.03cm	6.80g	
第72図	59	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-e層	509.483m	黒曜石B	1.56cm	1.42cm	0.50cm	1.10g	
第73図	60	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-f層	509.641m	チャートA	2.40cm	0.80cm	0.41cm	0.92g	
第73図	61	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-f層	509.654m	チャートA	1.73cm	0.90cm	0.43cm	0.52g	
第73図	62	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-f層	509.654m	黒曜石B	2.32cm	1.18cm	0.50cm	1.32g	
第73図	63	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-f層	509.559m	黒曜石B	2.80cm	1.53cm	0.55cm	2.36g	
第73図	64	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-f層	509.559m	黒曜石B	2.63cm	1.40cm	0.72cm	2.14g	
第73図	65	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-f層	509.626m	黒曜石B	2.81cm	1.50cm	0.90cm	2.84g	
第73図	66	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-f層	509.643m	黒曜石B	2.08cm	1.45cm	0.90cm	2.76g	
第73図	67	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-f層	509.626m	黒曜石B	2.55cm	1.82cm	0.90cm	4.32g	
第73図	68	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-f層	509.654m	黒曜石B	2.50cm	2.52cm	0.62cm	4.95g	
第74図	69	敲石	第2トレンチ	第Ⅴ-f層	509.672m	砂岩	6.84cm	5.40cm	4.40cm	189.65g	
第74図	70	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-g層	509.548m	黒曜石B	2.60cm	1.45cm	0.31cm	1.50g	
第74図	71	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-g層	509.482m	黒曜石C	1.90cm	1.38cm	0.47cm	1.23g	
第74図	72	ナイフ形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-g層	509.571m	黒曜石B	3.12cm	2.00cm	1.04cm	8.51g	
第74図	73	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-g層	509.592m	黒曜石B	1.35cm	1.15cm	0.30cm	0.53g	
第75図	74	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-g層	509.592m	黒曜石B	2.23cm	1.68cm	0.91cm	3.73g	
第75図	75	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-g層	509.571m	黒曜石B	2.63cm	1.94cm	0.93cm	4.88g	
第75図	76	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-g層	509.370m	黒曜石B	1.18cm	1.11cm	0.42cm	0.60g	
第75図	77	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-g層	509.571m	黒曜石B	3.60cm	3.42cm	0.73cm	8.39g	
第75図	78	剥片	第2トレンチ	第Ⅴ-g層	509.548m	頁岩	6.99cm	4.00cm	1.66cm	35.77g	
第75図	79	剥片	第2トレンチ	第Ⅴ-g層	509.571m	チャートA	4.70cm	2.30cm	1.17cm	9.95g	

出土石器一覧表（80～132）

図版番号	石器番号	器種名	出土トレンチ	出土層	出土高度	石質	全長	最大幅	最大厚	重量	備考
第75図	80	台形石器	第2トレンチ	第Ⅴ-h層	509.490m	黒曜石B	1.67cm	0.90cm	0.22cm	0.42g	
第76図	81	細石核	第3トレンチ	第Ⅲ層	510.233m	黒曜石A	2.10cm	1.85cm	1.05cm	3.96g	
第76図	82	細石核	第3トレンチ	第Ⅳ層	510.151m	チャートB	1.95cm	1.70cm	0.98cm	2.86g	
第76図	83	細石核	第3トレンチ	第Ⅴ-a層	510.031m	チャートA	1.90cm	3.15cm	2.95cm	18.90g	
第76図	84	細石核	第3トレンチ	第Ⅴ-a層	510.031m	チャートB	2.10cm	1.80cm	0.92cm	3.41g	
第76図	85	細石核	第3トレンチ	第Ⅴ-a層	510.153m	チャートA	1.95cm	1.48cm	0.63cm	2.43g	
第76図	86	細石刃	第3トレンチ	第Ⅴ-a層	510.252m	黒曜石A	1.32cm	0.52cm	0.09cm	0.11g	
第76図	87	細石刃	第3トレンチ	第Ⅴ-a層	510.252m	黒曜石A	0.90cm	0.52cm	0.10cm	0.05g	
第76図	88	細石刃	第3トレンチ	第Ⅴ-a層	510.252m	黒曜石A	1.13cm	1.28cm	0.04cm	0.05g	
第77図	89	石核	第3トレンチ	第Ⅴ-a層	510.150m	黒曜石B	6.95cm	7.40cm	6.82cm	425.45g	
第78図	90	石核	第3トレンチ	第Ⅴ-a層	510.153m	安山岩	5.50cm	7.70cm	8.10cm	409.40g	
第79図	91	石核	第3トレンチ	第Ⅴ-a層	510.153m	黒曜石B	2.80cm	6.35cm	4.40cm	71.26g	
第79図	92	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-a層	510.153m	黒曜石B	3.80cm	2.65cm	1.18cm	10.30g	
第79図	93	剥片	第3トレンチ	第Ⅴ-b層	509.059m	頁岩	6.20cm	4.37cm	1.30cm	23.87g	
第79図	94	細石核	第3トレンチ	第Ⅴ-b層	510.159m	黒曜石C	1.53cm	1.20cm	1.55cm	3.86g	
第79図	95	細石刃	第3トレンチ	第Ⅴ-b層	510.159m	黒曜石A	1.27cm	0.55cm	0.12cm	0.11g	
第80図	96	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-b層	510.129m	黒曜石B	2.10cm	1.00cm	0.63cm	1.00g	
第80図	97	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-b層	510.223m	チャートA	2.00cm	0.92cm	0.45cm	0.87g	
第80図	98	台形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-b層	510.067m	チャートC	1.08cm	1.50cm	0.20cm	0.58g	
第80図	99	台形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-b層	510.234m	黒曜石B	1.57cm	1.33cm	0.55cm	1.22g	
第80図	100	台形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-b層	510.223m	黒曜石B	2.00cm	1.40cm	0.44cm	1.16g	
第80図	101	台形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-b層	509.959m	黒曜石B	1.63cm	1.70cm	0.40cm	1.36g	
第80図	102	台形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-b層	510.289m	黒曜石B	2.80cm	1.75cm	0.50cm	3.15g	
第80図	103	台形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-b層	510.234m	黒曜石B	1.48cm	1.58cm	0.70cm	1.44g	
第81図	104	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-c層	509.912m	チャートA	2.65cm	1.41cm	0.38cm	1.75g	
第81図	105	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-c層	510.131m	黒曜石B	2.89cm	1.12cm	0.62cm	1.50g	
第81図	106	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-c層	509.912m	黒曜石C	1.75cm	0.88cm	0.62cm	1.02g	
第81図	107	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-c層	510.184m	黒曜石B	2.72cm	1.13cm	0.40cm	1.14g	
第81図	108	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-c層	510.131m	黒曜石C	2.06cm	1.28cm	0.30cm	0.76g	
第81図	109	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-d層	509.853m	黒曜石C	3.60cm	1.02cm	0.72cm	2.60g	
第81図	110	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-d層	509.926m	チャートA	2.08cm	0.84cm	0.31cm	0.47g	
第81図	111	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-d層	510.011m	チャートC	2.41cm	0.96cm	0.28cm	0.75g	
第81図	112	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-d層	509.926m	黒曜石C	2.08cm	0.89cm	0.36cm	0.49g	
第82図	113	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-d層	509.919m	黒曜石B	2.19cm	1.08cm	0.68cm	1.11g	
第82図	114	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-d層	509.919m	黒曜石B	3.84cm	2.25cm	1.20cm	7.23g	
第82図	115	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-d層	509.839m	黒曜石B	2.85cm	1.86cm	0.63cm	3.01g	
第82図	116	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-d層	509.807m	黒曜石B	2.89cm	1.75cm	0.88cm	3.72g	
第82図	117	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-d層	509.926m	黒曜石B	2.47cm	1.41cm	0.52cm	1.79g	
第82図	118	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-d層	510.121m	黒曜石C	2.09cm	1.14cm	0.31cm	0.73g	
第82図	119	台形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-d層	509.919m	黒曜石B	3.17cm	1.44cm	0.73cm	3.70g	
第82図	120	縦長剥片	第3トレンチ	第Ⅴ-d層	509.926m	黒曜石B	6.50cm	2.30cm	0.74cm	9.89g	
第83図	121	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-e層	509.978m	チャートA	2.72cm	1.05cm	0.28cm	0.84g	
第83図	122	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-e層	509.974m	黒曜石C	3.50cm	1.19cm	0.79cm	2.39g	
第83図	123	台形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-e層	509.976m	黒曜石B	2.50cm	1.20cm	0.52cm	1.76g	
第83図	124	台形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-e層	509.976m	黒曜石B	2.35cm	1.32cm	0.40cm	1.84g	
第83図	125	縦長剥片	第3トレンチ	第Ⅴ-e層	509.978m	黒曜石B	7.42cm	4.55cm	1.80cm	49.61g	
第83図	126	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-f層	509.853m	黒曜石C	1.75cm	0.72cm	0.30cm	0.36g	
第83図	127	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-f層	509.951m	黒曜石B	2.60cm	1.82cm	0.77cm	3.51g	
第83図	128	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-f層	509.961m	黒曜石B	1.50cm	1.13cm	0.52cm	0.83g	
第84図	129	剥片	第3トレンチ	第Ⅴ-f層	509.862m	黒曜石B	6.90cm	3.95cm	1.30cm	32.80g	
第84図	130	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-h層	509.882m	黒曜石B	2.90cm	1.43cm	0.53cm	1.47g	
第84図	131	ナイフ形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-h層	509.885m	黒曜石B	2.06cm	1.10cm	0.81cm	1.97g	
第84図	132	台形石器	第3トレンチ	第Ⅴ-g層	509.722m	黒曜石B	2.21cm	1.20cm	0.61cm	1.52g	

第Ⅵ章　熊本県旧石器時代遺跡資料

1．旧石器時代遺跡分布図



1	平山宿	**12**	**象ヶ鼻**	23	柿原	34	松島・小野崎	45	上ノ原	56	大丸	67	矢岳
2	陣屋敷	13	西原B	24	城・下原	35	上高橋	46	尾窪	57	狸谷	68	国見
3	今泉	14	西原Loc13	25	長沖	36	谷尾崎	47	後田	58	中山狸谷	69	田野
4	年の神	15	吉無田高原	26	宮野	37	柿原	48	曲野	59	段岡	70	一本松
5	備中	16	牧原	27	吉井原	38	天拝山	49	田平	60	射場ノ本	71	山渋谷
6	下津原	17	もみじ台	28	田中原	39	下南部	50	立神ドトク	61	大原	72	田栗須
7	中原	18	北猪見	29	虎口	40	葉山	51	岩立C	62	永葉山	73	熊ヶ倉
8	高塚	19	小火器射場	**30**	**伊野A**	41	久保	52	岩野	63	小柿	74	茂川カントリークラブ
9	下城	20	谷頭	31	伊野B	42	南小池	53	里ン城	64	鳴石	75	石飛分校・石飛東
10	**大観峯**	21	桑鶴土橋	32	伊野C	43	下横田	54	尾鉢	65	高山	76	ぐみの木段
11	湯浦	22	桑鶴小森	33	湯舟原	44	大峯	55	五本松	66	佐無田	77	五目木

2．旧石器時代遺跡一覧表

項目番号	遺跡名	所在地	遺物保管者・保管場所	主な出土石器	調査	文献
1	平山宿	荒尾市大字平山宿	松村一良　九州歴史資料館	礫器	表採	50
2	陣屋敷	荒尾市大字平山字陣屋敷	松村一良　九州歴史資料館	礫器	表採	〃
3	今泉	玉名郡岱明町大字今泉	河北　毅	ナイフ	表採	〃
4	年の神	玉名郡岱明町大字野口	河北　毅	ナイフ	表採	〃
5	備中	玉名郡岱明町大字西照寺	田添夏喜	ナイフ	表採	〃
6	下津原	玉名郡菊水町大字下津原東	菊水町歴史民俗資料館	ナイフ	表採	10．〃
7	中原	玉名郡菊水町大字瀬川中原	菊水町歴史民俗資料館	ナイフ・細石器	表採	10，〃
8	高塚	玉名郡菊水町大字江栗	高木正文	礫器	表採	〃
9	下城	阿蘇郡小国町大字下城	熊本県教育委員会	ナイフ・台形石器・三稜尖頭器	発掘調査（昭53・54）熊本県教育委員会	18.25.〃
10	大観峯	阿蘇郡阿蘇町大字大観峯	橋本誠二　熊本県教育委員会	ナイフ・剥片尖頭器	表採・発掘調査（昭59）熊本県教育委員会	35．〃
11	湯の浦	阿蘇郡阿蘇町大字内牧	熊本短期大学	細石核	表採	38．〃
12	象ヶ鼻	阿蘇郡一の宮町大字中通	橋本誠二　熊本県教育委員会	石核・剥片	表採・発掘調査（昭59）熊本県教育委員会	〃
13	西原B	阿蘇郡西原村大字河原	福田正文　吉田雅人	細石器・ナイフ三稜尖頭器	表採	〃
14	西原A	阿蘇郡西原村大字河原	福田正文　吉田雅人	細石器・ナイフ三稜尖頭器	表採	〃
15	吉無田高原	上益城郡御船町大字吉無田	福田正文　吉田雅人	ナイフ・石核・細石器・三稜尖頭器	表採	〃
16	牧原B	上益城郡矢部町大字大矢野原字牧原	福田正文　吉田雅人	細石器・三稜尖頭器	表採	〃
17	もみじ台	上益城郡矢部町大字北中島字もみじ台	福田正文　吉田雅人	細石器・ナイフ	表採	〃
18	北猪見	上益城郡矢部町大字北中島字北猪見	福田正文　吉田雅人	ナイフ	表採	〃
19	小火器射場	上益城郡矢部町大字北中島	福田正文　吉田雅人	細石器	表採	〃
20	谷頭	阿蘇郡西原村字谷頭	西原村公民館資料室	細石核	発掘調査（昭53）谷頭遺跡調査団	19．〃
21	桑鶴土橋	阿蘇郡西原村桑鶴土橋	熊本大学考古学研究室	細石器	発掘調査（昭54）熊本大学考古学研究室	20．〃
22	桑鶴・小森	阿蘇郡西原村桑鶴小森	西原村公民館資料室	細石器・ナイフ	表採	〃
23	柿原	鹿本郡鹿北町大字柿原	山鹿市博物館	尖頭器	表採	4．〃
24	城・下原	山鹿市城・下原	山鹿市博物館	剥片尖頭器	発掘調査（昭58）山鹿市博物館	〃
25	長沖	山鹿市十三部長沖	山鹿市博物館	細石器	表採	2．〃
26	宮野	鹿本郡菊鹿町大字米原	熊本県教育委員会	ナイフ	発掘調査（昭56）熊本県教育委員会	42．〃
27	吉井原	鹿本郡鹿央町吉井原	熊本県教育委員会	台形石器	表採	〃
28	田中原	鹿本郡植木町大字富応	古財誠也	尖頭器	表採	31．〃
29	虎口	菊池市大字竜門字虎口	田中儀信	尖頭器	表採	1．〃
30	伊野A	菊池市大字原字伊野	橋本誠二　吉田雅人　福田正文　熊本県教育委員会	ナイフ・細石器	表採・発掘調査（昭59）熊本県教育委員会	35．〃
31	伊野B	菊池市大字原字伊野	橋本誠二　吉田雅人　福田正文	ナイフ	表採	35．〃
32	伊野C	菊池市大字原字伊野	橋本誠二　吉田雅人　福田正文	細石器	表採	35．〃
33	湯舟原	菊池郡旭志村大字湯舟	福田正文	ナイフ・細石器	表採	〃
34	松島・小野崎	菊池郡七城町大字松島・小野崎	古財誠也　福田正文　熊本市博物館	細石器	表採	16．〃
35	上高橋	熊本市上高橋	橋本誠二	ナイフ	表採	35．〃
36	谷尾崎	熊本市谷尾崎	橋本誠二	細石器	表採	21．〃
37	（熊）柿原	熊本市花園町柿原	橋本誠二	ナイフ	表採	23．〃
38	天拝山	熊本市清水町楡ノ木	熊本市博物館	スクレーパー	表採	2．〃

項目番号	遺跡名	所在地	遺物保管者・保管場所	主な出土石器	調査	文献
39	新南部	熊本市新南部	福田正文　橋本誠二	ナイフ	表採	50
40	葉山	熊本市戸島町葉山	熊本県教育委員会	細石器	発掘調査（昭48）熊本市教育委員会	〃
41	久保	上益城郡御船町久保	熊本県教育委員会	ナイフ	発掘調査（昭48）熊本県教育委員会	26. 〃
42	南小池	上益城郡御船町南小池	熊本大学考古学研究室	細石器	表採	〃
43	下横田	上益城郡甲佐町下横田	熊本大学考古学研究室	細石器	表採	〃
44	大峯	上益城郡甲佐町大峯	熊本大学考古学研究室 緒方勉　佐藤伸二	スクレーパー	発掘調査（昭39）国分直一　三島　格他	5．6．〃
45	上ノ原	下益城郡城南町大字塚原	熊本県教育委員会	ナイフ	発掘調査（昭55）熊本県教育委員会	43. 〃
46	尾窪	下益城郡城南町大字尾窪	熊本県教育委員会	スクレーパー	発掘調査（昭47）熊本県教育委員会	13. 〃
47	後田	下益城郡城南町大字藤山	豊崎晃一	細石器	表採	〃
48	曲野	下益城郡松橋町大字曲野	熊本県教育委員会	ナイフ・台形石器	発掘調査（昭57・58）熊本県教育委員会	39.46.〃
49	田平	宇土市田平	宇土市教育委員会	ナイフ	発掘調査（昭56）宇土市教育委員会	〃
50	立神ドトク	八代郡宮原町大字立神川上	熊本県教育委員会	ナイフ・細石器	発掘調査（昭51）熊本県教育委員会	24. 〃
51	岩立C	八代郡宮原町大字立神岩立	熊本県教育委員会	ナイフ	発掘調査（昭51）熊本県教育委員会	22. 〃
52	岩野	球磨郡水上村岩野	福田正文　吉田雅人	ナイフ	表採	〃
53	里ン城	球磨郡多良木町里ン城	熊本県教育委員会	細石器	発掘調査（昭54）熊本県教育委員会	19. 〃
54	尾鉢	球磨郡上村尾鉢	高田素次	細石器	表採	〃
55	五本松	球磨郡免田町大字永才字五本松	高田素次	剝片	表採	〃
56	大丸・藤ノ迫	球磨郡山江村大字山田字藤ノ迫	熊本県教育委員会	ナイフ・台形石器	発掘調査（昭58・59）熊本県教育委員会	51. 〃
57	狸谷	球磨郡山江村大字狸谷	熊本県教育委員会	ナイフ・尖頭器 細石器	発掘調査（昭59・60）熊本県教育委員会	33.49.〃
58	中山狸谷	球磨郡山江村大字山田字中山狸谷	松舟博満	ナイフ	表採	44. 〃
59	段岡	球磨郡山江村大字山田字段岡	松舟博満	ナイフ	表採	44. 〃
60	射場ノ本	人吉市上永野町字射場ノ本西原	松舟博満	ナイフ	表採	33. 〃
61	大原	人吉市戸越町字大原	松舟博満	彫器・石核	表採	33. 〃
62	永葉山	人吉市永野町字永葉山	松舟博満	ナイフ	表採	33. 〃
63	小柿	人吉市下戸越町小柿	松舟博満	尖頭器	表採	33. 〃
64	鳴石	人吉市木地屋町字鳴石	松舟博満	尖頭器	表採	33. 〃
65	高山	人吉市下戸越字高山	松舟博満	細石器	表採	〃
66	佐無田	人吉市願成寺大字鼓ケ峰	熊本県教育委員会	ナイフ	発掘調査（昭60）熊本県教育委員会	〃
67	矢岳	人吉市矢岳町	高田素次	握槌	表採	〃
68	国見	人吉市大塚町国見	菖蒲和弘	ナイフ	表採	〃
69	田野	人吉市田野町	高田素次	細石器	表採	〃
70	一本松	人吉市北願成寺町一本松	松舟博満	石核	表採	45. 〃
71	山渋谷	球磨郡山江村大字山田山渋谷	松舟博満	ナイフ	表採	44. 〃
72	田栗須	人吉市上戸越町田栗須	松舟博満	尖頭器	表採	〃
73	熊ケ倉	芦北郡芦北町湯浦熊ケ倉	西健一郎	ナイフ	表採	〃
74	茂川カントリークラブ	水俣市茂川	片岡英治	ナイフ・三稜尖頭器	表採	〃
75	石飛	水俣市石坂川石飛	池水寛治　熊本県教育委員会	ナイフ・細石器	発掘調査（昭42・43）池水寛治 （昭60）熊本県教育委員会	7．8．〃
76	ぐみの木段	水俣市大字湯出字頭石鬼ケ嶽拓地	池水寛治	ナイフ・細石器	表採	8. 〃
77	五目木	水俣市大字湯出字頭石五目木	池水寛治	ナイフ	表採	8. 〃

※文献番号は文献目録の番号である。

3．旧石器時代関係文献目録

1．大　脇　直　泰	「熊本県菊池郡発見の石槍に就いて」『若木考古』50号	1958
2．平　岡　勝　昭	「熊本県発見の無土器文化資料の一例」『熊本史学』19・20号	1960
3．坂　本　経　尭	「上代の菊池文化」『菊池文化物語』	1960
4．杉　村　彰　一	「熊本県鹿本郡鹿北町柿原発見の尖頭器について」『考古学集刊』第3巻第3号	1968
5．（記　　事）	「大峯遺跡」　熊本日日新聞1965.6.15	1965
6．国分直一・三島　格	「熊本県における考古学調査の概要」『九州考古学』25・26・P19	1965
7．池　水　寛　治	「熊本県水俣市石飛分校遺跡」『考古学ジャーナル』No.21	1968
8．出水高校考古学クラブ	「水俣市石乳遺跡の第2次調査」『もぐら第9号』	1970
9．国　分　直　一	「賀川論文に対する論評」『第四紀研究』	1971
10．高木正文・清水宗昭	「熊本県玉名郡菊水町発見の先土器時代遺物について」『九州考古学』41～44号	1971
11．国　分　直　一	「先史時代の九州と大陸・南方文化」『九州文化論集』	1973
12．（記　　事）	「平山宿遺跡」熊本日日新聞　1973．8．21	1973
13．江　本　　直　他	『尾窪』　熊本県文化財調査報告書第12集　熊本県教育委員会	1973
14．二　宮　忠　司	「九州におけるナイフ形石器について」『九州考古学の諸問題』	1975
15．富　田　紘　一	「原始古代」『鹿本町史』	
16．富　田　紘　一	「旧石器・縄文時代の熊本」『新熊本の歴史』	1977
17．松　村　道　博　他	『谷頭遺跡』　谷頭遺跡調査団	1978
18．緒方　勉・田中寿夫	『下城Ⅰ』熊本県文化財調査報告書第37集　熊本県教育委員会	1979
19．大田幸博・下村悟史	『里ン城』熊本県文化財調査報告書第51集　熊本県教育委員会	1979
20．白木原　和　美　他	『桑鶴土橋』　熊本大学考古学研究室	1979
21．（記　　事）	「谷尾崎遺跡」熊本日日新聞　1979．9．29	1979
22．村　井　真　輝　他	『五ッ穴横穴古墳群』熊本県文化財調査報告書第34集	1979
23．富　田　紘　一	「象と阿蘇と柿原遺跡」『北部町史』	1979
24．江　本　　直　他	『立神ドトク遺跡』熊本県文化財調査報告書第35集　熊本県教育委員会	1979
25．緒方　勉・古森政次	「下城Ⅱ」熊本県文化財調査報告書第50集　熊本県教育委員会	1980
26．江　本　　直　他	『久保遺跡』熊本県文化財調査報告書第40集　熊本県教育委員会	1980

27. 乙 益 重 隆　「原始」『多良木町史』　1980
28. 野 田 英 治　「豊野村採集の先土器時代資料」『とどろき』6号　1980
29. 古 森 政 次　「鎌田辰則氏採集の尖頭器について」『とどろき』6号　1980
30. 木 﨑 康 弘　「九州地方の細石核」　『熊本史学』41～44号　1981
31. 隈　昭 志　「原始古代」『植木町史』　1981
32. 小 畑 弘 己　「矢部町名連川の縄文時代遺物」『赤レンガ』熊本大学　1981
33. 木 﨑 康 弘　「熊本県球磨・人吉地方の先土器時代資料について」
『肥後考古』第2号　1982
34. 平山修一・古森政次　『田平遺跡』宇土市埋蔵文化財調査報告書第5集 宇土市教育委員会　1981
35. 古 森 政 次　「熊本県下新発見の旧石器時代遺跡について」『旧石器考古学24』　1982
36. 新 山　聡　「熊本県下における舟底形細石核の新例」赤れんが出版会　1982
37. 松 舟 博 満　「永野の旧石器」『郷土』第10号　1982
38. 木 﨑 康 弘　「阿蘇をめぐる先土器時代」『阿蘇/海と山と里の文化』えとのす22　1983
39. 江 本　直　「層位・旧石器時代遺物」『曲野遺跡Ⅰ』
熊本県文化財調査報告書第61集　熊本県教育委員会　1983
40. 江 本　直　「熊本地方における火山灰層と遺物」 肥後考古学第176回例会資料　1983
41. 松 本 雅 明　肥後読史総覧　鶴屋百貨店　1983
42. 島津義昭・古森政次　『鞠智城』　熊本県文化財調査報告書第59集　熊本県教育委員会　1983
43. 松本健郎・木﨑康弘　『上ノ原遺跡Ⅰ』　熊本県文化財調査報告書第58集
熊本県教育委員会　1983
44. 松 舟 博 満　「消される遺跡地」『郷土』第11号　1983
45. 松 舟 博 満　「シラスの下の文化層」『くまひと』第3号　1983
46. 江 本　直 他　「曲野遺跡Ⅱ」熊本県文化財調査報告書第65集 熊本県教育委員会　1984
47. 江 本　直　「旧石器時代・縄文時代」『苓北町史』　1984
48. 長 野 真 一　「南九州地域の火山灰層」『考古学ジャーナルNo.242』　1985
49. 古 森 政 次　「中九州地域の火山灰層」『考古学ジャーナルNo.242』　1985
50. 肥 後 考 古 学 会　「特集：熊本の旧石器文化」『肥後考古』第5号　1985
51. 木 﨑 康 弘　『大丸・藤ヶ迫』熊本県文化財調査報告書第80集　1986

第Ⅶ章　総　括

現在、我国の旧石器時代遺跡の数は約3,000ヶ所を越えるといわれている。その殆んどは旧石器時代後期・晩期の遺跡であるが、最近では東北地方を中心に30,000年を越える遺跡の発掘調査が続き、前期旧石器時代遺跡の存在確立とその内容追求に積極的な展開が見られている。特に宮城県座散乱木・馬場壇遺跡らでは良好な火山灰層中から石器群が検出されており、火山灰の地質分析や科学的年代測定が実施され、十数万年前という大きな数字が示されている。まさに日本旧石器人の黎明を証するものとされる[註1]

さて、この時代の地球は第四紀の更新世であり、氷期と間氷期とが交互に繰り返されている。氷期の最盛期には日本列島は陸橋によって大陸と地続きになっている。したがって大陸から大型動物らが渡来してきている事実が化石などによって知られるし、動物を追う様にして人類も移動してきたものと理解される。最後の氷期は20,000～15,000年前が最盛期であり、気温は現在よりも年平均で７～８℃低かったといわれている。九州は冷温帯落葉樹が拡がっている状態で、ナウマン象・野牛・オオツノジカらが往来している世界である。[註2]

この間、日本列島では各地で盛んな火山活動が起っており、多くの火山灰や火山砕屑物を降下させ、その周辺の地表を厚く覆ってきている。これらの堆積物を研究することによって地表面や構成面の生成起源や年代を明らかにすることができ、各地域間の時間的対比作業にも重要な役割りをはたす事になる。そして、旧石器時代をはじめとした遺跡の遺構や遺物が良好なテフラ層から検出される場合には、確実な層位的編年と文化内容の把握や変遷を知るための重要な役割りをはたすことができる。

特に最近のテフノロジーは広域テフラの発見が続き、汎日本的な層位比較に重要な鍵層を与えている。AT（姶良－丹沢）火山灰約21,000～22,000年前や、Ah（アカホヤ）約6,000年前が最も知られるものである。熊本県地域でも火山灰層の地質分析が実施されるようになり、両者が広く存在している事実が明らかになってきている。[註3] なかでもAhは「キナコ」と俗称されるように黄褐色を呈する特徴的な色調で、肉眼観察による識別も可能なところがあり、時期差の示標となるばかりでなく、遺構検出面とされることも多く、発掘調査と非常に係わり合いの多い火山灰である。[註4]

ところで、熊本県地域には阿蘇火山が存在し、有史以来幾重にも重なった厖大な火山活動痕跡を見ることができる。将来的にこれらの豊富な火山灰層の各々の噴出起源とその年代が明確にされれば考古学研究上にこのうえない細かな時間的尺度を提供してくれよう。このほか、熊本県内では九住山火山灰、雲仙火山灰、霧島火山灰、加久藤火山灰などが阿蘇火山起源を主とした火山灰の中に入り混じっていることが指摘されている。何れもその分布は噴出火口に近い地域に限定はされるが、より細かな地域間対比の示標とされる日が待たれる。

さて、最近、これらの火山灰層と相係わり合う旧石器時代の遺跡・遺物を検出できる事例が増えてきており、明確な層位的編年や石器群内容の把握に大きな手がかりを与えてくれている。

従来の阿蘇郡小国町下城遺跡、[註5] 下益城郡松橋町曲野遺跡、註５球磨郡山江村狸谷遺跡[註6]らの地質分析に加えて、今回、阿蘇郡阿蘇町大観峯遺跡、菊池市伊野遺跡、水俣市石飛東遺跡の地質分析結果を得ることができた。そして、その対比図が柴田喜太郎氏によって呈示されている。[註7]

前記のように県内の主要な遺跡の地質分析結果をもとにした層位対比が語られ、基本土層との対比を礎にして県内の旧石器時代を第Ⅰ期～第Ⅳ期に分け、各期毎の石器群様相とその特徴や変遷の追求作業を続けてきているが、[註8] 今回の発掘調査によって良好な成果を得た大観峯遺跡、伊野遺跡、石飛東遺跡の石器群をこれらに位置づけ検討を加えて見たい。

〈大観峯遺跡石器群〉の位置

今回の調査で出土した主な石器には剝片尖頭器と削器・掻器がある。従来採集された石器にナイフ形石器、剝片尖頭器、台形石器などがあるが、調査の結果、石器包含層は単一である可能性が強いため[註9]包括して述べたい。とすると、石器群はナイフ形石器＋剝片尖頭器＋台形石器＋掻器・削器の石器組成を示すことになる。熊本県地域では稀な流紋岩を主要な石材としていること、剝片尖頭器の出土数が多い事が特徴として述べられる。ナイフ形石器は縦長剝片を素材しして基部加工が顕著にみられ、側縁へのブランティングは部分加工で終えている。基部の片方にノッチ状の抉り加工がある。このナイフ形石器の基部にノッチ状の加工を施こす特色は球磨郡山江村大丸・藤ノ迫遺跡[註10]や同郡同村狸谷遺跡の「ＡＴ」上位の石器群に類似する特色である。そして、この特徴を有するナイフ形石器は後記する石飛東遺跡でも出土しており、その位置は「ＡＴ」平行か、「ＡＴ」以降で長く間を置かない時期の所産とできるし、鹿児島県指宿市小牧ⅢＡ遺跡[註11]の「ＡＴ」直上から出土した石器群と出土状態や石器組成に類似性が見られる。以上の様に大観峯遺跡を熊本県地域旧石器時代区分第Ⅰ期～第Ⅳ期で見れば、第Ⅲ期に相当できる。この第Ⅲ期は下城遺跡[註12]第１文化層で代表されるもので基本土層で述べれば、第Ⅱ期の所謂「Ｂ・Ｂ」暗色帯より上位で「ソフトローム」「ハードローム」層を含んでいる。当然、第Ⅲ期の細分が計られていかれようが、「Ｂ・Ｂ」から上位で「ＡＴ」までを仮りに第Ⅲ－ａ期と区分すれば、今回の大観峯の石器群は「ＡＴ」上位と判断できるので「ＡＴ」平行もしくはそれよりも新しい時期の第Ⅲ－ｂ期の石器群として設定を行っておきたい。

なお、今回の地質分析では「ＡＴ」の位置が明確にできていない。第１および第４トレンチの調査を実施し、「ＡＴ」火山灰は第１トレンチでの第Ⅰ～Ⅵ層のどこかに認められるものと予想されたが、サンプリングの問題もあり再度、分析の機会を持つことが必要となろう。第１トレンチで述べれば、第Ⅸ層が厚い「Ｂ・Ｂ」暗色帯であり、第Ⅸ層が黄褐色を呈する粘質土であり「鳥栖ローム」と判断される。これらより「ＡＴ」の位置が下がることは予想されず、第Ⅶ層は付近一帯に認められる赤色軽石層と見られ、大矢野原遺跡の側の様に「ＡＴ」はこれらより上位に位置するはずである。相対的に「ＡＴ」の位置を求めて行けば第Ⅰ～Ⅵ層のどこかに「ＡＴ」火山灰の火山ガラスや重鉱物のピークは認められるものと思われる。

〈伊野遺跡石器群〉の位置

伊野遺跡は造成工事のため遺跡の大半を失してしまっているが、僅かに残されたトレンチ設定地で良好な状態で石器群を検出することができている。県内でも最も火山灰に恵れた状況を示す地域での出土でもあり、今後、基礎的な資料として扱うことができよう。石器群については伊野遺跡第１～３文化層の設定を行ったところであるが、以下、その編年的位置づけと特色を述べてみたい。

伊野第１文化層は、その出土層を「ソフトローム」上位と「黒ニガ」に求めることができ、第Ⅳ期に位置づけることができる。県内で発掘調査等によって細石器の出土層を明確にできた事例は少なく、今回の結果は評価できよう。この第Ⅳ期の中で細石器自身がどのような形態・技術的変遷を見せ、また、石器の組成や縄文土器との共伴関係などの問題点は今後に求めていかねばならない。

出土した細石核は黒曜石の角礫を素材としており、形状・技術的には「野岳」型[註13]の範疇に含まれるものであろう。

伊野第２文化層は「ソフトローム」層に求められる石器群であり、第Ⅲ期に位置づけることができる。第Ⅲ期は「ＡＴ」下位を第Ⅲ－ａ期、上位を第Ⅲ－ｂ期と第Ⅲ－ｃ期に分離を試みてみた。「ハードローム」を「ＡＴ」を介して上下に分けて、それぞれ第Ⅲ－ａ期と第Ⅲ－ｂ期とにするものであり、「ソフトローム」は第Ⅲ－ｃ期とされるものである。伊野第２文化層は第Ⅵ層「ソフトローム」から検出される石器群であり、第Ⅲ－ｃ期と位置づけている。

石器群はナイフ形石器を中心として、剝片尖頭器、削器、彫器、掻器、三稜尖頭器などがある。ナイフ形石器は小形で切り出し状の刃部を有するもの、綿密な二側縁加工を施こし柳葉形を呈するもの、大形の縦長剝片を素材として部分的に粗雑なブランティングを施こすものなどが見られ、ナイフ形石器の最盛期～衰退期への状況を示しているものと思われる。そして、剝片尖頭器や三稜尖頭器を有しているのが、数量が少なく、形状、技術的に見て、この器種の最盛期を示すものとは思われない。台形石器の出土も少ない。安山岩（サヌカイト）を素材とする石器が非常に数多いことを述べておかねばならない。熊本県内では原石を認めることはできない石材であり、西北九州、中でも佐賀県多久市や小城地方に原産される安山岩である可能性が強いものである。大形の端正な縦長剝片を素材とする部分加工のナイフ形石器や、最も多いのは削器であり、三稜尖頭器[註14]も見られる。石核や石屑の出土が少なく、製品化された石器が搬入された可能性が強い。削器とした石器の中に面加工の著しいものがある。両面加工石器につながるものであるのか興味がもたれる。

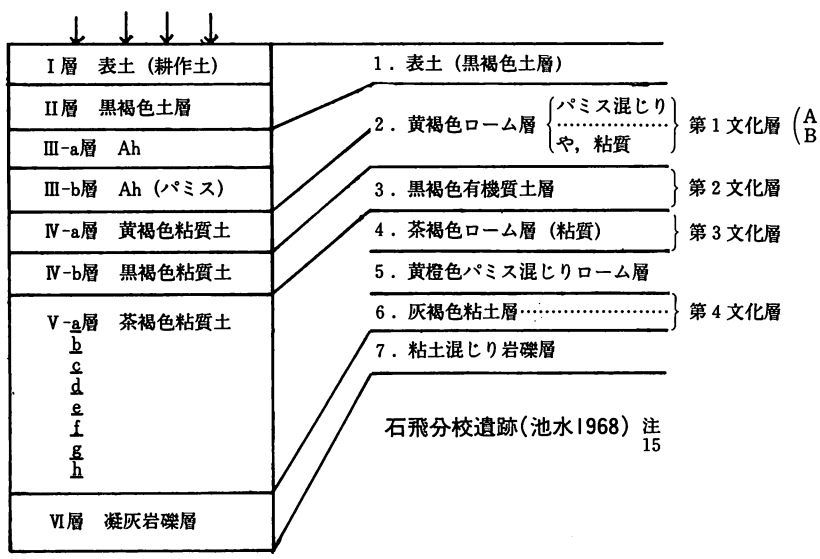
伊野第３文化層は「ハードローム」層から検出された石器群であり、第Ⅲ期に位置づけられ、前記区分で第Ⅲ－ｂ期とすることができる。

伊野第２文化層に比べて石器の出土数が少ないため石器組成などを明らかにできないが、小形の切り出し状ナイフを有することが述べられる。「ＡＴ」下位からの系統を示すものであるのか注目される。また、第２文化層で大きな展開を見せる大形の縦長剝片を素材とする剝離技術の起源も今後に求めなければならない問題である。

尚、地質分析の結果では「火山ガラス」と「重鉱物含有率」のピークにはいささかのズレが認められる様であり、ズレそのものについての分析、解釈の技を知らないが、今後、両者のセット現象の解釈には、地域ごとの分析集計を含めての資料の積み上げと検討が必要とされてこよう。何れにしろ単線的な線引きはできないが、第Ⅶ層「ハードローム」層の中部位に「ＡＴ」火山灰が位置しているとの解釈のもとで以上の報文を進めてきている。

〈石飛東遺跡石器群〉の位置

今回の調査で第Ⅲ層は所謂「Ah」アカホヤ層であることが明らかになった。第Ⅳ層には縄文時代の押型文や円筒土器とともに細石器が出土しており、混在した出土状況を示している。これは、熊本県地域基本土層の第Ⅳ層「黒ニガ」層のあり方と類似し、伊野遺跡第Ⅳ層と共通している。編年区分では第Ⅳ期に相当し、旧石器～縄文時代への移行期としての普遍的現象として捉えることが可能であろう。



石飛東遺跡（1985）

さて、第Ⅴ層が石器群の主要な包含層であった。石飛分校遺跡での第Ⅳ～Ⅵ層に相当するが、今回はその特徴的な第Ⅴ層黄褐色パミス混じりローム層を明確に識別することが困難であった。したがって、第Ⅴ層茶褐色粘質土で一括しており、約50～80cmの厚さがある。調査は上位から10cm毎に掘り下げ機械的に第Ⅴ－a～h層としている。

地質分析の結果は第Ⅲ層に「Ａｈ」の火山ガラスと重鉱物が典型的な状況で検出され確定される。そして、第Ⅴ層の上部に約25cmに亘って「ＡＴ」火山ガラス、重鉱物が検出されているが、不安定な堆積状況を示すことが報告され「ＡＴ」火山灰そのものを単一層として捉えることはできないであろう。地質分析に加えて地層の堆積起因や原因を追求する作業が今後に課せられてこよう。

さて、第Ⅴ層は上部から下部まで通して石器群が出土しており、最下部では第Ⅵ層の礫層に密着した出土状態を示している。乱暴な分離方法ではあるが、第Ⅴ層を三分割して石器群様相を捉えてみたい。

すなわち、地層状態から

第Ⅴ－ａ・ｂ・ｃ層（30cm）＝第Ⅴ－１文化層

第Ⅴ－ｄ・ｅ・ｆ層（30cm）＝第Ⅴ－２文化層

第Ⅴ－ｇ・ｈ層（20cm）＝第Ⅴ－３文化層

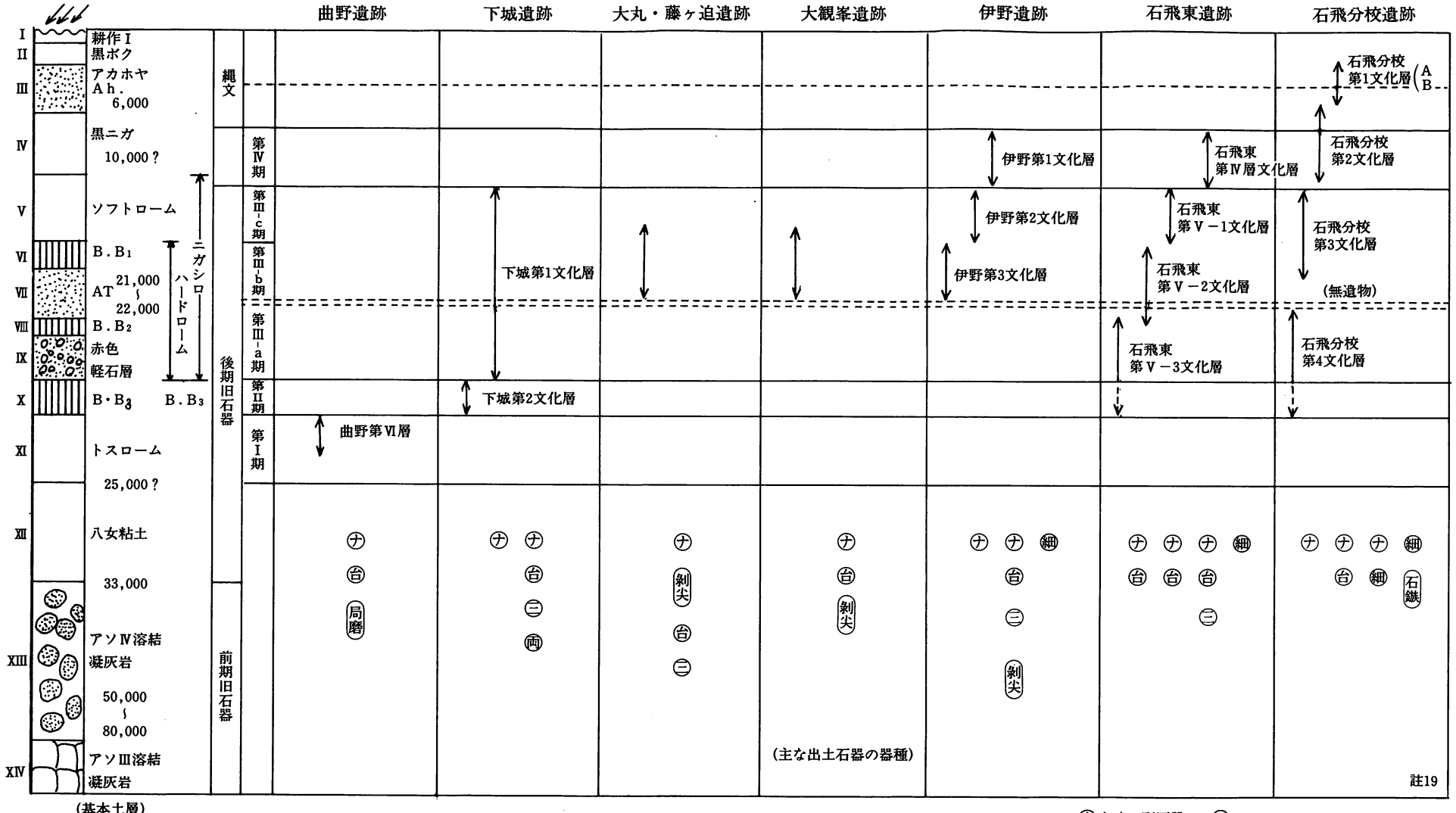
として進めて見たい。

第Ⅴ－１文化層はナイフ形石器を主体とするが上位には細石器の出土もある。第Ⅴ－ａ・ｂ層から第Ⅳ層に細石器のベースが位置づけられ、第Ⅳ層で縄文時代へと移行するものであろう。細石核は角・円礫の一端に打面調整を施したものが見られ、側面への調整剥離は及んでいないもので、殆んどが「野岳」型の範疇に含められよう。この第Ⅴ－１文化層の上部から第Ⅳ層の細石器が主体となる石器群の編年は第Ⅳ期に位置づけられよう。

第Ⅴ－１文化層の主体をなすナイフ形石器、台形石器はⅤ－２文化層に比べて出土数の減少がある。形態的にはナイフ形石器はＢ・Ｇ・Ｊ型、台形石器はＡ・Ｄ型が多いことが述べられる。台形石器の中にはＧ型（百花台型）[註16]が一点含まっている。また、三稜尖頭器も出土しておりこの文化層での石器組成の特色を表わすものであろう。これらの石器群は第Ⅲ－ｃ期に位置づけができよう。

第Ⅴ－２文化層はナイフ形石器の大盛行期の状況を如実に示している。出土数も多く分類した形態の殆んどが出揃っている。全体的に見ると小形の切り出し状を呈し二側縁加工を施したものが多い。特徴的に基部の片方に抉りを有するF型が見られる。台形石器は逆台形の形状をとり、二側縁加工を施した「日ノ岳」[註17]型が凌駕するが、一部平担剥離を行ったものがあり、「枝去木」[註18]型との関連が問われる。縦長剥片の中には５cmを越えるものがあり（120、125、129）、大型剥片剥離技術が確実に展開していることを示している。剥片尖頭器や三稜尖頭器は検出されていないが以上の石器群はナイフ形石器が大盛行する時期で第Ⅲ－ｂ期に位置づけられよう。一部は「ＡＴ」をはさみ第Ⅲ－a期の石器も含まっていよう。

第Ⅴ－３文化層（第Ⅴ－ｇ・ｈ層）はナイフ形石器と台形石器とが出土している。ナイフ形石器は小形で不定形剥片を素材としている。Ｄ・Ｅ・Ｇ・Ｉ型で示される様に「切り出し状ナイフ」の形状をとり二側縁加工を行ったものである。台形石器も同じく小形で不定形剥片を素材としている。Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｆ型の形態であり、逆台形の形状で粗い二側縁加工を施こし、下縁への加工は行なわれていない。「日ノ岳」型の台形石器として捉えることができよう。以上の石器群の特徴は曲野第Ⅵ層の石器群に非常に近いことを示している。県内では第Ⅱ期（下城第２文化層）の出土例が少なく石器群の実態を定かにできていないので対比できない状態であるが、この石飛東第Ⅴ－３文化層の石器群を「ＡＴ」下位の第Ⅲ－ａ期～第Ⅱ期に位置づけて適当であろう。そして曲野第Ⅵ層の石器群に類似する特徴はさらに第Ⅰ期近くに位置づけられる可能性も有しているといえよう。



熊本県主要遺跡石器群編年表

〈石器群変遷〉について

以上の様に大観峯、伊野、石飛東遺跡の石器群の編年位置づけを行っていくと、後期旧石器時代の第Ⅰ期～第Ⅳ期の骨組みに確かな資料をつけ加えることになる。

第Ⅰ期は曲野第Ⅵ層の石器群で示すことができ、小形のナイフ形石器と台形石器それに局部磨製石斧の存在があり「トスローム」上位にのっている。

第Ⅱ期は下城第2文化層と石飛東第Ⅴ－3文化層で示すことができよう。石飛東第Ⅴ－3文化層では、曲野第Ⅵ層の影響と特色を継続させ、下城第2文化層では二側縁加工で柳葉形をなす所謂「九州型ナイフ」の出現を臭わせる。そして、ナイフ形石器の大形化の傾向のきざしと、縦長剥片剥離の展開を感じさせる。

第Ⅲ期は「ＡＴ」をはさみ第Ⅲ－ａ期～第Ⅲ－ｃ期を設定している。石飛東第Ⅴ－2文化層は第Ⅲ－ａ・ｂ期の双方にからんでいると思われる。第Ⅲ－ｂ・ｃ期は「ＡＴ」上位でナイフ形石器が大盛行をなし、衰退へと向う長い時間である。大観峯、伊野第2・3文化層、石飛東第Ⅴ－1・2文化層が位置づけられる。ナイフ形石器は全ての形態が出揃うと見てよく「九州型ナイフ」も早い段階から見られるし、基部に抉りを施こす特徴的なナイフもこの段階に出現している。台形石器は「日ノ岳」型や平坦剥離技術の展開によって「枝去木」型が下城第1文化層に見られ、一般的に流布する様である。それに、剥片尖頭器（大観峯）が認められ、息を長くする石器の様である。やがては三稜尖頭器の出現となり、下城第1文化層、石飛東第1文化層に認められ細石器出現の前段階まで続いている。

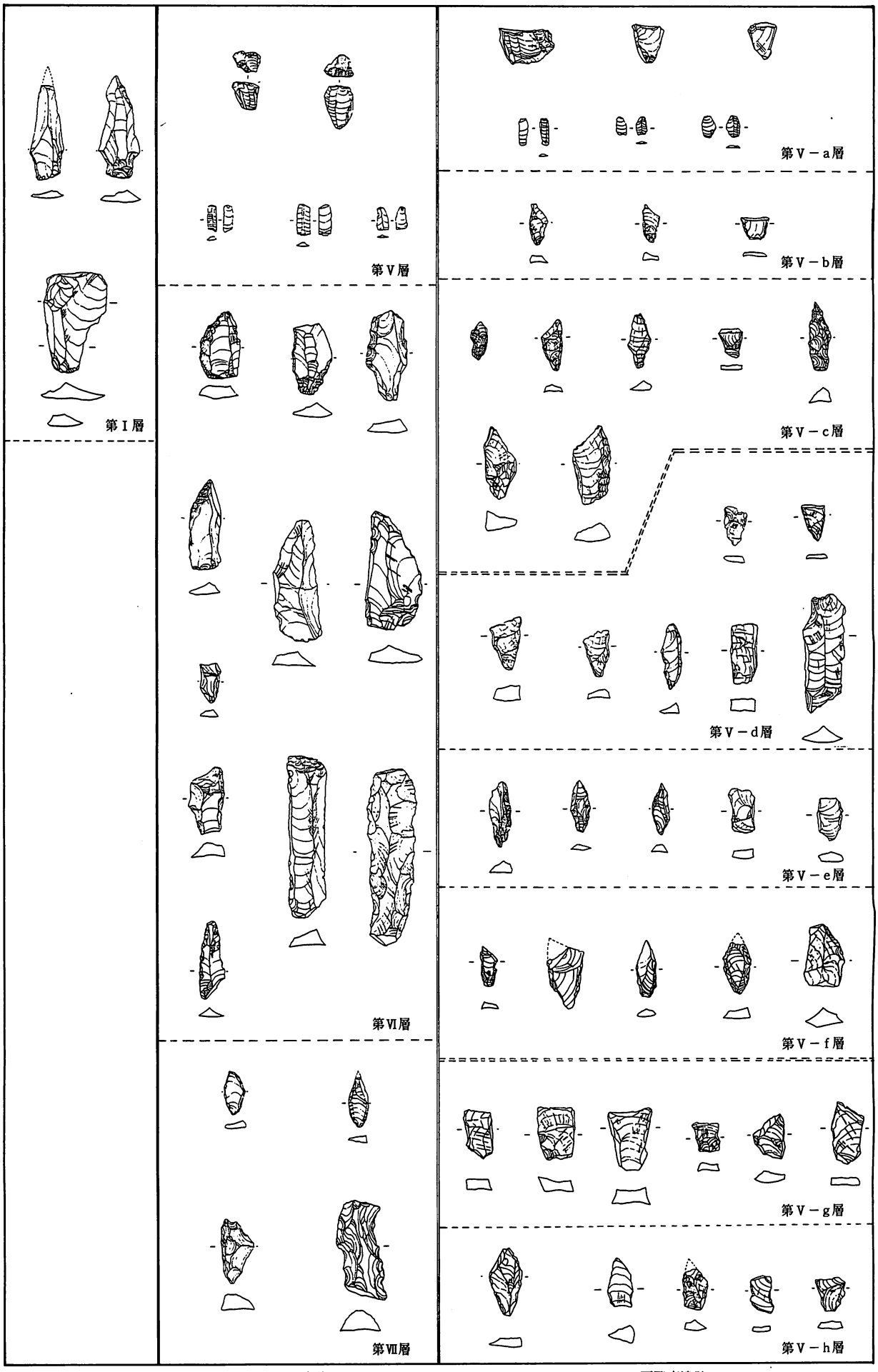
第Ⅲ－ｃ期の後半ではナイフ形石器、台形石器の数が減少とともに形状のくずれや二次加工技術の衰退が見られ部分加工に終わるものが増えている。台形石器の中で「百花台」型は細石器出現の直前まで出土している。

また、縦長剥片剥離技術の出現は「ＡＴ」に前後して、主に黒曜石の大型のナイフ形石器「九州型ナイフ」の出現と相係わり合う様である。そして、「ＡＴ」上位で剥片尖頭器、やがて三稜尖頭器の出現に伴いその素材として、黒曜石のみならず安山岩(サヌカイト)、流紋岩に対する大型の石刃技法が展開していったものであろう。また、大型の縦長剥片を素材として、二面加工尖頭器が下城1文化層に認められるし、伊野第2文化層のスクレーパー（88）は安山岩を用いる両面加工の尖頭器とのつながりが指摘できよう。細石器出現の前の時期と理解される。

第Ⅳ期は細石器が主体となる。伊野遺跡では「ソフトローム上位～クロニガ」、石飛東遺跡では第Ⅴ－ａ・ｂ層～第Ⅳ層に出土している。共伴する石器は明確にできていないが、細石核は角・円礫の一部に平坦打面、もしくは調整打面を持つもので「野岳型」の範疇にはいるものが殆んどである。今後、形態変遷や共伴石器、共伴土器についての資料を求めていかねばらない。

このほかでは、石核からの剥離技術の段階的、時間的システムの解明には時間を要しそうである。また、瀬戸内地方を中心として、最近では西北九州でも出土が見られる様になった「国府型ナイフ」[註19]は今回の調査では出土していない。県内に類似する資料が、二、三点あるが何れも出土層を明確にしないし、単発資料であり、石核の出土もなくいまだ評価できる段階に至っていない。

主要石器一覧表


第Ⅰ層
第Ⅴ層
第Ⅵ層
第Ⅶ層
第Ⅴ－a層
第Ⅴ－b層
第Ⅴ－c層
第Ⅴ－d層
第Ⅴ－e層
第Ⅴ－f層
第Ⅴ－g層
第Ⅴ－h層
大観峯遺跡
伊野遺跡
石飛東遺跡

註

註１　藤村新一他『座散木遺跡』石器文化談話会　1983

註２　戸沢充則・安蒜政雄「先土器時代とその環境」『探訪先土器の遺跡』　1983

註３　町田洋・新井房夫「広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義」『科学』第16巻　1976

註４　古川博恭・満塩博美「熊本県曲野遺跡の地質層序－とくに旧石器包含層の火山灰について－」『曲野遺跡II』熊本県教員委員会　1984

柴田喜太郎「熊本県松橋町曲野遺跡の堆積物－曲野遺跡および関連地域の堆積物に含まれる火山噴出物の検出と対比－」『曲野遺跡II』熊本県教育委員会　1984

註５　籾倉克幹「下城遺跡の火山灰と地質環境」『下城Ｉ』　1979

古川博恭「下城遺跡の地質層序と遺物出土層準」『下城II』1980

註６　柴田喜太郎「熊本県松橋町曲野遺跡の堆積物－曲野遺跡および関連地域の堆積物に含まれる火山・噴出物の検出と対比－」『曲野遺跡II』熊本県教育委員会　1984

註７　柴田喜太郎「熊本県内旧石器遺跡の堆積物に含まれる火山噴出物の検討」『熊本県旧石器時代調査報告書』　1986

註８　江本直『曲野遺跡II』熊本県教育委員会　1984

江本直「旧石器時代研究の現状と課題」『肥後考古』第５号　1985

註９　古森政次「熊本県下新発見の旧石器時代遺跡について」『旧石器考古学24』　1983

註10　木﨑康弘『大丸・藤ノ迫遺跡』熊本県教育委員会　1986

註11　長野真一「小牧IIIA遺跡の紹介」『指宿史談』創刊号　1979

註12　緒方勉、古森政次『下城II』熊本県教育委員会　1980

註13　鈴木忠司「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』23－８　1971

橘昌信「九州における細石器文化の共伴遺物」『肥後考古』第５号　1985

註14　松尾吉高氏御教示。

註15　池水寛治「熊本県水俣市石飛分校遺跡」『考古学ジャーナル』No.21　1968

註16　麻生優他「百花台遺跡」『日本旧石器文化３』雄山閣　1976

小畑弘己「台形石器」『季刊考古学』第４号雄山閣　1983

註17　下川達彌『日ノ岳遺跡』長崎県立美術博物館　1981

註18　註17，小畑弘己「台形石器」『季刊考古学』第４号雄山閣　1983

註19　松藤和人「九州における国府系旧石器の系譜－岩戸Ｉ・船塚　第VII層石器群を中心に－」『肥後考古』第５号　1985

付　説

熊本県内旧石器遺跡の堆積物に含まれる火山噴出物の検討

広島大学理学部地鉱教室　　柴田喜太郎

I　はじめに

本報告は昭和60年度に熊本県教育委員会により発掘調査が行われた伊野遺跡と石飛東遺跡および大観峯遺跡の堆積物に関する検討結果を主とし、昭和59年に熊本県教育委員会より刊行された曲野遺跡IIの報告書の中で、柴田（1984）が検討し取りまとめた曲野遺跡・狸谷遺跡と上場遺跡および関連地域の資料を含め考察を加えたものである。

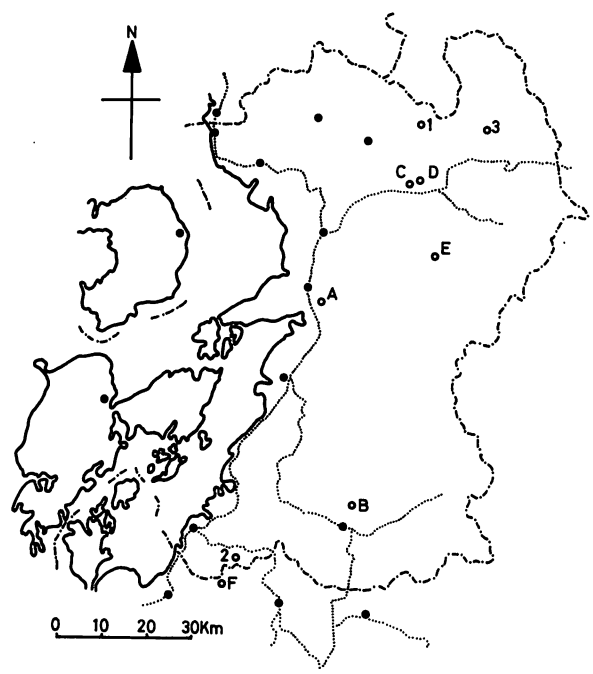
本報告において検討した資料は次の地点より採取した。以下に示した地点を除いて、その他の資料については柴田（1984）を参照されたい。資料採取地点を第1図に示した。

1．熊本県菊池市大字原字伊野　伊野遺跡

2．熊本県水俣市大字石坂川　石飛東遺跡

3．石飛東遺跡の東約180mの道路法面

4．熊本県阿蘇郡阿蘇町大観峯　大観峯遺跡



第I図　試料採取地点位置図

1：伊野遺跡　2：石飛東遺跡
3：大観峯遺跡
A：曲野遺跡　B：狸谷遺跡
C：大津町高尾野　D：大津町新小屋
E：矢部町大矢野原　F：上場遺跡

本報告をまとめるに際して、試料採取の便宜をおはかり下さった熊本県教育委員会関係各位、火山噴出物に含まれる鉱物の光学性について御教示を賜わった群馬大学教育学部地学教室新井房夫教授の御援助に対して深甚なる謝意を表する。

II　試料採取地点の地形と地質の概要

II－1　伊野遺跡（第2図，4tr－W・S）

伊野遺跡は地形区分では八女山地に含まれる津江山地に位置し、向柏川と菊池川が作る深い谷にはさまれ、西に緩く傾斜する台地上にある。この地域には阿蘇火山の噴出物が分布している。

伊野遺跡第4トレンチ西側（4tr－W）の地点では、最上部約50cmの盛土の下に層厚2m30cmの堆積物があり、V層～IX層に土層区分される。V層は有機物を含み暗色を示す堆積物（IV層？）の直下にあり、最上部に黒色～暗褐色シルトを含む赤褐色シルトからなる。VI層は全体が赤褐色シルト。VII層上半部は暗褐色シル

ト、以下はⅧ層に続く暗褐色～黒色シルトからなる。Ⅸ層は赤褐色シルトからなり鳥栖ロームに相当すると考えられる。第4トレンチ南側（4tr－S）の試料採取地点では厚さ20cmの盛土の下に150cmの堆積物があり、西側地点と同様にⅤ層～Ⅸ層に土層区分される。堆積物の層相は最下部の鳥栖ロームまでの深さがやや浅い点を除くと、先に述べた西側の層序と同じである。

Ⅱ－2　石飛東遺跡（第3図、3tr－e－5gr, B）

石飛東遺跡は水俣市街の南東約12km、鹿児島県の上場遺跡の北約2kmにあって、共に県境から北に続く高度500m前後の台地上に位置する。この地域は地形区分によると九州山地の北部地域に含まれ、基盤には鮮新世～洪積世前期の安山岩類や安山岩質集塊岩が分布している。

石飛東遺跡第3トレンチe－5グリッド（3tr－e－5gr）南西の隅にある深掘口では、表層部分が剥土されているが層厚80cmの堆積物が見られた。堆積物はⅢ層～Ⅵ層に土層区分される。Ⅲa層～Ⅲb層は細粒の軽石を含み、上位のⅢa層はⅢb層の拡散、漸移帯である。Ⅳa層とⅤ層は黄褐色のシルトを主とし、Ⅴ層は粘土分がやや多い。Ⅵ層はⅤ層と同質の堆積物の中に直径10～15cmの凝灰岩の礫を含む。Ⅳa層とⅤ層の間に位置するⅣb層は有機物を含む黒褐色シルトからなり、Ⅳa層とⅤa層に接する部分は色調が漸移する。比較の為試料を採取した石飛東遺跡の東約180mの道路法面の地点（B）では、深掘口に見られる堆積物中のⅥ層を欠く点を除くと、石飛東遺跡の堆積物によく似ている。

Ⅱ－3　大観峯遺跡（第3図、D－3tr）

大観峯遺跡は阿蘇外輪山上に位置する。遺跡の西側と南側は外輪山の中に広がる盆地に面する急崖に接し、北は外輪山の高原地に続く丘陵地である。この地域は阿蘇火山に起源をもつ外輪山熔岩および先阿蘇火山岩と、より新期の火砕流堆積物からなっている。

大観峯遺跡の堆積物は発掘担当者によるとⅠ層～Ⅹ層に土層区分される。この層序について熊本県内の堆積物の模式層序と比較すると、大観峯遺跡の最上部の第Ⅰ層は模式層序の第Ⅵ層（暗色帯）に相当するものと考えられている。大観峯遺跡の堆積物は軽石やスコリアを含むものが多く全体的に粗粒物に富む。

Ⅲ　試料と分析方法

Ⅲ－1　試　料

石飛東遺跡の試料は第3トレンチe－5グリッド深掘口と遺跡の南側を横断する道路法面から採取し、伊野遺跡では第4トレンチ西側と南側の崖面から採取した。石飛東遺跡の堆積物は第3図の柱状図に示したように薄層である為、堆積物全層を厚さ5cmに分割し、伊野遺跡では厚さ10cmに分割して全層の試料を採取した。大観峯遺跡の試料は発掘担当者によって採取されたもので、各々の層準毎に区分された試料である。

Ⅲ－2　分析方法

採取した試料について火山ガラス含有率（粒数%）、重鉱物含有率（重量%）、重鉱物組成（粒数%）、火山ガラスの屈折率を検討した。各々の分析方法は次のとおりである。

火山ガラス含有率：乾燥試料50gを取り、115#（0.125mm）と250#（0.0625mm）の標準篩を用いて篩分し、115#～250#篩の間に残る微細砂（粒経0.125mm～0.0625mm）を分離する。次にこの微細砂を用いて散布プレパラートを作り、偏光顕微鏡下で鉱物粒子250～300粒中に占める火山ガラス片の粒数%を求めた。集計に際し

て稲科植物に起源をもつ植物硅酸体は除外した。

重鉱物含有率：微細砂３～５gを四臭化エタン（比重2.965）を用いて処理し、微細砂中の重鉱物を分離した。次に重鉱物の重量を求め、原試料中の重鉱物重量％を算出した。

重鉱物組成：分離した重鉱物を用いて散布プレパラートを作り、偏光顕微鏡下で重鉱物250～300粒中の各鉱物種の粒数％を求めた。各試料の重鉱物組成は、普通角閃石、酸化角閃石、斜方輝石、単斜輝石、雲母類、その他（ジルコン＋変質鉱物＋不明）、不透明鉄鉱物について組成比を求めた。

火山ガラスの屈折率：火山ガラス含有率と重鉱物組成の検討を基礎にして、火山噴出物が含まれていると判断された試料について、試料に含まれている火山ガラス片の屈折率を浸液法により測定した。

Ⅳ　分析結果

伊野遺跡と石飛東遺跡及び大観峯遺跡の堆積物の分析結果を第２図～第３図に示した。次に分析結果の概要について述べる。

Ⅳ－１　伊野遺跡（第２図，４tr－W・S）

伊野遺跡の堆積物に含まれる火山ガラス含有率の変化は、試料を採取した２地点に共通して土層区分のⅦ層上部とⅥ層中部に含有率の増加が見られる。特にⅦ層上部の増加が著しい。他に堆積物の最下部に見られるⅨ層は両地点共含有率が低い。

重鉱物含有率は火山ガラス含有率の増減に対して逆の傾向を示す。含有率はⅤ層より上位とⅦ層下部～Ⅷ層の範囲で50重量％を越えるが、火山ガラス片が顕著な増加傾向を示すⅦ層中部附近では20重量％、第４トレンチ南側地点では10重量％以下に減少する。

重鉱物組成ではⅥ層中部とⅨ層を除いて、角閃石の増減は火山ガラス片の増減と反対の傾向を示し、斜方輝石はⅥ層中部より上位の部分とⅦ層～Ⅷ層に高い含有率を示す。雲母類はⅥ層に多い。

Ⅳ－２　石飛東遺跡（第３図，３tr－e－５gr, B）

石飛東遺跡第３トレンチe－５グリッド深掘口の試料を検討した結果、火山ガラス含有率の変化に２層準で顕著な増加が見られた。上位の層準の増加はⅢｂ層にあってⅢａ層に向って漸減し、下位の層準の増加はⅤｃ層～Ⅴａ層にかけて幅広い範囲に見られる。

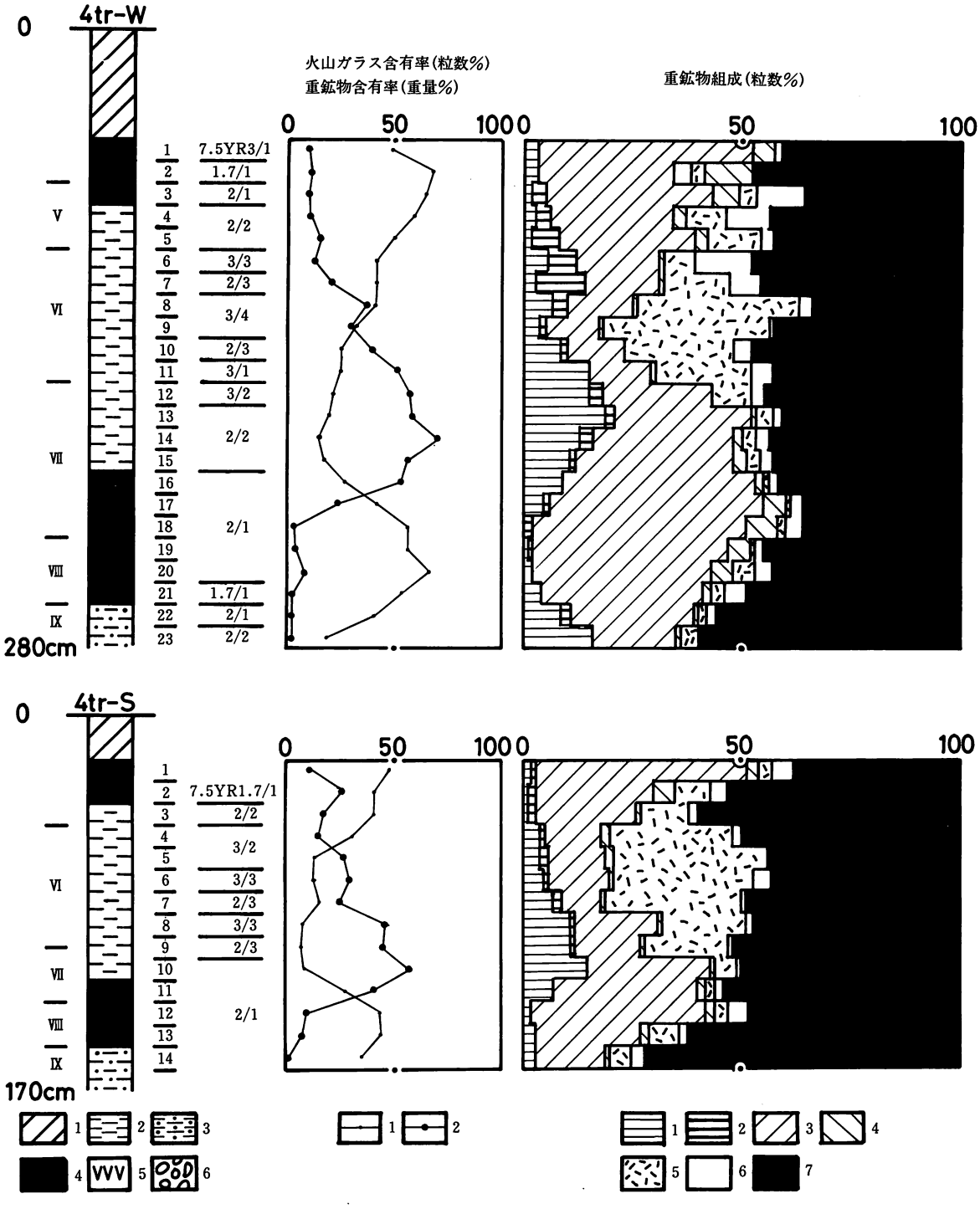
重鉱物含有率はⅢｂ層～Ⅲａ層の範囲で10～20重量％、下位の火山ガラス片が増加する層準で10重量％以下であり特に顕著な傾向を示さない。

重鉱物組成は上位の火山ガラス片の増加層準で角閃石を欠き斜方・単斜輝石を含み、下位の火山ガラス増加層準では角閃石と斜方・単斜輝石を含む。不透明鉄鉱物はⅤａ層よりも下位に多い。

石飛東遺跡東側の道路法面より採取した試料について火山ガラス含有率を検討した。全層を通じての傾向は石飛東遺跡第３トレンチｅ－５グリッドに似ているが、土層区分のⅤ層に見られる火山ガラス片が増加する層準は、石飛東遺跡第３トレンチｅ－５グリッドに見られたものよりも薄く、層厚にして５cm程度の中に入る。

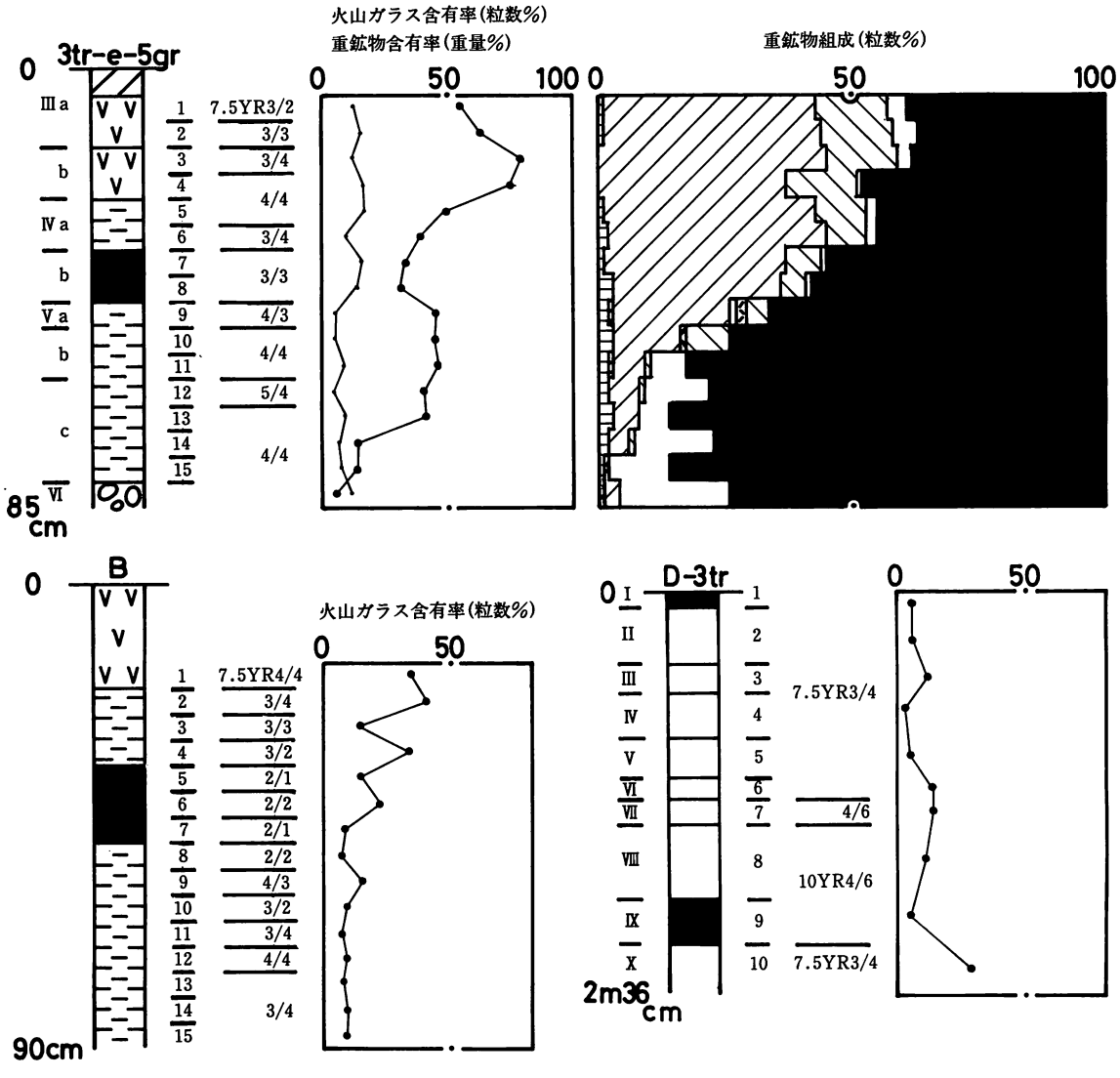
Ⅳ－３　大観峯遺跡（第３図，D－３tr）

大観峯遺跡の堆積物については火山ガラス含有率を検討した。Ⅰ層～Ⅹ層に土層区分される中で最下部の



第２図　伊野遺跡の試料の分析結果

柱状図凡例　1：埋土　2：シルト　3：砂質シルト　4：有機質シルト(暗色帯)
5：軽石(露頭で識別可能なもののみ示す)　6：礫(基質はシルト)
分析値凡例　1：重鉱物含有率(重量%)　2：火山ガラス含有率(粒数%)
重鉱物組成凡例　1：普通角閃石　2：酸化角閃石　3：斜方輝石　4：単斜輝石
5：雲母類　6：その他　7：不透明鉄鉱物



第3図　石飛東遺跡(3tr-e-5gr, B)と大観峯遺跡(D-3tr)の試料の分析結果、(凡例は第2図参照)

X層に29粒数%、他の層準では20粒数%を越えるものはなく、全体として含有率は低く変化に乏しい。

V　火山ガラスの屈折率

伊野遺跡と石飛東遺跡の堆積物に含まれる火山ガラス片について屈折率の検討を行った。検討の目的が姶良Tn火山灰とアカホヤ火山灰包含層準の確認と検出であることにより、火山ガラス含有率が高率を示し、重鉱物組成が各々の火山灰の持つ性質に近い試料を選択した。検討の結果は次のとおりである。

伊野遺跡、第4トレンチ西側、Ⅶ層中部、

試料番号14、屈折率1,499～1,501、AT

石飛東遺跡、第3トレンチe－5グリッド.

Ⅲb層、試料番号3、屈折率1,509～1,513、Ah.

Ⅴb層下部、試料番号11、屈折率1,498～1,501、AT.

大観峯遺跡の堆積物は熊本県内旧石器遺跡の模式層序と比較して第Ⅲ層附近の層準に姶良Tn火山灰が含まれているものと考えられていた。火山ガラス含有率から見て第Ⅲ層は12粒数％と他の層準よりも多いが、伊野遺跡や石飛東遺跡の姶良Tn火山灰の層準の火山ガラス含有率に比較して著しく少ない。他にスコリアを含み構成鉱物にカンラン石を含む。これらの性質からこの層準には姶良Tn火山灰が含まれていないものと判断できる。

Ⅵ 考 察

Ⅵ－1 伊野遺跡、石飛東遺跡、大観峯遺跡の堆積物に含まれる火山噴出物

各々の遺跡の堆積物を検討した結果、伊野遺跡の堆積物に姶良Tn火山灰が、石飛東遺跡の堆積物には姶良Tn火山灰とアカホヤ火山灰が含まれていることが明らかになった。

伊野遺跡の堆積物では第Ⅶ層の中部附近の試料（試料番号14）に姶良Tn火山灰が含まれている。火山ガラス含有率は第４トレンチ西側の地点の試料14に69粒数％、南側の地点では同じ層準の試料10に57粒数％含まれる。重鉱物含有率の変化傾向と共に重鉱物組成においても角閃石を含む複輝石型の組成を示し、伊野遺跡の試料を採取した両地点ともよく対応する。また重鉱物組成の中でⅥ層中部附近で雲母類が増加する傾向も共通して認められる。このような火山ガラスと重鉱物含有率、重鉱物組成の特徴的な傾向は堆積物の広域対比に役立つものである。特に姶良Tn火山灰よりも上位の層準に雲母類の顕著な増加が見られた例は熊本県内では報告例がない。

石飛東遺跡の堆積物は火山ガラス含有率に顕著な増加が見られ、これによってアカホヤ火山灰と姶良Tn火山灰の層準が予測できる。重鉱物組成においてもアカホヤ火山灰は角閃石を欠くという特徴から、石飛東遺跡に見られるアカホヤ火山灰は再堆積によるものではないと判断できる。それに対してⅤ層に含まれる姶良Tn火山灰は重鉱物組成において不透明鉄鉱物の占める割合が著しく高い。火山ガラス含有率が高率を占める層準が約25cmの厚さを持つことについては、姶良Tn火山灰が降下した時の本来の厚さを示していると解することも可能であるが重鉱物組成が対応しない。石飛東遺跡よりも南に位置する上場遺跡や北東に位置する狸谷遺跡における姶良Tn火山灰の堆積様式を見ると（柴田、1984）、両遺跡とも姶良Tn火山灰は軽石として堆積物に含まれる。石飛東遺跡では姶良Tn火山灰の火山ガラスが含まれる層準の堆積物は黄褐色シルトを主とし、姶良Tn火山灰はその中に混在した状態で含まれる。石飛東遺跡に見られる重鉱物の中に結晶が円磨されたり風化変質している例がないことから、不透明鉄鉱物が濃集する原因を鉱物種の選択的風化のみに求めることは難しいが、石飛東遺跡が位置する地点の地形が南側の山地から北に伸びる斜面であることを考慮すると、雨水等による表層土の移動が関与していることも否定できない。

大観峯遺跡の堆積物は火山ガラス含有率において顕著な傾向が見られない。この地点の堆積物は全体的に粗粒物に富み軽石やスコリア等を含み、鉱物組成をも考慮すると大観峯遺跡第３トレンチの堆積物に姶良Tn火山灰は含まれていないと判断できる。より上位と下位の堆積物について検討する必要がある。

Ⅵ－2 熊本県内旧石器遺跡に見られる火山噴出物の概要

熊本県内の旧石器遺跡に見られる堆積物に含まれている火山噴出物は、各々の遺跡における層序上の位置を考慮して対比すると第４図のようにまとめることができる。本図中の伊野遺跡と石飛東遺跡を除いた試料は曲野遺跡Ⅱ（1984）において柴田（1984）が報告したものを用いた。

熊本県内の旧石器遺跡では石飛東遺跡と狸谷遺跡を除いて堆積物の最下部に阿蘇火山の噴出物である鳥栖

ローム、八女粘土が見られる。この火山噴出物は阿蘇火山噴出物の中で阿蘇Ⅳとして一括されるもので、火砕流堆積物は山口県宇部市や小郡町附近にも分布し、南方には人吉盆地にも分布する。狸谷遺跡では堆積物のさらに下位の部分に含まれていることも考えられる。重鉱物組成は曲野遺跡での結果から見ると、少量の雲母類を伴い角閃石及び斜方・単斜輝石を含むもので、重鉱物含有率は約25重量%、火山ガラス片は風化して粘土化していて残存しない。鳥栖ロームの特異な点は、一見ノコクズ状で時に白色粒状の二次鉱物（ギブサイト）を含むことである。絶対年代測定値は最も新しい年代を示すもので約2600年（^{14}C年代)、古い年代を示すものでは約84000年（FT年代）まであって巾が広い。

上益城郡矢部町大矢野原では阿蘇Ⅳに相当する鳥栖ロームと後述する姶良Tn火山灰の間に黄橙色（10YR 7/8～8/8）の軽石層がある。この軽石層（仮称、赤色軽石層）は菊池郡大津町新小屋や阿蘇郡一ノ宮町で見られ、一ノ宮町で見られる赤色軽石層は各々の間に凝灰質の堆積物をはさみ3層に区分される。各々に含まれている斜方輝石の屈折率（γ）は全てがごく接近した範囲にあって、これによって相互の分層はできないが最上部の赤色軽石層を除いて下位の2層の重鉱物に橄欖石を含むことにより、最上部の赤色軽石層か下部の2層であるかの判別ができる。この点についてみると新小屋と大矢野原の赤色軽石層は一ノ宮の最上部の赤色軽石層に対比され、その分布が最も広い。赤色軽石の噴出源は明らかではないが、阿蘇山周辺で層厚が増す点を考慮すると、噴出源は阿蘇山の可能性が高い。噴出年代は姶良Tn火山灰の年代約21000年～22000年よりも古く、阿蘇Ⅳの年代よりも新しい。赤色軽石の分布と年代については不明な点があり、今後の調査によって補わねばならぬ所が多い。

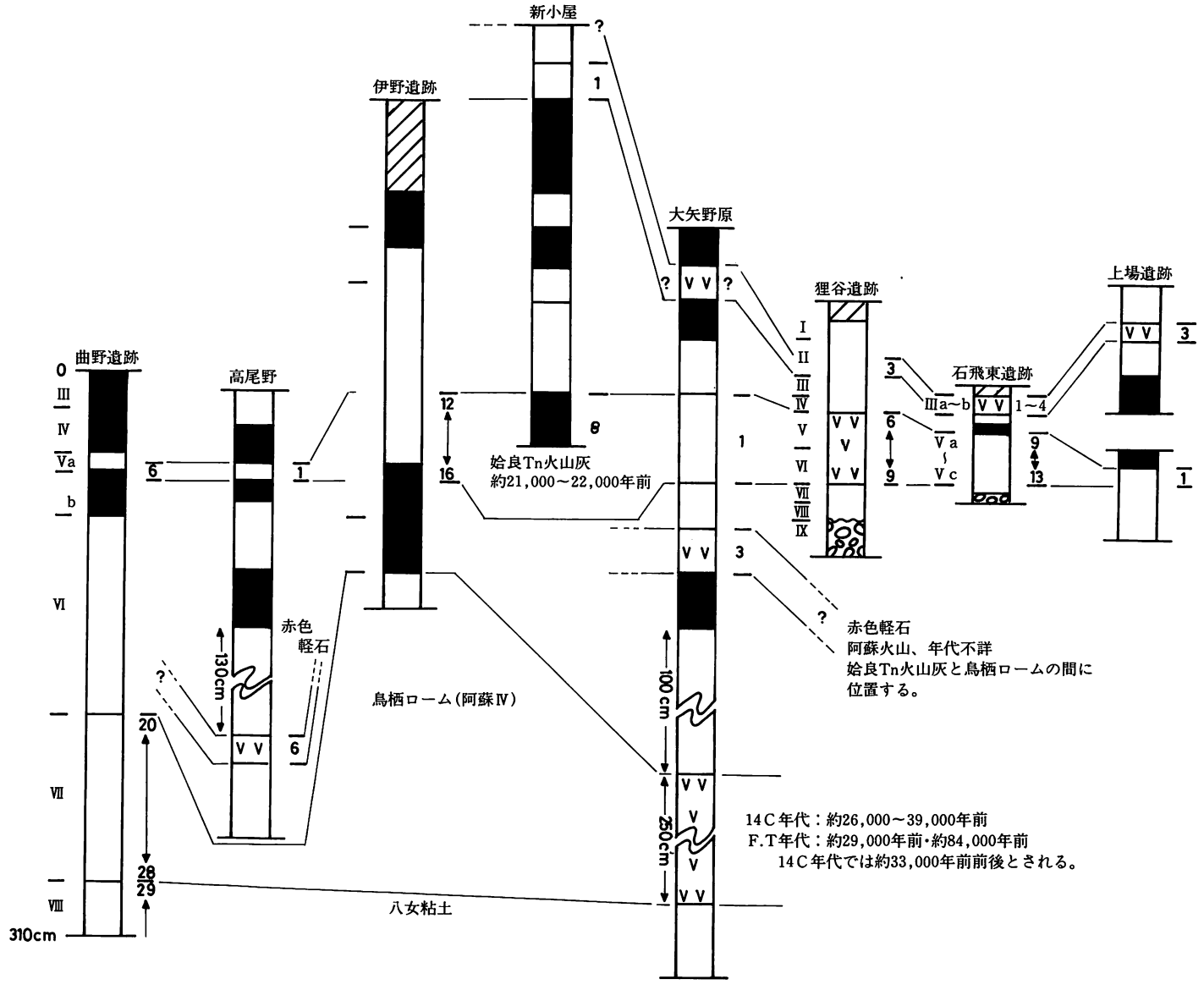
姶良Tn火山灰は前述した赤色軽石よりも上位にあって、熊本県内では本報告でふれた大観峯遺跡第3トレンチの堆積物を除いて全ての遺跡の堆積物に含まれている。姶良Tn火山灰は入戸火砕流の降下相である。火山ガラス片を多量に含み、重鉱物含有率は10重量%以下であることが多い。重鉱物組成では少量の角閃石を含み、斜方・単斜輝石と不透明鉄鉱物からなる。堆積物に含まれる場合には軽石の粒子が見えることもあるが、再堆積したものや土壌化が進んでいる時には不明瞭になる。姶良Tn火山灰の存否の判定には火山ガラス含有率の検討が有効である。姶良Tn火山灰の絶対年代値は約21000～22000年前（町田・新井、1976）である。

アカホヤ火山灰は姶良Tn火山灰よりも上位にあって熊本県内全域で見られるが、堆積物最上部の有機質黒色土に含まれている為、耕作に伴い削り取られ失われている場合が多い。アカホヤ火山灰は火山ガラス片を多量に含み、重鉱物組成では角閃石を欠き、斜方・単斜輝石と不透明鉄鉱物からなる。絶対年代値は約6500年前（町田・新井、1978）である。アカホヤ火山灰は単層をなす時は赤味を帯びた橙色を呈し、暗色の有機質土の中にある時は色調から識別が容易である。

Ⅶ 結 論

1．伊野遺跡第4トレンチ西側の地点ではⅦ層上部に姶良Tn火山灰起源の火山ガラス片が含まれ、試料14に火山ガラス片が特に多い。南側の地点では西側の場合と同様にⅦ層上部に火山ガラス含有率の高い層準があり、重鉱物含有率と重鉱物組成も同じ傾向を示す。

2．石飛東遺跡第3トレンチe－5グリッド深掘口の堆積物にはアカホヤ火山灰と姶良Tn火山灰が含まれている。アカホヤ火山灰はⅢb層を主としⅢa層に向って拡散・漸移する。火山ガラス片は試料3・4に多く、重鉱物組成では角閃石を欠くアカホヤ火山灰の特徴を示している。姶良Tn火山灰起源の火山ガラス片はⅤa層～Ⅴc層上部に含まれ約25cmの厚さを持つ。重鉱物組成では不透明鉄鉱物が姶良Tn火山灰が含まれる層準



第4図　各試料採取地点に見られる堆積物の対比枠状図凡例は第9図参照　Ⅰ～Ⅺ：土層番号、1～29：試料番号

に多く、これまでに調査報告されている資料と異なる。不透明鉄鉱物の濃集については降灰後の雨水等による表土の流失等が関係しているものと考えられる。

3．大観峯遺跡第3トレンチの堆積物には姶良Tn火山灰は含まれていない。より上位と下位の試料について検討を要する。

Ⅷ　参考文献

一色直紀・小野晃司・平山次郎・太田良平(1965)：放射性炭素による^{14}C年代測定、地質ニュース、133、pp20～27

熊本県教育委員会(1984)：曲野遺跡Ⅱ、一般国道3号松橋バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査報告、熊本県文化財調査報告第61集

玉生志郎（1978)：ガラスによるフィッショントラック年代測定、地質学会85年大会、演旨、253

町田　洋・新井房夫（1976)：広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義、科学、第16巻、9号、pp339～342

町田　洋・新井房夫（1978)：南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰、第四紀研究、第17巻、pp143～163

柴田喜太郎(1984)：熊本県松橋町曲野遺跡の堆積物－曲野遺跡および関連地域の堆積物に含まれる火山噴出物の検出と対比－、曲野遺跡Ⅱ、熊本県文化財調査報告第65集、pp186～199

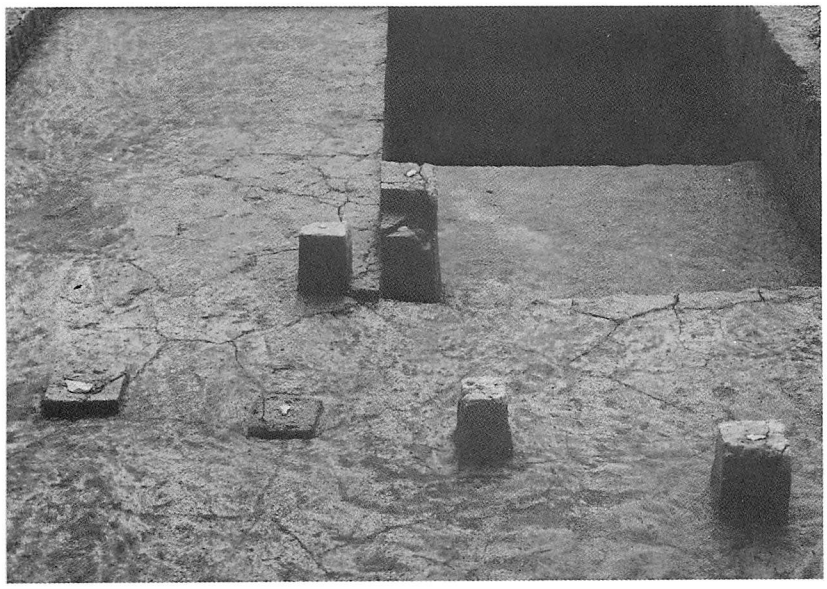
図　　版

伊野遺跡空中写真

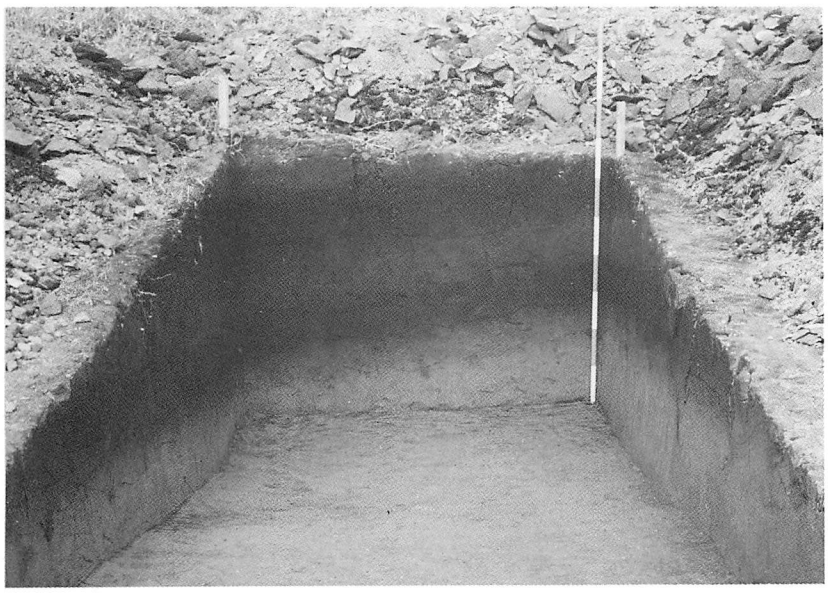
石飛遺跡空中写真

大観峯遺跡調査状況図

大観峯

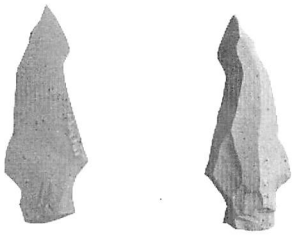


遺物出土状況

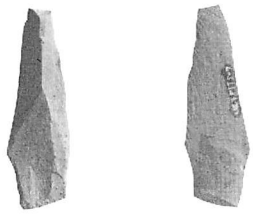


第４トレンチ西側土層

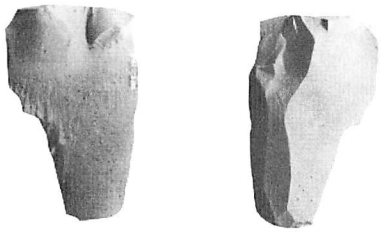
図版２　大観峯遺跡



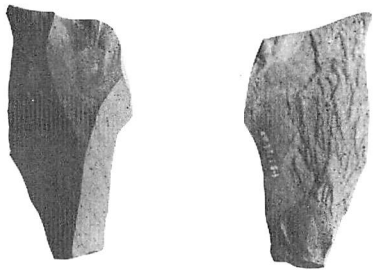
01



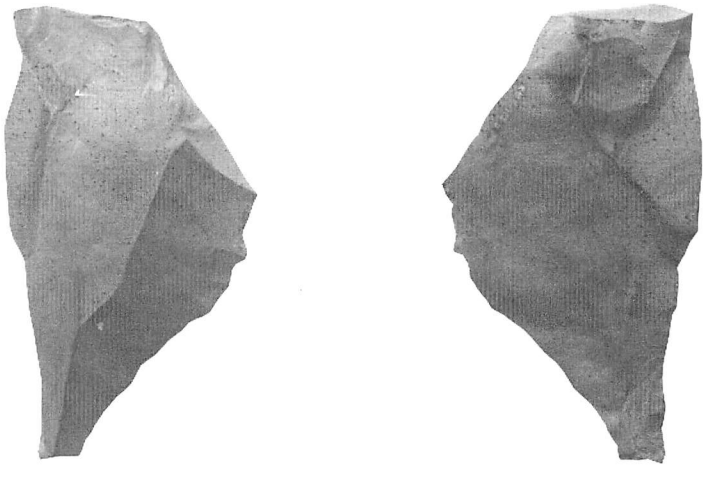
02



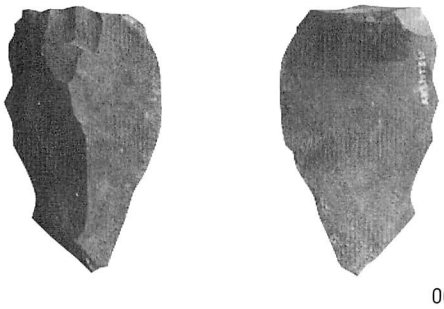
03



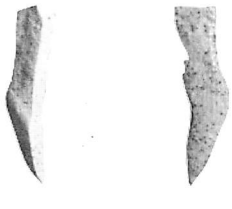
04



05



06

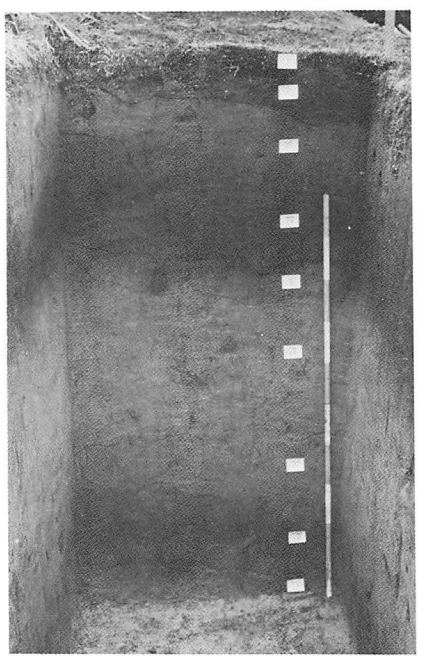


07

図版３　大観峯遺跡出土石器(01～07)

伊野遺跡遠景

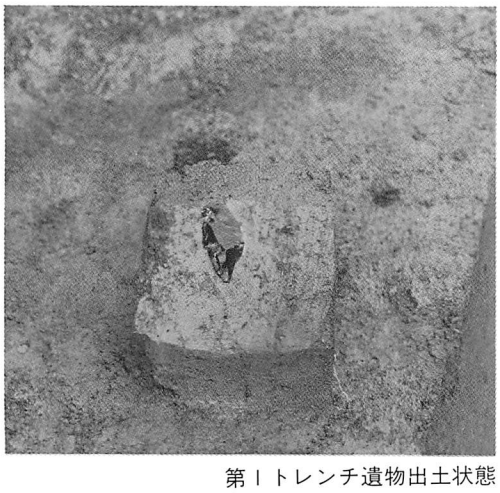
第3トレンチ　　第4トレンチ



土層写真

第３トレンチ調査状況

第３トレンチ遺物出土状態



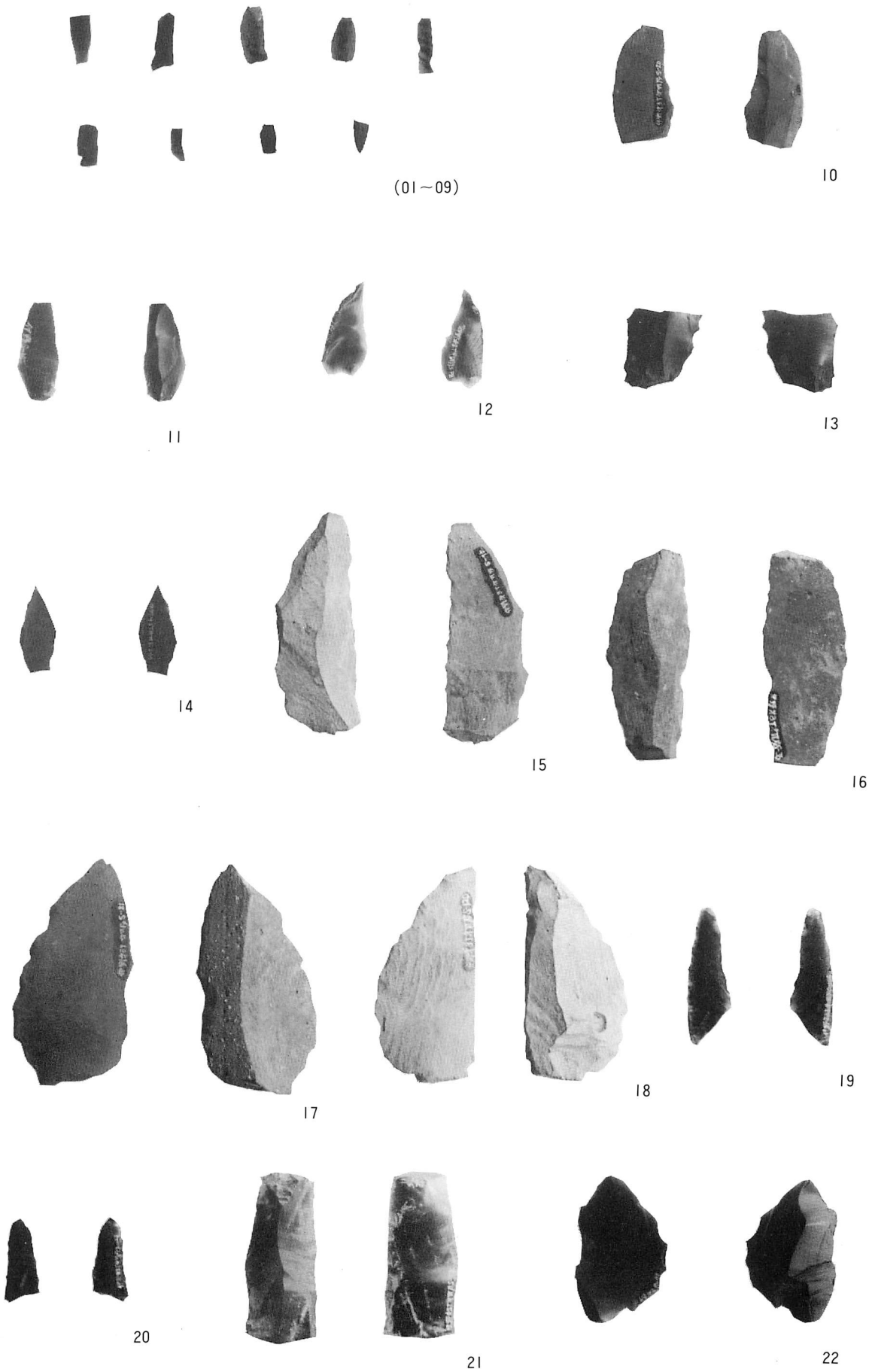
第１トレンチ遺物出土状態

第４トレンチ遺物出土状態

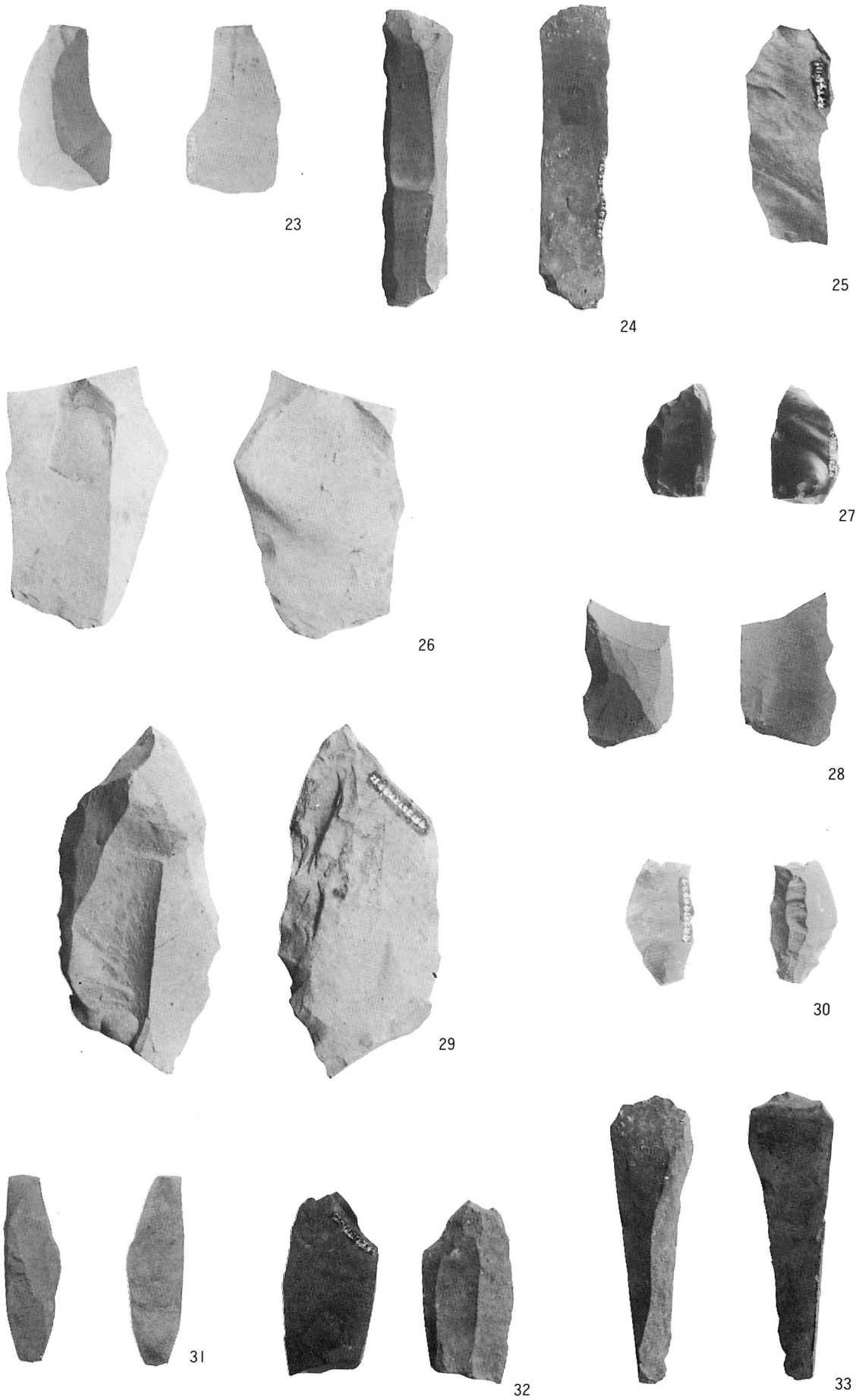
第３トレンチ遺物出土状態

第３トレンチ遺物出土状態

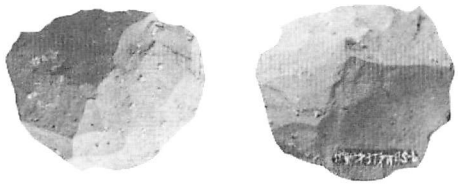
図版５　伊野遺跡



図版 6　伊野遺跡出土石器(01～22)

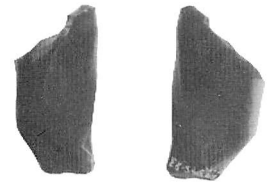


図版 7　伊野遺跡出土石器(23～33)

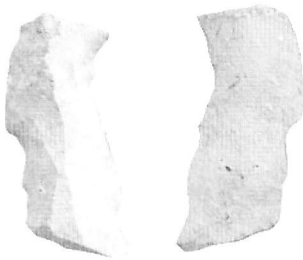


34

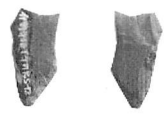
35



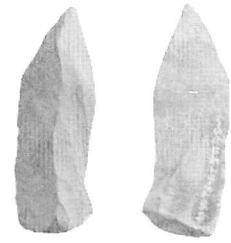
36



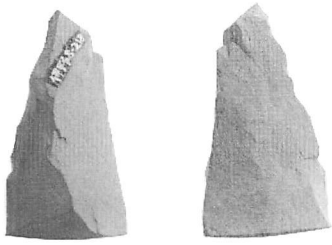
37



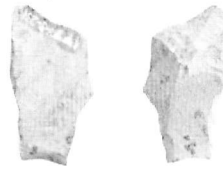
38



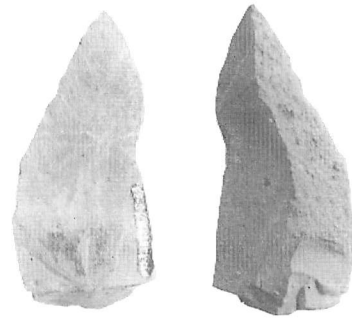
39



40



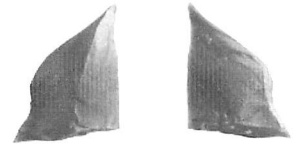
41



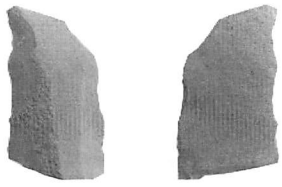
42

43

44

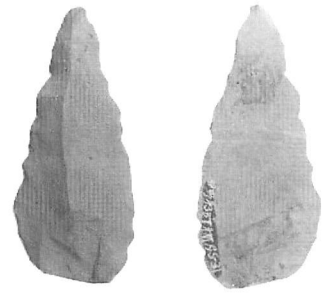


45



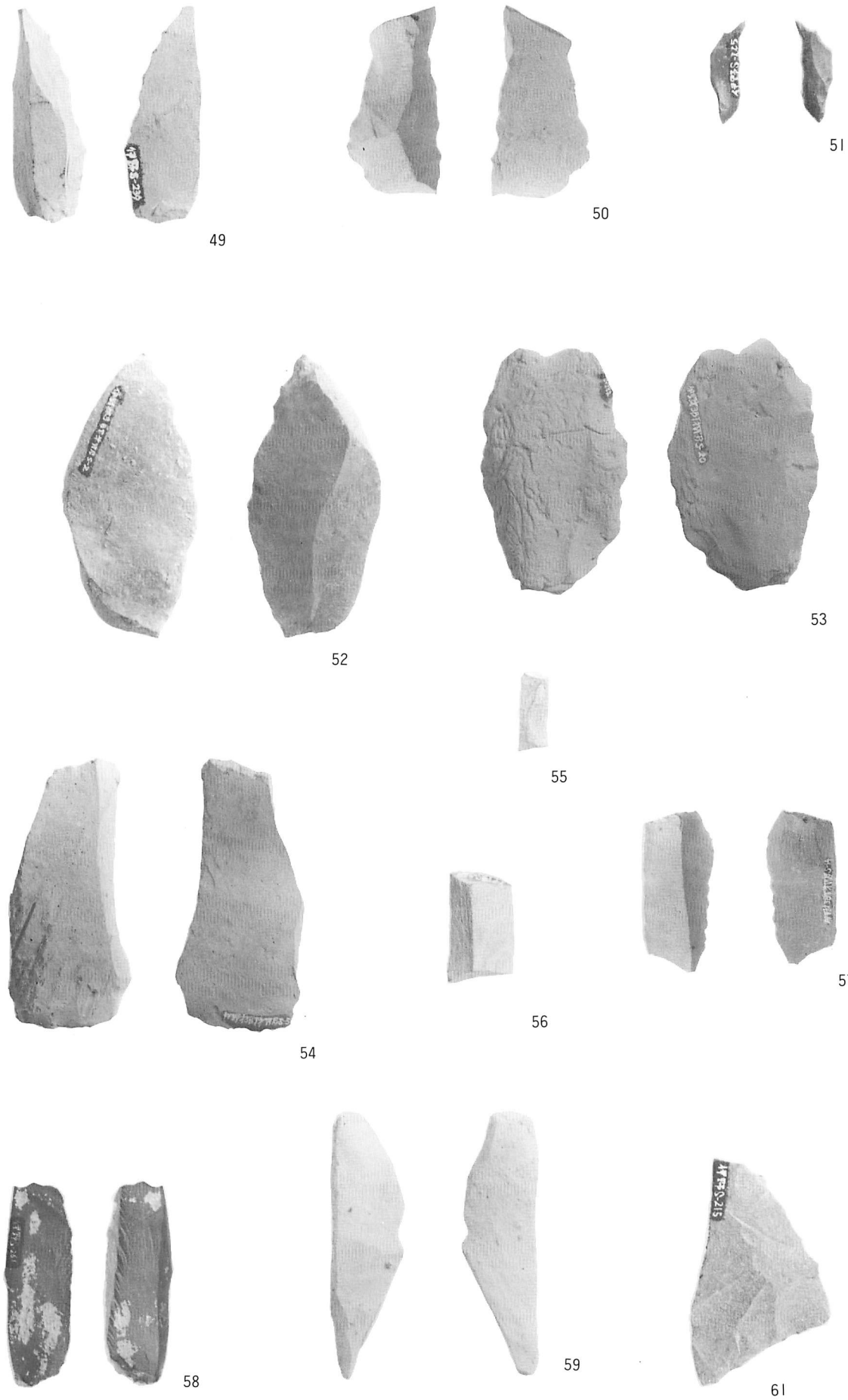
46

47

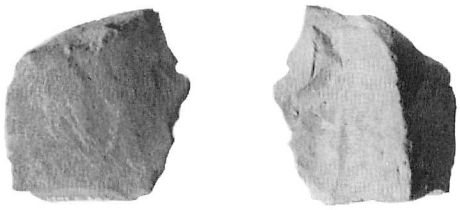


48

図版 8　伊野遺跡出土石器(34～48)

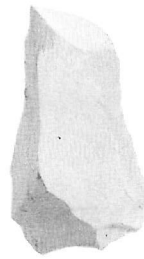


図版 9　伊野遺跡出土石器(49～61)



60

62



63

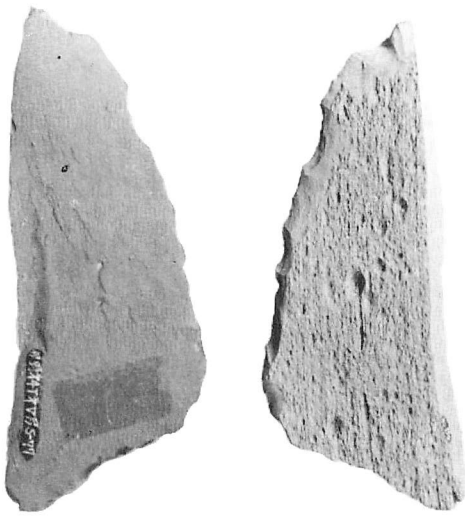
64

70

71

72

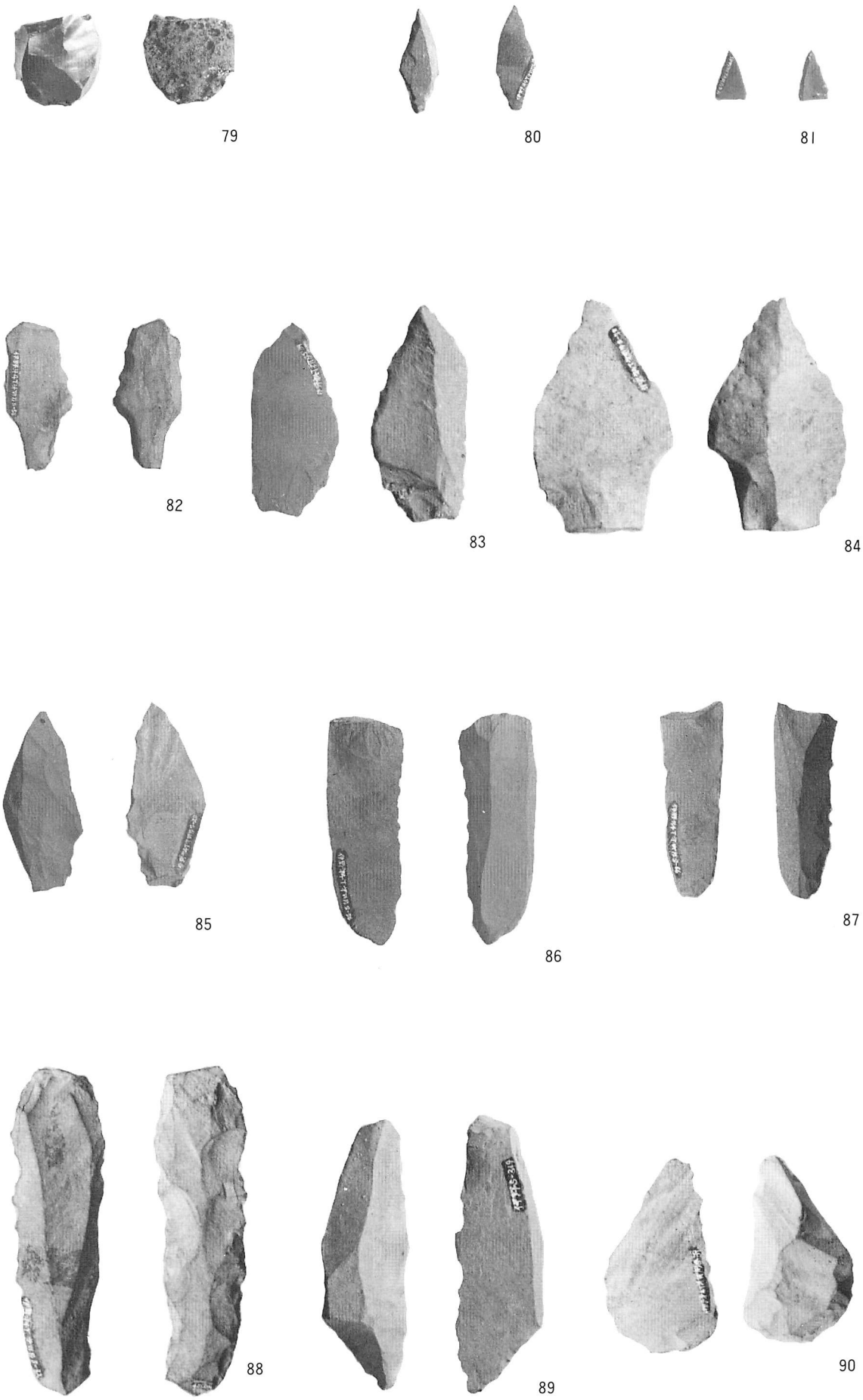
73



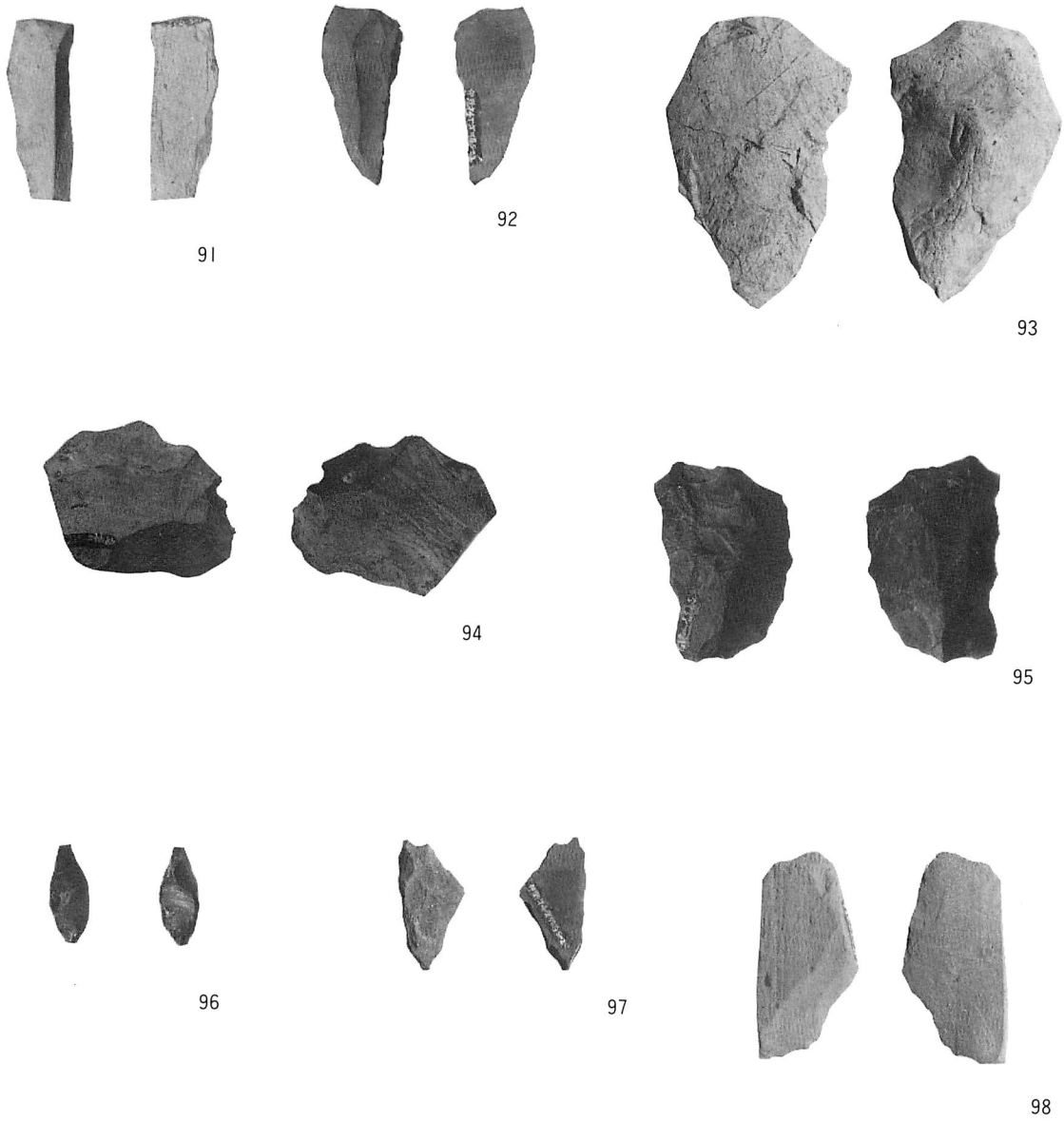
74

75

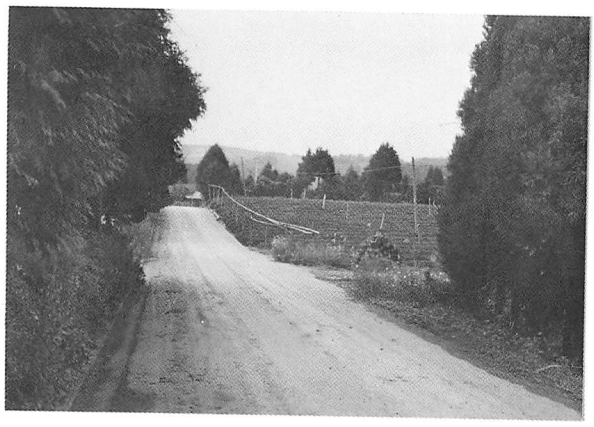
図版10　伊野遺跡出土石器(60～75)



図版11　伊野遺跡出土石器(79～90)

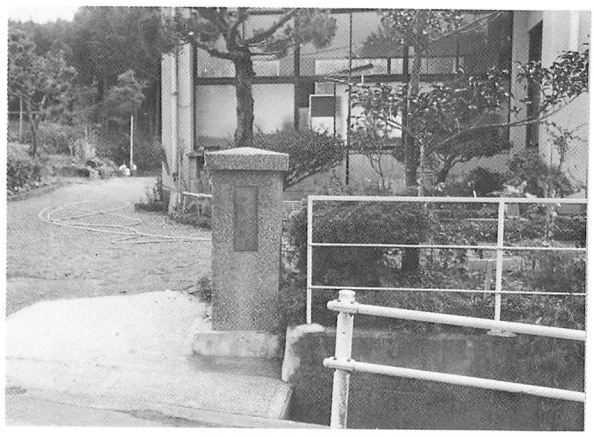


図版12　伊野遺跡出土石器(91～98)

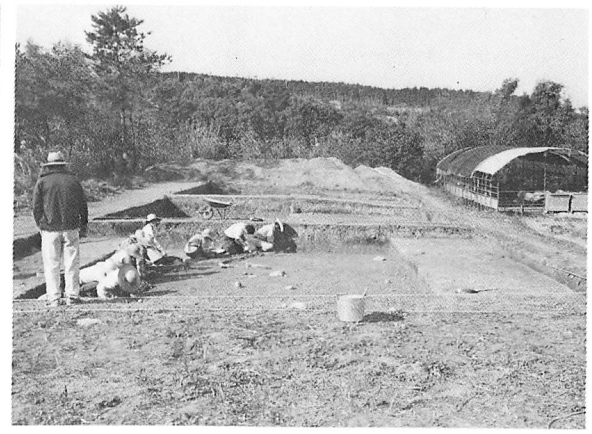


石飛分校遺跡遠景

石飛分校遺跡標柱

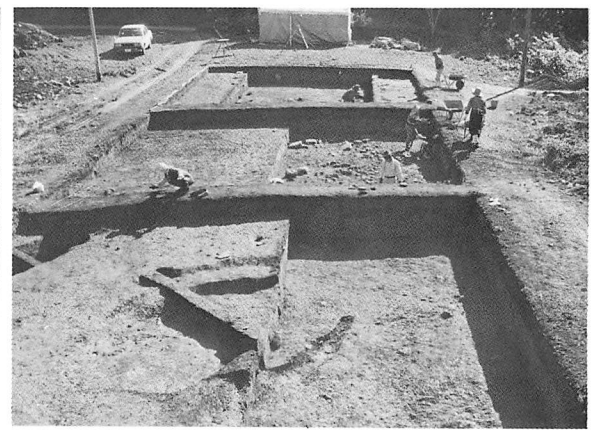


石坂川小学校石飛分校



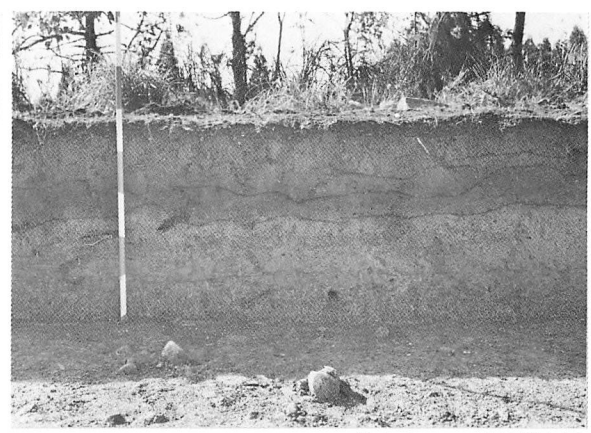
石飛東遺跡調査風景

石飛東遺跡調査風景



石飛東遺跡調査状況

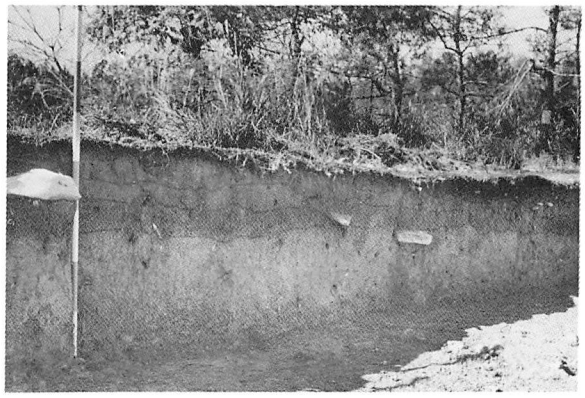
第Ⅲトレンチℓ－5グリット土層



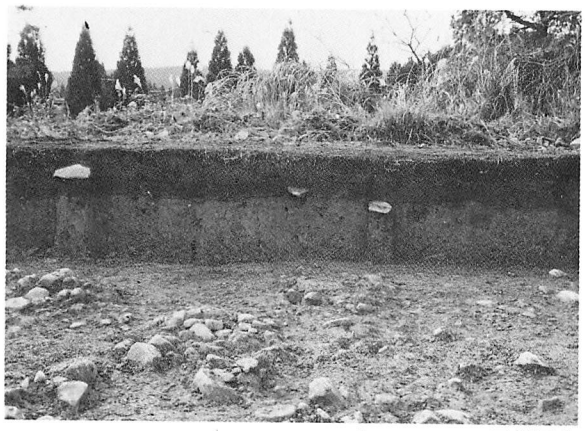
第Ⅱトレンチ西側土層

図版13　石飛東遺跡

第１トレンチ西側層位



第２トレンチ西側層位



第２トレンチ西側層位

第１トレンチ西側層位

第３トレンチ南側層位

第２トレンチ第Ｖ－ｅ層遺物出土状況

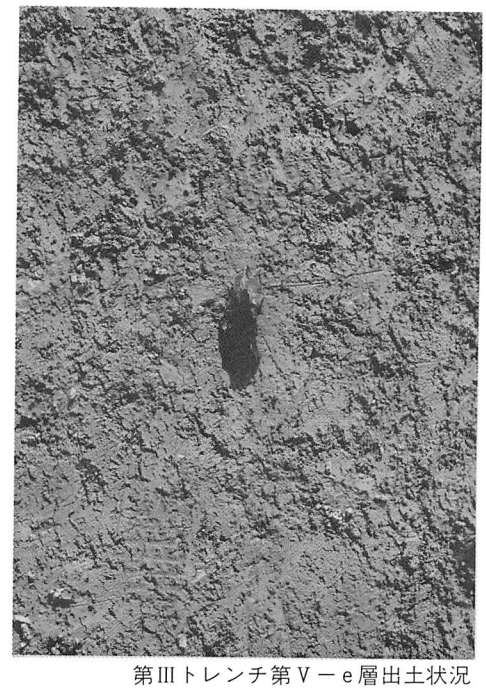
第２トレンチ第Ｖ－ｅ層遺物出土状況

図版14　石飛東遺跡

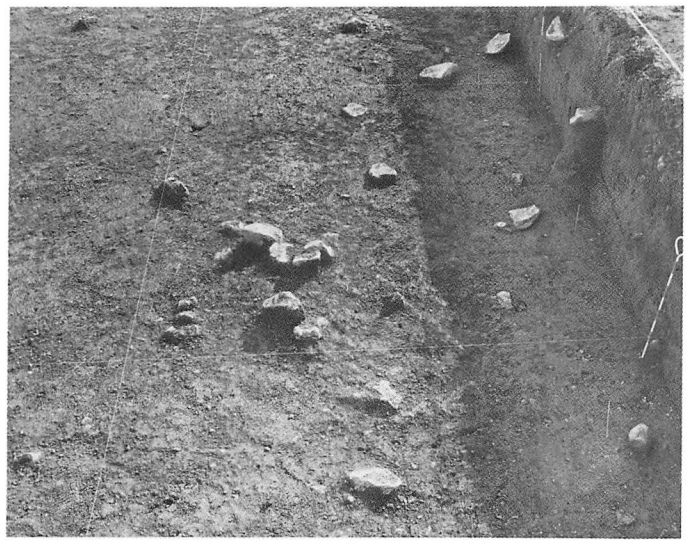
第Ⅰトレンチ第Ⅴ－c層出土状況

第Ⅲトレンチ第Ⅴ－c層出土状況

第Ⅲトレンチ第Ⅴ－c層出土状況

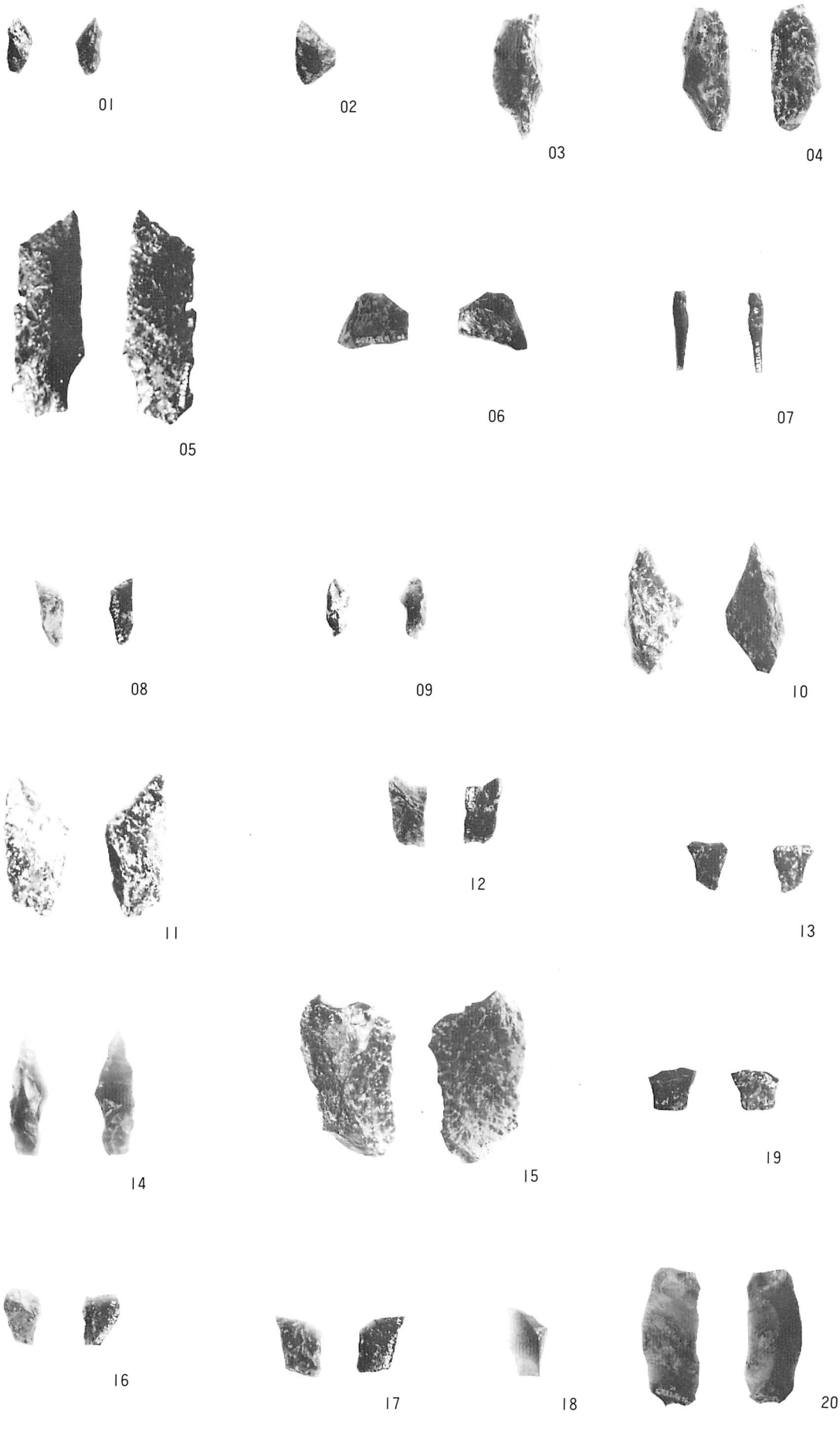


第Ⅲトレンチ第Ⅴ－e層出土状況



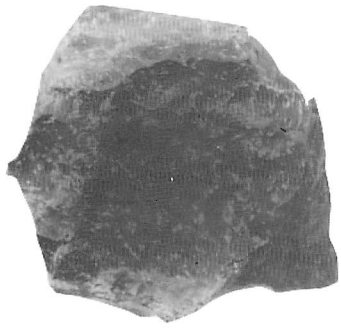
第Ⅱトレンチ第Ⅴ－d層出土状況

図版15　石飛東遺跡

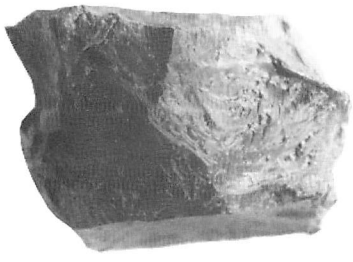


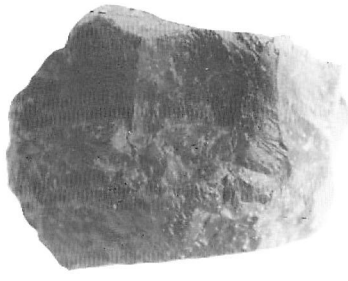
図版16　石飛東遺跡出土石器(01～20)

図版17　石飛東遺跡出土石器(21～46)

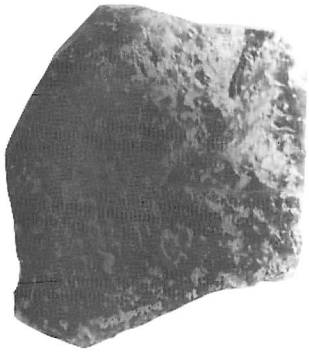


49 50

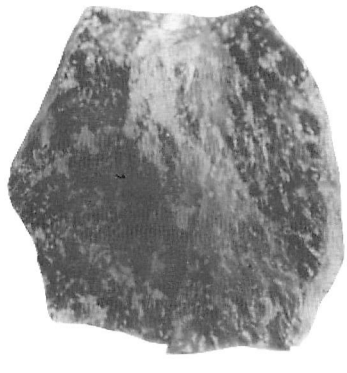




47



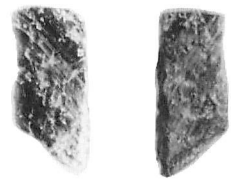
48



54

図版18　石飛東遺跡出土石器(47～54)

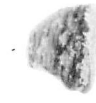
55

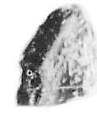

58

59

64

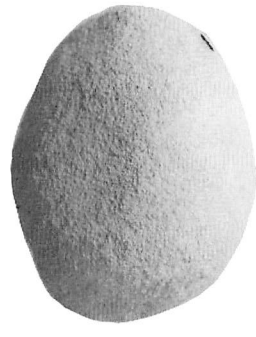
65

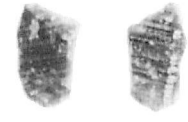

66



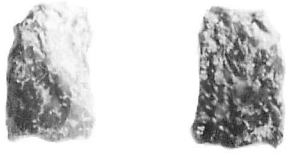
67

68

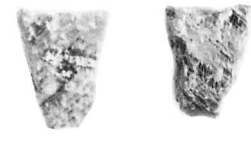

69

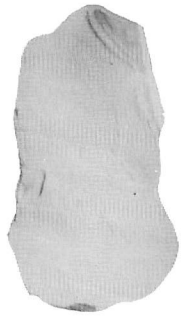

70

71


72

74


75


78

79

80

図版19　石飛東遺跡出土石器(55～80)

81

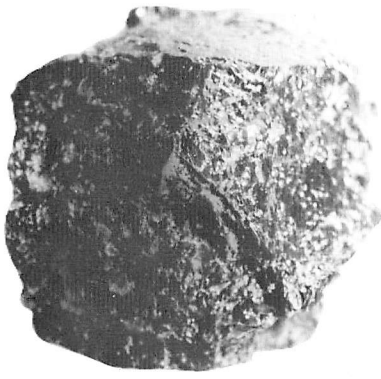
82

83

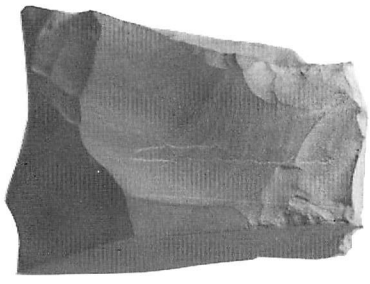
84

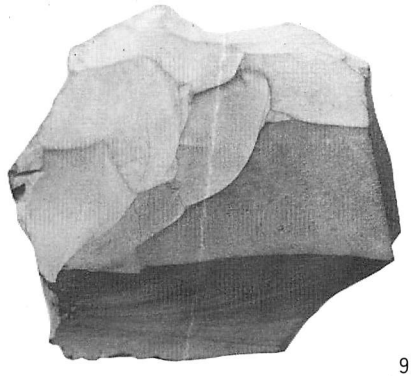
85

86

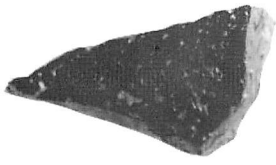


89

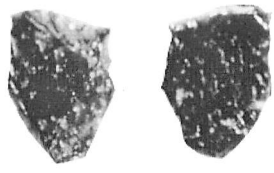




90

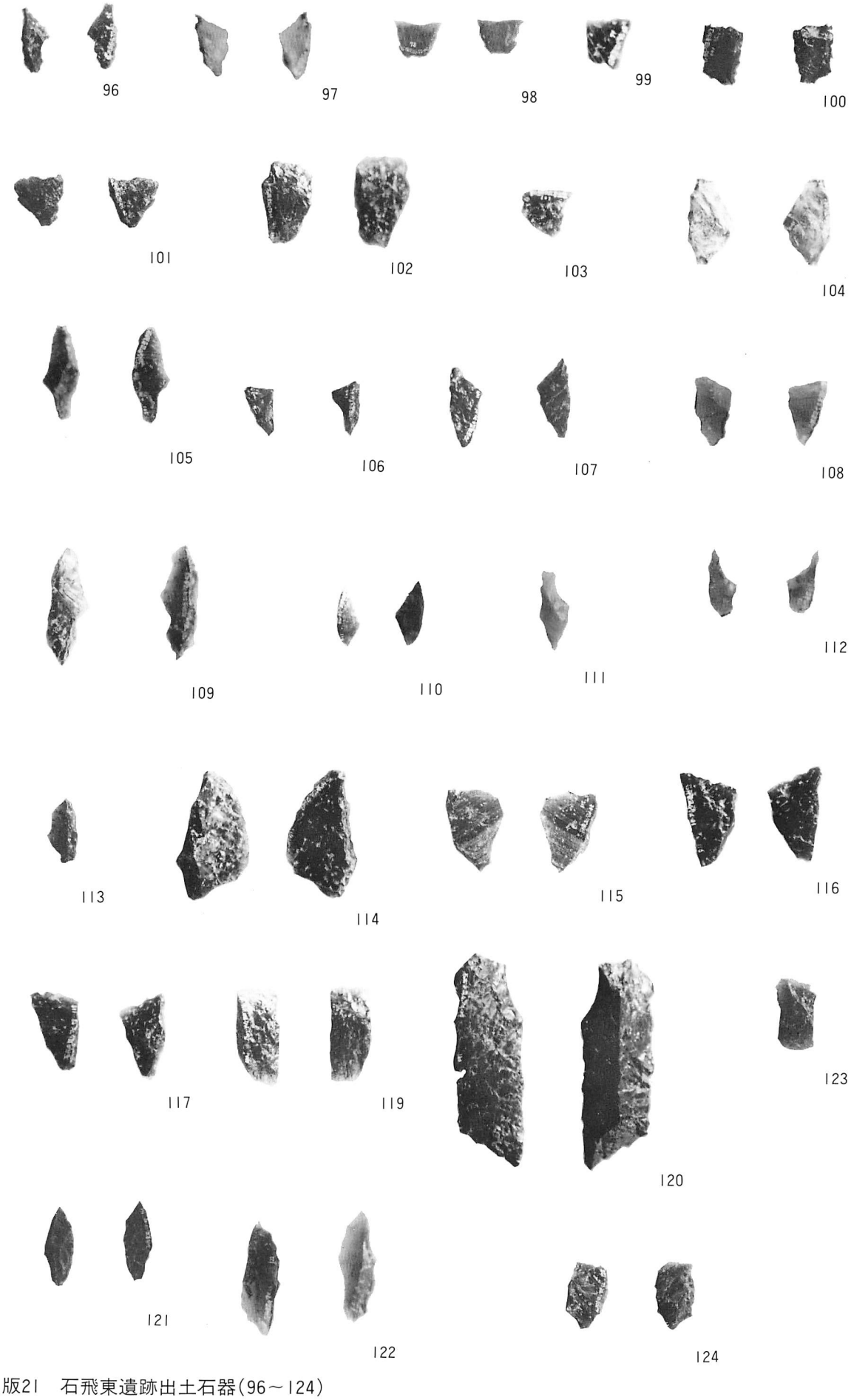


91

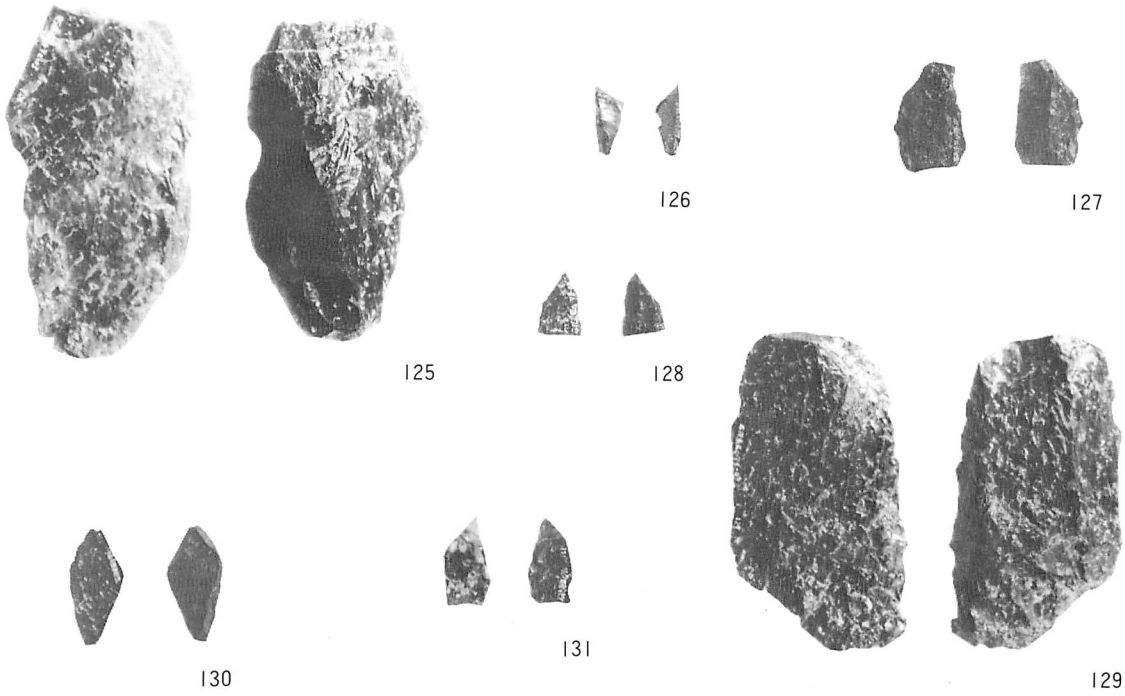


92

図版20　石飛東遺跡出土石器(81～92)



図版21　石飛東遺跡出土石器(96～124)



図版22　石飛東遺跡出土石器(125～131)

熊本県文化財調査報告　第81集

熊本県旧石器時代
調査報告書

昭和61年3月31日

編集・発行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印　　刷　凸版印刷株式会社
〒810 福岡市中央区薬院1－7－28
☎ (092) 772－2000

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 81 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：熊本県旧石器時代調査報告書
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/